丹波市春日町

火山古墳群火山城跡火山遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路 I)建設事業 に伴う埋蔵文化財調査報告書 I

2005年3月

兵庫県教育委員会

丹波市春日町

火山古墳群火山 城跡火山遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路 I)建設事業 に伴う埋蔵文化財調査報告書 I

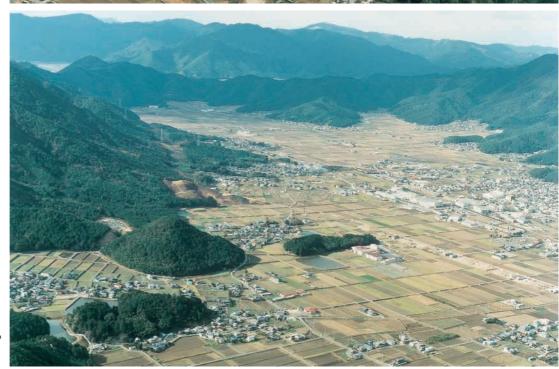
2005年3月

兵庫県教育委員会

航空写真 巻頭図版 1



火山古墳群(手前)から 多紀連山を望む (北西から)



火山古墳群(手前)から 水分れ方向を望む (南東から)



黒井城跡(手前)から 火山城跡を望む (北から)

巻頭図版 2 航空写真



火山古墳群全景(東から)



1~6号墳(北から)



7・9・11号墳、火山遺跡(西から)



8・11号墳、火山城跡(東から)

巻頭図版 4 遺構



7号墳石室内遺物出土状況(南から)



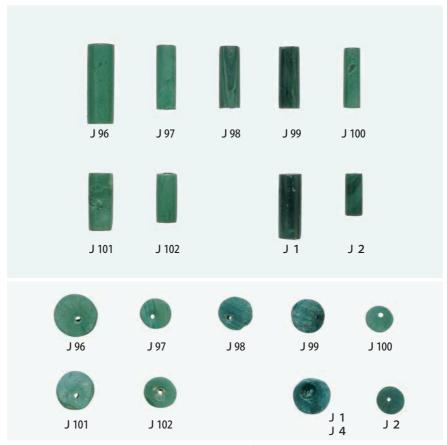
10号墳石室全景 (西から)



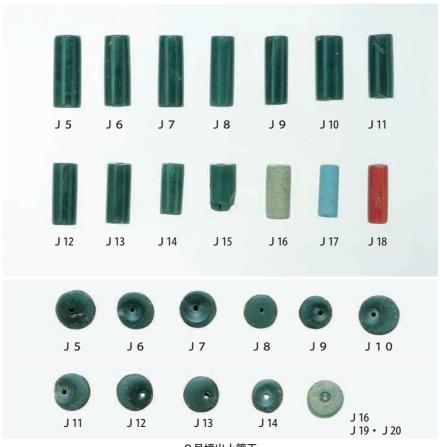
7号墳出土土器



10号墳出土土器



10・7号墳出土管玉



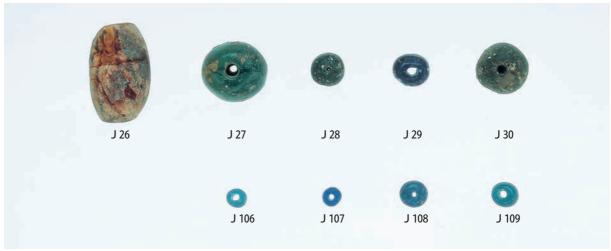
9号墳出土管玉



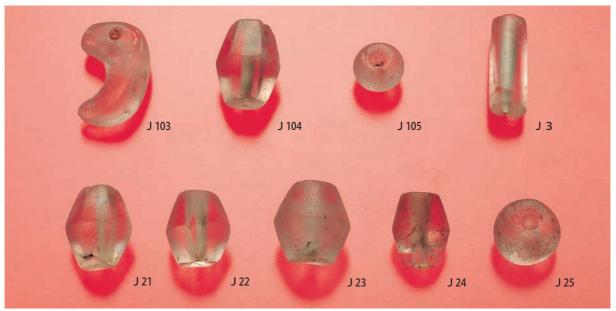
13号墳出土勾玉・ガラス小玉



9号墳出土ガラス小玉



(上段)9号墳出土棗玉・ガラス玉・土玉 (下段)10号墳出土ガラス小玉



10・7・9号墳出土水晶玉



7・9号墳出土耳環

例 言

- 1 本書は丹波市春日町(調査時は氷上郡春日町)平松字火山に所在する火山古墳群・火山城跡・火山 遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路 I)建設事業に伴うもので、建設 省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所(当時)の依頼を受けて、平成7~9年度に兵庫県教育委員 会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
- 3 整理作業については国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所の依頼を受けて、平成14~16年度に 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
- 8 本文の執筆は池田正男・菱田淳子・中川 渉・長濱誠司・岡本一秀・大前篤子の他、多賀茂治(兵庫県教育委員会文化財室)、岡 昌秀(兵庫県立武庫之荘総合高等学校)が行った。そのうち火山 古墳群の遺構調査・遺物出土状況については多賀が、火山城跡については中川・岡が、火山遺跡に ついては中川が担当した。また遺物のうち土器・玉類・石器については中川が、鉄鏃については池田が、鉄斧・鉄鎌・鑷子・耳環については菱田が、馬具については岡本が、刀剣・刀子・鉄鑿については大前が、その他の鉄器については長濱が分担した。なおまとめの執筆分担は本文目次のとおりである。編集は森本貴子の補助を得て、中川が実施した。
- 10 調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。 丹波市(旧氷上郡)教育委員会、春日町歴史民俗資料館、芦田岩男(丹波市役所)、吉森信行 佐原 眞(故人、当時国立歴史民俗博物館)、和田晴吾(立命館大学)、菱田哲郎(京都府立大学)、 青木哲哉(立命館大学)、高橋克壽(独立行政法人奈良文化財研究所)、吉井秀夫(京都大学) 福島克彦(大山崎町教育委員会)、多田暢久(姫路市教育委員会) 宮原文隆(中町教育委員会)、安平勝利(加美町教育委員会)

凡 例

1 座標・水準高

図版に示す方位・座標は国土座標V系に則っており、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした海抜高度である。

2 使用地図

本書に使用した地図は下記の通りである。

第1図 国土地理院1/25,000地形図「黒井」平成14年8月1日発行

「市島」「柏原」「宮田」平成11年5月1日発行

第2図 春日町全図No.1・2

3 使用写真

本書に使用した航空写真および写真測量図は、アジア航測㈱と委託契約を交わして作成したものである。

遺物写真の作成にあたっては、イーストマン(株)と委託契約を交わして、兵庫県教育委員会埋蔵文化 財調査事務所において撮影した。

4 地区割り

古墳の墳丘での遺物の取り上げは、木棺直葬墳では墳頂部・墳丘斜面・墳丘裾に分け、墳丘斜面・墳丘裾については古墳の中軸線(尾根に平行する南北方向のライン)を基準に東西で区別している。横穴式石室墳では石室中軸ライン上の墳丘の中心点を基準に4分割し、中軸ラインの奥壁側を起点として時計まわりに1~4区としている。また石室内は玄室・羨道それぞれについて石室中軸ラインを基準に東西もしくは南北に分け、さらに石室奥壁を起点に手前に向かって1mごとに1区、2区…と地区割りして遺物を取り上げている。

5 遺物番号

掲載した遺物の種類には土器・金属器・玉類・石器があり、報告No.は土器が $1\sim$ の通し番号、同様に金属器がM $1\sim$ 、玉類が J $1\sim$ 、石器が S $1\sim$ とする。

6 土器の種別

土器の種別は実測図断面の色を、須恵器・須恵質埴輪が黒ベタ、土師器・埴輪が白抜き、黒色土器・ 瓦器・陶磁器がトーンとすることで区別する。

7 鉄鏃の分類

鉄鏃の記述に際しては、杉山秀宏氏の論文「古墳時代の鉄鏃について」(『橿原考古学研究所論集』 第八 奈良県立橿原考古学研究所1988年刊行)を基本文献として、型式の分類等を行った。

目 次

第1	章。請	周査の経過	中川)
	第1節	はじめに	1
	第2節	平成3年度の調査	1
	第3節	平成7年度の調査	1
	第4節	平成8年度の調査	3
	第5節	平成9年度の調査	3
	第6節	出土品整理・報告書作成作業	6
kk c			L mil
第2		遺跡の環境	
	第1節	地理的環境	7
	第2節	歴史的環境	7
第3	章 ル	人山古墳群	
<i>></i> • •	第1節	概要	多賀) 11
	第2節	1号墳	
	第3節	2号墳(多賀・中川・大前・氵	
	第4節	3号墳(多賀・中川・大前・菱田・氵	
	第5節	4 号墳(多賀・中川・大前・菱田・氵	
	第6節	5号墳(多賀・「	
	第7節	6号墳 (多賀・「	中川) 23
	第8節	7 号墳(多賀・中川・大前・長濱・菱田・氵	
	第9節	8号墳(多賀・中川・氵	
	第10節	9号墳(多賀・中川・岡本・大前・池田・蓼	
	第11節	10号墳(多賀・中川・岡本・大前・池田・蓼	
	第12節	11号墳(多賀・「	
	第13節	12号墳	
	第14節	13号墳(多賀・大前・氵	
55 A	u 크샾 I		
第4		V山城跡	+uu) ==
		立地	
		山城の遺構(r	
	第3即	出土遺物(中川・上	長濱) 60
第5	章 少	火山遺跡	
	第1節	概要	中川) 61
	第2節	山頂部の遺構(ロ	中川) 61
	第3節	水田部の遺構(ロ	中川) 61
	第4節	出土遺物(中川・土	長濱) 62
笠 6	* 辛 :1	としみ	
第6		まとめ - ルルナ接野山上の第三の幸地公長	l 拆田 CE
		火山古墳群出土の管玉の産地分析京都大学原子炉実験所 藁科 火山古墳群出土鉄器の検討(大前・)	哲男 65
		火山古墳群出土土器の検討 (て前・)	
		火山古墳群の形成と変遷	
		火山城跡の検討 (岡・「	
		次山城跡の検討 (岡・F おわりに (ミ	
	知 / 即	40477 YC	多賀) 92

挿図目次

2
4
8
66
67
71
71
71
72
73
74
74
75
75
76
34
37
90
5
9
65
8
70
73
73
76
30
35
99
)2

図版目次

図版 1	1~11号墳全体図	図版36	9号墳周辺の遺構
図版 2	1~6号墳調査前測量図	図版37	9号墳下層竪穴住居跡
図版 3	1~6号墳調査後測量図	図版38	10号墳調査前測量図
図版 4	1号墳墳丘	図版39	10号墳墳丘
図版 5	1号墳埋葬施設	図版40	10号墳墳丘断面
図版 6	2号墳墳丘	図版41	10号墳横穴式石室
図版 7	2号墳埋葬施設	図版42	10号墳石室平面・基底石据付状況
図版 8	3号墳墳丘	図版43	10号墳石室内遺物出土状況
図版 9	3号墳埋葬施設・埴輪出土状況	図版44	10号墳石室掘り方・S X 01
図版10	4号墳墳丘	図版45	11号墳調査前測量図・墳丘
図版11	4号墳第1埋葬施設	図版46	11号墳横穴式石室
図版12	4号墳第2・3埋葬施設	図版47	12・13号墳調査前測量図
図版13	5号墳墳丘	図版48	12・13号墳墳丘
図版14	7号墳調查前測量図	図版49	12号墳埋葬施設
図版15	7号墳墳丘	図版50	13号墳埋葬施設
図版16	7号墳墳丘断面	図版51	火山城跡調査前測量図
図版17	7号墳橫穴式石室	図版52	火山城跡全体図
図版18	7号墳石室平面・基底石据付状況	図版53	火山城跡エレベーション図
図版19	7号墳石室内遺物出土状況(土器)	図版54	火山城跡 平坦地(1)
図版20	7号墳石室内遺物出土状況(鉄器)	図版55	火山城跡 平坦地(2)
図版21	7号墳石室掘り方	図版56	火山城跡 平坦地(3)
図版22	8号墳調査前測量図	図版57	火山遺跡 土坑(1)
図版23	8号墳墳丘	図版58	火山遺跡 土坑(2)
図版24	8号墳石室と墳丘内列石	図版59	2~6号墳土器・3号墳埴輪(1)
図版25	8号墳墳丘断面		1~17
図版26	8号墳横穴式石室	図版60	3号墳 埴輪(2) 18~30
図版27	8号墳石室平面・天井見上げ図・基底石	図版61	7号墳 土器(1) 31~67
	据付状況	図版62	7号墳 土器 (2) 68~94
図版28	8号墳石室内遺物出土状況	図版63	7号墳 土器 (3) 95~105
図版29	9号墳調査前測量図	図版64	7号墳 土器(4) 106~124
図版30	9号墳墳丘	図版65	8号墳 土器・9号墳 土器(1)
図版31	9号墳墳丘断面		125~154
図版32	9号墳横穴式石室	図版66	9号墳 土器 (2) 155~172
図版33	9号墳石室平面・基底石据付状況	図版67	10号墳 土器(1) 173~206
図版34	9号墳石室内遺物出土状況	図版68	10号墳 土器(2) 207~221
図版35	9号墳石室内床面玉類出土状況	図版69	10号墳 土器 (3)・11号墳 土器

	222~233	図版83	9号墳 鉄器(4)	M105~M119
図版70	火山城跡・火山遺跡(山頂部)土器	図版84	10号墳 鉄器(1)	M120
	234~249	図版85	10号墳 鉄器(2)	M121~M130
図版71	火山遺跡(平地部)土器 250~272	図版86	10号墳 鉄器(3)	M131~M142
図版72	2・3号墳 鉄器 M1~M24	図版87	13号墳 鉄器(1)	M143~M151
図版73	4号墳 鉄器(1) M25~M26	図版88	13号墳 鉄器(2)	M152~M163
図版74	4号墳 鉄器(2) M27~M32	図版89	13号墳 鉄器(3)・	火山城跡·火山遺跡
図版75	4号墳 鉄器(3) M33~M45		鉄器	M164 \sim M172 • M189
図版76	7号墳 鉄器(1) M46~M55	図版90	7・9号墳 耳環	M173~M188
図版77	7号墳 鉄器(2) M56~M64	図版91	7号墳 玉類・9号墳	貴 玉類(1)
図版78	7号墳 鉄器(3) M65~M76			J1~J26
図版79	7号墳 鉄器(4)・8号墳 鉄器	図版92	9号墳 玉類(2)	J27~J95
	M77∼M93	図版93	10号墳 玉類	J96~J109
図版80	9号墳 鉄器(1) M94	図版94	13号墳 玉類	J110~J186
図版81	9号墳 鉄器(2) M95~M99	図版95	火山遺跡 石器	S1~S2
図版82	9号墳 鉄器(3) M100~M104			

卷頭図版目次

巻頭図版1 射	[空写真
---------	-------------

火山古墳群(手前)から多紀連山を望む(北西 7号墳出土土器

から)

火山古墳群(手前)から水分れ方向を望む(南 巻頭図版6 遺物 東から)

黒井城跡(手前)から火山城跡を望む(北から)

巻頭図版 2 航空写真

火山古墳群全景(東から)

1~6号墳(北から)

巻頭図版 3 航空写真

7・9・11号墳、火山遺跡(西から)

8・11号墳、火山城跡(東から)

巻頭図版4 遺構

7号墳石室内遺物出土状況(南から)

10号墳石室全景(西から)

巻頭図版5 遺物

10号墳出土土器

10・7号墳出土管玉

9号墳出土管玉

巻頭図版7 遺物

13号墳出土勾玉・ガラス小玉

9号墳出土ガラス小玉

(上段) 9号墳出土棗玉・ガラス玉・土玉

(下段) 10号墳出土ガラス小玉

巻頭図版8 遺物

10・7・9号墳出土水晶玉

7・9号墳出土耳環

写真図版目次

写真図版1 火山古墳群全景モザイク写真

2 調査前全景(北から)

写真図版 2 1~6号墳

3 調査前近景(北から)

1 調査前全景(北西から) 写真図版3 1~6号墳

		1 調査後全景(西から)		4 埴輪列検出状況(北から)
		2 調査後全景(北から)		5 埴輪24断割り断面(東から)
		3 調査後全景(南から)		6 埴輪30断割り断面(東から)
:	写真図版 4	1~6号墳		7 墳丘断割り状況(南から)
		1 2・3号墳表土掘削後(北か	ら)	8 墳丘断割り断面(西から)
		2 1号墳表土掘削後(西から)	写真図版11	4号墳
		3 1・2号墳間周溝断面(西か	ら)	1 全景(南から)
		4 2・3号墳間周溝断面(西か	ら)	2 墓壙検出状況(南から)
		5 3・4号墳間周溝断面(西から	5)	3 第1~3埋葬施設(北から)
:	写真図版 5	1号墳	写真図版12	4号墳第1埋葬施設
		1 全景(南から)		1 全景(南から)
		2 埋葬施設(南から)		2 棺内南側副葬品出土状況(東から)
		3 埋葬施設調査状況(北西から))	3 棺内中央部副葬品出土状況(東から)
:	写真図版 6	1号墳		4 棺内長軸断面(北西から)
		1 埋葬施設棺内短軸断面(西か	ら)	5 棺内短軸断面(北から)
		2 埋葬施設墓壙断割り状況(南から	ら) 写真図版13	4号墳第2・3埋葬施設
		3 墓壙断割り状況(西から)		1 第2埋葬施設全景(南から)
:	写真図版 7	2号墳		2 第2埋葬施設副葬品出土状況(西から)
		1 墓壙検出状況(北から)		3 第2埋葬施設棺内短軸断面(南から)
		2 全景(北から)		4 第3埋葬施設全景(東から)
		3 埋葬施設(南から)		5 第3埋葬施設棺内短軸断面(西から)
:	写真図版8	2号墳	写真図版14	5号墳
		1 埋葬施設(西から)		1 墓壙検出状況(北から)
		2 棺内鉄刀出土状況(南から)		2 埋葬施設調査状況(東から)
		3 埋葬施設棺内長軸断面(南か	5)	3 埋葬施設(北から)
		4 埋葬施設棺内短軸断面(西か	ら) 写真図版15	7号墳
		5 墳丘・墓壙断割り状況(南東から	5)	1 調査前全景(北から)
		6 墳丘断割り断面(西から)		2 調査前全景(北から)
		7 墓壙断割り状況(西から)		3 調査前全景(南西から)
		8 墓壙断割り状況(南から)		4 調査前全景(東から)
:	写真図版 9	3号墳		5 調査前近景(南から)
		1 墓壙検出状況(南から)		6 石室の崩落石除去後(南から)
		2 全景(北から)		7 前庭部埋土断面(南西から)
		3 埋葬施設(南から)		8 東周溝断面(南から)
:	写真図版10	3号墳	写真図版16	7号墳
		1 墓壙断割り状況(北東から)		1 調査後全景(南から)
		2 墓壙断割り状況(西から)		2 石室全景(南から)

3 墓壙内鉄鏃出土状況(北から)

写真図版17	7号墳石室内遺物出土状況		7 石室検出状況(南から)
	1 前庭部から玄室内を望む(南から)		8 墳丘内列石検出状況(南東から)
	2 奥壁上から玄室内を望む(北から)	写真図版23	8号墳
	3 床面の状況(南から)		1 調査後全景(南から)
写真図版18	7号墳石室内遺物出土状況		2 石室と列石(南から)
	1 奥壁付近(南から)		3 石室全景(南から)
	2 西側壁北側(東から)	写真図版24	8号墳石室内遺物出土状況
	3 床面中央(南から)		1 前庭部から玄室内を望む(南から)
	4 西側壁南側(東から)		2 奥壁上から玄室内を望む(北から)
	5 袖石付近(東から)		3 玄門部西側(東から)
	6 床面奥半(北から)	写真図版25	8号墳横穴式石室
	7 礫床・棺台検出状況(北から)		1 前庭部・玄門(南から)
写真図版19	7号墳横穴式石室		2 奥壁(玄門から)
	1 前庭部・玄門(南から)		3 玄門(石室内から)
	2 奥壁(南から)	写真図版26	8号墳横穴式石室
	3 玄門(石室内から)		1 西側壁(南東から)
写真図版20	7号墳横穴式石室		2 東側壁(南西から)
	1 西側壁(北東から)		3 西側壁(東から)
	2 西側壁(東から)		4 東側壁(西から)
	3 北東隅持ち送り状況(南西から)		5 羨道西側壁(南東から)
	4 右片袖部(東から)		6 羨道東側壁(南西から)
	5 東側壁(北西から)		7 前庭部前面列石(南から)
	6 羨道西側壁(南東から)		8 南東側墳裾列石(南東から)
	7 羨道東側壁(南西から)	写真図版27	8号墳
写真図版21	7号墳		1 墳丘内列石検出状況(南から)
	1 墳丘全景(南西から)		2 南東側墳丘内列石(南から)
	2 墳丘全景(北西から)		3 墳丘断面と前庭部前面列石(南から)
	3 墳丘断割り断面(南から)		4 南東側墳丘内列石(南から)
	4 墳丘除去後(東から)		5 墳丘断割り断面(南から)
	5 石室基底石(南から)		6 石室南半基底石下の盛土(東から)
	6 石室掘り方(南から)		7 石室北半基底石(南から)
写真図版22	8号墳		8 奥壁裏込め断面(東から)
	1 掘削状況(南西から)	写真図版28	9号墳
	2 調査前全景(南から)		1 調査前全景(東から)
	3 西周溝断面(南から)		2 調査前全景(北から)
	4 東周溝断面(南から)		3 調査前全景(北から)
	5 表土掘削後(南から)		4 掘削状況(北東から)
	6 表土掘削後(南西から)		5 石室内埋土断面(西から)

	6	東墳丘断面(北東から)	写真図版35	10두	号墳
	7	石室内作業状況(西から)		1	表土掘削後(南西から)
	8	石室床面作業状況(東から)		2	墳丘全景(南から)
写真図版29	9 7	号 墳		3	北周溝断面(西から)
	1	調査後全景(西から)		4	南周溝断面(西から)
	2	石室全景(西から)		5	石室調査状況(西から)
写真図版30	9 5	号墳石室内遺物出土状況		6	土坑SX01土器出土状況(西から)
	1	床面奥半礫床(西から)		7	土坑SX01土器出土状況(南東から)
	2	床面奥半礫床(東から)	写真図版36	10두	号墳
	3	床面西側(南から)		1	調査後全景(西から)
	4	床面中央礫床(真上から)		2	前庭部から玄室内を望む(西から)
	5	西側壁 鉄刀(南から)		3	石室全景(南から)
	6	西側壁 異形提瓶(南から)	写真図版37	10두	号墳石室内遺物出土状況
	7	奥壁隅 管玉 (南西から)		1	奥壁上から玄室内を望む(東から)
	8	礫床上 耳環 (真上から)		2	玄門部付近(北から)
写真図版31	9 5	号墳横穴式石室	写真図版38	10두	号墳石室内遺物出土状況
	1	石室全景(西から)		1	奥壁付近(北西から)
	2	前庭部から玄室内を望む(西から)		2	奥壁付近(西から)
四本同じつ	0.5	□ 		3	床面中央(北から)
写真図版32	97	5.俱		J	
与具凶颀32	1	5項 墳丘全景(南から)	写真図版39		号墳横穴式石室
与具図版32			写真図版39		
与具凶颀32	1	墳丘全景(南から)	写真図版39	105	号墳横穴式石室
与具凶颀32	1 2	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から)	写真図版39	10 5	号墳横穴式石室 石室全景(西から)
与具凶颀32	1 2 3	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から)	写真図版39	10 5 1 2	号墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から)
与具凶颀32	1 2 3 4	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から)	写真図版39	10 5 1 2 3	号墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から)
与具凶颀32	1 2 3 4 5	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から)	写真図版39	10 5 1 2 3 4	登墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から)
与具凶颀32	1 2 3 4 5 6 7	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から)	写真図版39	10 5 1 2 3 4 5	音墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から)
	1 2 3 4 5 6 7 8	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から) 石室基底石(西から)	写真図版39	10 5 1 2 3 4 5	号墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から) 框石(東から) 羨道南側壁(北から)
	1 2 3 4 5 6 7 8	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から) 石室基底石(西から) 石室掘り方(西から)		10 5 1 2 3 4 5 6 7	号墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から) 框石(東から) 羨道南側壁(北から)
	1 2 3 4 5 6 7 8 9	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から) 石室基底石(西から) 石室掘り方(西から)		105 1 2 3 4 5 6 7	号墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から) 框石(東から) 羨道南側壁(北から)
	1 2 3 4 5 6 7 8 9 1	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から) 石室基底石(西から) 石室掘り方(西から) 環下層住居跡 南北断面(西から)		10 5 1 2 3 4 5 6 7 10 5 1	音墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から) 框石(東から) 続道南側壁(北から) 境 北側墳丘断割り断面(西から)
	1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から) 石室基底石(西から) 石室掘り方(西から) 子 墳下層住居跡 南北断面(西から) カマド上面出土土師器		105 1 2 3 4 5 6 7 105 1 2	号墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から) 框石(東から) 羨道南側壁(北から) 号墳 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から)
	1 2 3 4 5 6 7 8 9 5 1 2 3	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から) 石室基底石(西から) 石室掘り方(西から) 賃下層住居跡 南北断面(西から) カマド上面出土土師器 東西断面(南から)		10 5 1 2 3 4 5 6 7 10 5 1 2 3	写墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から) 框石(東から) 羨道南側壁(北から) 賃 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 墳丘断面(南西から)
写真図版33	1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から) 石室基底石(西から) 石室掘り方(西から) 持下層住居跡 南北断面(西から) カマド上面出土土師器 東西断面(南から) カマド検出状況(南から)		105 1 2 3 4 5 6 7 105 1 2 3 4	号墳横穴式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から) 框石(東から) 羨道南側壁(北から) 賃 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 墳丘断面(南西から) 東側墳丘断割り断面(南から)
写真図版33	1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から) 石室基底石(西から) 石室掘り方(西から) 子 「暦住居跡 南北断面(西から) カマド上面出土土師器 東西断面(南から) カマド検出状況(南から) カマド断面(西から)	写真図版40	105 1 2 3 4 5 6 7 105 1 2 3 4 5 5	環境内式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から) 框石(東から) 羨道 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 東側墳丘断割り断面(南から) 東側墳丘断割り断面(南から) 東側墳丘断割り断面(南から) 東側墳丘断割り断面(南から)
写真図版33	1 2 3 4 5 6 7 8 9 5 1 2 3 4 5 9 5 1 1	墳丘全景(南から) 墳丘断面(西から) 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 奥壁裏込め状況(東から) 東側墳丘断割り断面(南から) 石室基底石(西から) 石室掘り方(西から) お下層住居跡 南北断面(西から) カマド上面出土土師器 東西断面(南から) カマド断面(西から) カマド断面(西から)	写真図版40	10 5 1 2 3 4 5 6 7 10 5 1 2 3 4 5 6	環境内式石室 石室全景(西から) 奥壁(西から) 玄門(石室内から) 北側壁(南から) 南側壁(北西から) 框石(東から) 羨道 北側墳丘断割り断面(西から) 南側墳丘断割り断面(西から) 東側墳丘断割り断面(南から) 東側墳丘断割り断面(南から) 東側墳丘断割り断面(南から) 東側墳丘断割り断面(南から)

3 調査後全景(南から)

写真図版42	115	号墳横穴式石室		2	調査前全景(東から)
	1	石室全景(南から)		3	調査前全景(南から)
	2	石室内埋土断面(南から)	写真図版49	火L	山城跡
	3	石室内埋土断面(西から)		1	黒井城跡遠景(南から)
	4	前庭部から玄室内を望む(南から)		2	尾根部調査状況(南から)
	5	奥壁と天井石(南から)		3	西側斜面調査状況(南から)
	6	西側壁(南東から)		4	第2郭付近調査状況(南から)
	7	東側壁(南西から)		5	西帯曲輪覆土断面(南から)
写真図版43	115	号墳		6	尾根上東肩部覆土断面(南西から)
	1	墳丘断面 (南から)		7	西帯曲輪覆土断面(南から)
	2	石室基底石(南から)		8	東側斜面覆土断面(南西から)
	3	石室掘り方(南から)	写真図版50	火L	山城跡
写真図版44	12+	号墳		1	東尾根線からの通路(南西から)
	1	埋葬施設(東から)		2	東尾根線鞍部の盛土(東から)
	2	埋葬施設断面(西から)		3	東尾根線からの全景(東から)
	3	埋葬施設長軸北側断面(西から)		4	尾根上鞍部の通路(東から)
	4	埋葬施設長軸南側断面(西から)	写真図版51	火山	山城跡航空写真
写真図版45	135	号墳		1	遠景(北東から)
	1	全景(北から)		2	全景(西から)
	2	埋葬施設(北から)		3	火山城跡(手前)から黒井城跡
	3	埋葬施設調査状況(西から)		Ž	を望む(南から)
	4	墓壙完掘状況(北から)	写真図版52	火L	山城跡
写真図版46	135	号墳		1	調査後全景(南から)
	1	埋葬施設(西から)		2	調査後南半部(南から)
	2	棺内副葬品出土状況(南から)		3	調査後北半部(北から)
	3	鉄鏃出土状況(南から)	写真図版53	火L	山城跡
	4	鉄剣(南から)		1	第1~2郭(北から)
	5	勾玉出土状況(南から)		2	第1郭南側通路(北から)
	6	不明鉄製品出土状況(南から)		3	第1郭東側平坦地4(北から)
	7	棺内短軸断面(西から)		4	第1郭西側切土(北から)
写真図版47	火	山城跡		5	平坦地7(南から)
	1	黒井城跡から火山城跡を望む		6	平坦地7埋土断面(西から)
	((北から)		7	第3~5郭(北から)
	2	黒井城跡から水分かれ方面を望	写真図版54	火L	山城跡
	q	む(北東から)		1	帯曲輪(南から)
	3	遠景(北東から)		2	平坦地 5 (南から)
写真図版48	火山	山城跡		3	帯曲輪(北から)
	1	調査前遠景(北から)		4	平坦地1(北東から)

	5 平坦地1焼土断ち割り(南から)	写真図版79	10号墳 土器 (6)
写真図版55	火山城跡	写真図版80	10号墳土器 (7)・11号墳 土器
	1 平坦地4 (北から)	写真図版81	火山城跡 土器・火山遺跡 土器
	2 平坦地4 (南から)	写真図版82	2・3号墳 鉄器
	3 平坦地3 (南から)	写真図版83	4号墳 鉄器(1)
	4 平坦地2 (北から)	写真図版84	4号墳 鉄器(2)
	5 平坦地6 (南西から)	写真図版85	4号墳 鉄器(3)
	6 第2郭東側盛土断面(南から)	写真図版86	7号墳 鉄器(1)
写真図版56	火山遺跡	写真図版87	7号墳 鉄器 (2)
	1 全景(南から)	写真図版88	7号墳 鉄器 (3)
	2 北半部(南から)	写真図版89	7号墳 鉄器(4)・8号墳 鉄器
	3 南半部 (西から)	写真図版90	9号墳 鉄器(1)
写真図版57	火山遺跡	写真図版91	9号墳 鉄器(2)
	1 土坑SX01 (西から)	写真図版92	9号墳 鉄器(3)
	2 土坑SXO2 (西から)	写真図版93	10号墳 鉄器(1)
	3 柱穴P1土器出土状況	写真図版94	10号墳 鉄器 (2)
	4 9号墳前庭部出土中世土器(西から)	写真図版95	10号墳 鉄器 (3)
写真図版58	2~4号墳 土器・3号墳 形象埴輪	写真図版96	13号墳 鉄器(1)
写真図版59	3号墳 埴輪	写真図版97	13号墳 鉄器 (2)・火山城跡 鉄器・
写真図版60	7号墳 土器(1)		火山遺跡 鉄器
写真図版61	7号墳 土器(2)	写真図版98	火山遺跡 石器
写真図版62	7号墳 土器(3)		
写真図版63	7号墳 土器(4)		
写真図版64	7号墳 土器(5)		
写真図版65	7号墳 土器(6)		
写真図版66	7号墳 土器(7)		
写真図版67	7号墳 土器(8)		
写真図版68	7号墳 土器(9)		
写真図版69	7号墳 土器(10)		
写真図版70	8号墳 土器(1)		
写真図版71	8号墳 土器 (2)・9号墳 土器 (1)		
	9号墳 土器(2)		
写真図版73	9号墳 土器(3)		
写真図版74	10号墳 土器(1)		
	10号墳 土器(2)		
写真図版76	10号墳 土器(3)		
写真図版77	10号墳 土器 (4)		

写真図版78 10号墳 土器 (5)

第1章 調査の経過

第1節 はじめに

昭和63年に開通した舞鶴自動車道(平成15年3月から舞鶴若狭自動車道に改称)は、美嚢郡吉川町で中国自動車道と分岐した後、三田市・篠山市を経由して丹波市春日町・市島町を通過し、京都府福知山市に抜けている。兵庫県教育委員会は昭和57~61年にかけて、道路建設に伴う発掘調査を実施しており、特に春日町域では、旧石器時代・弥生時代・奈良時代の大集落である七日市遺跡、奈良時代の「里長」木簡が出土した山垣遺跡を始めとする大きな成果があげられた。

その後、建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所(当時)によって、但馬と丹波、ひいては阪神間とを直結させる北近畿豊岡自動車道の建設が計画された。この道路は春日町の中央部に設けられた春日インターチェンジを起点に西へ向かい、氷上町で加古川沿いに北上して青垣町を抜け、遠阪トンネルから朝来郡山東町を経て和田山町で播但連絡道和田山インターチェンジとジャンクションを結ぶ。計画ではさらに養父市・城崎郡日高町を経由して豊岡市に至る予定である。

この経路はいわゆる氷上回廊から山陰道に向かうルートで、埋蔵文化財も濃密に分布することが予想 された。そこで兵庫県教育委員会は事業者からの開発事業計画の照会に基づき、路線予定地内の埋蔵文 化財について、分布調査を実施するに至った。

第2節 平成3年度の調査

分布調査(遺跡調査番号910019)

この調査では計画路線の内、氷上郡(当時)の春日町・氷上町・青垣町の3町を対象範囲とし、平成3年4月15~19日の5日間で現地踏査した他、圃場整備などに伴う既往調査のデータ収集などによって、遺跡の分布状況を調査した。

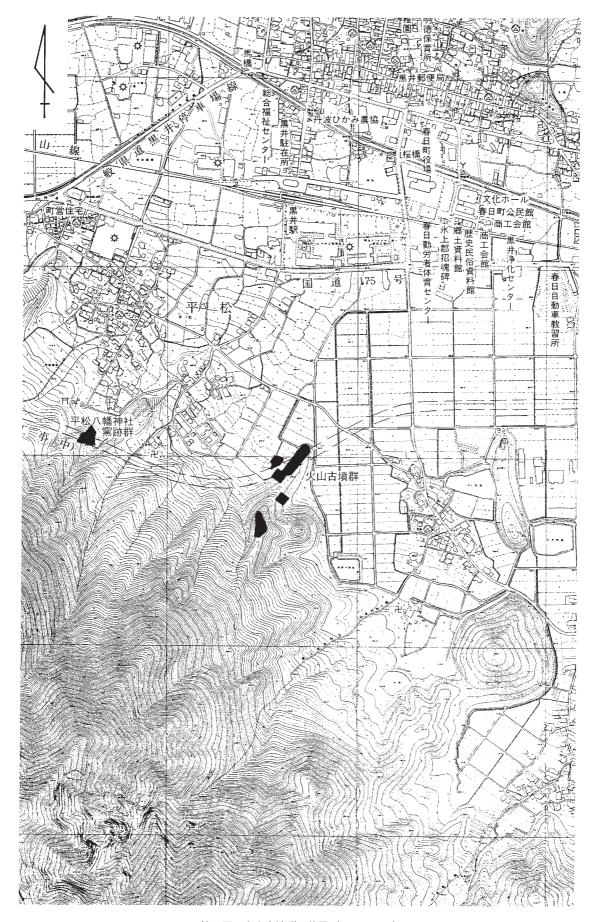
その結果、春日町域においてはNo.1~13地点の13箇所で埋蔵文化財包蔵地がリストアップされた。 その中には周知の埋蔵文化財包蔵地である七日市遺跡(No.1地点)・朝日城跡(No.8地点)・坂古墳群 (No.13地点)が含まれている。その他の10箇所の内、火山古墳群にあたるNo.2地点では、尾根線上で4 基の古墳を発見していて、その段階では木棺直葬墳のみからなる古墳群という認識であった。

第3節 平成7年度の調査

確認調查(遺跡調査番号950364)

平成3年度の分布調査の成果に基づき、平成7年3月発行の氷上郡埋蔵文化財分布地図(氷上郡教育委員会編)において火山古墳群として登載された。

トレンチ調査の結果、尾根線上で5基の古墳を確認し、2~4号墳では埋葬施設を検出した。また3号墳の周辺からは埴輪片が出土し、春日町域で初の埴輪検出例となった。その他、尾根の南西側斜面において横穴式石室墳(のちの7号墳)が見つかり、木棺直葬墳から横穴式石室墳への変遷がたどれる古



第1図 火山古墳群の位置(1:10,000)

墳群であることが判明した。

分布調查(遺跡調査番号950366)

一方、火山古墳群に隣接する地区で道路建設に伴う土取りが計画され、当該範囲にも遺跡が存在する 可能性が高いとみられたため、分布調査を実施した。

その結果、火山古墳群から尾根線沿いに南へ上った山頂部に古墳状の高まりが1基あり、その周囲が 曲輪状に整形されているところから、中世の山城跡が存在する可能性も考えられた。またこの山頂部の 東側斜面が山懐状の谷部になっており、谷の中腹で半壊状態の横穴式石室墳1基(8号墳)が見つかっ た。その他に不明確ではあるが、やや隆起した地形2箇所が認められた。

全面調查(遺跡調査番号950367)

尾根線上の木棺直葬墳の範囲を全面調査した結果、6基の円墳を検出し、尾根の先端から順に $1\sim6$ 号墳とした。そのうち $1\sim5$ 号墳で埋葬施設を調査し、3号墳では円筒埴輪列を検出した。

調査成果は記者発表の後、平成8年3月10日に現地説明会を開催し、一般に公開した。

第4節 平成8年度の調査

分布調査(遺跡調査番号960310)

平成7年度に分布調査を実施した土取り計画の範囲がさらに拡大したため、追加範囲についても分布 調査を実施した。

その結果、前回の分布調査で発見した山頂部の古墳状高まりと曲輪状の遺構全体が範囲内に含まれる ことを確認し、さらに西側斜面でも犬走り状の段を発見した。また尾根続きの稜線上にも曲輪状平坦地 が認められた。

なお、当初の調査対象範囲ではなかったが、火山古墳群西側山裾の計画路線内において、新たに横穴 式石室墳1基(9号墳)を発見した。

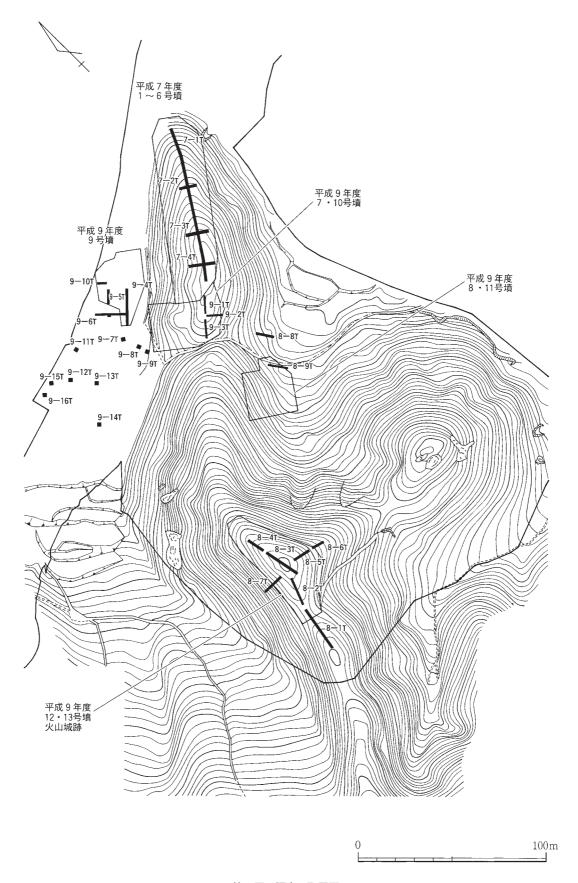
確認調查(遺跡調査番号960371)

土取りの計画範囲内において、埋蔵文化財確認調査を実施した。山頂部の古墳および山城跡の存在が予想される範囲について 7本のトレンチ $(8-1\sim7$ トレンチ)を、東側谷部の古墳状隆起 2 箇所について 2本のトレンチ $(8-8\sim9$ トレンチ)をそれぞれ設定した。

調査の結果、山頂部では古墳の墓壙・中世の土坑・曲輪状の段差を検出し、古墳(のちの13号墳)・中世の遺跡・山城跡の複数の性格をもつ遺跡であることが判明した。ただし尾根続きにある曲輪状平坦地では、遺構の兆候は認められなかった。一方、東側谷部の古墳状隆起については自然地形であることが判った。

第5節 平成9年度の調査

全面調查(遺跡調査番号970161)



第2図 調査区配置図

1~6号墳が立地する尾根の西側斜面~山裾に存在する2基の横穴式石室墳(7・9号墳)を対象とした。ところが6号墳南側の稜線上で横穴式石室に関係するらしい石材を発見した他、9号墳の周囲にも柱穴等の遺構が広がることが判明したため、急遽確認調査(970210)を実施して遺構の広がりを把握した。調査の結果確認された10号墳と火山遺跡の範囲についても調査区を拡張し、併せて全面調査した。調査成果は記者発表の後、平成9年7月26日に現地説明会を開催する予定であったが、台風の影響による悪天候で中止となったため、予定を変更して7月31日に地元向けの説明会を実施した。

確認調查(遺跡調査番号970210)

6号墳の南側で、7号墳の東側上方にあたる稜線上付近に散在する石材群を清掃したところ、横穴式石室の一部とみられる石の並びが見つかったため、古墳の存在が確実となり、これを10号墳とした。石室を中心に北・東・南の3方向に9-1~3トレンチを設定し、墳丘の裾部を検出した。

また9号墳では調査区の南西側に $9-4\sim16$ トレンチを設定した結果、9-4トレンチで9号墳の南周溝の外側の肩部を検出した。また $9-4\sim6\cdot10$ トレンチにおいて中世の柱穴・包含層を確認し、調査の拡張が必要な範囲を確定した。

全面調査(遺跡調査番号970337~970339)

前年度の確認調査(遺跡調査番号960371)で把握した山頂部の遺構群と、東側谷部に存在する8号墳を対象とした。

山頂部では2基の古墳(12・13号墳)の埋葬施設と、中世の土坑数基、山城跡を調査した。 谷部では8号墳の東側で新たに低墳丘の横穴式石室墳(11号墳)を検出し、併せて調査した。 調査成果は記者発表の後、平成10年1月17日に現地説明会を開催し、一般に公開した。

表 1 火山古墳群調査一覧表

遺跡調査番号	種別	遺跡名	調査期間	調査担当者	備考
910019	分布	No. 2 地点	平成3年4月15日 ~平成3年4月19日	水口富夫・平田博幸 西口圭介・中川 渉 藤田 淳・多賀茂治 鈴木敬二・柏原正民 廣野 誠	4基の古墳状隆起を発見。
950364	確認	№.2地点 (火山古墳群)	平成7年12月11日 ~平成7年12月12日	山下史朗	5基の古墳(1~5号墳)を確認した他、横穴石 室墳1基(7号墳)を発見。
950366	分布		平成8年1月12日	山下史朗	山頂で古墳状隆起1基(13号墳)と曲輪状遺構 (火山城跡)、東側谷部で横穴式石室墳1基(8号 墳)と古墳状隆起2箇所を発見。
950367	全面	火山古墳群	平成8年1月9日 ~平成8年3月29日	山下史朗・多賀茂治	火山 1 ~ 6 号墳を調査。
960310	分布		平成8年10月21日	山下史朗・中川 渉	前回の分布調査成果を追認した他、西側山裾で横 穴式石室墳(9号墳)を発見。
960371	確認	火山遺跡	平成8年12月2日 ~平成9年3月19日	山下史朗・山本 誠 長濱誠司	山頂部で古墳の墓坑・中世の土坑・山城の遺構を 検出。
970161	全面	火山 7 ・ 9 ・ 10号墳 火山遺跡	平成9年5月12日 ~平成9年10月7日	中川 渉・多賀茂治 岡 昌秀	火山7・9・10号墳を調査。 火山遺跡を調査。
970210	確認	火山10号墳 火山遺跡	平成9年6月17日 ~平成9年6月23日	中川 渉・多賀茂治 岡 昌秀	火山10号墳・火山遺跡の範囲を確認。
970337 970338 970339	全面	火山城跡 火山遺跡 火山12・13・ 8号墳	平成9年10月20日 ~平成10年2月10日	中川 渉・多賀茂治 岡 昌秀	山頂部で火山12・13号墳、火山城跡、中世の遺構 を調査 東側谷部で火山8・11号墳を調査

第6節 出土品整理・報告書作成作業

出土品の整理作業は平成13~16年度の4箇年度に分けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に おいて実施した。

平成13年度

土器・石器の水洗い・ネーミング・接合補強、金属器の保存処理を行った。

調查担当職員 主査 中川 渉 主任 多賀茂治

整理担当職員 主査 菱田淳子 主査 中村 弘(工程管理担当)

主查 加古千恵子 技術職員 岡本一秀(保存処理担当)

非常勤嘱託員 長谷川洋子 伊藤ミネ子 家光和子 衣笠雅美 江口初美

吉田優子 島村順子 石野照代 河上智晴 蓬莱洋子

西野淳子 三好綾子 藤井光代 三島重美(保存処理担当)

平成14年度

土器・石器の実測・拓本・復元・写真撮影・写真整理、金属器の保存処理、分析鑑定を行った。

調查担当職員 主查 中川 渉

整理担当職員 主査 菱田淳子 主任 深江英憲 (工程管理担当)

主查 加古千恵子(保存処理担当)

非常勤嘱託員 森本貴子 高田めぐみ 高瀬敬子 垣本明美 香川フジ子 西口由紀

島村順子 木村淑子 前田千栄子 鈴木まき子 中西睦子 宮野正子

西野淳子 三好綾子 藤井光代 三島重美(保存処理担当)

日々雇用職員 豊田貞代 森田美穂(保存処理担当)

平成15年度

図面補正、土器・石器のトレース、金属器の保存処理を行った。

調査担当職員 主査 中川 渉

整理担当職員 主査 長濱誠司(工程管理担当)

主任 岡本一秀(保存処理担当)

非常勤嘱託員 森本貴子 高田めぐみ 高瀬敬子 垣本明美

栗山美奈 三好綾子 藤井光代 三島重美 (保存処理担当)

日々雇用職員 西村美緒

平成16年度

金属器の実測・拓本・写真撮影・トレース、写真整理、レイアウト、報告書印刷を行った。

調査担当職員 主査 中川 渉

整理担当職員 主査 長濱誠司(工程管理担当)

非常勤嘱託員 森本貴子 佐伯純子 島田留里

日々雇用職員 荒木由美子

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

丹波市(旧氷上郡)は氷上町石生の水分かれを境に、加古川水系と由良川水系に分かれる。春日盆地では由良川水系の竹田川と黒井川が盆地の北部で合流し、福知山方面へ流下する。火山古墳群が位置する丘陵の前面には黒井川が東流するが、その周辺では過去に河川争奪があったといわれ、沖積面は低湿地であった。しかしこの谷間は「氷上回廊」とも呼ばれ、太平洋側と日本海側をつなぐ最も平坦なルートとして知られる。

火山古墳群が位置する丘陵は、丹波市春日町・柏原町、篠山市の旧西紀町が境を接する山塊から派生する一支尾根にあたり、石才から野村にかけて丘陵の先端が、北西ー南東方向の直線上に揃う中、火山が目立って突出している。火山の南東側には野村断層・野村グランドのケルンコルが存在するが、棚原・国領方面までは丘陵に遮られて見通しがきかない。従って火山からの眺望は、黒井〜新才の黒井川流域から、七日市・野上野周辺の盆地中央部が主体となる。

第2節 歷史的環境

春日町域では盆地という1つの地域の中で、旧石器時代から近世までの遺跡が比較的濃密に調査されてきている。ここでは、本書に関わりのある古墳時代と中世城郭について触れることにする。

古墳時代

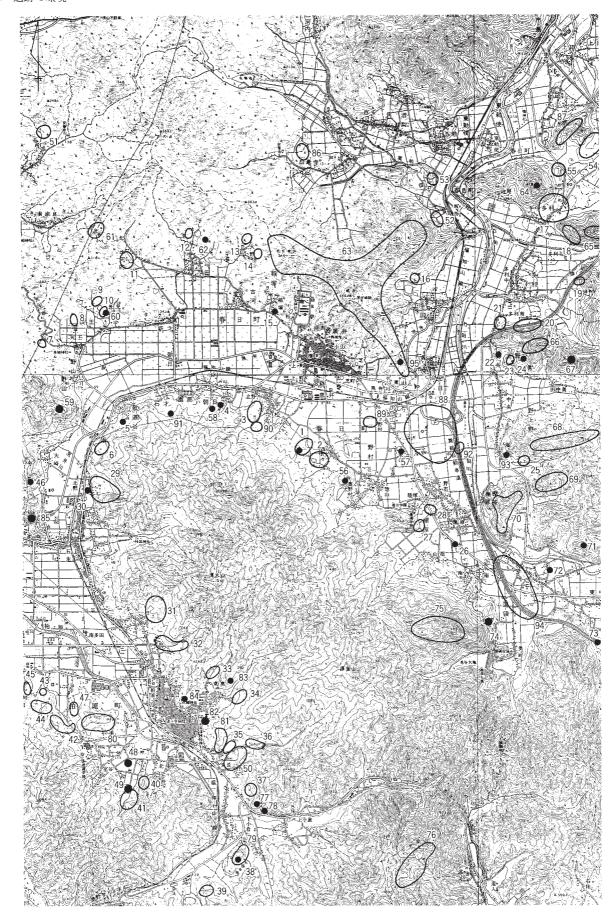
春日町内には現在のところ140基ほどの古墳があるが、5世紀後半を遡る時期の確実な例は知られておらず、古墳の築造が盛んになるのは、須恵器の副葬が一般化する段階以降のようである。

まず町内を代表する古墳として、野上野に二間塚古墳(22)・桂谷寺古墳(24)という2基の前方後 円墳がある。全長はいずれも40m前後で、平地にある二間塚古墳と丘陵上の桂谷寺古墳が前方部を向け あう形で並んでいる。野上野から多利にかけての春日部地区では、多利向山古墳群(20)・松ノ本古墳 群(19)が発掘調査されており、多利向山C2号墳の横穴式石室は正方形プランの古い型式を示す。

黒井川左岸の稲塚にはかつて稲塚大塚古墳(15)が存在し、前方後円墳から明治~大正時代に馬具・ 刀剣・玉類・土器が出土したとの記録がある。黒井川右岸の丘陵裾では、火山古墳群の他に、平松古墳 群(3)・朝日八幡山古墳群(4)で横穴式石室墳・木棺直葬墳が調査されている。さらに柏原町域と の境に近い坂には坂古墳群(6)がある。そのうち1・2号墳は全長20m前後の小型の前方後円墳で、 奥壁に三角隅持ち送り技法を用いた横穴式石室をもつことで知られている。

町域の南部で発掘調査された古墳はないが、棚原桜塚古墳(26)から出土した金銅装大刀が春日町歴 史民俗資料館に収蔵されており、丹波市内では唯一の装飾大刀出土例である。

古墳に比べて当該時期の集落遺跡についての情報は少なく、七日市遺跡(88)で布留期の住居跡が見つかっている以外、面的な調査例はほとんど無い。おそらくこの地域ではその段階から、現在の集落と



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1:50,000)

同じ場所に居住域が移ったため、遺跡が見つからないという現象が生じるものと考えられる。

中世城郭

町内を代表する城郭に国指定史跡黒井城跡(63)がある。戦国時代末期に赤井直正によって改修された結果、本丸・二の丸・三の丸の石垣に象徴される本格的な戦国城塞の威容を誇る。明智光秀によって落城した後、ほとんど人手が入っていないため保存状態が良く、現在も町のランドマークとなっている。

黒井城跡の正面に当たる丘陵には、朝日城跡(58)・茶臼山城跡(56)がある。朝日城跡は黒井城の支城としての役割を担っており、城跡の遺構のみならず、家臣団の屋敷跡が遺存しているところに特色がある。一部で開発に伴う発掘調査が実施され、曲輪群・虎口・畝状空堀・竪堀などが見つかっている。茶臼山城跡は火山城跡から南東方向の独立丘陵に位置し、山頂部に曲輪が認められる。明智光秀方の陣城であったとの伝承がある。

野村集落西側の水田地帯に方形土塁をもった野村城跡(57)がある。丹波では珍しい平地の方形居館で、条里型地割りの外側に接しているところから、当時の耕作地を避けて占地したのであろう。

町域の南端に位置する三尾城跡は、多紀連山の天険に拠って氷上郡-多紀郡のルートを抑えており、 黒井城に次いで重要な城塞といえる。山城の北麓には方形居館の河津館跡(73)があり、発掘調査によって土塁と堀の一部が見つかっている。

参考文献

兵庫県教育委員会1982 『兵庫県の中世城館・荘園遺跡―兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告―』 櫃本誠一・瀬戸谷晧1982 『日本の古代遺跡 2 兵庫北部』保育社 氷上郡教育委員会1995 『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(2)―兵庫県氷上郡春日町―』

春日町歴史民俗資料館2000 『三万年のメッセージ 七日市遺跡と「氷上回廊」』

表 2 周辺の遺跡

古均	費および古墳時代の遺跡	24	桂谷寺古墳群	49	三原遺跡	73	河津館跡
1	火山古墳群・火山城跡	25	塩ケ谷岡田古墳群	50	見長遺跡	74	国領岩戸神社城館遺跡
'	・火山遺跡	26	棚原桜塚古墳	51	北油良古墳群	75	高尾城跡
2	西野々古墳群	27	六ツ塚古墳群	52	長者ヶ野古墳群(南)	76	金山城跡
3	平松古墳群	28	棚原古墳群	53	長者ヶ野古墳群(北)	77	円成寺城跡
4	朝日八幡山古墳群	29	親王塚北野古墳群	54	梶原遺跡群	78	円成寺館跡
5	歌道谷古墳群	30	親王塚古墳	55	姫塚古墳群	79	大部谷城跡
6	坂古墳群	31	大歳神社古墳群	城蝕	棺および関連遺跡	80	小南山城跡
7	天王石原古墳群	32	昭和池古墳群	56	茶臼山城跡	81	新町城跡
8	天王稲葉古墳群	33	藤の目古墳群	57	野村城跡	82	柏原陣屋跡
9	長見古墳群	34	東奥古墳群	58	朝日城跡	83	奥村城跡
10	長見楯縫神社古墳群	35	新町古墳群	59	野山城跡	84	八幡山城跡
11	牛河内古墳群	36	見長上古墳群	60	長見城跡	85	横田城跡
12	山田樹源寺東古墳群	37	法蓮寺古墳群	61	牛河内城跡	86	東城館遺跡
13	大野氏亀山上古墳群	38	中山古墳群	62	山田城館遺跡	87	畑山城館遺跡
14	氏亀古墳群	39	赤花古墳群	63	黒井城跡	北	丘畿道関連遺跡
15	稲塚大塚古墳群	40	北中古墳群	64	小富士山城跡	88	七日市遺跡
16	多田古墳群	41	三原古墳群	65	小多利城館遺跡	89	西野々遺跡
17	柏野古墳群	42	沖田古墳群	66	桂谷寺裏城館遺跡	90	平松八幡神社窯跡群
18	小多利古墳群	43	挙田 B 古墳群	67	野上野城跡	91	石才大池遺跡
19	松ノ本古墳群	44	おさんの森古墳群	68	野々間北城館遺跡	主要	要遺跡
20	多利向山古墳群	45	拳田A古墳群	69	野々間南城館遺跡	92	山垣遺跡
21	芝ヶ西古墳群	46	横田山古墳	70	尉ヶ腰城跡	93	野々間遺跡
22	二間塚古墳	47	清蔵谷遺跡	71	柚津城跡	94	国領遺跡
23	野上野西古墳群	48	三原西遺跡	72	国領城跡	95	東山墳墓群

第3章 火山古墳群

第1節 概要

火山古墳群は13基の古墳からなる。古墳は平松集落と西野々集落の間にある丘陵上及び丘陵裾に分布する。北近畿豊岡自動車道の本線部分と、これに伴う土取り工事が広範囲に及んだため、ひとつの古墳群全てが調査対象となった。古墳は平野部に突き出た南北120m、東西60mほどの丘陵の尾根上に北から1号墳、2号墳、3号墳、4号墳、5号墳、6号墳、10号墳が並び、この丘陵の西側斜面に7号墳、丘陵西側裾に9号墳が立地している。この丘陵の東側に北東に開く谷があり、その奥に8号墳、11号墳がある。1~7号墳・10号墳が乗る丘陵から、鞍部を隔ててさらに南側には、後世に城郭として利用された丘陵があり、その頂部に12号墳、13号墳の2基の古墳が築かれている。古墳は1~6号墳及び12号、13号墳の8基が木棺直葬墳であり、7号~11号墳の5基が横穴式石室墳である。古墳群は5世紀後半に築造が開始され、最も新しい古墳は7世紀前半のものである。

なお各古墳の番号は、発見の順に付けていったため、立地上の順序とは一致しないが、報告においても番号はそのままにしている。また遺物の取り上げは、木棺直葬墳は墳頂部、墳丘斜面、墳丘裾に分けており、墳丘斜面及び墳丘裾については古墳の中軸線(尾根に平行する南北方向のライン)を基準に東西で区別している。横穴式石室墳については、墳丘を石室中軸ライン及び墳丘の中心点を通って石室中軸ラインに直交するラインを基準に4分割し、中軸ラインの奥壁側を起点として時計まわりに1~4区としている。また石室内は玄室・羨道それぞれについて石室中軸ラインを基準に東西もしくは南北に分け、さらに石室奥壁を起点に手前に向かって1mごとに1区、2区…と地区割りして遺物を取り上げている。

以下の記述の中で、主な遺物については出土位置を説明・図示しているが、石室内で床面から浮き上がっていた遺物や墳丘斜面などから出土した遺物については詳細な出土位置の説明を省き、巻末の出土 遺物一覧表に掲載している。

第2節 1号墳

1 立地

古墳群の北端、尾根の先端部の傾斜変換点に位置する。この古墳から先は尾根が急傾斜に変わる。標高は約110mである。

2 調査前の状況

調査前はわずかな平坦地が認められるのみであり、古墳の規模や墳形は不明であった。

3 墳丘(図版4、写真図版5)

墳丘は急傾斜の斜面に築かれているために、盛土をほとんど失っており、地山を削りだした南北2m、

東西 5 m程度の平坦地と、墳丘の輪郭が残るのみである。墳丘の痕跡は西側では明瞭ではないが、東側には墳丘裾を整形した跡がわずかに残る。南側の 2 号墳との間には周溝はなく、平坦地を削りだした際の段が認められるのみである。墳形、規模ともに不正確にしかわからないが、直径10m程度の円墳に復元ができる。

4 埋葬施設(図版5、写真図版5・6)

地山を削り出した平坦面一杯に長さ4.2mの長方形の墓壙を東西方向(尾根に直交する方向)に掘り、ここに長さ3.3mの割竹形木棺を納めたものである。墓壙は岩盤を掘り抜いた部分しか残存していないが、棺の高さを考えると、本来は地山の上に積まれた盛土の上から掘り込まれていたものであろう。墓壙幅は東西両側で異なり、東側が1.4m、西側が1.1mである。深さは約0.3mであるが、棺の納まりを考慮すると、本来は幅と同程度の深さを有していたと推定する。墓壙底は東西3.7m、南北0.8mの広さがあり、墓壙壁は北側・南側が約60度、西側が約30度、東側が約50度の角度で立ち上がっている。墓壙底は黄橙色の精良な土(シルト~極細砂)が堆積している。この土は墓壙掘削時の残土を利用して、棺の安定をはかるための置土としたものであろう。

棺は木質が完全に腐朽消滅しているが、墓壙内に明瞭な痕跡が認められた。長さ3.3mの割竹木棺であり、墓壙内に地山を掘削して得られた土(褐色砂礫混じりシルト)を置き、その上に棺を置く。棺の痕跡は長さ3.3m、深さ0.3mであり、底は緩やかに円弧を描く。この円弧から推定した棺の直径は約0.8mである。棺の幅は東西で異なる。東側が0.75m、西側が0.62mであり、墓壙の幅と同じく東側が広くなる。このことから、頭位方向は東向きであったと考えられる。

墓壙内の南側、棺と墓壙壁との間には、45cm×30cm、18cm×12cmの2個の石が認められる。埋葬時に意図的に置いたものかどうかは判断できない。棺の腐朽後に流れ込んだ埋土は上下2層に分けられる。下層は赤褐色の中砂〜粗砂であり、上層は淡褐色の礫混じりシルト〜極細砂である。下層の土はやや赤味を帯びた土であり、ベンガラや朱の代用として、意図的に棺の覆土に用いたものであろうか。上層の土は棺の下側や側面に置かれた土と同質である。

5 遺物出土状況

副葬品はなく、墳丘からの遺物の出土もなかった。

6 小結

出土遺物が無いため、時期を特定することは極めて困難である。埋葬施設が割竹形木棺直葬であり、6世紀前半以前であることは間違いないであろう。

第3節 2号墳

1 立地

尾根の先端に近いところ、1号墳の南側、標高113m付近に立地する。

2 調査前の状況

墳頂部の平坦面が明瞭に観察できたため古墳との認識は可能であったが、墳丘の裾は明確ではなく、 墳丘の形状や規模は不明であった。

3 墳丘(図版6、写真図版7)

墳丘は地山を削りだし、盛土を施したものである。盛土は大部分が流失しているが、墳頂部にわずかに残存している。墳丘の東側裾が地滑りのために損壊する。墳丘裾はさほど明瞭ではないが、傾斜変換点を追うことにより直径11.5mの円墳に復元できる。墳丘北側裾が標高111.2m、墳丘の最高部113.8mであるので、現状での高さは約2.6mであるが、本来あった盛土の高さを考えると、高さは約3mと推定できる。

墳丘は墳頂部と墳裾部を地山まで削り、その土を墳頂部の周辺に10cm程度の厚みで積み上げて成形している。墳頂の平坦面は東西6.4m、南北6.2mの広さがある。

4 埋葬施設(図版7、写真図版7・8)

この古墳の埋葬施設は、長さ3.4m、幅2.0mの墓壙に、長さ2.0m、幅0.9mの組み合わせ式の箱形木棺を納めたものである。墓壙は盛土の上から掘りこまれており、底がわずかしか地山に達していないため、盛土の流失によって極めて残存状態が悪かった。墓壙は約0.2mの深さを残すのみであり、表土を除去した段階で棺内・墓壙内の副葬品が顔を出す状態であった。

棺は完全に腐朽しているが、痕跡は明瞭であった。棺は墓壙のやや南寄りに置かれ、墓壙底には墓壙内の踏み固め土(墓壙掘削の最終段階で、底に残る微細な削り滓が踏み固められたもの。意図的な置き土ではない。)があり、その上に棺が据えられる。棺の東側小口には拳大の礫を10個ほど置き、小口板のおさえとしている。棺と墓壙の間には土が充填されるが、しまりは悪い。棺内の埋土は上下2層に分けられるが、上層よりも下層の方が土の締まりは良い。

副葬品の配置から、東側に頭を向けて埋葬されていたと推定できる。

5 遺物出土状況

棺の北側、やや西寄りの位置から、鉄製大刀1本(M1)が鋒を西に向けて出土しており、その横に 平根式の鉄鏃1本(M2)と刀子1本(M3)が出土している。また墓壙の北側、中央部付近には須恵器の直口壺(3)が出土している。この土器は盛り土の流失によって浅い位置にあったため、破損が著しく、その破片は墳頂部や墳丘西側斜面からも出土している。また墳丘の西側斜面から須恵器杯と壺(1・2)が出土しているが、これらの土器は本来墓壙内に納められていたものか、墳頂部に置かれて いたものであろう。

6 出土遺物

①土器(図版59、写真図版58)

須恵器

杯身(1)

受け部から立ち上がり部にかけての小片で、口縁端部と底部は残っていない。立ち上がり部はやや内

傾気味で、受け部の端部は丸みを帯びる。最大径は12.0cm程度に復元できる。

壺(2~4)

2はハの字に開く頸部の破片で、端部は残っていない。外面に1条の突帯と、タタキの痕跡が残る。 3は直口壺で、口頸部と体部は直接接合しなかったが、胎土・焼成などからみて同一個体である。頸部外面には上から順に、2条の突帯→凹線→櫛描波状文を施す。体部下半は回転へラケズリで仕上げるが、格子タタキの痕跡が残存する。体部上半は自然釉に覆われていて観察できない。

4 は全周の1/4ほどが残る肩部の破片で、外面に格子タタキ、内面に同心円当て具痕が残る。頸部近くには自然釉がかぶる。

②鉄器(図版72、写真図版82)

武器

大刀 (M1)

ほぼ完形で、全長68.85cm、刀身幅3.4cm、厚1.0cm。刀身はやや内反りで、鞘と思われる木質と有機質が残る。また、関付近に鞘口装具らしき残欠があるが、材質は不明である。茎は撫角と思われる片関隅抉尻中細茎で全長16.0cm、茎幅2.2cm、厚0.6cm。直径0.5cmの目釘孔が2個ある。関から3.2cm茎尻側の点の柄木に微かなアタリ痕があり、同じ点から茎尻に向けて柄巻の痕跡があることから、長さ3.2cm程度の柄縁装具があったようである。また、関から1.2cm茎尻側に長さ1.0cmほどの抉りがX線写真で確認できた。

鉄鏃 (M2)

無茎・短茎鏃群に分類される。切先と片側の側縁を欠失し、現存長4.73cmである。鏃身部の外形は三角形を呈し、断面形は平造である。片側に残る逆刺は、重ね抉りとなっている。鏃身部の中央に、先端を尖らせた矢柄の木質が、両側から挟み込むように遺存する。 X線写真による観察では、矢柄の両側の小孔と極く短い茎部が認められる。

7 小結

火山古墳群では唯一、墓壙内に土器を副葬する古墳である。出土している須恵器が田辺編年のTK47型式のものであるため、5世紀末の築造時期が考えられる。

第4節 3号墳

1 立地

南北に伸びる尾根上のやや広い緩傾斜面を利用して造られている。標高は墳頂部で約117mである。 北側は2号墳と接するが、南側の4号墳とは約20mの間隔があいている。

2 調査前の状況

墳頂部は広い平坦面となっており、火山古墳群の木棺直葬墳の中では最も古墳の存在が明確であった。

3 墳丘 (図版8・9、写真図版9・10)

墳丘は地山を削りだして、その土を盛り上げて成形している。特に南側は尾根を大きく削った周溝を掘り込んでいる。周溝を掘削した土で墳丘の盛土をおこなっていたのであろうが、盛土はほとんどが流失しており、墳頂部東側付近にわずかに残るだけである。墳丘は東西13.0m、南北10.5mのややいびつな形をした円墳である。墳頂部には直径6.7mの正円形に近い平坦面が造られ、その中心に埋葬施設が設けられている。墳裾の最も低いところで標高114m、墳頂部で116.8mであり、墳丘の高さは2.8mである。本来はこれに盛土があったので、高さは3m以上と推定できる。

墳裾には円筒埴輪が1.5~2.5mの間隔で並べられている。墳丘の流失のため、北側及び東側の埴輪樹立の状況は不明であるが、おそらく全周していたものであろう。埴輪が原位置を保っていたのは東側の2箇所だけであり、これも最下段が残存するだけであった。他は掘り方を検出したのみであり、埴輪は破片となって周溝や墳丘裾の堆積土の中から出土している。埴輪は直径0.8m、深さ0.4mの坑を掘り、そこに最下段が埋没し、タガがわずかに見える程度に設置されていた。出土埴輪を見ると、円筒埴輪以外にも朝顔形円筒埴輪や形象埴輪が樹立されていたようであるが、どの位置に樹立されていたかは不明である。

4 埋葬施設

墳頂部には長さ4.1m、幅2.2mの墓壙が尾根に直交する方向に設けられ、そこに長さ3.25m、幅0.75 mの木棺が納められている。墓壙は地山を掘り込んでつくり、底は岩盤にまで達しているが、本来は盛土の上から掘り込まれていたものであろう。墓壙底は長さ3.5m、幅1.0mの長方形の平坦面であり、そこから約30度の緩やかな角度で墓壙壁が立ち上がる。墓壙と棺の間には細粒(細砂~中砂)の土が、10~20cm程度の厚みで3~4度に分けて詰められている。

棺は完全に腐朽して消滅しているが、平坦な墓壙底の形状や埋土の状況から箱形の木棺であった可能性が高いと考える。

5 遺物出土状況

埋葬施設内では、墓壙南東側で長頸鏃の東(M4~M24)が、棺内床面上で刀子(M3)が出土している。鋒を西側に向ける。埋葬施設内にはこの他に副葬品はなく、墳丘規模の割には副葬品に乏しい。棺内には土器の副葬はなく、墳丘東側斜面の盛土流出土内から須恵器杯が5個体(5~9)出土している。これらは本来、墳頂部に置かれていたものであろう。

6 出土遺物

①土器(図版59·60、写真図版58·59)

須恵器

杯蓋 (5~8)

いずれも口縁部から天井部にかけての小片で、頂部は残っていない。 $5 \sim 7$ の口縁部は直立気味で、薄くシャープな作りである。口縁端部は内傾する匙面となっており、口縁部と天井部の境界は短く外へ突出する。天井部外面は回転へラケズリで仕上げる。復元径は13cm弱である。 8 は他より法量・厚みが異なっており、別器種か別時期かもしれない。

杯身(9)

口縁部から受け部にかけての小片で、底部は残っていない。立ち上がり部はやや内傾し、口縁端部は 内傾する匙面となっている。体部外面は回転へラケズリで仕上げる。

埴輪

形象埴輪 (16·17)

いずれも小片のため確実なことはいえないが、16は馬形埴輪、17は家形埴輪の可能性がある。

16は図の下面が接合面で、断面は接合面に対して傾斜している。欠失部分を反転すれば鞍の形になり、 馬形埴輪の一部であった可能性が高い。

17は鈍角の角をもった破片で、天地も含めてどの部分に相当するかは不明だが、家形埴輪の一部であった可能性が考えられる。

朝顔形円筒埴輪(22)

肩部から頸部にかけての破片で、口縁部は残っていない。頸部突帯は低く形骸化しており、強いナデ で山状に盛り上げた程度のものである。調整は不明である。

円筒埴輪(18~21·23~29)

18~20はほぼ直立する口縁部である。18・20は内外面に横~左斜め上方向の粗いハケメを施し、口縁端部内外面をヨコナデする。19は外面に縦方向の細かいハケメを施すが、内面は不明である。

21は開き気味の口縁部で、外面に左斜め上方向のハケメ、内面に横方向のハケメを施す。

23~27は両端を欠失していて、タガと円形の透かし孔が観察できる円筒部の破片であるが、タガの間隔が判る資料はなかった。23・25の透かし孔は、上下の段に角度を違えて配置し、タガの上から穿っている。

23・24はタガの断面形が太い台形で、上下を強くナデている。23の調整は外面が縦方向あるいは左斜め上方向、内面が左斜め上方向の細かいハケメであるが、外面の調整のタッチがタガの上下で異なっており、製作工程上の段階が異なっているかもしれないという示唆を受ける。24の調整は外面が縦方向の粗いハケメのみで、ヨコハケを省略している。

25・26はタガの断面形がやや細い台形となる。調整は外面が縦方向、内面が縦~左斜め上方向の粗いハケメである。

27はタガの断面形が山形となっている。調整は外面が縦方向、内面が縦~左斜め上方向のハケメである。

28・29は円筒の底部で、復元径が約16cmと20cmの大小がある。底部から約8cm上に1段目のタガがある。29の調整は内外面とも縦方向のハケメで、裾部外面ではハケメを板状工具でナデ消し、内面にはその際の指頭痕が残る。さらに底部端面も同様の工具で面取りしているため、側面が波打って見える。

須恵質円筒埴輪(30)

図化していないものも含めて、須恵質はこの1点のみである。断面が楕円形に焼けひずみ、斜めに割れが入ってしまっている製品だが、底部から3段目までが原位置で出土し、実用に供されたことを示している。

タガはやや崩れかけてはいるものの、まだ太い台形を呈し、上下を強くナデている。透かし孔は円形で、3段目にタガの上から穿っている。外面の調整は非常に密なハケメで、縦方向→横方向の順で行っている。横方向のハケメは、埴輪をずらしながら数cmずつの単位で施しており、タガのナデを切ってい

ることが観察できる。従って調整の工程は、縦ハケ→タガの成形→横ハケの順序となる。内面は接合痕・ 指頭痕が観察でき、裾部は横方向の板ナデを施す。

②鉄器(図版72、写真図版82)

工具

刀子 (M3)

刀身をほとんど欠損するため、現存長5.17cm、身幅1.2cm、厚0.5cm。両関。茎は全長3.6cm、茎幅0.7 cm、厚0.4cmで栗尻。

武器

鉄鏃 (M4~M24)

 $M4\sim M24$ は長頸鏃群に属する。 $M4\sim M9$ は片刃鏃 6本が銹着している。鏃身の外形は片刃形、断面は平片刃造である。最も遺存状態の良いM9は、鏃身先端部分を欠き、現存長16.97cmを測る。頸部関部は斜関で、茎部にかけて矢柄の木質・樹皮が良好な状態で残る。長さ7.2cm、直径は1.03cmを測る。その他の鉄鏃は銹化のため不明な点がある。 $M4\cdot M8$ は鏃身部・頸部から茎部の途中まで残り、茎部には木質が遺存する。M8は茎部の鉄芯が0.8cmの円形を呈する。 $M5\sim M7$ は鏃身部から頸部にかけての断片で、 $M5\cdot M7$ の関部には樹皮が遺存する。

M10~M13は3本の片刃鏃と形式不明の鉄鏃が銹着している。M10~M12は刃部の先端を欠き、鏃身部・頸部から茎部まで遺存する。鏃身の外形は片刃形、断面は平片刃造、鏃身関部は撫関である。頸部は直線状を呈し、断面は長方形である。関部は台形関で、茎部の断面は円形である。M13は頸部以下が遺存する。関部から茎部には、円形の鉄芯を取り巻くように木質が残り、さらに関部付近にはその上に樹皮を巻いている。木質及び樹皮の遺存状態は良い。

M14・M15は、刃部の先端を欠くM14と、頸部以下が遺存するM15が銹着している。M14は現存長14.55cmを測る。鏃身部は片刃形で、断面は平片刃造である。鏃身関部は角関である。頸部は長く、細い。その形は直線状を呈し、断面は長方形である。頸部関部は斜関をとり、断面の形は円形である。関部以下に木質が遺存する。M15は現存長5.3cmを測る。頸部の断面は、方形を呈する。頸部関部は斜関を呈し、茎部の先端部が細くなるものである。断面の形は円形である。関部以下に木質が遺存する。

M16は茎部の末端を欠く。片刃鏃に属する。現存長14.85cmを測る。鏃身部の外形は片刃形で、断面形は平片刃造である。鏃身関部は無関である。頸部は長く、細い。その形は直線状である。断面形は長方形を呈する。頸部関部は斜関である。茎部は長く、末端は不明。断面の形は方形である。鏃身部2.2 cm、頸部7.0cm、茎部5.5cmである。刃部の最大幅0.6cm、中位の厚さ0.55cmを測る。関部から茎部まで直径0.8cmの矢柄の木質と樹皮巻が遺存する。

M17~M19は茎部下端を欠損する。片刃鏃に属し、現存長はM17が11.2cm、M18が10.83cm、M19が10.45cmを測る。鏃身部は片刃形を呈し、断面は平片刃造である。鏃身関部は撫関である。頸部は長く、細い。その形は直線状である。断面形は長方形を呈する。頸部関部は斜関である。茎部は不明。木質が残存する。

M20は鏃身から頸部まで遺存する。現存長8.0cmを測る。鏃身部は片刃形を呈し、断面は平片刃造である。鏃身関部は撫関である。頸部は長く、細い。その形は直線状である。断面形は長方形を呈する。 M21は頸部のみ遺存する。頸部は長く、細い。その形は直線状である。断面形は方形を呈する。頸部

関部は棘状関である。頸部関部に木質が遺存する。

M22・M24は、頸部関部を中心にして頸部・茎部が遺存する。現存長はM22が10.85cm、M24が6.15 cmである。頸部は長く、細い。その形は直線状である。断面形は長方形を呈する。頸部関部は斜関である。茎部は細く、末端は不明。断面の形は円形である。関部から茎部まで矢柄の木質と樹皮巻が遺存する。

M23は頸部から茎部が遺存する。残存長7.45cmを測る。頸部は細い。その形は直線状である。断面形は長方形を呈する。頸部関部は斜関である。茎部は細く、末端は不明。断面の形は円形である。頸部関部以下に木質と樹皮巻が遺存する。

7 小結

この古墳は火山古墳群の木棺直葬墳の中では最大の墳丘をもち、埴輪を樹立するなど外見的には最も優勢である。しかし副葬品は刀子と鉄鏃のみと乏しく、ギャップの大きさが一つの特徴となっている。出土した須恵器は田辺編年の TK 23型式のものであり、また埴輪は川西編年のIV 期後半のものであることから、築造時期は 5世紀の後半と考えられる。

火山古墳群の中では唯一、埴輪を持つ古墳であるが、埴輪はまばらに樹立されるのみであり、使用している埴輪の数は10数本にすぎない。また通常は使用しないような大きく焼け歪んだ埴輪を使用することから、この古墳のために焼かれた埴輪ではなく、他の大型古墳のために焼成された埴輪を流用したものであるかもしれない。

第5節 4号墳

1 立地

3号墳の南約20m、尾根の最後部よりやや北に下りた所に位置する。この付近は岩盤が露出しており、 4号墳はこの岩盤を削って造られている。墳頂部の高さは標高122.4mである。

2 調査前の状況

岩盤の上を薄い腐植土が覆っており、平坦面は認められたが墳丘は明確ではなかった。

3 墳丘(図版10、写真図版11)

岩盤を円形に削りだした、直径9mの円墳である。墳頂平坦面は東西6.8m、南北6.2mの広さがある。墳丘には旧表土層が認められるだけで、盛土は完全に流失していた。墳丘西側斜面の旧表土の上に土の堆積が認められるため、元はわずかながら盛土が存在したようである。墳丘は裾部を円形に成形しているが、その加工はわずかである。現状の高さは約1.0mである。

4 埋葬施設 (図版11・12、写真図版12・13)

墳頂部には3基の埋葬施設が造られている。火山古墳群では唯一、複数の埋葬施設をもつ。尾根に平行するものが2基(東側を第1、西側を第2埋葬施設とする)、尾根に直交するものが1基(第3埋葬施設)である。第1、第2埋葬施設の中間が墳頂平坦面の中心になるため、第1、第2埋葬施設は当初

から2基が平行して造る予定で場所を決めていると考える。第3埋葬施設は第1、第2埋葬施設の南端の位置に棺の北側を沿わせているため、第1、第2埋葬施設の後に造られたものであろう。

第1埋葬施設の墓壙は、まず幅1.5m、長さ3.2m、深さ0.2mほどのほぼ長方形に岩盤を掘り窪め、そこに長さ2.75m、幅0.65m、深さ0.4m(残存値)の墓壙をさらに岩盤を穿って掘る。墓壙の底部から側面にかけて黄色の粘土を置く。棺はその上に置かれており、棺底の痕跡から割竹形木棺であったと推定する。墓壙は地山の岩盤を削った土で埋められている。副葬品の剣の鋒が南側に向くため、頭位は北側であると考える。

第2埋葬施設は第1埋葬施設の西側に平行して造られている。岩盤を堀抜いた長さ3.25m、幅0.85m、深さ0.35m(残存値)の墓壙に割竹形木棺を納める。これは副葬品の刀の鋒が北側を向くので、頭位は南側であったと考える。

第3埋葬施設は第1、第2埋葬施設の南側に接する。長さ2.8m、幅0.8m、深さ0.45mの墓壙の底部から側面にかけて黄色の粘土を置き、その上に割竹形木棺を置く。墓壙は地山を削った礫まじりの土で埋められている。

5 遺物出土状況

第1・第2埋葬施設からは副葬品が出土している。第1埋葬施設の棺内からは剣1(M25)、鉄斧2(M28・M29)、鑿1(M27)、鎌1(M30)、鉄鏃4(M33~M36)、鑷子1(M32)、刀子1(M31)が出土している。遺物は2群にわかれ、剣と鑷子は棺の北側、西壁寄りから出土しており、他のものは棺の南側から出土している。南側の農工具を中心とした副葬品は、床面から浮き上がり、その下に墓壙埋土と同質の礫混じりの土が入るので、棺の上に置かれていたものが、棺の腐朽とともに落ち込んだ可能性が考えられる。他に墓壙の上面から、須恵器壺(11)が出土している。

第2埋葬施設からは、大刀1 (M26)と鉄鏃9 (M37~M45)が出土している。大刀は棺の南側東壁寄りから鋒を北側に向けて出土しており、鏃も南側西壁寄りで束になって鋒を北側に向けて出土している。また第3埋葬施設の墓壙上面からは須恵器壺 (10)が出土している。この他に墳丘北側裾の、盛土の流土と思われる層から須恵器器台の破片 (12)が出土している。この土器は墳頂部に置かれていたものが盛土の流失に伴い、転落したのであろう。

6 出土遺物

①土器(図版59、写真図版58)

須恵器

壺 (10・11)

10は短頸壺と思われる口縁部のみの小片である。

11は広口壺の口頸部で、頸部外面には上から順に、1条の突帯→櫛描波状文→1条の突帯→凹線を施す。

器台 (12)

口縁部のみの小片であるが、復元する角度から、器台の可能性を考えておく。口縁端部は外へつまみ 出して外傾する面をもち、口縁直下から櫛描波状文→突帯を施すが、以下の文様は欠失のため不明であ る。 ②鉄器(図版73~75、写真図版83~85)

武器

鉄剣 (M25)

第1埋葬施設から出土した。

完存する長剣で、全長74.32cm、身幅4.3cm、厚0.8cm。刀身には鞘木がよく残り、最大厚2.8cmになる。 剣身断面は凸レンズ形。茎は浅直・斜角関中細茎で全長14.8cm、茎幅1.4cm、厚0.4cm。直径0.3cmの目 釘孔が2個ある。茎全体に柄木が残る。身幅の割には茎が細く短い印象がある。

大刀 (M26)

第2埋葬施設から出土した。

ほぼ完形の大刀であり、全長82.45cm、身幅2.6cm、厚0.7cm。刀身はやや内反りで、鞘木がわずかに残る。鞘口には装具の残欠と思われる木質がある。茎は直角片関一文字尻中細茎で、全長16.0cm、茎幅1.8cm、厚0.8cm。直径0.4cmの目釘孔が3個あり、そのうちの2個には長さ1.8cmの目釘が残る。また、茎には直径0.2cmの繊維質の柄巻が良好に残り、現存長12.0cm、現存幅2.4cm、厚2.1cm。また、現存長3.0cm、最大幅3.2cm、厚2.0cmの柄縁装具が残る。

工具

M27~M32は第1埋葬施設から出土した。

鉄鑿 (M27)

袋鑿で、現存長24.3cm、身部幅1.0cm、厚1.0cm。刃の一部を欠損している。袋部断面は円形で、端部の現存直径は3.0cm、深さは8.5cmである。

鉄斧 (M28·M29)

M28は肩部で張り出し段をなすタイプの有肩有袋斧である。長さ12.76cm、最大幅6.77cm。袋部の断面の形状は C 字状を呈し、長径4.19cm、短径3.6cm。袋部に木質は残っていない。古瀬氏の分類では A_1 類(全長 $6\sim13$ cm、刃部幅 $4\sim8$ cm)に属し、出土例が最も多い小型のタイプである(古瀬1991)。

M29は肩に段が無く全体の形状が台形を呈する袋状鉄斧である。長さ8 cm、最大幅4.85cm。袋部の断面は楕円形で、長径3.8cm、短径は2.75cmである。これも袋部に木質は残っていない。古瀬氏の分類では B_2 類(全長7~14cm、刃部幅3~6 cm)で、これも無肩鉄斧では出土例が最も多いタイプである。有肩有袋タイプに対して、作りが厚手という通例に合致している。

鉄鎌 (M30)

長さ14.9cm、基部の幅3.3cm。中型(寺沢分類によれば、刃渡り10~16cm)の曲刃鎌であるが、刃部 先端の屈曲はわずかであり、型式的には古い特徴を示す。基部は短く刃に対して左方向に折り返してい る。柄は刃に対してほぼ直角につくものと推測できる。刃部中央は使用による摩耗の可能性がある(寺 沢1991)。

刀子 (M31)

鋒をわずかに欠損するため、現存長8.79cm、身幅0.95cm、厚0.4cm。関の形状は劣化により不明瞭である。茎は全長3.6cm、茎幅1.13cm、厚0.45cmで栗尻。関付近に柄の木質がわずかに残存する。

鑷子 (M32)

毛抜き(鑷子)である。細長い板を半分で折り曲げ、ピンセット状にしたものである。図化した面での長さ11.8cm、2枚の板が最も離れている下から4分の1程度の高さでの幅は2.18cm、下端はわずかに

狭まっている。折り曲げた上部から中程までは錆で一体となっている。側面からみると、折り曲げ部分の幅が狭く、真ん中以下はやや幅広で0.8cmとなっている。通例では先端が薄く片刃状になっているようであるが、刃の有無は不明である。丸く折り曲げた上部に遊環が付く。遊環には継ぎ目が見られる。鑷子は古墳時代の5世紀中葉から6世紀末の出土が知られ、古代以降の火葬墓からも出土している。遊環および連結金具が付く例がいくつか有り、吊り下げて用いたものと考えられている(石山1977)。後代には鏡・櫛・鋏・櫛払い・刷毛・お歯黒壺・筆などとともに出土した例があり、毛抜きという用途から、化粧道具の一種と考えられる。女性人骨に伴う例が多いとされている(秋山1995)。

武器

鉄鏃 (M33~M45)

M33~M36は第1埋葬施設、M37~M45は第2埋葬施設から出土した。

M33は無茎・短頸鏃群のA形式に属する。丸みを帯びた切先から側縁が直線的に延び、長三角形状の鏃身をもつ。断面形は平造、無茎で、基部は内弯状に抉り込まれており、逆刺の先端は欠失し、現存長6.9cmを測る。鏃身部の中央に、先端を尖らせた矢柄の木質が、両側から挟み込むように遺存する。X線写真による観察では、矢柄の両側に小孔が認められる。

M34~M36は長頸鏃群の頸部・茎部が遺存する。現存長はM34が9.7cm、M35が10.28cm、M36が10.4 cmを測る。頸部は長く、細い。その形は直線状である。断面形は長方形を呈する。頸部関部はM34が無関、M35・M36が角関である。茎部は細く、末端は不明。断面の形はM34・M36が方形、M35が円形である。頸部関部以下に木質が遺存する。

M37は無茎・短頸鏃群のA形式に分類される。鏃身部の基部から片側の逆刺を欠損する。残存長6.35 cmである。鏃身部の外形は三角形を呈し、断面形は平造である。片側に残る逆刺は、重ね抉りとなっている。鏃身部の中央に、先端を尖らせた矢柄の木質が片側にのみ遺存するが、本来は両側から挟み込まれていたものとみられる。2号墳のM2と同型式と考えられるが、X線写真による観察では、矢柄の両側に小孔は認められなかった。

M38~M41は、長頸鏃群のM38・M39と腸抉三角形鏃群のM40・M41が銹着して、一塊となっている。M38・M39は長頸鏃群の片刃鏃に属する。M38は鏃身部上半と茎部下半を欠く。頸部は長く、断面は方形である。M39は切先を欠く程度で、現存長16.4cmを測る。鏃身部の外形は片刃形を呈する。鏃身部の現存長5.6~6.0cm、最大幅2.4cmを測る。頸部以下は銹化のため不明である。共に茎部以下に木質と樹皮巻が残る。M40・M41は腸抉三角形鏃群のうち、逆刺を有する広根鏃で、ほぼ完形である。現存長はM40が12.7cm、M41が15.3cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は両丸造である。鏃身逆刺の抉りは深く、先端がやや外側へ開く。頸部は短い直線状で、断面は方形を呈する。茎部は短く、木質が遺存する。断面の形は方形である。

M42・M44・M45は、長頸鏃群の片刃鏃に属し、片逆刺をもつ。ほぼ全形が残り、現存長はM42が17.5cm、M44が15.7cm、M45が15.75cmである。鏃身部は片刃形で、断面は銹化のため不明瞭だが、M42の観察から平片刃造とみられる。M42は鏃身部の長さ2.7cm、最大幅0.88cm、中位の厚さ0.35cm。同様にM44は2.7cm、1.12cm、0.51cm、M45は2.4cm、1.0cm、0.5cmである。頸部の断面は方形で、関部はM42・M45が斜関、M44が台形関を呈する。茎部には木質と樹皮巻が残存する。

M43は長頸鏃群の片刃鏃に属し、逆刺をもたない。現存長16.6cmを測る。鏃身部は片刃形で、断面は 銹化のため定かではないが平片刃造とみられる。鏃身部の長さ2.2cm、最大幅0.8cm、中位の厚さ0.5cm である。頸部の断面は方形で、関部は角関かと思われる。茎部には木質が遺存する。

7 小結

この古墳は墳丘規模こそ小さいが、火山古墳群の木棺直葬墳の中では唯一の複数埋葬の古墳である。墳丘規模の割には、副葬品が豊富であることが特徴である。墳丘周辺から出土した土器が田辺編年のT K 23型式に比定できることから、5世紀後半の年代が与えられる。この年代観は副葬品の年代観とも矛盾しない。また第3埋葬施設上面から出土した須恵器は田辺編年のT K 47型式まで下がる可能性があり、最後の埋葬が5世紀末まで下がる可能性がある。

第6節 5号墳

1 立地

4号墳の南側、尾根の最高部に位置する。墳頂部の標高は123.8mである。

2 調査前の状況

尾根上がやや平坦になっており、古墳である可能性は認識できたが、墳丘は全く認識できなかった。

3 墳丘(図版13、写真図版14)

4号墳同様、岩盤を削りだして墳丘を成形する。わずかに残る墳丘裾の位置から直径8m程度の円墳と推定するが、墳丘上では盛土を確認することはできなかった。墳丘の西側裾の旧表土上に、上方から流れて堆積したと思われる土が認められるので、本来は盛土があったと推定できる。

4 埋葬施設

盛土が失われているため、埋葬施設もその底部の痕跡がわずかに残るのみである。棺の正確な大きさ や構造は不明である。石材が一切認められないので、木棺直葬であろう。

5 遺物出土状況

墳丘の西側裾及び斜面から須恵器(13・14)が出土している。

6 出土遺物

須恵器 (図版59)

無蓋高杯(13)

口縁部から体部にかけての小片である。口縁部は外反気味で、体部外面には上から順に、2条の突帯 →櫛描波状文を施す。

蓋(14)

口縁部のみの小片で、内弯気味の体部から、口縁端部は内傾する面をもたせる。口縁端面の仕上げと、 外面全体に自然釉がかぶるところから、何らかの蓋と考えておく。外面に 1 条の沈線を施す。

7 小結

埋葬施設の残りが悪く、副葬品の有無は明らかではないが、出土した須恵器が田辺編年の T K 47型式 \sim M T 15型式のものであるため、6世紀初頭の築造と考えられる。

第7節 6号墳

1 立地

5号墳の南側に位置する。標高は約123mである。

2 調査前の状況

平坦地が認められたが、古墳かどうかは判断できていなかった。

3 墳丘

岩盤を削って平坦面を造るが、盛土は存在せず、墳丘は明確ではない。

4 埋葬施設

埋葬施設の痕跡は認められなかった。当初から埋葬施設が存在しなかった可能性もあるが、不明である。

5 遺物出土状況

西側斜面から須恵器提瓶(15)が出土しているが、6号墳に確実に伴うものかどうか不明である。

6 出土遺物

須恵器 (図版59)

提瓶 (15)

凸面側の体部のみの破片であるが、小型の提瓶の一部とみられる。円盤充填部は接合面から欠失している。外面はカキメで仕上げる。

7 小結

人工的な加工の痕跡が認められたため、古墳であると判断し6号墳と名づけ調査をおこなったが、埋葬施設は痕跡も認められなかった。須恵器が出土しているため、葬送に係る何らかの行為が行われた可能性は高いが、古墳ではない可能性も考えられる。

第8節 7号墳

1 立地

北東にのびる丘陵の西側斜面に位置する。最高部で標高119mである。

2 調査前の状況(図版14、写真図版15)

古墳は盛土が流失しており、石室天井部が露出していた。石室は側壁の崩落により4枚ある天井石のうち、1枚(奥から2枚目)を除いて石室内に落ち込んだ状態であった。奥壁は中位以上は失われており、奥壁側から石室内部が見える状態であり、石室内部には多量の土砂が流入していた。

3 墳丘 (図版15・16、写真図版15・16・21)

墳丘は盛り土上部が失われており、築造時の高さはとどめていないが、墳丘裾は比較的明瞭である。平面形は円形であり、規模は東西方向で13.5m、南北方向で14.2m、高さは現存値で6mである。墳丘は斜面を大きくカットすることにより基底部を作り出しており、東側から南北両側にかけて幅3~4mの周溝が巡る。この削りだした土で盛り土をおこなっており、厚さ20cm前後の盛土の単位が認められた。盛土は旧表土の上からおこなっており、粘性が強く締まりの良い土と締まりの悪い土を適宜使い分けながら、墳丘の下側から順次上に向かって積み上げをおこなっている。また石室構築に伴う盛り土の単位(1次墳丘)と墳丘成形に伴う盛り土の単位(2次墳丘)が明瞭に認められる。

北西の基底部には人頭大の角礫を2~3段に積んだ列石が二重に構築されている。石の基底部は地山の上に置かれており、急斜面に盛り土をおこなった際に土止めのために築かれたものであると考える。現状では盛り土の流出土を除去した段階で検出されたが、築造時に墳丘の表面に出ていたかどうかは判断できなかった。埋め殺しの列石であった可能性も考えられる。また墳丘裾の北側には須恵器を納めた小土坑があるが、古墳に伴うものかどうかは不明である。

4 埋葬施設 (図版17・18・21、写真図版16・19~21)

この古墳の埋葬施設は全長7.8mの右片袖の横穴式石室である。石室は主軸を南北方向に向け南側に開口する。規模は玄室長3.9m、玄室幅1.9m、羨道長3.9m、玄門幅1.3m、玄室高2.2mである。羨道は右側壁が西に広がっており、「ハ」の字形になる。幅3.3m、長さ7.0mの掘り方の中に築かれている。掘り方の壁沿いに幅0.5m~0.6m程度の溝を掘り、そこに基底石を据え付ける。 奥壁と袖石のみは、安定を増すため石材の大きさにあわせてさらに掘り方を設けている。

玄室は側壁が6段、奥壁が5段の石積みで構築されており、5枚程度の天井石が架構されていたと推定する。天井石は3枚残っていたが、原位置を保つものは1枚だけであった。この1枚も不安定な状態であったため、石室内部の調査に入る前に記録を取り、撤去している。石材の遺存状況や羨道部の側壁の構築状況から判断して、天井が架構されていたのは玄室及び羨道の一部(玄門から1m程度)までで、これより先は元来天井石がなかったと判断できる。よって閉塞石は残っていなかったが、閉塞は羨道の玄門寄りの部分、すなわち右側壁が大きく広がる手前の部分で行われていたと推定する。

奥壁は厚みのない大型の石材を立てて使って基底部としている。その上に横に長い石を積み上げて壁

を構築している。上部が崩壊しているため、残存するのは1.2mほどの高さのみである。側壁の石材も基底は厚みの薄いものを立てて使い、この上に大型の石材を積み上げて順次わずかに持ち送っている。側壁の基底石の底のレベルは奥壁側から羨道に向かって緩やかに下っており、その結果として羨道部の基底石は掘り方を設けず直接地山の上に置いており、床面が基底石の下端よりも低くなっている。袖石は板状の大型の石材を約40cm地面に埋め込んで立てており、この上に1石を挟んで天井石を架構している。

玄室の床面は掘り方の底面に土を敷き、その上に径5cm程の小礫を敷いているが、床面の攪乱のため 原位置をとどめているものは少なかった。床面は1面だけである。

5 遺物出土状況 (図版19・20、写真図版17・18)

遺物は石室内、前庭部、墳丘裾で出土している。石室内では奥壁付近で原位置をとどめた状態で須恵器・土師器等の副葬品が出土しているが、石室中央部は一面に遺物が散乱した状態であり、破損も著しかった。当初は後世の攪乱により、副葬品の配置が乱されたものと考えていたが、整理作業の結果、破損したものも破片は石室内で得られたものが多く、場所毎に有る程度遺物の帰属時期がまとまっていることから、部分的に人為的な攪乱を被ってはいるが、ほとんどは石室が崩れた時に石材の下敷きになり、破損・散乱した可能性が高いと考える。なお石室内の遺物については、出土位置に基づき便宜的にA群~I群にグルーピングして以下の記述をおこなう。

羨道では、玄門に近い部分の西側に遺物が集中する。南側のまとまりをA群、北側のまとまりをB群とする。A群は須恵器杯身(49・53・58・61)と提瓶(99)、大型刀子(M46)からなる。49・53・58の杯身と99の提瓶の一部は重なるように壁際に置かれており、大型刀子は58の杯身に茎をのせ、鋒を玄室側に向ける。B群は須恵器杯蓋(35・36・39・40)と杯身(63)、廰(97)、大型刀子の茎(M47)からなる。蓋は正位で置かれるが、36と40は破片が散乱している。このA群とB群は杯の蓋と身がセットとなる可能性が高く、ひとつのグループとして副葬されたものであろう。蓋と身を分けて置くことから、玄室内にあったものを追葬時に羨道部に移動したものであろう。破片が散乱するのは、側壁が崩落した時の衝撃によると考える。

玄室内は右側壁沿いと奥壁付近に多くの遺物が集中している。 C 群は右側壁の南寄りの鉄鏃(M70・M72・M80・M82・M84・M87・M89)、鉄刀子(M52・M55)からなる。鉄鏃はM72とM84が離れる以外はまとまって出土しており、本来は束で副葬されていたものであろう。 D 群は C 群の東の一群である。 須恵器(62・94・92)と鉄鏃(M58・M64・M71・M85・M86・M91・M76)、刀子の把部(M53)からなる。 鉄鏃は向きがバラバラであり、副葬後の移動を想定すべきであろう。 本来は C 群とひとまとまりの束であった可能性もある。

石室中央部やや西に偏して多くの遺物が集中している部分をE群とする。この群には21個体の須恵器 (43・45・46・48・60・64など)、大型刀子 (M48)、7本の鉄鏃 (M61など)、4個の耳環 (M174~M 177) などがある。M48の大型刀子は鋒を西側に向け、石室主軸にほぼ直交して出土しているので、副 葬当時の原位置を保つ可能性が高い。耳環は2個対になるはずであるが、出土位置から正確にはセット 関係を把握できない。それ以外の土器、鉄器はいずれも不規則に散乱した状態であるが、須恵器の型式 がよくまとまっていることから、1回もしくは2回の追葬で副葬されたセットであると考える。

玄室左側壁奥の板状の石(棺台か)の周辺から出土した一群をF群とする。この群は須恵器(65・67・

87・102・103)と鉄鏃(M59・M63・M74)と鉄刀子(M50・M51)からなる。土器の破損が少ないので、原位置から大きくは移動していないであろう。この群の西側に接する一群をG群とする。この群は須恵器(72・93)と鉄鏃(M81)からなる。須恵器壺(93)の破損が著しいので、本来の位置から移動している可能性も考えられる。玄室右側壁奥にある一群をH群とする。この群は須恵器杯身(55・56)と鉄鏃、鉄鑿(M57)、飾金具(M49)、耳環(M173)からなる。須恵器は完形であるため、原位置を保つと考える。鉄鏃はまとまりなく出土しているので、原位置を失っているものもあるだろう。

奥壁の東隅にまとまる一群を I 群とする。この群は玄室内で最も残存状態の良いものである。コーナー部分であるため、石材崩落時の直撃を免れたためであろう。西には須恵器杯身(50・51・52・59)・提瓶 (101)、東には須恵器杯蓋 (31・32・37)、土師器甕 (106)・壺 (107) が置かれている。追葬時の片づけによる集積であろうが、杯の蓋と身を別々に分けて置くのは、A・B群と同じである。

これ以外に周溝や墳裾からも須恵器が出土している(108~124)。比較的古い型式の土器が多いことから、全て7号墳に伴うものとは言い切れない。このうち108と113は墳丘に隣接する小土坑から、蓋と身が合わさった状態で出土したものである。小土坑と古墳の関係が明確でないため、これらの遺物を古墳に伴うものであるとは言い切れない。また周溝から出土したものは、すぐ上にある10号墳の石室内から追葬時に出されたものが転落してきた可能性も考慮する必要がある。

6 出土遺物

①石室内出土土器(図版61~64、写真図版60~68)

須恵器

杯蓋 (31~48)

18点を図化しており、法量・調整技法をもとに4つに分類する。

31・32・35・37・38は口径13.85~15.1cm、器高3.95~4.5cmで、天井部を回転ヘラケズリで調整する。 口縁端部は丸く収まる。口縁部と天井部の境界は不明瞭である。

33・34・36・39~41は口径13.3~14.6cm、器高3.8~4.3cmで、器形的には前者とほとんど区別できないが、天井部の回転ヘラケズリは頂部まで達しない。33・34は口縁端部にヤスリ状の調整痕が認められる。

42~43は口径12.4~12.9cm、器高4.2cmで、天井部は回転ヘラキリ後、不調整である。

44~48は口径11.3~12.1cm、器高3.5~3.9cmで、天井部は回転ヘラキリ後、不調整である。78は頂部が平坦に成形される。

杯身 (49~77)

蓋に比べて出土量が多く、29点を図化している。法量・器形・調整技法をもとに4つに分類する。

 $49\sim54$ は立ち上がり部が比較的長く、長さは 1 cm余りである。そのうち $49\sim51$ は直立気味に立ち上がるのに対し、 $52\sim54$ はやや内傾している。口縁端部は丸く収まる。口径 $12.0\sim14.05$ cm、器高 $3.7\sim4.45$ cmで、底部は回転へラケズリで調整する。ただし54のみは不調整である。なお54は墳裾出土の破片と接合する。

 $55\sim63$ は立ち上がり部の長さが $1\,\mathrm{cm}$ 弱で、基部からは内傾気味に立ち上がる。そのうち $55\cdot56$ は基部が上外方に伸び、深い受け部を作っている。口径 $11.8\sim13.9\,\mathrm{cm}$ 、器高 $3.45\sim4.7\,\mathrm{cm}$ で、底部は回転へラケズリで調整する。

 $64\sim67$ は立ち上がりがさらに短く内傾し、法量も小型化する。口径 $11.15\sim11.75$ cm、器高 $3.5\sim3.65$ cmで、底部は回転ヘラキリ後、不調整である。 $64\cdot67$ は底部が平坦に成形される。

68~77は立ち上がりが矮小化して、短く立ち上がる。基部は上外方に伸びて深い受け部を作るものと、短く外へ開くものがある。口径10.2~11.2cm、器高3.2~4.4cmで、底部は回転へラキリ後、不調整で、平坦に成形されるものも多いが、74は不整方向の調整が施される。

高杯蓋 (78)

有蓋高杯は出土点数が少なく、図化できたのは蓋 1 点のみで、身は全形が判るものはなかった。78は 杯蓋の頂部につまみが付いた、一般的な形態である。

無蓋高杯 (79)

小振りな杯蓋を反転させて脚部を付けた、低脚高杯である。

無頸壺 (80·81)

良質な胎土で薄く仕上げた、蓋と身のセットである。色調は灰白色を呈し、やや低火度で焼成された ものとみられる。身(81)は碁笥状の器形で、外面に2条の突帯を貼り付け、突帯の下部を凹線状にナデ る。突帯の上段は蓋の受け部となっていて、ここに蓋をかぶせる構造である。器面は丁寧に仕上げ、底 面は回転へラケズリで調整している。

蓋(80)は天井部にやや背の高いつまみを付け、端部を外反させている。外面に2条の凹線を施し、器面を丁寧に仕上げている。

短頸壺 (82・83)

82は扁球形の体部で、口縁部が短く外反する。体部の最大径部分に1条の突帯を貼り付け、突帯の下部を強くナデる。底面は回転ヘラケズリで調整する。

83は肩の張った体部で、口縁部が短く外反する。体部の下半部は回転ヘラケズリで調整する。

椀 (84~87)

84・86は内弯した深めの体部で、底部は不整な尖底気味となる。口縁部はナデで仕上げる。

85はやや浅めの体部で、底部は平底である。外面に1条の突帯を施す。

87は杯状の器形で、口縁部を内屈させる。いわゆる杯 I の器形に近いが、底部を厚く高台状にすると ころから、椀とした。

脚付き椀 (88~90)

体部が垂直に立ち上がる大振りの椀に、脚台を付けた器形である。

88は外面に2条の凹線を施し、椀部底面を回転ヘラケズリで調整する。脚部は段状の屈曲をもつ。全体に自然釉がかぶり、内面に融着痕がある。

89は外面中程にキザミメを加えた2条の突帯、下半に4条の沈線を施している。2条の突帯は上下に 沈線を巡らせることで、突帯を強調している。椀部底面を回転へラケズリで調整し、脚部に移行すると ころで、以下は欠失する。外面全体に自然釉がかぶり、器形は大きく歪んでいる。

90の外面は無文で、椀部底面を回転ヘラケズリで調整し、高台状の脚部を有する。器形は大きく歪んでおり、楕円形を呈する。

直口壺 (91・92)

91は口縁部が直線的に開き、肩の張った体部から丸底の底部にいたる。肩部に2条の沈線と綾杉状のキザミメを施す。体部下半はイタナデで調整する。

92は頸部が直立気味で、口縁端部を欠失する。体部は低くつぶれた扁球形で、底部の厚みが1~1.5 cmあり、底面も平らで、鈍重な印象を受ける。肩部には幅広い凹線を施し、体部下半は不正方向のヘラケズリで調整する。体部下半には重ね焼き痕も認められる。

広口壺 (93・94)

93は頸部が外反気味に開き、口縁端部を欠失する。体部は倒卵形で、3~5 mm 程度の薄い器壁のまま、丸底の底部にいたる。焼成も非常に硬質で、他の須恵器とは異質な印象を受ける。体部外面の肩部から中程にかけては回転ナデの後カキメで仕上げ、下半部は回転ヘラケズリで調整する。肩部にヘラで、3本のかぎ爪状の記号を描く。

94は口縁部と底面を欠失する。体部は扁球形で、外面をカキメで仕上げる。

細頸壺 (95·96)

95は頸部が直立気味に立ち上がり、中程で口縁部が内弯気味に開く。その変換点付近に2条の沈線を施す。体部は低くつぶれた扁球形で、少し張った肩部から、平らな底面にいたる。肩部に2条の沈線を施し、体部は回転へラケズリで仕上げる。

96は口縁部と底面を欠失する。頸部は直線的に開き、体部はなで肩の球形を呈する。外面の頸部中程には2条の沈線、体部上半には2条の沈線間に櫛描きの波状文を施す。体部下半は横方向の粗いカキメで仕上げる。

踉 (97·98)

97は口頸部が外へ開いた後、受け部が内弯気味に立ち上がる。受け部の基部と頸部の中程に、それぞれ2条の沈線を施す。体部は肩の張った扁球形で、肩部に3条の沈線を施し、沈線を切って孔を穿つ。 底部外面は回転ヘラケズリで調整する。

98は頸部を欠失しているため、口縁部と体部を図上復元しており、器高は推定値である。口縁部は内 弯気味に開き、外面に1状の沈線を施す。体部は扁球形で、肩部の櫛状工具によるキザミメ・沈線を切っ て孔を穿つ。

提瓶 (99~102)

体部の直径13~16cmの中型品(99~101)と、10cm未満の小型品(102)がある。

99は口頸部が内弯気味に立ち上がり、内面まで丁寧に仕上げられている。体部は凸面側をカキメで仕上げ、平面側は回転へラケズリのままである。肩部の両側には、円形浮文を貼り付ける。

100は口頸部が内弯気味に立ち上がるも、焼け歪みで変形している。体部は凸面側をカキメで仕上げる他、平面側も回転へラケズリの後、カキメを施す。肩部に把手の痕跡はない。

101は口頸部が外反し、端部を玉縁状とする。体部は凸面側をナデで仕上げ、平面側は回転ヘラケズリのままである。肩部に把手の痕跡はない。

102は口頸部が直線的に開く。体部は凸面側をカキメで仕上げる他、平面側も回転へラケズリの後、カキメを粗く施す。肩部の両側には、円形浮文を貼り付ける。

平瓶 (103)

底面の平らな扁球形の体部の片側から頸部が立ち上がるが、口縁部は欠失する。底面・体部外面・頸部も含めた表面全体にカキメが施されており、体部上面ではその上から圏線を4重に巡らし、圏線間にキザミメを施す。さらに頂部の両側に突起状の把手を一対設ける。頸部では正面側に縦方向の細い沈線3条を目印のように書き込み、その上に2条の沈線を巡らす。また全面に自然釉がかぶっている。

甕 (104)

大型の甕の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は外反気味に開き、端部が玉縁状となる。 体部外面は縦方向の平行タタキ、内面は同心円タタキで成形する。

壺(105)

口縁部から体部中程までが残存しているが、直接接合しないため図上復元している。口縁部は直口気味に開き、端部を平坦に収める。体部外面は縦方向の平行タタキの後カキメを粗く施し、内面は同心円タタキのままである。肩部に把手を貼り付けた痕跡をもつ破片が2点あり、鉤状の把手が付くものと考えられる。4単位に復元したが、町内多利所在松ノ本8号墳出土の類品(兵庫県教委1985『松ノ本古墳群』第47図1)を参考にすれば、3単位の可能性もある。

土師器

甕(106)

寸詰まりの体部をもつ小型の甕である。体部内外面は斜位のハケメ調整を行う。

壺 (107)

球形の体部をもつ小型の壺である。体部内面の下半部にはユビナデ痕を残し、上半部はハケメ調整する。外面は磨滅のため不明である。

②墳斤裾部・周溝出十十器(図版64、写真図版68・69)

須恵器

杯蓋 (108~112)

5点を図化しており、法量・器形をもとに3つに分類する。

108は口径14.0cm、器高4.3cmで、口縁部が垂直近くに立ち上がり、口縁部と天井部の境界は比較的明瞭である。口縁端部は内側に傾く面をもつ。天井部は回転へラケズリで調整する。

109~111は口径14.4~14.9cm、器高4.0~4.5cmで、口縁部の立ち上がりが緩く、口縁部と天井部の境界は不明瞭となる。天井部は回転ヘラケズリで調整する。

112は口径13.9cm、器高3.4cmで、口縁部の立ち上がりが低く、口縁部と天井部の境界は丸い。天井部は回転ヘラケズリの後、カキメを施す。

杯身(113~118)

6点を図化しており、法量・器形をもとに3つに分類する。

113は口径12.8cm、器高5.0cmで、立ち上がり部が内傾気味に 2 cmの伸びを見せ、口縁端部は内側に傾く面をもつ。底部は回転ヘラケズリで調整する。108と113は墳丘裾部からセットで出土した蓋杯である。 114・115は口径13.0cm、器高 $4.2\sim4.5$ cmで、立ち上がり部の長さは 1 cmを超える。底部は回転ヘラケズリで調整する。

116~118は口径12.3~12.4cm、器高3.6~4.1cmで、1 cm強の立ち上がり部が内傾する。底部は回転へラケズリで調整する。

無蓋高杯 (119)

無蓋高杯の杯部のみが残存している。水平な底部から、口縁部が稜をもって真っ直ぐ立ち上がり、口縁部の側面には櫛目文が施される。底面は回転ヘラケズリで調整する。

短頸壺 (120)

球形で肩の張った体部から、口縁部が短く直立する。体部外面にはカキメを施し、底面は回転ヘラケ

ズリで調整する。

脚付き壺 (121・123)

121は小型の直口壺に脚部が付く器形である。脚部には3方向に長方形の透かしを設ける。

123は球形の底部にスカート状の脚部が付く。外面はカキメで仕上げ、脚部の中程に2条の凹線を施す。全体の器形は不明だが、中型の広口あるいは直口壺になるものと思われる。

直口壺(122)

肩の張る体部から口縁部が内弯気味に立ち上がる。外面にはカキメを施し、底部は回転ヘラケズリで調整する。

甕 (124)

体部は球形で、広い頸部から口縁部が直線的に開き、端部を玉縁状に収める。外面には格子タタキ、 内面には同心円タタキが残るものの、頸部のナデはタタキを切っている。

③石室内出土金属器(図版76~79・90、写真図版86~89、巻頭図版8)

武器

大型刀子 (M46~M48)

M46~M48は大型刀子とされるものであるが、ここでは工具の刀子とは別とした。

M46は刃の大半と茎尻を欠損するため、現存長34.3cm、刀身残存幅2.4cm、厚0.8cm。反りはない。刃側を欠損しているが、両関であろう。茎は現存長5.4cm、茎幅1.4cm、厚0.6cm。茎尻欠損のため、目釘孔の有無は不明。

M47は茎と関の一部のみで、現存長9.9cm、刀身現存幅2.1cm、厚0.4cm。関は両関と思われる。茎は全長4.2cm、茎幅1.0cm、厚0.3cmで栗尻。直径0.5cmの目釘孔が1個ある。わずかであるが、木質が残存する。

M48はほぼ完形で、現存長27.5+16.55cm、刀身幅2.6cm、厚0.8cm。反りはない。両関で、鉄製の柄縁金具がつく。この金具は峰側を欠損しているが、銀杏形に復元でき、現存長1.0cm、幅3.35×3.25cm、厚0.1cm。茎は全長9.4cm、茎幅1.2cm、厚0.45cmで栗尻。直径0.4cmの目釘孔に現存長1.45cmの目釘が残る。

金具

飾金具 (M49)

玄室から出土したもので、革帯金具と思われる。扁平な地板に3箇所の鋲孔があり、うち1箇所に現長 2.0cmの円頭鋲が残存する。地板の平面形は鋲が1個認められる短辺側を丸くしている。

工具

刀子 (M50~M55)

M50は鋒を欠損し、現存長9.55cm。研ぎ減りのため、刀身幅1.65cm、厚0.4cm。反りはなく、両関。 茎は全長5.4cm、茎幅0.8cm、厚0.4cmで栗尻。茎と刀身に鹿角が残ることから、柄と鞘があったようで ある

M51は茎尻と鋒を欠損。現存長7.1cm、研ぎ減りのため、刀身幅0.6cm、厚0.3cm。反りはなく、両関。 茎は現存長3.6cmで、茎尻に近い部分では茎幅0.4cm、厚0.1cmと非常に薄い。柄木が良好に残存している。

M52は鋒を欠損し、現存長7.5cm。研ぎ減りのため、刀身幅1.4cm、厚0.4cm。反りはなく、両関。茎

は全長3.0cm、茎幅0.4cm、厚0.3cmで栗尻。

M53は鋒を欠損、現存長7.1cm。研ぎ減りのため、刀身幅1.55cm、厚0.3cm。反りはなく、両関。茎は全長4.7cm、茎幅0.8cm、厚0.3cmで栗尻。茎には幅0.1mmほどの細い植物性繊維質が、茎に対して斜め方向に巻いたのち、直角方向に巻かれている。木質がみられないことから、直接茎に巻いたようである。

M54は刀身をほとんど欠損するため、現存長7.45cm、刀身幅1.75cm、厚0.5cm。反りはなく、両関。 茎は茎尻欠損のため、現存長5.0cm、茎幅0.8cm、厚0.5cmで栗尻。茎全体に木質が残る。刀身に対して、 茎がやや反り上がる。

M55も刀身をほとんど欠損するため、現存長5.7cm。研ぎ減りのためか、刀身幅1.8cm、厚0.6cm。両関。茎は長4.4cm、幅0.9cm、厚0.4cmで栗尻。

鉄鎌 (M56)

2片はおそらく同一個体と思われるものの、接点が無い。刃部の破片の長さは11.9cmで、幅は2.08cm。 刃の中央部は使用のよるものか、薄くなり、減っている。背の幅は0.7cmでしっかりした厚みがある。 基部の破片の幅は2.54cmである。図化した方向は上下逆で、刃に対して右方向に折り曲げ、柄に対して 鈍角に刃がつくタイプとなる可能性もある。

鉄鑿 (M57)

ほぼ完形で、全長10.8cm、身幅0.5cm、厚0.5cmになる。茎は全長3.0cm、茎幅0.6cm、厚0.5cmで木質が残存する。関幅は1.2cm。無肩式・茎式・薄手の Π B類(古瀬1991)にあたる。

器海

鉄鏃 (M58~M91)

玄室からの出土で、大きく「腸抉三角形鏃群 (M58~M71)」「三角形鏃群 (M72~M76)」「長頸鏃群 (M77~M91)」の3つの型式に分類することができる。

腸抉三角形鏃群(M58~M71)

M58は逆刺の両先端部分と茎部の下端を欠損し、現存長12.95cmを測る。鏃身部の外形は先太りの長三角形を呈し、断面は平造である。鏃身の逆刺は深く、先端が外側へ開く。鏃身部の現存長7.8cm、最大幅3.55cm、厚さ0.5cmである。頸部は短く、直線状で、断面は方形を呈する。頸部関部は角関で、茎部は短い。頸部以下に樹皮等を巻いた痕跡が残る。

M59~M61は逆刺の外反度が刃部の幅に等しく、刃部の幅が全体の中で中位のものである。鏃身部の 先端・逆刺の先端・茎部等を欠損し、現存長はM59が12.1cm、M60が13.7cm、M61が8.7cmである。鏃 身部は長三角形を呈し、断面は平造である。逆刺は深い。M60の鏃身部の現存長6.5cm、最大幅2.6cm、 中位の厚さ0.5cmである。頸部は短く、直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部はM59・M61が棘 状関、M60が角関である。茎部は短く、先端が細くなる。M60の断面は円形である。M59は頸部以下に 樹皮巻が残る。

M62は切先と逆刺の先端を欠き、現存長13.05cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は平造とみられる。逆刺は基部のみ深く抉り込んでおり、外反度は弱い。鏃身部の現存長6.1cm、最大幅3.5 cm、中位の厚さ0.85cmを測る。頸部は短い直線状で、幅8 mm、断面は長方形である。頸部関部は台形関とみられる。茎部は短く、先端は細くなる。断面は方形である。茎部には木質が残る。

M63は逆刺の先端、茎部を欠き、残存長7.3cmを測る。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は平造である。逆刺は深く、大きく外反する。鏃身部の現存長7.1cm、最大幅4.0cm、中位の厚さ0.85cmである。

頸部は直線状を呈し、断面は長方形である。

M64は逆刺の先端と茎部を欠き、現存長7.3cmである。鏃身部は矢印状の形状を呈するが、三角形鏃の破損品を再利用した可能性がある。断面は両丸造である。鏃身部の現存長3.9cm、最大幅2.9cm、中位の厚さ0.4cmを測る。逆刺は深く、翼状に大きく開き、角度は約55度を測る。頸部は短い直線状で、断面は長方形を呈する。関部は棘状関である。

M65は切先と茎部末端を欠き、現存長12.45cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は平造である。逆刺の外反は弱い。鏃身部の現存長5.7cm、最大幅2.8cm、中位の厚さ0.45cmを測る。頸部は短い直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部は棘状関である。茎部は短く、先端が細くなる。断面は円形である。

M66は茎部末端を欠き、現存長10.25cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は平造である。 逆刺は重ね抉りで、外反度は弱い。鏃身部の現存長5.5cm、最大幅2.55cm、中位の厚さ0.25cmを測る。 頸部は短い直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部は台形関である。茎部の断面は楕円形である。 M67はほぼ完形で、全長11.05cmである。鏃身部の外形は細身の長三角形で、断面は両丸造である。 逆刺は深く、先端が外反する。鏃身部の長さ5.4cm、最大幅2.0cm、中位の厚さ0.35cmを測る。頸部は短い直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部は台形関とみられる。茎部は短く、先端が細くなる。 断面は方形である。茎部に木質・樹皮巻が残存する。

M68・M69は茎部の末端を欠き、現存長はM68が9.95cm、M69が9.75cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は平造である。逆刺は深く、大きく外反する。M68は鏃身部の長さ5.3cm、最大幅2.8 cm、中位の厚さ0.45cm、M69は同様に5.5cm、1.8cm、0.25cmを測る。頸部は短い直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部はM68が台形関、M69が棘状関である。茎部は先端が細くなる。断面はM68が円形、M69が方形である。

M70は茎部末端、M71は鏃身部側縁・逆刺先端・茎部を欠き、現存長はM70が8.05cm、M71が5.25cm である。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は平造である。逆刺は深く、外反度は小さい。M70は鏃身部の長さ5.1cm、最大幅2.5cm、中位の厚さ0.31cmを測る。頸部は短い直線状で、断面はM70が長方形、M71が方形を呈する。M70の関部は角関で、茎部の断面は方形である。

三角形鏃群 (M72~M76)

M72は三角形鏃群、B形式(杉山1988)に属する。茎部末端を欠くがほぼ全形をとどめ、現存長11.3 cmを測る。鏃身部は柳葉形を呈し、断面は平造である。鏃身部の長さ5.1cm、最大幅2.75cm、中位の厚さ0.5cmを測る。鏃身関部は撫関で、緩やかに弯曲する頸部に続く。断面形は長方形を呈する。関部は棘状関である。茎部は短く、先細りする。断面は長方形である。

M73は茎部が歪むものの完形を保ち、全長12.45cmを測る。鏃身部は長三角形を呈し、断面は平造である。鏃身関部は浅い逆刺状になる。鏃身部の長さ5.3cm、最大幅3.8cm、厚さ0.4cmを測る。頸部は短い直線状で、断面は長方形を呈する。関部は角関である。茎部は短く、先細りする。断面は円形を呈する。

M74は完形で、全長12.0cmを測る。鏃身部は長三角形を呈し、断面は平造である。鏃身関部は角関である。鏃身部の長さ5.4cm、最大幅2.9cm、厚さ0.45cmを測る。頸部は短い直線状で、断面は長方形を呈する。関部は角関である。茎部は短く、断面は方形である。

M75は頸部の下端以下を欠損し、現存長7.9cmを測る。鏃身部は長三角形を呈し、断面は両丸造であ

る。鏃身関部は角関である。鏃身部の長さ5.8cm、幅3.35cm、厚さ0.7cmを測る。頸部は短い直線状で、 断面は長方形を呈する。

M76は頸部と茎部にかけての断片で、現存長5.7cmを測る。鏃身部を欠損するが、三角形鏃群に属する鉄鏃とみられる。鏃身関部は角関である。頸部は短い直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部は角関である。茎部の断面は長方形で、関部以下に木質が残る。

長頸鏃群 (M77~M91)

M77~M79は逆刺を有する三角形鏃である。M77・M79は逆刺の片側を欠損するものの、全長を知ることができ、M77が15.05cm、M79が12.6cmを測る。M78は鏃身部の残りが悪く、現存長は13.65cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は両丸造である。逆刺は基部を抉り込むが、ほとんど開かない。M77は鏃身部の長さ2.8cm、最大幅2.25cm、中位の厚さ0.6cm、M79は同様に2.7cm、1.65cm、0.25cmを測る。頸部は長い直線状で、断面はM77・M78が長方形、M79が方形を呈する。頸部関部はM77が明瞭な台形関、M78が無関、M79が棘状関である。茎部は先端が細くなり、断面は方形である。

M80~M84は長三角形鏃で、鏃身部の長さが3cm前後である。M80・M82はほぼ全形が遺存する。現存長はM80が17.15cm、M82が15.3cmを測る。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面は平片刃造、あるいは両丸造である。鏃身関部は角関である。M80は鏃身部の長さ3.5cm、最大幅1.1cm、中位の厚さ0.35cm、M82は同様に3.05cm、1.0cm、0.3cmを測る。頸部は長短があるが、形は直線状で、断面は長方形を呈する。関部は棘状関である。茎部は長く、先細りし、断面は丸い。M80は頸部関部上部から茎部にかけて木質が残る。M81はほぼ完形で、全長15.9cmを測る。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面は両丸造である。鏃身関部は撫関である。鏃身部の長さ3.0cm、最大幅1.2cm、中位の厚さ0.35cmを測る。頸部は長く、直線状で、断面は長方形を呈する。関部は明瞭な棘状関である。茎部は短く、断面は方形である。M83・M84は茎部の末端を欠き、現存長はM83が12.3cm、M84が11.5cmを測る。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面はM83が平丸造、M84が両丸造である。鏃身関部は角関である。M83は鏃身部の長さ2.85cm、最大幅1.4cm、中位の厚さ0.25cm、M84は同様に3.2cm、1.05cm、0.35cmを測る。頸部は長短があるが、形は直線状で、断面は長方形を呈する。関部は棘状関である。

M85~M88・M90・M91は長三角形鏃で、鏃身部の長さが2cm~2.5cmである。M85~M88は茎部の末端を欠き、現存長はM85が9.4cm、M86が13.97cm、M87が14.4cm、M88が13.1cmを測る。M90・M91は頸部以下を欠損し、現存長はM90が7.0cm、M91が5.6cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面はM86が両丸造、M85・M87・M88・M90が片丸造、M91が平造である。鏃身関部はM86・M88・M90が角関、M85・M87・M91が撫関である。M86は鏃身部の長さ2.45cm、最大幅、0.9cm、中位の厚さ0.5cm、同様にM87は鏃身部の長さ2.4cm、最大幅1.25cm、中位の厚さ0.3cm、M88は2.0cm、0.9cm、0.25cm、M90は2.0cm、1.0cm、0.35cm、M91は2.0cm、0.8cm、0.25cmを測る。頸部は長く直線状で、断面は長方形を呈する。関部は、銹で不明瞭な部分もあるが、棘状関とみられる。茎部は先細りし、断面は方形である。関部以下には木質が残る。

M89は鏃身部を欠損し、現存長12.25cmを測る。頸部は長く、直線状で、断面は長方形を呈する。関部は棘状関である。茎部は末端が先細りし、断面は丸い。

装身具

耳環 (M173~M178)

6点、3対の耳環が出土している。 $M173 \cdot M174$ がわずかに大ぶりで幅3.2cm、高さ2.9cm。他のものは幅 $2.6 \sim 3$ cm、高さ $2.55 \sim 2.7$ cmである。 $M176 \cdot M178$ は全体の箔の残りは良い。金環であるが、特にM $173 \cdot M175 \cdot M176$ の色調は白っぽい。M174は全面緑青に覆われている。 $M175 \sim M178$ は端面にシボリ目がみとめられる。

④石室内出土玉類(図版91、巻頭図版6・8)

掘削時に見つかったのは管玉1点のみで、床面の排土を土ふるいした結果、さらに管玉2点とガラス 小玉1点を採集した。しかしガラス小玉は管玉の孔内に挟まった状態なので、本来は一連の玉飾りが存 在した筈であり、検出しえた点数はごく僅かの割合である。

碧玉製管玉(J1・J2)

光沢のある濃緑色を呈する碧玉製で、J2は分析鑑定(第6章 第1節)の結果、島根県花仙山産の石材と判断された。片面穿孔を行い、J1の孔の入口側にガラス小玉1点(J4)が詰まっている。2点の管玉は長・径とも大きさに較差があり、別の連であった可能性がある。

水晶製管玉(J3)

半透明の水晶製で、片面穿孔の断面が透けて見えている。

ガラス小玉(J4)

管玉(J 1)の孔内に詰まっているため細かい観察はできないが、高さ 2 m、径 3 m 程度の大きさで、青緑色を呈する。

7 追葬

石室内の遺物のグループで分けると、I群・H群・A群・B群のグループ、C群・D群のグループ、 E群・F群・G群のグループと3つのグループに分けられる。耳環は6個体出土しているので、最低3 人の埋葬が推定できるが、遺物の時期や配置を考慮すると2回以上の追葬を想定できる。

8 小結

この古墳は石室内外から多量の遺物が出土しており、火山古墳群の中では最も多くの埋葬が行われた 古墳であろう。6世紀中葉に築造され、7世紀前半まで2回以上の追葬が行われている。墳裾から古い 型式の須恵器が出土しているが、石室から確実に出土しているのは田辺編年のTK43型式~TK217型 式の須恵器である。

第9節 8号墳

1 立地

北東方向に開く谷の東向き斜面に位置する。最高部で標高118mである。

2 調査前の状況 (図版22、写真図版22)

古墳は盛土が流失しており、石室天井部が露出していた。石室は側壁の崩落により4枚ある天井石のうち、東側の2枚が石室内に落ち込んだ状態であった。石室内部には多量の土砂が流入していた。

3 墳丘(図版23~25、写真図版22·23·27)

墳丘は盛り土上部が失われており、築造時の高さはとどめていないが、墳丘裾は比較的明瞭である。 平面形は円形であり、規模は東西方向で12.0m、南北方向で12.5m、高さは現存値で6mである。墳丘はまず第一段階として石室構築に伴う整地を行っており、これに伴う列石(墳丘内列石)を斜面の下側一東~北側で検出した。列石は人頭大の角レキを旧表土の上に直接積み上げており、最も高い所で3~4段、高さ0.7mほどになる。この列石の内側5m×9mの範囲に盛り土を施し平坦地を造り、ここに石室の基底石を据えている。その後第二段階として石室の構築に伴って背後の斜面を削って墳丘を積み上げている。完成時には第一段階の整地に伴う列石は墳丘内に埋没する。

盛土は厚さ20~30cmの厚さで積み上げており、石室石材の積み上げに伴い、墳丘の外側から内側に向けて順次積み上げている。墳丘の東側は旧表土の上に直接積み上げてゆくが、西側は地山を削って成形した面から積み上げる。第一段階の盛土である石室基底部は旧表土の上に盛土を積み上げており、墳丘の外側から順に内側へと盛土を施してゆき、整地をおこなっている。

4 埋葬施設 (図版26·27、写真図版23~26)

この古墳の埋葬施設は無袖の横穴式石室である。石室の主軸は斜面の等高線に対して直交方向を向いており、方位は南東一北西方向で、南東側に開口する。規模は全長7.4m、幅1.5m、高さ1.6mである。石室は山側を大きく削って幅5m、長さ5mの掘り方を造るとともに、先に説明したようにその土を利用して斜面側に盛り上げて整地した結果、石室の規模に比較して、大規模な造成となっている。

石室の壁及び天井は大型の石材で構築されている。側壁が3段、奥壁が2段の石積で構築されており、4枚の天井石が架構されている。床面は奥壁から羨門に向かって緩やかに傾斜させレベルを下げて行く。 閉塞石は残っていなかったが、最も南側にある天井石の位置から判断して、閉塞は奥壁から6mほどの所で行われていたと推定する。

側壁の石材は基底部に厚みの薄い大型の石材を立てて使い、この上に小型の石材を平積みしている。 基底石は浅い掘り方に据えられており、かませの石材が床面上に露出している。

奥壁は西側に側壁同様に厚みの薄い大型の石材を立てて使い、東側は小型の石材を入れる。天井石は 奥から2枚目と3枚目の石材が大きく、石の間の隙間は拳大の石を詰めて塞いでいる。床面には敷石等 はない。

5 遺物出土状況(図版28、写真図版24)

石室が開口していたため遺物の残りは良くないが、石室内から土器と鉄製品が出土している。鉄製品は奥壁付近で鉄鏃(M92)が、中央部の右側壁沿いでも鉄鏃(M93)が出土している。土器は石室中央部よりも南寄りで出土しており、大きく3群に分けられる。最も南側のA群は側壁に沿って集中しており、須恵器杯蓋(125~128)と同杯身(133~135)、同壺(139)からなる。126、133、134は固まって出土しており、原位置を保つ可能性も考えられる。左側壁沿いのB群は、須恵器杯身(132、136)と同

®(137)からなるが、破損が著しいので原位置から移動している可能性が高い。A群の奥に散らばる ものをC群とするが、ここには杯蓋(129・130)と杯身(131)がある。まとまりなく散在しているの で、原位置を失っていると考える。

6 出土遺物

①出土土器(図版65、写真図版70·71)

須恵器

杯蓋 (125~130)

6点を図化している。

125は口径11.6cm、器高4.15cmで、天井部は回転へラキリ後、不調整である。口縁部の内側を段状に強くヨコナデする。

126~130は口径10.05~11.05cm、器高3.55~4.2cmで、天井部は回転へラキリ後、不調整である。口 縁端部は外反気味に強くナデる。

杯身(131~136)

口縁部は短く反り上がり、溝状の受け部を作る。口縁端部は受け部よりやや高い程度にとどまる。底部は回転へラキリ後、不調整で、135は平底状を呈する。

ラッパ状に二段に開く口縁部の破片のみである。

高杯脚部(138)

小型の脚部のみの破片である。中程に2条の凹線を施し、端部は下方につまみ出す。

細頸壺 (139)

球形の体部から肩が張って頸部が細く締まり、口頸部が内弯気味に立ち上がる。頸部中程と肩部に2 条の凹線を施し、体部下半は回転ヘラケズリで調整する。

杯 B 底部 (140)

貼り付けの輪高台を有する杯の底部である。

②出土鉄器(図版79、写真図版89)

武器

鉄鏃 (M92·M93)

M92は長頸鏃群の長三角形鏃に属する。鏃身部の銹化が著しく、茎部末端を欠くが、全体の形が良く 残り、現存長15.7cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は両丸造である。鏃身関部は角関で ある。鏃身部の現存長3.1cm、最大幅1.3cm、中位の厚さ0.35cmを測る。頸部は長く、直線状で、断面は 長方形である。関部は棘状関である。茎部は細長く、断面は方形を呈する。

M93は長頸鏃群の片刃鏃に属する。茎部末端を欠損し、現存長15.3cmである。鏃身部の外形は片刃形を呈し、断面は両切刃造である。鏃身関部は無関である。鏃身部の長さ1.4cm、最大幅0.7cm、中位の厚さ0.3cmを測る。頸部は長く、直線状で、断面は長方形である。関部は棘状関である。茎部は先細りし、断面は方形を呈する。

7 追葬

石室内から出土した須恵器が田辺編年のTK217型式のもののみであり、須恵器の型式の時間幅から 追葬回数を推定することはできないが、内部の土器が片づけられているようなので、追葬があったこと は確実であろう。

8 小結

この古墳は石室基底部構築のために、石垣状に石を積み上げるという特徴をもつ。7世紀前半に築かれたものであり、埋葬は比較的短期間で終了している。

第10節 9号墳

1 立地

丘陵の西側裾に位置し、標高は最高部で107mである。

2 調査前の状況 (図版29、写真図版28)

水田の造成により、墳丘の西半部を大きくカットされており、盛土はほとんど失われていた。このため石室の石材が地表に露出した状態であったが、石室は天井石を失っている以外は残存状況は良好であった。

なお古墳の発見が道路工事開始後であったため、西側には盛土が既に施されており、周溝の西端部分については調査が行えていない。

3 墳丘(図版30・31、写真図版28・29・32)

墳丘の残存状態は悪く、西側及び北側の裾は不明瞭である。東側は地山をカットした幅3 m以上の周溝が巡り、このラインからおおよその規模は推定できる。墳丘の直径は15m、高さは残存値で1 mである。

墳丘は丘陵の裾をカットした土を西側に積み上げて構築されており、厚さ10~20cmほどの盛り土の単位が確認できる。盛土の下層からは古墳築造前に焼失した竪穴住居や柱穴を検出している(後述)。

4 埋葬施設 (図版32・33、写真図版29・31・32)

この古墳の埋葬施設は主軸を東西に向けた無袖の横穴式石室であり、西側に開口する。平面形は奥壁から6.2m付近でややくびれ、ここから先は「ハ」の字形に開く。奥壁から4m付近で側壁の石材の積み方が大きく変わり、またこの付近で床面の敷石がなくなるので、袖がなく明確な玄門は形成しないが、ここまでが玄室であり、これより先は羨道であると考えられる。石室の規模は玄室長4m、玄室幅2m、羨道長4.3m、玄室残存高は1.3mである。

石室の玄室部分は「コ」の字形に掘り込んだ掘り方の中に小型の石材を基底石として据え、この上に 大型の石材を積み上げている。玄室と羨道の境には大型の石材を基底部に据え付け、羨道部は小型の石 材を積み上げて構築している。全体に石材の積み方は粗雑である。玄室の床面には10~20cmの扁平な割 石を敷きつめている。閉塞石は残っていなかったが、羨道の中程で閉塞がおこなわれていたと推定する。 調査の最終段階で敷石を除去したが、敷石下には埋葬面は認められなかった。

5 遺物出土状況(図版34・35、写真図版30)

遺物は石室内、前庭部、墳丘裾部などから出土している。石室内は後世の攪乱のために荒らされており、原位置をとどめる遺物はほとんどない状態であった。遺物の種類は副葬品である須恵器・土師器の土器類が、耳環、玉類、鉄鏃・直刀・馬具などの鉄器がある。

遺物は散乱しているが、大きく $A \sim D$ 群の4つのグループに分けられる。A群は羨道部の右側壁沿いの一群である。須恵器壺蓋(160)、同杯身(149)、提瓶(165)、鉄鑿(M119)などが出土している。土器はいずれも破損が著しいが、壁際に集中することから、比較的原位置に近い状態ではないかと判断する。B群は羨道部の中央に散乱する遺物群である。須恵器杯蓋(143)、同杯身(150・155・156)、同高杯蓋(151)、同短頸壺(161・164)、鉄鏃(M110)、鉄剣(M100)、刀子(M103・M104)、耳環(M188)、刀装具(M101)などが出土している。須恵器は破片となって広い範囲に散らばっており、また鉄製品もまとまりなく散布しているため、かなり後世に移動されているものと思われる。

C群は玄室部の西側に散乱する遺物群である。西寄りに須恵器、東寄りに鉄製品が多く散布する。須恵器には杯身(145・147)、脚付き椀(159)、短頸壺(162・163)があり、鉄製品には馬具(M96・M98・M99)、鉄鏃(M107・M109・M111・M117)、刀子(M102)がある。また耳環(M184・M186)も出土している。須恵器の破損が著しく、また馬具も細片化しており、後世の攪乱や石室石材の崩落による影響が大きいようである。またこの群の東寄りには玉類が集中しており、碧玉製管玉・水晶製切子玉・水晶製丸玉・琥珀製棗玉・ガラス小玉が多量に出土している。これらの玉は首飾りを構成するものであろう。狭い範囲から集中して出土していることから、埋葬当時の位置を保つと思われる。

D群は奥壁から1mほど西に集まる遺物群である。須恵器には杯蓋(141・142・144)、同杯身(146・157・158)があり、鉄製品としては馬具(M94・M95・M97)、鉄鏃(M105・M106・M112・M113・M116)があり、耳環(M180~M183・M185)も出土している。遺物は散在しており、原位置は失われていると判断する。またこれらの遺物群からやや離れて、奥壁北東隅にも管玉4点(J7・J10・J11・J14)がかたまっている。

6 出土遺物

①出土土器(図版65·66、写真図版71~73)

須恵器

杯蓋 (141~144)

4点を図化している。法量・器形・調整技法をもとに2つに分類する。

141・143は口径13.7~14.0cm、器高4.4cmで、口縁部と天井部の境界が不明瞭ながらも意識される。 天井部は回転へラキリ後、不調整である。143は口縁部を強くナデて端部を外反気味にし、内側に沈線 状の段を加える。

142・144は口径12.6~12.8cm、器高3.5~3.65cmと法量が一回り小さく、口縁部から天井部にかけての輪郭は緩やかに連続する。天井部は回転ヘラキリ後、不調整である。口縁部内側の身が当たる部分に、 沈線状の段を加える。 杯身(145~150·155~158)

10点を図化しており、法量・器形・調整技法をもとに3つに分類する。

145・146は口縁部が直立気味に立ち上がり、立ち上がり部の長さは約1cm余である。口径12.75~13.45 cm、器高3.9~4.35cmで、底部は回転ヘラケズリで調整する。

 $147\sim150\cdot155$ は立ち上がり部の長さが $1\,\mathrm{cm}$ 弱で、基部から内傾気味に立ち上がる。口径 $11.45\sim13.25\,\mathrm{cm}$ 、器高 $3.7\sim4.2\,\mathrm{cm}$ で、底部は回転ヘラケズリで調整するが、147のみはハケメ状工具で不整方向にナデ消す。

156~158は立ち上がりが矮小化して短く立ち上がり、基部は短く外へ開く。口径11.65~12.05cm、器高3.25~3.65cmで、底部は回転へラキリ後、不調整である。

高杯蓋 (151~153)

151・152は口縁部と天井部の境界に強いナデを施して、稜線を意識している。天井部は平坦で、低平なつまみが付く。口径15.8~16.2cm、器高4.7~5.05cmである。

153は口縁部から天井部にかけて緩やかに連続する。口径14.95cm、器高5.5cmである。

有蓋高杯 (154)

やや深めの杯部の破片で、脚部を欠失している。口縁部は内傾気味に立ち上がり、受け部との間が溝状となる。脚の基部には、2方向に方形透かしの痕跡が残る。口径14.0cm、現存の器高5.7cmである。

外面に2条の凹線を施し、椀部底面を回転ヘラケズリで調整する。脚部は段状の屈曲をもち、屈曲部 に沈線を施す。

短頸壺蓋 (160)

脚付き椀 (159)

伏鉢形の蓋で、口縁端部が外屈する。天井部は平坦で、回転ヘラケズリによって調整する。口径と重ね焼きの痕跡・色調などから、162の短頸壺とセットになるものとみなせる。

短頸壺 (161~164)

161・162は扁球形の体部から口縁部が短く直立する。体部下半は回転ヘラケズリで調整し、肩部に 1 条の凹線を施す。162は体部外面をカキメで仕上げる。

163・164は扁球形の体部から口縁部が外反気味に短く開く。体部下半は回転へラケズリで調整する。 提瓶 (165~167)

体部の直径14~15cmの中型品(165・167)と、20cm近くなる大型品(166)がある。

165は口縁部の片側がフード状に拡張する異形提瓶である。口縁端部は約半分が欠けているが、頸部から器壁を薄く引き延ばして、背面を山形にしたものと思われる。頸部には焼成時の融着痕がある。体部両面はカキメで仕上げるが、やや平面側寄りに、カキメの空白地を残す。平面側にはカキメの上から「卅」に似たへう記号を刻み、両肩には円形浮文を貼り付ける。

167は口縁部が外反し、端部に面をとる。体部両面はカキメで仕上げる。肩部は欠失していて、把手の有無は判らない。

166は体部の一部が残るのみで、全形は不明であるが、大型提瓶とみられる。体部両面はカキメで仕上げる。

壺 (168)

口縁部のみの破片である。口縁端部は四角く肥厚させ、頸部に2本のヘラ記号を引く。肩部にはカキ

メを施す。

脚付き壺 (169)

肩部の張った扁球形の体部のみの破片であるが、底部側に脚部の接合痕跡が残る。肩部下に2条の凹線を引き、その間に櫛描き波状文を施す。体部下半は回転へラケズリで調整する。

土師器

杯 (170)

竪穴住居跡のカマド内から出土した。底部から丸く立ち上がる椀で、外面をハケメで調整し、口縁部をヨコナデで仕上げる。

高杯 (171)

口縁部と脚部を欠失した杯部下半のみの破片で、底面には円盤充填を行う。

甕(172

小型の甕で、ほとんど屈曲のない頸部から、口縁部がわずかに開く。体部内面はヘラケズリ、口縁部 内面は横方向のハケメで調整する。

②出土金属器(図版80~83・90、写真図版90~92、巻頭図版8)

馬具

轡 (M94)

板状立間素環鏡板付轡である。楕円形の環状の鏡板に長方形の立間が付く。銜と引手の結合は鏡板の外側で行われている。引手は引手壺一方が外反するタイプで、それぞれ逆方向に捻りが入れられている。 鍛金具(M95~M98)

M95は鐙靼である。鉸具と兵庫鎖からなる。鉸具は長辺がややくびれた隅丸長方形の縁金の基部に蕨手状の刺金を巻き付けた形状で、長さ9cm、最大幅5cmである。兵庫鎖は2連である。一辺0.6cmの断面方形の鉄棒を曲げて作られており、長さ11.2~10.5cm、最大幅2.9cmを測る。鉸具、兵庫鎖とも断面が角の丸い方形の鉄棒から作られている。

M96もM95と同様の鐙靼である。鉸具は半分以上が欠損する。刺金も蕨手状に縁金の基部に巻き付く部分以外は欠損している。兵庫鎖は2連残存している。一辺0.6cmの断面方形の鉄棒を曲げて作られており、長さ10.0~9.7cm、最大幅3.0cmを測る。

M97・M98は鐙吊金具である。M97は、やや開いた U 字形の吊手部とハの字状に広がる脚部からなる。吊手部は断面方形で、脚部は吊り手部から叩き延ばして板状にして作られており、2箇所に鉄釘を打ち、木製壺鐙を固定する。鉄釘は3箇所に残存しており、内1本は完存している。鉄釘の長さは1.8 cm、頭部の直径は0.4cmを測る。脚部の端部が欠損している。M98は、形状はM97と同じであるが、ほぼ完存している。鉄釘は4箇所に残存している。内1本は完存である。

鞖金具 (M99)

鞍金具に用いられる鞖金具の残欠である。上部がすぼまった茄子形の縁金と形状不明の座金具、板状の足金物より構成されている。足金物は縁金の基部に搦めて座金具を通し木製鞍橋に固定されるものと推測される。足金物の一方が欠損している。

武器

大型刀子 (M100)

M48とほぼ同型の大型刀子である。現存長32.75+19.63cm。刀身は現存幅2.55cm、厚0.75cm。反りは

ない。刃の痛みが激しく、鋒を欠損する。両関で、鉄製の柄縁金具がつく。金具は半分近く欠損しているが、銀杏形に復元できる。現存長1.6cm、幅3.6×3.0cm、厚0.2cm。表面に漆を施す。茎は全長7.6cm、茎幅1.4cm、厚0.4cmで栗尻。柄木が残存する。直径0.4cmの目釘孔に現存長2.23cmの目釘がある。 刀装具(M101)

柄頭もしくは鞘尻装具で、M100に付属すると思われる。平面はほぼ円頭形であるが、断面は銀杏形になる。完形で全長2.6cm、幅3.1cm、厚2.4cm。縁から0.8cmのところに、直径0.3cmの目釘孔があり、全長2.4cmの目釘が完存する。

工具

刀子 (M102~M104)

M102は刀身と茎の一部のみで現存長12.1cm、刀身幅1.6cm、厚0.7cm。両関で関幅1.8cmになる。反りはない。茎は現存長1.1cm、茎幅1.2cm、厚0.4cm。目釘孔・目釘等は不明。柄木が残存する。

M103は鋒欠損のため、現存長9.3cm、刀身幅1.45cm、厚0.4cm。両関。反りはない。茎は茎尻を欠損するため、現存長1.0cm、茎幅1.2cm、厚0.4cm。柄木が残存する。

M104は鋒を欠損するため、現存長15.3cm、刀身幅1.3cm、厚0.5cmで両関。反りはない。刃の一部を研ぎ減りする。茎は全長4.6cm、茎幅0.9cm、厚0.4cmで栗尻。木質の上に繊維状のものを横方向に巻いた痕跡がある。

武器

鉄鏃 (M105~M117)

M105・M106は三角形鏃群に属し、鏃身部の長さが3cmを超える。M105は鏃身部の一部と茎部の末端を欠くが、ほぼ全形が知られ、現存長10.68cmである。M106は茎部の大半を欠き、現存長6.4cmである。鏃身部は長三角形を呈し、断面は平造である。鏃身関部は角関である。M105は鏃身部の長さ4.5cm、最大幅2.32cm、中位の厚さ0.38cm、M106は同様に3.5cm、2.5cm、0.35cmを測る。頸部は短く直線状で、断面は長方形を呈する。関部はM105が棘状関、M106が角関である。茎部は先細りし、断面は方形である。

M107・M108は三角形鏃群に属し、鏃身部の長さが2.5cm前後である。M107は茎部を欠き、現存長5.9 cmである。M108は切先と茎部を欠き、現存長6.25cmである。鏃身部は長三角形を呈し、断面はM107が両丸造、M108が平造である。鏃身関部は角関である。M107は鏃身部の長さ2.3cm、最大幅1.9cm、中位の厚さ0.55cm、M108は同様に2.0cm、1.8cm、0.4cmを測る。頸部は短く直線状で、断面は長方形を呈する。

M109~M111は長頸鏃群の三角形鏃に属し、鏃身部に逆刺をもつ。M109は切先と茎部の末端を欠き、残存長9.2cmである。鏃身部の外形は三角形を呈し、断面形は平造である。鏃身関部の逆刺の抉りは浅い。鏃身部の現存長1.9cm、最大幅1.8cm、中位の厚さ0.35cmを測る。頸部は比較的短く、直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部は棘状関である。茎部は先細りし、断面は方形である。M110は茎部末端を欠き、現存長12.1cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面形は平造である。鏃身関部の逆刺の抉りは深い。鏃身部の長さ3.3cm、最大幅1.9cm、中位の厚さ0.25cmを測る。頸部の長さはM109とM111の中間で、形状は直線状、断面は長方形を呈する。頸部関部は棘状関である。茎部は先細りし、断面は方形である。M111は茎部末端を欠き、願存長存長14.42cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面形は片丸造である。鏃身関部の逆刺の抉りは浅い。鏃身部の長さ2.35cm、最大幅1.4cm、中位

の厚さ0.3cmを測る。頸部は長く、直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部は不明瞭だが、角関と みられる。茎部の断面は楕円形である。

M112~M116は長頸鏃群の長三角形鏃に属し、鏃身部に逆刺をもたない。M112~M114は茎部の末端を欠く以外は全体の形状が窺える。M115・M116は鏃身部や頸部以下を欠損する。残存長はM112が14.78 cm、M113が13.6cm、M114が16.3cm、M115が12.35cm、M116が8.4cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面形はM112・M114が両丸造、M113・M115・M116が平造である。鏃身関部はM112~M115が角関、M116が撫関である。M112は鏃身部の長さ3.2cm、最大幅1.08cm、中位の厚さ0.4cm、同様にM113は3.0cm、1.15cm、0.25cm、M114は2.2cm、0.8cm、0.37cm、M116は3.0cm、1.12cm、0.25cmを測る。頸部は長く、直線状で、断面は長方形または方形を呈する。関部はすべて棘状関である。茎部は先細りし、断面は方形である。M112・M113の関部以下には木質が残る。

M117は切先と頸部以下を欠くため、型式は不明である。現存長4.35cmを測る。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面は両丸造である。鏃身関部は撫関である。わずかに残存する頸部の形状は直線状で、断面は長方形を呈する。鏃身部の現存長2.35cm、最大幅1.4cm、中位の厚さ0.25cmを測る。

工具

鉄鑿 (M118 · M119)

M118は全長8.6cm。身部幅0.5cm、厚0.3cmで、断面は方形である。茎部は断面円形で、尖端を尖らせており、木質の痕跡がある。無肩式・茎式・薄手のIIB類(古瀬1991)である。

M119は先端を欠損するため、現存長7.82cm、身部幅0.4cm、厚0.2cmで、茎部は関幅0.8cm、厚0.3cm、端部厚0.1cmになる。断面は長方形である。茎には木質を巻き止めた痕跡があり、これらを含めた厚みは0.5cmになる。無肩式・茎式・薄手のII B類(古瀬1991)である。

装身具

耳環 (M179~M188)

10点、5対の耳環が出土している。幅2.65~3.4cm、高さ2.45~3.05cmである。表面の欠損や、剥離が著しいため、箔の残りが悪いものが多く、7号墳出土の耳環と比較して残存状況は悪い。蛍光 X 線分析などの科学的成分分析を行っていないため断言はできないが、M179・M180・M186~M188は銀環と思われる。完形はM179、ほぼ完形はM180・M186のみである。M182・M185は全面緑青に覆われている。M183・M184には、箔の下地の灰白色の物質が残っている。M179・M180・M186の端面にはシボリ目がみとめられる。M179の箔には亀裂がみられる。

③出土玉類 (図版91・92、巻頭図版6~8)

碧玉製管玉が11点(J5~J15)、緑色凝灰岩製管玉が1点(J16)、不明軟玉製管玉が1点(J17)、 瑪瑙製管玉が1点(J18)、水晶製切子玉が2点(J21・J22)、水晶製算盤玉が2点(J23・J24)、 水晶製丸玉が1点(J25)、琥珀製棗玉が1点(J26)、不明軟玉製丸玉が1点(J27)、土製丸玉が2 点(J28・J30)、ガラス丸玉が1点(J29)、ガラス小玉が67点(J19・J20・J31~J95)ある。

出土位置は大きく、玄室中央のC群と奥壁近くのD群に分かれ、それぞれに複数の耳環が伴う。特にC群では琥珀製棗玉など多様な種類の玉と多数のガラス小玉が出土している。

碧玉製管玉 (J5~J15)

光沢のある濃緑色を呈する碧玉製で、分析鑑定(第6章 第1節)の結果、J15は島根県花仙山産の石材と判断された。片面穿孔を行い、孔の出口側の欠けを臼状に整形する、念入りな二次調整が特徴的

に認められる(巻頭図版 6)。大きさは J 5~ J 7が長さ30.0mm、径10.0~11.0mm、 J 8・ J 9が長さ29.0~29.5mm、径9.0~9.5mm、 J 10~ J 13が長さ25.5~27.0mm、径10.0~12.0mm といくつかのまとまりに分けられ、規格品の存在が予想される。

緑色凝灰岩製管玉 (J16)

石材は風化の進んだ緑色凝灰岩で、表面の光沢は失われている。片面穿孔だが、風化に伴い孔の径が広がってしまっているように見受けられる。孔の出口側にガラス小玉 2 点(J19・J20)が詰まっている。

軟玉製管玉(J17)

空色を呈する軟質の玉材であるが、分析鑑定(第6章 第1節)の結果では、未だ石材の産地が比定されていない産地未定C群に一致するデータが得られた。両面穿孔を行う。

瑪瑙製管玉(J18)

半透明の赤褐色を呈する瑪瑙製で、両面穿孔を行う。

水晶製切子玉(J21·J22)

半透明の水晶製で、多角形のカットを行い、片面穿孔を行う。孔の出口側に欠けが生じているが、特に再調整は認められない。J21はやや細めのプロポーションで、断面六角形に面をとる。J22は一回り大きく、断面七角形に面をとる。

水晶製算盤玉 (J23·J24)

半透明の水晶製で、片面穿孔を行う。孔の出口側に欠けが生じているが、特に再調整は認められない。 J 23は太めのサイズで、中央に明瞭な稜線をとる。J 24はやや細めで、稜線が甘く、一部欠損している。 水晶製丸玉(J 25)

天地を平坦に成形して平玉状にし、片面穿孔を行う。

琥珀製棗玉(J26)

風化が進んで琥珀本来の色調は失われており、くすんだ灰茶褐色を呈する。一部欠損している上に、 非常に脆く、取り上げ時に砕けている。平面棗形、断面楕円形で、不明瞭だが、おそらく両面穿孔を行っ ている。

軟玉製丸玉(J27)

明緑色で、マーブル状の模様を呈する軟質の玉材である。球形で、天地をわずかに平坦に成形し、片面穿孔を行っている。

土製丸玉 (J28 · J30)

J 28は小型の球形で、ツヤのある黒色を呈する。石製かとも思われたが、穿孔の痕跡が認められず、 一部剥離した面の観察から、土玉と判断される。

J30は球形で黒褐色を呈する。

ガラス丸玉 (J29)

コバルトブルーに白筋が縦に入っており、蜻蛉玉状を呈する。形状はいびつなドーナツ形で、成形時 に縦に伸張した痕跡が認められる。

ガラス小玉 (J19・J20・J31~J95)

長さ1.0~3.7mm、径2.3~4.3mm、重さ0.01未満~0.07gまでの幅がある。平均では長さ2.15mm、径3.40mm、重さ0.035gである。色調は淡い緑~深緑の濃淡があるが、全体に緑色を基調としている。

7 追葬

出土須恵器は田辺編年の T K 209~ T K 217型式のものに限られるので追葬期間は短いが、耳環が10個体出土しているので 4 回以上の追葬があったと推定できる。

8 小結

この古墳は墳丘の残存状態は悪かったが、石室内からは多くの遺物が出土している。玉類の出土量の 多さが特筆できる。また墳丘の下からは竪穴住居が検出されており、これが焼失した後に古墳を築いて いる。竪穴住居が古墳築造のためのキャンプか、もしくは葬送儀礼の中で用いられた施設なのかは判断 が難しい。

9 竪穴住居跡 (図版36・37、写真図版33・34)

9号墳の南側墳丘の断ち割りトレンチで焼土面・炭層を検出し、墳丘の盛土下に住居跡 S H01の存在が判明した。この住居跡が 9号墳成立以前のものであることは明らかだが、時期的に大きくは隔たっておらず、古墳群の築造に関わる遺構と考えられるため、この節で取り扱う。

この住居は焼失して放棄されており、埋土下に東西方向に倒れ込む炭化材と薄い炭層の広がりを検出 した。合掌形に組まれた垂木材と屋根材の炭化物と考えられる。ただし北壁沿いでは短めの炭化材が南 北方向に横倒しになっており、腰壁状のものがあった可能性が考えられる。

住居跡は平面方形で、東西3.0~3.1m、南北3.0~3.4m、深さ0.4mである。床面はトレンチによって東西に分断された形となってしまっているが、北壁面中央に造り付けのカマド、北東隅に土坑を検出した。その他、南壁面西寄りに小ピットが2箇所あるものの、残っている床面上では主柱となるべき柱穴は検出できなかった。

カマドは西半部を失うが、北壁面中央に位置し、焚き口に向かって右側に土坑を備えている。カマドの焚き口から燃焼部に向かっては浅く土坑状に掘り込み、袖部を盛土で馬蹄形に構築する。燃焼部の底には直方形の支脚石が立てられ、8・9層で固定される。9層上面に炭層(7層)が重なるところから、この面が最終段階の使用面であったとみられる。煙道部は燃焼部底からスロープ状に、屋外へ舌状に張り出す。カマド内中層からは土師器片、検出面では板石と土師器杯(170)が出土している。

北西隅の土坑は平面不整円形で、断面ボウル状、径0.5m、深さ0.23mである。

第11節 10号墳

1 立地

丘陵の尾根上にある。最高部で標高122mである。

2 調査前の状況 (図版38)

墳丘の盛り土はほぼ完全に失われており、天井石も残っていなかった。尾根上に側壁の石材が露出している状態であった。

3 墳丘 (図版39・40、写真図版35・40)

尾根の末端部を利用して墳丘が造られている。尾根を周溝によってカットし、その土を斜面側に盛り上げている。墳裾は不明瞭であり、わずかに裾部を削りだしている部分があることにより墳端が認識できる。平面形は円形であり、規模は直径が12.5m、高さは残存値で2mである。墳丘の北側には幅2mの周溝が巡る。

墳丘の西側は大きく削られて平坦面がつくられており、ここから石室まで墓道が続く。また墳丘の南西部には浅い土坑 S X 01があり、ここから完形品の土器が出土している。

4 埋葬施設 (図版41・42・44、写真図版36・39・40)

この古墳の埋葬施設は右片袖の横穴式石室であり、西側に開口する。玄門の外側に框石を置き、玄室 床面が羨道から1段下がる。

規模は玄室長2.8m、玄室幅は奥壁で1.4mであり、高さは残存値で1.3mである。羨道はやや「ハ」の字形にひらき、長さ2.5m、幅が玄門部で1.0mである。

石室は長方形の掘り方に玄室部の基底石と框石を置き、羨道の側壁は玄門に続く1石を除いて掘り方の外に置かれる。側壁は小型の基底石の上に大型の石材を積み重ねて内側に持ち送っている。玄室床面には5cmほどの亜角礫を敷きつめる。玄門外側、框石の周辺に20~30cm大の礫が検出されているが、これが閉塞石の一部だとすると玄門のすぐ外側で閉塞がおこなわれていたことになる。

5 遺物出土状況 (図版43・44、写真図版35・37・38)

遺物は石室内と墳丘上の土坑 S X 01、墳丘西側の平坦面(西側テラス)から出土している。石室内は 攪乱を受けておらず大半の遺物は原位置を保っている。出土位置により A~F 群の 7 つのまとまりに分 けることができる。A 群は玄門の外側、框石の上とその東側にある一群であり、框石の上には須恵器杯 蓋 (184) と同杯身 (192) があり、184の杯蓋の内側には壺蓋 (209) が置かれていた。また刀子 (M122) が須恵器の西側から出土している。框石に接して内側に須恵器杯身 (190・191)、同杯蓋 (176・182)、 同短頸壺 (213)、同無蓋高杯 (205) が出土している。190の杯身には176の杯蓋が被せられていた。

A群の東側には須恵器提瓶 (221) と同短頸壺 (215) があり、これらをB群とする。このB群の横、右側壁沿いには鉄製品が集中しており、鉄鏃 (M131・M135・M138・M142) と鉄刀子 (M124・M126) が出土している。これをC群とする。C群の反対側、左側壁沿いにも鉄製品が集中しており、これをD群とする。この群には、鉄鏃 (M127~M130・M134・M136・M137・M139・M140) と轡 (M120)、須恵器杯身 (189) がある。鉄鏃は鋒がバラバラの方向を向いており、束で副葬されたものではないようである。

D群の東側にも鉄製品が集中する場所があり、これをE群とする。この群には須恵器杯蓋(177)と 鉄鏃($M132 \cdot M133$)と刀子($M121 \cdot M123 \cdot M125$)がある。須恵器杯蓋はD群の須恵器杯身とセットになると思われるので、D群とE群はひとつのグループと考えて良いだろう。

奥壁付近にも遺物が集中している。右側壁寄りにあるものをF群、左側壁寄りにあるものをG群とする。F群は土師器直口壺(226)と須恵器直口壺(207)が並んでいる。G群は最も土器が集中する一群であり、須恵器杯蓋(175・179)、同杯身(185・186)、同無蓋高杯(204)、同短頸壺(211・214)、 趣

(222)、提瓶 (217・218)、鉄鏃 (M141) からなる。また E 群・ F 群付近からは玉類 (碧玉製管玉・水晶製丸玉・ガラス小玉) が出土している。

これらの遺物群はA群、B・D・E群、F・G群の大きく3 グループに分けられる。C群はどのグループに属するかは判断が難しい。土器型式から判断して、F・G群 \rightarrow A群 \rightarrow B・D・E群の順に副葬されたものであろう。F・G群及びA群は、追葬時に壁際に片づけられたものであると考える。

墳丘上の土坑 S X 01には須恵器杯蓋 (228)、杯身 (229)、横瓶 (230)、広口壺 (231)、提瓶 (232)が埋められていた。須恵器は蓋と身が組み合った状態で出土している。広口壺は約半分が欠けたものであったが、他は完形で出土している。また墳丘西側のテラスからもまとまって土器が出土している。出土しているのは全て須恵器であり、杯蓋 (173・174・178・180)、杯身 (187・188・193・194)、高杯蓋 (195・197)、有蓋高杯 (198~203)、高杯 (206)、壺蓋 (210)、壺 (216)、不明 (223)、広口壺 (224)がある。石室内や石室前庭部から出土した破片と接合する個体があるので、これらの土器は追葬時に石室外に掻き出されたものであろう。

6 出土遺物

①石室内出土土器(図版67~69、写真図版74~79)

須恵器

杯蓋 (173~184)

12点を図化しており、法量・器形をもとに3つに分類する。

173・175は天井部が高く、回転ヘラケズリで調整する。口縁部内側は強いナデで、段状に仕上げる。 口径13.95~14.6cm、器高4.3~4.6cmである。184は同様な形態を示すが、外面に凹線状のナデを施した り、口縁端部を外反させたりしているため、別器種の蓋か、椀の可能性もある。

174・176~181は天井部の傾斜がなだらかで、回転ヘラケズリで調整する。口縁部内側は強いナデで、 段状に仕上げる。口径12.65~14.25cm、器高3.65~4.6cmである。

182・183は天井部が低く、回転ヘラケズリは頂部まで達しない。口縁部は内弯気味に収める。口縁端部にはヤスリ状の調整痕が認められ、7号墳の33・34と同じ特徴を示す。口径12.9~13.05cm、器高3.6~3.8cmである。

杯身 (185~194)

10点を図化しており、法量・器形をもとに3つに分類する。

185~187は立ち上がり部がやや内傾し、長さは1.5cm前後である。特に185・186は口径に対する器高の比率が高く、口径11.9~12.2cm、器高4.9~5.3cmである。187は口径13.4cm、器高4.15cmである。口縁端部は丸く収め、底部は回転ヘラケズリで調整する。

 $188\sim192$ は立ち上がり部の長さが 1 cm前後で、内傾の度合いが強まる。口径 $12.5\sim13.2$ cm、器高 $3.85\sim4.3$ cmで、底部は回転ヘラケズリで調整する。

193・194は立ち上がり部がさらに短く、1 cm未満である。口径12.0~12.4cm、器高3.6~4.15cmで、底部の回転へラケズリは中心まで達しない。

高杯蓋 (195~197)

口縁部は内弯気味に立ち上がり、天井部との境界は不明瞭である。頂部に扁平なつまみを付ける。口 縁端部は丸く収め、天井部は回転ヘラケズリで調整する。

有蓋高杯(198~203)

203は口縁部を欠失するが、杯身に低平な脚部を付けた同一型式の有蓋高杯で、蓋とともに西側テラスから出土している。杯部の形態は188~192と共通しており、立ち上がり部の長さが1cm前後である。脚部には透かしがなく、裾部で外側へ強く開き、端部に面をとる。

無蓋高杯 (204~206)

204は小型の高杯で、口縁端部の内側を強くナデて、わずかに外屈させる。脚部の裾近くに円形透かしを3方向に穿ち、裾部を屈曲させて収める。

205・206は脚部が長脚2段透かしで、脚部中央を2条の凹線で区切って、上下に長方形透かしを3方向に穿つ。杯部は口縁立ち上がりの基部に凹線を入れて、屈曲させる。特に206は杯部側面に2条の凹線、底面には2条の圏線の外側にキザミメを放射状に施す。

直口壺 (207)

肩のやや張った体部から、口頸部が開き気味に立ち上がり、端部を丸く収める。体部下半は回転へラケズリで調整する。

壺蓋 (208~210)

208は長頸壺などとセットになるとみられるが、該当する個体は認められない。笠形の蓋で、内面にかえり部が垂下する。天井部には櫛状工具によるキザミメを、連続的に施文する。

209・210は短頸壺の蓋であるが、セットとなる個体は特定できない。209は口縁部がわずかに外反し、端部に内傾する面をとる。210は内弯気味の口縁部から、端部を平たく収める。天井部は回転ヘラケズリで調整して頂部を平坦に成形し、「×」のヘラ記号を施す。

短頸壺 (211~215)

肩の張った扁平な体部から、口頸部が短く直立し、体部下半は回転ヘラケズリで調整する。211・213・215は色調の変化や自然釉のかぶり方から、焼成時には蓋とセットであったことが判る。211は口頸部がやや内傾し、肩部に2条の凹線を施す。212・214・215は体部上半にカキメを施す。213の体部は扁平の度合いが強く、肩部に1条の凹線を施す。

壺 (216)

口縁部を欠失するが、頸部がわずかに直立する。体部は倒卵形で、肩部がやや強く張り、底部は丸底 気味である。肩部には、図化するにはいたらないが、ハケメ状の原体で調整した痕跡が残る。体部外面 に 2 条の凹線を施し、下面は回転ヘラケズリで調整する。

提瓶 (217~221)

体部の直径が14~16cmの中型品(217~219)と、12cmの小型品(220)、19cmの大型品(221)がある。 217は口縁部が緩やかに開いて端部を玉縁状に収め、肩部に環状の把手をもつ。体部の平面側は回転 ヘラケズリ、凸面側はカキメで仕上げる。

218・219は肩部に角状の把手をもち、体部の両面をカキメで仕上げる。218は口縁部が緩やかに開いて外側に面をとる。

220は口縁部が緩やかに開いて端部の内側に匙面をとり、肩部に半円形の突起状の把手をもつ。体部は回転へラケズリの後、ナデ消されている。

221は口縁部が緩やかに開いて端部が肥厚し、肩部に円形浮文を貼り付ける。体部は両面を回転へラケズリで調整する。

腺(222)

扁球形の体部から頸部が大きく開き、さらに口縁部が段をもって開く。体部中程に2条の凹線と櫛描のキザミメを施文し、注ぎ口を穿孔する。体部下半は回転へラケズリで調整する。口頸部には櫛描波状文と凹線を3段に施す。

不明 (223)

不整形な円盤から鋭角に折れ曲がる破片で、器形・天地など不明である。外面にハケメの痕跡があり、 接合面から外れた断片かとも思われたが、自然釉をかぶっているところもあり、適当な説明ができない。 内面にはユビオサエの痕跡も残る。

広口壺 (224)

丸みを帯びた肩部から口頸部が緩やかに開き、端部の外側を丸く肥厚させる。頸部から体部にかけての外面はカキメで仕上げる。

甕 (225)

口頸部が大きく開き、端部の外側を四角く肥厚させる。体部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキ で成形し、口頸部は回転ナデで仕上げる。

土師器

直口壺 (226)

扁球形の体部から口頸部が直線的に開き、端部を丸く収める。調整は摩滅のため不明である。

甕 (227)

口縁部が短く外反する小型の甕で、下半部を欠失する。体部外面は縦方向、内面は横方向の粗いハケメで調整する。

②土坑SX01出土土器(図版69、写真図版79・80)

須恵器

杯蓋 (228)

口縁部と天井の境界は不明瞭で、口縁部の内側に沈線状の段を設ける。口径13.3cm、器高4.05cmで、 天井部は回転ヘラケズリで調整する。

杯身 (229)

立ち上がり部は内傾し、長さが 1 cm前後である。口径12.7cm、器高4.2cmで、底部は回転ヘラケズリで調整する。

横瓶 (230)

俵形の体部の両端の内、製作時の底面側は回転へラケズリで調整し、中程はタタキの上からカキメを 粗く施す。体部の円盤充填側は入念なカキメで仕上げ、その次の工程で口を設ける。口頸部は小さく開 き、端部に外頸する面をとる。

広口壺 (231)

上半に最大径のある球形の体部から頸部が直線的に開き、口縁端部を玉縁状に肥厚させる。体部外面 は平行タタキの上からカキメを施し、内面には同心円タタキが残る。

提瓶 (232)

体部の直径15cmの中型品で、口縁部が緩やかに開いて外側に面をとる。肩部に角状の把手をもち、体部の平面側を回転へラケズリで調整し、凸面側の調整はナデ消す。

③石室内出土鉄器(図版84~86、写真図版93~95)

馬具

轡 (M120)

瓢形素環鏡板付轡である。鉄棒の環を瓢状にくびれさせ、大きい方を鏡板、小さい方の環を立聞としている。銜と引手はそれぞれが鏡板と直接つながる。引手は長さ16cmを測り、一方が鍛接して環状になっているが、もう一方は細くなっていく端部をコイル状に巻き付け環状にしている。銜は左右で長さが異なり、6.4cmのものと10.7cmのものが結合されている。短い方の銜は一方の端部は鍛接して環状になっているが、もう一方は端部を1回巻き付けただけの形状である。長い方の銜は、両端とも2回ずつコイル状に巻き付けて環状にしている。

工具

刀子 (M121~M126)

M121は現存長17.2cm+4.9cm。刀身幅1.6cm、厚0.4cmで両関。反りはない。茎は一部欠損のため、現存長0.8+4.9cm。茎幅0.8cm、厚0.4cmで栗尻。柄木が残存する。

M122は鋒と茎尻欠損のため、現存長18.5cm、刀身幅1.68cm、厚0.3cmで両関。反りはない。茎は現存 長4.8cm。茎幅0.72cm、厚0.2cm。柄木が残存する。

M123は刀身の一部がひずむため、現存長15.5cm、刀身幅1.6cm、厚0.4cm。両関。反りはない。茎は全長5.8cm、幅0.8cm、厚0.3cmで栗尻。刀身・茎ともに関付近に木質が残る。

M124は茎尻欠損のため、現存長11.35cm。刀身幅1.4cm、厚0.3cmで両関。茎は現存長2.4cm、茎幅0.4 cm、厚0.2cm。木質残存。M51と同じく、茎が非常に薄い。

M125は刀身のみで、現存長9.57cm。研ぎ減りのため、刀身幅1.6cm、厚0.3cm。反りはない。

M126は完形で全長9.7cm、刀身幅1.0cm、厚0.3cm。反りはない。関は不明瞭であるが、鉄製の柄縁装具がつくため、両関であろう。装具は刃側の端部を欠損するが、銀杏形で全長1.0cm、幅1.9cm、厚0.2cm。茎は全長4.2cm、茎幅0.8cm、厚0.1cmで栗尻。木質の上に巻痕がある。

器缸

鉄鏃 (M127~M142)

石室からの出土で、「圭頭鏃群(M127)」「三角形鏃群(M128・M129)」「腸抉三角形鏃群(M130~M135・M137~M139)」「三角形鏃群(M136・M140~M141)」「長頸鏃群(M142)」の5つに分類する。 圭頭鏃群(M127)

鏃身上部が圭頭を呈し、圭頭鏃群のB形式、第2型式に属する。完形で、全長15.88cmを測る。鏃身部は三角形状の切先から、側縁が下すぼまりとなり、わずかな突起状の関部を経て頸部に移行する。鏃身部の断面は平造で、頸部の断面は長方形である。鏃身部の長さ5.1cm、最大幅3.39cm、厚さ0.6cmを測る。頸部関部は角関である。茎部は先細りし、断面は方形である。

三角形鏃群 (M128 · M129)

三角形鏃群の中でも、大型の鏃身部と撥形の頸部をもつ一群である。

M128は完形で、全長15.0cm。M129は切先を欠き、現存長13.1cmである。鏃身部は柳葉形を呈し、断面はM128が平造、M129が片切刃造とみられる。鏃身関部は撫関である。M128の鏃身部の長さ6.5cm、最大幅3.2cm、中位の厚さ0.45cmを測る。頸部は下すぼまりで、断面は長方形を呈する。頸部関部はM128が無関、M129が角関である。茎部は先細りし、断面は方形である。

腸抉三角形鏃群 (M130~M135・M137~M139)

鏃身部に逆刺を有する。鏃身部の形状によって、4タイプに分けられる。

M130は鏃身部の長さが10cm近い大型品であるが、茎部を欠損しており、現存長は11.3cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は平造である。鏃身部の逆刺は、抉りが極めて深く、外反度は大きい。鏃身部の現存長9.4cm、中位の最大幅3.65cm、厚さ0.45cmを測る。頸部は短くて太く、直線状で、断面は長方形を呈し、幅は1.0cmである。頸部関部は角関である。

M131~M134は鏃身部の長さが 6~7 cm、幅が 3 cm余り。鏃身の刃部が鈍角で、逆刺が大きく開く。 M131はほぼ完形で、全長13.79cm。M132~M134は切先・頸部が欠けており、現存長はM132が9.85cm、M133が9.9cm、M134が8.75cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は平造とみられる。鏃身部の逆刺は抉りが極めて深く、角度も広く、外反度は大きい。M131は鏃身部の現存長6.5cm、最大幅3.08cm、厚さ0.32cm、同様に、M132は6.85cm、3.7cm、0.65cm、M133は6.65cm、3.0cm、0.3cm、M134は5.5cm、3.45cm、0.3cmを測る。頸部は短くて太く、下端がやや広がり、頸部関部は台形関となる。頸部の断面は長方形を呈し、幅は0.7cm~0.9cm。茎部は先細りで、断面は円形である。M131の茎部には木質が遺存する。

M135は鏃身部のサイズは前者と同じだが、鏃身の刃部が鋭角で、逆刺の抉りが浅い。茎部の末端を欠き、現存長11.45cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面形は平造である。逆刺は抉りが浅い。鏃身部の長さ6.2cm、最大幅3.0cm、厚さ0.3cmを測る。頸部は短くて太く、下端がやや広がり、頸部関部は台形関となる。頸部の断面は長方形を呈し、幅は0.8cm。茎部は短く、断面は方形である。

M137~M139は、鏃身部がさらに細身のものである。茎部末端を欠損し、現存長はM137が12.0cm、M138が11.45cm、M139が11.3cmである。鏃身部の外形は長三角形を呈し、断面は平造とみられる。 逆刺の外反度は小さいが、鋭利な印象である。M137は鏃身部の長さ6.4cm、最大幅2.2cm、厚さ0.35cm、同様にM138は6.65cm、2.5cm、0.6cm、M139は5.3cm、2.2cm、0.25cmを測る。頸部は短くて太く、直線状である。断面は長方形を呈し、幅は0.7~1.0cm。頸部関部はM137・M138が棘状関、M139が角関である。茎部は先細りで、断面は円形である。M137・M139には、茎部に木質が残る。

三角形鏃群 (M136 · M140~M141)

三角形鏃群の中でも、中型の鏃身部と直線的な頸部をもつ一群である。

M136は切先と茎部末端を欠き、全長11.7cmである。鏃身部は三角形を呈し、断面は平造とみられる。 鏃身関部は角関である。鏃身部の長さ6.05cm、最大幅4.1cm、中位の厚さ0.4cmを測る。頸部は短く直線 状で、断面は長方形を呈する。関部は棘状関である。茎部の断面は円形である。頸部に有機質状の付着 物が認められ、茎部以下には矢柄に巻きつけた繊維が残存する。

M140は茎部末端を欠き、現存長9.2cm、M141は鏃身部上半と茎部末端を欠き、現存長8.4cmである。 鏃身部はどちらも長三角形とみられ、断面は平造である。鏃身関部は角関である。M140の鏃身部の長 さ5.1cm、最大幅2.4cm、中位の厚さ0.35cmを測る。頸部は短くて太く、断面は長方形を呈する。関部は 台形関である。茎部の断面は円形で、関部以下に木質が残る。

長頸鏃群 (M142)

長頸鏃群の長三角形鏃に属する。頸部の途中を欠失していて直接接合しないが、同一個体と考えられる。鏃身部側の現存長は7.9cm、茎部側は6.05cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面は平造である。鏃身関部は角関である。鏃身部の長さ2.45cm、最大幅1.0cm、先端付近の厚さ0.35cmを測る。頸

部は長く、直線状で、断面は長方形を呈する。関部は棘状関である。茎部は長く、先細りし、断面は円形である。茎部中位に木質が付着する。

④石室内出土玉類(図版93、巻頭図版6~8)

碧玉製管玉が7点(J96~J102)、水晶製勾玉が1点(J103)、水晶製切子玉が1点(J104)、水晶製丸玉が1点(J105)、ガラス小玉が4点(J106~J109)ある。

碧玉製管玉 (J96~J102)

編状の地紋をもつ淡緑色の製品 5 点(J96・J97・J100~J102)と光沢のある濃緑色を呈する製品 2 点(J98・J99)に分かれる。分析鑑定(第6章 第1節)の結果、J97は島根県花仙山産の石材と 判断された。片面穿孔を行い、孔の出口側が欠けたものについては臼状に整形する(巻頭図版 6)。ただしJ102のみは反対側からの穿孔の痕跡が認められる。大きさは濃緑色のJ98・J99が長さ26.0~26.5 mm、径9.0mm と揃っているのに対し、淡緑色のJ96・J97・J100~J102は長さ21.0~33.5mm、径7.5~11.5mmまで、長さ・径ともばらつきが大きい。

水晶製勾玉 (J 103)

C字形のプロポーションの頭部側に片面穿孔を行い、尾部側はやや先細りとなる。頭部の断面は扁円形、中央は三方に稜をもつ不整円形である。

水晶製切子玉(J104)

半透明の水晶製で、整った六角形にカットを行い、片面穿孔を行う。

水晶製丸玉(J 105)

半透明の水晶製で、扁球形に成形し、片面穿孔を行う。穿孔時に、孔の出口側が大きく欠けている。 ガラス小玉(J106~J109)

大きさは J 106・ J 107が長さ3.0~3.2mm、径3.5~4.0mm、 J 108・ J 109が長さ3.8~5.0mm、径5.8~6.0mmと大小に分けられる。色調は淡い青~青緑~深緑の濃淡がある。

7 追葬

玄門付近の土器群と奥壁付近の土器群の間に型式差が認められることから、2回以上の追葬があったことが推定できる。

8 小結

この古墳は火山古墳群の中では最も古い横穴式石室墳であり、導入期の横穴式石室の特徴をよく示している。また墳丘上の土坑 S X 01 は、古墳祭祀に関連するものであろう。

第12節 11号墳

1 立地

8号墳の北側に隣接して築かれている。最高部で標高112mである。

2 調査前の状況 (図版45)

天井石の一部が露出していたのみで、墳丘は後世の盛土によって完全に埋没していた。天井石は奥壁上に乗る1枚を除いて失われており、石室内には多量の土砂が流入していた。

3 墳丘(図版45、写真図版41·43)

墳丘は盛土上部が失われているため築造時の高さはとどめていないが、平面形は円形であり、直径5.2 m、高さは1 mである。斜面を削り平坦地を造成してからさらに石室掘り方を掘削し、そこに基底石を据える。その後に背後の斜面をさらに削って盛り土を行い墳丘を構築する。墳丘の南西側から北東側にかけて幅1 mほどの周溝が巡る。

4 埋葬施設 (図版46、写真図版42·43)

この古墳の埋葬施設は無袖の横穴式石室である。石室の主軸は8号墳とほぼ平行しており、方位は南東一北西方向で、南東側に開口する。全長3.5m、幅0.9m、高さ1.0mの極めて小型の石室である。基底石にやや大型の石材を使い、側壁・奥壁ともに3段に石材を積む。天井は3~4枚であったと推定する。閉塞石が残っていなかったため、閉塞位置は不明である。床面には薄く粘土が敷かれていたが、敷石等は認められなかった。

5 遺物出土状況

石室内から須恵器蓋が1点(233)と前庭部から須恵器甕の破片が数点出土したのみである。いずれの遺物も原位置を失っている。

6 出土遺物

須恵器 (図版69、写真図版80)

蓋(233)

頂部は回転へラ切り後、不調整で、いびつな天井部から屈曲して口縁部が直立する。蓋か身か判断の難しい器形だが、身ならば底が不安定な点や、天井部に沈線様の施文がある点、外面に自然釉があることなどから、杯以外の蓋の可能性も考えておく。

7 追葬

出土遺物が少ないため、遺物の時期幅から追葬の有無を判断することはできない。

8 小結

この古墳は火山古墳群の中で最も新しく、石室の小型化が著しい。規模から考えて、単葬墓であろう。

第13節 12号墳

1 立地

丘陵の最高部、火山城跡の第2郭上にあり、標高は159mである。

2 調査前の状況 (図版47)

山城に伴う造成のため広い平坦面になっており、墳丘は全く認識できなかった。

3 墳丘 (図版48)

墳形は直径約7m程度の円墳であったと考えられるが、山城の造成によって盛土と西側の斜面が大きく削平されている。墳丘は全く残っておらず南側で周溝の痕跡とみられる凹みが埋め立てられているのを検出したのみである。

4 埋葬施設 (図版49、写真図版44)

埋葬施設は尾根線の西側に偏った所で、尾根線と平行方向に検出した。しかし、ほとんど底近くまで削平されている上、平安時代の土坑2基にも切られているため0.9×2.8mほどの墓壙の痕跡が判明したのみである。

5 遺物出土状況

この古墳から遺物は出土しなかった。

6 小結

後世の攪乱が激しいため、古墳の詳細は知り得なかった。

第14節 13号墳

1 立地

丘陵の最高部、火山城跡の第1郭上にあり、標高は最高部で160mである。

2 調査前の状況 (図版47)

マウンド状に盛り上がっていたが、後世の改変も観察されたため、古墳もしくは山城の曲輪の存在が 予想された。

3 墳丘(図版48、写真図版45)

もともとは円墳であったと考えられるが、山城の造成に伴って墳丘が削平を受け、特に東・西側は直線的にカットされているため、現状ではやや方形に近くなっている。削平の痕跡からみると、古墳の直径は12m程度に復元できる。

4 埋葬施設 (図版50、写真図版45·46)

埋葬施設は墳丘のやや南側に偏った所で、尾根線と直交方向に検出した。埋葬施設は3.6m×1mの墓壙に、幅0.7m、長さ3.2mの割竹形木棺を納める。

5 遺物出土状況(図版50、写真図版46)

棺内には鉄剣(M143)・鉄鏃(M144~M169)・不明鉄製品(M170)・勾玉(J110)・ガラス小玉(J111~J186)が副葬されている。鉄鏃は棺の西小口側に束で納められており、棺の中央西寄りの北側には鋒を西に向けて鉄剣が納められている。勾玉は剣の把のすぐそばから出土しており、ガラス小玉は棺中央よりも東寄りで集中して出土している。不明鉄製品はガラス小玉よりもさらに東小口側から出土している。

副葬品の出土位置から被葬者は頭位を東に向け、胸のあたりにガラス小玉を置き、鉄剣・鉄鏃の切先を足下に向けていたことが窺える。

6 出土遺物

①出土鉄器(図版87~89、写真図版96·97)

武器

蛇行剣 (M143)

鋒と茎尻を欠損するため、現存長71.9cm、身幅2.8cm、厚0.6cm。刀身に木質が残る。不均等両関で屈曲は3回。茎は先細り式で、現存長10.2cm、茎幅1.6cm、厚0.2cm。直径0.4cmの目釘孔が2個ある。直径0.1cmほどの柄巻の痕跡が茎尻の現存端から2.0cm残る。片側に一回のみ突出部を造り出して3曲し、基部および鋒が直立するCタイプにあたる(北山1999)。

鉄鏃 (M144~M169)

埋葬施設から東の状態で出土し、本来は約30本副葬されていたとみられるが、遺存状況が悪く、残欠を含めて26本を図化した。すべて長頸鏃群に含まれるもので、鏃身部の形状から「三角形鏃(M144)」「長三角形鏃(M145~M146・M148~M158・M160~M163)」「片刃鏃(M147・M159)」「型式不明(M164~M169)」に分けられる。

三角形鏃 (M144)

M144は頸部の中位以下を欠失し、現存長6.23cmである。鏃身部の形状は銹化が進んで不明確だが、外形は三角形で、ほとんど開かない逆刺をもつ。頸部は細く、直線状で、断面は長方形を呈する。 長三角形鏃(M145~M146・M148~M158・M160~M163)

M145は鏃身部から頸部関部までの長さが14cm弱に復元でき、図化した中では最も長い。鏃身部の先端が折れ曲がっている他、茎部の下半を欠失し、現存長は15.7cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面は平造である。鏃身関部は角関である。鏃身部の本来の長さは約3cm、中位の幅1.5cm、厚さ0.35cmを測る。頸部は太めで長く、やや裾広がりになる。断面は長方形を呈し、幅は0.6~0.9cmを測る。頸部関部は角関である。茎部は先細りし、断面は方形を呈する。関部以下には木質・樹皮が残る。

M146は鏃身部から頸部関部までの長さが10.5cm程度に復元でき、図化した中では最も短い。切先を欠く他は茎部の先端まで遺存し、現存長は14.8cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面は平造である。鏃身関部は角関である。鏃身部の長さは2.1cm、中位の幅1.15cm、厚さ0.3cmを測る。頸部は細長く、直線状である。断面は長方形を呈し、幅は0.5cmである。頸部関部は棘状関である。茎部は円形断面で、細長く、先端は細くなる。

M148~M155は鏃身部から頸部関部までの長さが12.0~12.5cmの一群である。

M148~M151は関部まで含めた鏃身部の長さが4cm前後となる。鏃身部のみの断片では、他にM163

がある。M148は完形で全長16.0cm、M149~M151は茎部末端を欠き、現存長はM149が15.85cm、M150が14.83cm、M151が13.55cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面はM148・M149が平造、M150・M151が片丸造である。鏃身関部の形はあまりはっきりせず、刃部から関部へは緩やかに移行する。M148は鏃身部の長さ3.7cm、中位の幅1.1cm、厚さ0.3cm、同様にM149は3.6cm、1.1cm、0.3cm、M151は3.8cm、1.1cm、0.35cm、M163は4.2cm、1.2cm、0.7cmを測る。頸部は細く直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部は角関である。茎部は先細りし、断面はM148・M149が円形で、M150・M151が方形を呈する。M148・M149の関部以下には木質・樹皮と、巻き付けられた繊維の痕跡が残る。

M152~M155は関部まで含めた鏃身部の長さが3cm前後となる。鏃身部のみの断片では、他にM162がある。M152~M155は茎部末端を欠き、現存長はM152が14.45cm、M153が15.3cm、M154が13.82cm、M155が13.8cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面はM152~M154が片丸造、M155が両丸造である。鏃身関部の形はM152が撫関の他はあまりはっきりせず、刃部から関部へは緩やかに移行する。M152は鏃身部の長さ3.0cm、中位の幅1.0cm、厚さ0.3cmを測る。同様にM153は3.2cm、1.15cm、0.3cm、M154は現存長3.0cm、0.9cm、0.25cm、M155は現存長2.4cm、0.9cm、0.3cm、M162は3.3cm、1.0cm、0.35cmを測る。頸部は細く直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部はM152・M153が無関、M154・M155が撫関である。茎部は先細りし、断面はM148・M149が円形で、M150・M151が方形を呈する。M148・M149の関部以下には木質・樹皮と、巻き付けられた繊維の痕跡が残る。

M156~M158・M160・M161は鏃身部の残りが悪いが、頸部関部までの長さが10~11cm程度に復元できる一群である。M156が最も遺存状況がよく、現存長14.1cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面はM156・M157・M161が片丸造、M158が平造、M160が両丸造である。鏃身関部の形はあまりはっきりせず、刃部から関部へは緩やかに移行する。頸部は細く直線状で、断面は長方形を呈する。頸部関部はM156・M157・M161が角関、M158・M160が無関である。茎部は先細りし、断面は長方形・もしくは方形である。M156・M157・M161の関部以下には木質・樹皮が残る。

片刃鏃 (M147·M159)

M147は鏃身部から頸部関部までの長さが約13cmに復元できる。茎部の下半を欠き、現存長は15.7cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面は片刃造である。鏃身関部は撫関である。関部まで含めた鏃身部の長さは3.2cm、中位の幅0.95cm、厚さ0.35cmを測る。頸部は細長く、直線状である。断面は長方形を呈し、幅は0.5~0.6cmを測る。頸部関部は角関である。茎部は先細りし、断面は方形を呈する。関部以下には木質が残る。

M159は鏃身部から頸部関部までの長さが10cm程度に復元できる。鏃身部先端と茎部の下半を欠き、現存長は11.61cmである。鏃身部の外形は柳葉形を呈し、断面は両丸造である。鏃身関部は撫関である。頸部は細長く、直線状である。断面は長方形を呈し、幅は0.6cmを測る。頸部関部は無関である。茎部の断面は方形を呈し、関部以下に木質が残る。

型式不明(M164~M169)

頸部から茎部にかけての断片で、鏃身部が残っていないため型式不明としたものである。

頸部関部はM164・M166・M168・M169が角関、M165・M167が撫関である。M165・M167の関部以下には、木質・樹皮巻がよく残っている。

その他の金属器

不明鉄製品 (M170)

第3章 火山古墳群

断面方形の鉄棒の一方を斜めに曲げており、こちらを仮に頭部とする。他方の先端は厚みを減らして楔状にする。幅は両端で大きく変化しない。各所に断片的ではあるが木質が残存する。全長12.9cm、幅1.0 cm、厚 $0.4\sim0.8$ cm。用途は不明である。

②出土玉類(図版94、巻頭図版7)

瑪瑙製勾玉が1点(J110)、ガラス小玉が76点(J111~J186)ある。

瑪瑙製勾玉 (J 110)

白~茶褐色の斑状となる瑪瑙製で、片面穿孔を行う。 C 字形のプロポーションの頭部側やや背面寄り に片面穿孔を行い、尾部側はやや先細りとなる。頭部の断面は隅丸長方形、中央は不整円形である。 ガラス小玉 (J 111~ J 186)

最も大きい J 122が長さ4.5 mm、径6.0 mm、重さ0.24 g、次に大きい J 172が長さ3.0 mm、径4.2 mm、重さ0.07 g で抜きん出ている。それ以外は長さ1.2~3.0 cm、径2.0~3.75 mm、重さ0.01未満~0.04 g までの範囲に収まり、74点の平均では長さ1.91 mm、径2.68 mm、重さ0.015 g の小粒品である。色調は淡い緑~青緑~群青の系統がある。

7 小結

この古墳の時期は、副葬品のセットなどからみて6世紀前半のものであり、木棺直葬墳の中では後出のものである。

第4章 火山城跡

第1節 立地

火山 $1 \sim 6 \cdot 10$ 号墳が連なる尾根から南西側に延びる尾根線を、一気に登り詰めた山頂部を中心に城跡の遺構は存在する。最高点の標高は約160mで、麓の水田面との比高差は約60m、10号墳からでも約38mある。城跡として認識できる遺構が設けられるのは、尾根筋沿いに南北55m、東西斜面方向20m程度の限られた範囲で、尾根自体はさらに鞍部を介して南方へ上がってゆくが、確認調査の結果では、遺構は続いていない。なお最高点から南東方向へは別の尾根が伸びて、先端にも51つのピークを作っているが、そちらは岩山となっており、遺構は認められなかった。

山頂部からのロケーションは、黒井川沿いの平野部を見下ろし、東方は盆地の中央部を、西方は朝日 方面を望む。ただし朝日城跡を直接目にすることはできない。尾根の先端方向は、約2km 北側の黒井 城跡の石垣を正面にしている。

第2節 山城の遺構(図版51~53、写真図版47~52)

城跡に関する遺構は、山頂部最高点から北側尾根線にかけて直線的に並ぶ曲輪群(第 $1\sim5$ 郭)と、西側斜面の帯曲輪および斜面の各所に設けられた平坦地などである。

曲輪は山頂部南側の最高点を第1郭とし、その北側の平坦面を第2郭とする。さらに北へ下る尾根線に連続的に整形された階段状の曲輪群を $3\sim5$ 郭とする。第1郭より南側の鞍部に面しては、平坦地7や通路状の掘り込みがある程度で、尾根線を明確に切断するような遺構は認められない。

西斜面側では平坦地 $1 \cdot 5$ とそれをつなぐ帯曲輪を設け、東斜面側の各所には平坦地 $2 \sim 3 \cdot 6$ が存在する。

1 第1郭(図版48・52、写真図版53)

山頂部南半部の最高点に位置する13号墳の墳丘を利用しているため、マウンド状の高まりとなっている。形状は南北に長い楕円形を呈し、規模は上端で9.2×7.2m、下端で10.6×7.8m、第2郭側との比高差約1m、最高点の標高160.2m(以下、断りの無い限り、曲輪・平坦地の標高は床面中央付近の数値を記す)である。曲輪の上面は緩やかな円丘状で、あまり広い平坦面は得られず、城に伴う個別の遺構も存在しない。もともと古墳の墳丘がほとんど地山削り出しであったため、盛土は認められない。上面平坦面の面積は約50㎡である。

曲輪の東西両側面は、古墳の墳丘を削り込んで幅1m程の犬走り状の通路にしており、裾部には部分的に壁溝を設ける。西側通路は南へ鉢巻状に回り込んで第1郭に上がる。東側通路は平坦地4を経て、南尾根線側へ下りて行くが、南斜面付近から通路は判然としなくなる。

南尾根線側は通路下の斜面をカットし、東西両斜面から溝状に掘り込みを入れ、中央の尾根線のみを幅約1mの通路状に掘り残す。溝状掘り込みは幅1.5~2m、深さ20~50cm程度の皿状で、竪堀と言え

るようなものではない。

2 第2郭(図版48・52、写真図版53)

山頂部の北半部には本来12号墳が存在したが、ほぼ地山まで削平・整地して、城跡の中で最も広い平 坦面を確保している。第1郭寄りの東西斜面側は不整形に凹んでいて、薄く盛土することで平坦化され ていた。この凹みが古墳周溝の名残りか、自然地形を反映したものであったかは判然としなかった。曲 輪の形状は尾根の先端に向かって次第に細くなる細長い台形で、規模は南北長11.2m、東西幅が南端で 9.0m、中央で6.6m、北端で3.6m、平坦面の面積約60㎡、標高159.0mである。

第2郭からは曲輪の南端で第1郭東西の通路に接続し、南尾根線側に連絡する。東側斜面は心もち切岸状にカットされ、その下に平坦地3を作る。

3 第3郭(図版52、写真図版53)

第2郭の先端からおよそ0.6mの比高差をもって、平面台形の形状に整形される。裾部には壁溝をもつ。規模は南北長2.0m、東西幅が基部で3.6m、先端で1.6m、平坦面の面積約4㎡、標高157.7mである。

4 第 4 郭 (図版52、写真図版53)

第3郭の先端から約1mの比高差をもって、平面不整三角形の形状に整形される。裾部には壁溝をもつ。規模は南北長3.0m、基部の東西幅が4.8m、平坦面の面積約7㎡、標高156.5mである。

5 第5郭(図版52、写真図版53)

第4郭の先端から約1 mの比高差をもって、平面不整方形の形状に整形される。裾部には壁溝をもつ。 規模は南北長3.8m、東西幅が基部で5.2m、先端で3.4m、平坦面の面積約12㎡、標高155.3mである。

第5郭より下方は急傾斜で痩せ尾根となり、遺構は認められない。東側斜面には同じ等高線沿いに、 平坦地2がある。なお西側斜面の帯曲輪とはなお約1mの比高差があるため、容易に連絡できる関係で はない。

6 帯曲輪 (図版52·55、写真図版54)

西側斜面には南尾根鞍部に取り付く帯曲輪が設けられる。帯曲輪の両端には平坦地1・5が設けられており、通路部分の延長26m、平坦地部分も含んだ延長38mである。標高は北端が154.8m、南端が156.4mで、両端では1.6mほどの比高差があり、先端に向かって低くなる。先端にある平坦地1の先は急斜面となって、行き止まりである。第2郭および第1郭の西側通路とは、約3mの比高差がある。

曲輪は斜面の山側をカットした土を谷側に盛り出して、幅 $1 \sim 2$ mの通路を造成している。また第 1 郭南側の溝状掘り込みの下辺りに、山側斜面を抉った拡張部をしつらえている。規模は延長5.5m、幅は上端から 3 m、平坦部で2.5m、平坦面の面積約12m、標高156.3m。床面南寄りで焼土面を 1 箇所検出した。拡張部より北側の通路部分には壁溝が付く。

7 平坦地 1 (図版55、写真図版54)

帯曲輪の北端に位置する。平面長方形に整形され、北端は一部崩れている。規模は延長6.2m、幅は上端から2.7m、平坦部で2.4m、平坦面の面積約12㎡、標高154.5m。床面は帯曲輪の通路部分から一段低くなり、北寄りで焼土面を2箇所検出した。裾部にはコの字形に壁溝がめぐる。床面の外側は盛土されている。

8 平坦地 2 (図版54、写真図版55)

東側斜面の北端、第4郭の東に位置する。平面長方形に整形され、裾部にはL字形に壁溝がめぐる。 規模は延長6.0m、幅2.0m、平坦面の面積約7㎡、標高155.2m。床面は全て地山削り出しである。

9 平坦地3 (図版52、写真図版55)

東側斜面の中央、第2郭の東に位置する。第2郭の東縁は弧状にカットされ、犬走り状のスロープとなっている。さらにその南半部は一段低く弓形に整形されている。規模は延長8.2m、幅は上端から3.1m、平坦部で2.0m、平坦面の面積約8㎡、標高157.3m。

10 平坦地 4 (図版54、写真図版55)

第1郭東側通路の北端に位置し、通路からは一段低くなる。平面長方形に整形され、裾部にはコの字形に壁溝がめぐる。規模は延長3.3m、幅1.5m、平坦面の面積約3㎡、標高158.7m。床面は全て地山削り出しである。

11 平坦地 5 (図版56、写真図版54)

帯曲輪の南端に位置する。平面長方形に整形される。規模は延長5.4m、幅は上端から2.7m、平坦部で2.0m、平坦面の面積約9㎡、標高156.6m。床面のレベルは帯曲輪の通路部分と変わりなく、裾部に逆L字形の壁溝がめぐる。床面の外側は盛土されている。

12 平坦地 6 (図版52、写真図版55)

東側斜面の南端、第1郭から南東方向に延びる尾根線上に位置する。ただし遺構の形状としては不明確で、延長約8m、幅約1mの範囲が段状に整形されている。

13 平坦地 7 (図版56、写真図版53)

他の平坦地が斜面に位置するのに対し、第1郭南側の尾根線上に占地する。平面台形に整形され、裾部に壁溝をもつ。規模は南北長2.4m、東西幅が基部で3.9m、先端で1.5m、平坦面の面積約5㎡、標高157.9mである。床面は全て地山削り出しである。

14 通路状掘り込み (図版56、写真図版53)

南側尾根線鞍部の、最も低い部分を幅約2m、深さ30cmほどの溝状に切っている。断面形状は皿形で、 防御的な意識は薄いものとみなされる。調査前に東側谷部から上ってきた山道がここに取り付くところ から、通路に伴う切り通しの可能性があり、その時期も不明である。

15 盛十遺構(図版56、写真図版50)

今回の調査範囲外ではあるが、第1郭から南東方向に延びる尾根の鞍部において盛土遺構を発見した。 このルートは8号墳の谷から尾根越しに上記の山道へ合流する地点にあたり、鞍部への盛土によってルートを閉鎖し、目隠しのようにもなっている。

盛土は幅約 $7 \,\mathrm{m}$ 、高さ $1.4 \,\mathrm{m}$ あり、旧表土の上に大きく $2 \,\mathrm{\mu}$ 位の工程で築かれている。出土遺物はなく、時期も不明である。

第3節 出土遺物

①出土土器(図版70、写真図版81)

土師器

小皿 (238)

手捏ね成形で、丸みを帯びた底部から口縁部が開く。摩滅のため調整は不明である。内面に油煙状の 煤が付着していた痕跡も認められるが、それもほとんど剥落してしまっている。

瓦質土器

鍋(246)

口縁部のみの破片で、鉢状に開く体部から口縁部が外屈する。頸部外面には凹線状の強いユビナデを施す。

土師器

擂鉢 (247)

口縁部・底部とも欠失した体部のみの破片で、磨滅が著しいためはっきりしないが、あるいは瓦質の 焼成であったかもしれない。内面に 5 条 1 単位のオロシメが施され、備前焼の写しとみられるが、在地 の製品である。

②出土鉄器(図版89、写真図版97)

火箸 (M171)

第2曲輪東肩部から出土したもので、火箸と思われる。基部が欠損するが、現存長32.47cmを測る。 基部は現存長8.5cmにわたりねじりを施している。断面形はほぼ正方形を呈する。

第5章 火山遺跡

第1節 概要

古墳群・城跡以外に中世の遺構が見つかっており、火山遺跡としてまとめる。遺構が検出されたのは 12・13号墳、城跡が存在する山頂部と、9号墳周辺の水田部で、平安時代~室町時代の遺物が出土して いる。

第2節 山頂部の遺構

確認調査時に2基の土坑、本発掘調査時に12号墳の埋葬施設と重なって2基の土坑の計4基の土坑を 検出した。

1 土坑 S K 02 (図版57)

城跡第1郭の中央に位置する。平面不整円形、断面逆台形で、径0.7~0.75m、深さ0.2mである。埋土から須恵器こね鉢(242)が出土しており、12世紀代の年代が与えられる。

2 土坑 S K 03 (図版57)

城跡第2郭の中央に位置する。平面円形、断面逆台形で、径0.95~1.0m、深さ0.3mである。埋土から須恵器こね鉢(241)が出土しており、12世紀代の年代が与えられる。

3 十坑 S K 04 (図版49、写真図版44)

城跡第2郭の西寄りに位置し、12号墳埋蔵施設の南側を切り込んでいる。平面方形に近い円形、断面箱掘りで、径0.5~0.55m、深さ0.7mである。埋土上層から巨礫と須恵器椀(236)が出土しており、12世紀代の年代が与えられる。

4 土坑 S K 05 (図版49、写真図版44)

SK04の北隣に位置し、12号墳埋蔵施設の北側を切り込んでいる。平面不整円形、断面逆台形で、径0.5m、深さ0.4mである。埋土上層から瓦器椀が出土している。

第3節 水田部の遺構(図版36、写真図版56)

9号墳の調査時に、墳丘周辺で柱穴・土坑などが見つかったため、新たに周囲の水田部に調査トレンチ・グリッド($9-4T\sim16T$)を入れ、遺構の広がりを確認した(第2図)。その結果、 $9-4T\sim6$

T・10Tでピット・土坑・焼土面などの遺構および遺物包含層を検出したため、その範囲について拡張・ 調査した。

見つかった遺構には120基余りの柱穴、性格不明の土坑2基の他、焼土面数箇所がある。柱穴は多数存在するものの、整然と並んで建物を構成するものはない。いくつかの柱穴からは中世の土器・石器が出土している。またはっきりした輪郭としては提示できなかったが、溜まり状遺構とした堆積土中から、遺物の多くが出土している。

1 土坑 S X 01 (図版58、写真図版57)

9号墳の墳裾から南 5 mに位置する。平面形は「く」の字に曲がる細長い土坑で、長1.5m、幅0.55 \sim 0.7m、深さ0.23mである。坑底に角礫が敷かれ、炭混じりの土が充填しているところから、何らかの目的で火を焚いているのは明らかである。しかし骨片等も出土しておらず、用途は不明である。遺物は出土していない。

2 土坑 S X 02 (図版58、写真図版57)

SX01の南 1 mに位置する。平面形は方形の輪郭を取るが、北側の肩部は失われている。東西長2.3 m、南北長1.4m以上、深さ0.15mである。坑内に角礫が多く含まれているが、火は受けていない。用途および SX01との関係は不明である。埋土から瓦器椀(253)・小皿(256・258)が出土しており、12世紀代の年代が与えられる。

第4節 出土遺物

1 山頂部(図版70、写真図版81)

須恵器

杯蓋 (234·235)

杯Bとセットになる蓋だが、いずれも頂部を欠失しているため、つまみが付くかどうかは不明である。 口縁部の屈曲は弱く、端部が短く直立する。天井部は回転へラケズリで調整する。

椀 (236)

平底から体部がやや内弯気味に開き、端部を丸く収める。底部内面の凹みは痕跡程度で、底部は回転 糸切り技法で切り離す。

小皿 (237)

口縁部のみの破片で、体部がやや内弯気味に開き、端部を丸く肥厚させる。

こね鉢(239~245)

小破片のため口径・傾きに不安定な要素があるが、241・242は口縁部の約1/4が遺存する。図化した中に片口部が残る個体はなかった。体部は直線的に開き、口縁端部を上方へわずかにつまみ上げて外側に面をとる。底面は回転糸切り技法で切り離す。

2 尾根部

①出土土器(図版70、写真図版81)

黒色土器

椀 (248)

口縁部と底部の破片を図上で結合している。断面三角形の輪高台を貼り付けた底部から、体部が内弯 状に立ち上がる。口縁部には2段のヨコナデを施すが、その他の調整は摩滅のため不明である。

②出土金属器(図版89)

銅銭 (M189)

10号墳石室上面から出土した。表面には「寛永通寶」銘が良好に残存する。背面は無文である。

3 平地部

①出土土器(図版71、写真図版81)

須恵器

椀 (250~252)

250・251は平底から体部がやや内弯気味に開き、端部を丸く収める。底部内面の凹みは痕跡程度で、底部は回転糸切り技法で切り離す。

252は墨書痕が残る体部の破片だが、文字は判読できない。

小皿 (259)

平底から体部がやや直線的に短く開き、端部を丸く収める。底部は回転糸切り技法で切り離す。

提瓶 (262)

提瓶か壺の口縁部の破片で、9号墳の副葬品の一部とみられる。

こね鉢 (268)

体部は直線的に開き、口縁部の外側を厚く肥厚させる。

瓦器

椀 (253・254)

断面三角形の輪高台を貼り付けた底部から、体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部には1段のヨコナデを施すが、その他の調整は摩滅のため不明である。253の口縁端部には内外面に沈線状の段を設ける。小皿(256~258)

手捏ね成形で、平底から口縁部が短く立ち上がり、端部は丸く収める。口縁には1段のヨコナデを施す。 紅皿 (263)

顔料を入れるポケットが2個1対並んでいる。全体をヘラ状のもので成形しており、瓦質焼成されている。

土師器

杯 (255)

平底から体部が直線的に開き、端部を丸く収める。底部は回転糸切り技法で切り離す。

小皿 (260 • 261)

手捏ね成形で、平底から口縁部が短く開き、端部は丸く収める。260は口縁に1段のヨコナデを施す。 羽釜(264) 体部は直立し、寸胴型になるものと思われる。口縁端部はわずかに肥厚し、端部から2cmほど下に断面三角形の鍔部を貼り付ける。調整は不明だが、外面全体に煤が付着する。

鍋(265~267)

265・266はタタキ成形した下膨れ気味の体部から口縁部が直立するタイプで、口縁端部を強調している。265は口縁部外面を2段の強いナデで調整し、端部を外側へ引き出すように肥厚させる。体部外面は右上がりの平行タタキ、内面はイタナデで調整する。266は口縁部がやや開いて、端部を玉縁状に肥厚させる。体部外面は横方向の平行タタキ、内面はイタナデで調整する。

267は体部が鉢状に開くタイプで、口縁部の内側を帯状に肥厚させる。図示した個体では、把手の孔の部分は残っていなかった。外面に平行タタキが残る。

丹波焼

擂鉢 (269~270)

体部は約60°の急な角度で直線的に開き、口縁端部を丸く収める。端部外面は回転ナデで面をとり、270には沈線状の段がつく。内面には1本引きのオロシメを施す。

瀬戸美濃焼

天目茶碗 (271)

直線的な体部から口縁部が屈曲して外反する。内面から体部外面2/3にかけて鉄釉を施し、黒褐色を呈する。以下の体部は露胎で、底部を欠失する。

青磁

碗 (272)

体部は内弯気味に立ち上がり、直線的に口縁部へ至る。外面には鎬蓮弁文を刻み、内外面に薄緑色の 釉薬を施す。

②出土鉄器(図版89、写真図版97)

火切り金 (M172)

9号墳南西側の溜まり状遺構から出土した。山形を呈し、頂部に紐通し孔がある。両底角が上方へ反り、打撃部は緩やかな弧状を呈する。

③出土石器(図版95、写真図版98)

石臼(S1)

9号墳墳丘の表土から出土した。下臼で、周縁は剥離していて残存径が19.1×16.9cm、高さが8.0~8.4cmである。軸穴の径は上半が1.5cm、下半は広がって4.5cmである。溝の目は反時計回りに8分画されているものの、その割付は不正確で、溝の本数も4~8本まで不揃いである。また分画の末端は目なしにして、目のこぼれを防いでいる。

砥石(S2)

柱穴 P 16より出土した。直方形で、一方の小口面は斜めに整形されている。断面は台形に近い不整五角形で、側縁の 5 面と斜めの小口面を、砥面として使用している。全長が16.05cm、断面が6.4×3.3cmである。

第6章 まとめ

第1節 火山古墳群出土の管玉の産地分析

京都大学原子炉実験所 藁科 哲男

1 はじめに

玉類の原材料としては滑石、軟玉(角閃石)、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、メノウなどが推測される。 一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。これら玉 材については岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、 若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどくらいであり、非破壊で命 名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。また原石名が決定されたのみでは考古学 の資料としては不完全で、どこの産地原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に 寄与できる資料となるのである。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製 品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイ(硬玉、軟 玉)や碧玉の原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推 定である。玉類の原石産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイ が発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説であったが、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法10 および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光 X 線分析で行う元素比法2.3) が報告されてい る。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究としては蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を 併用することで産地分析をより正確に行った例4)が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品は それぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1) 石器の原 材産地推定で明らかになる遺跡から石材原産地までの移動距離、活動範囲は、石器が生活必需品である ので、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではな く、勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして精神的な面に重要な作 用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、 権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれないし、お祭、御守り、占いの道具 であれば、同じような習慣を持つ文化圏ではないかと考えられる。このように玉類の産地分析では、石 器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った遺物は、兵庫県丹波市春日町平松に位置する火山古墳群の6世紀中葉~7世紀中葉の第7、9、10号墳出土の各1、2、1個の合計4個の管玉で、分析した遺物の出土地区を表3に示した。これら管玉の分析結果が得られたので報告する。

表3 火山古墳群出土管玉の出土地区

分析番号	遺物番号	報告番号	古墳	主体部
88146	玉 16	J 2	7号墳	玄室 4 区西
88147	管玉9	J 15	9号墳	第 1 床面
88148	管玉11	J 17	9号墳	第 1 床面
88149	管玉4	J 97	10号墳	石室 2 区南

2 非破壊での産地分析の方法と手段

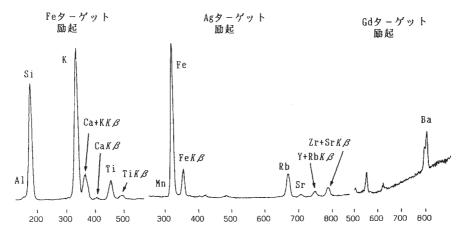
原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかくおこなってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。よって石器の原材産地分析で成功している⁴⁾ 非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した50。

3 碧玉原石の蛍光 X 線分析

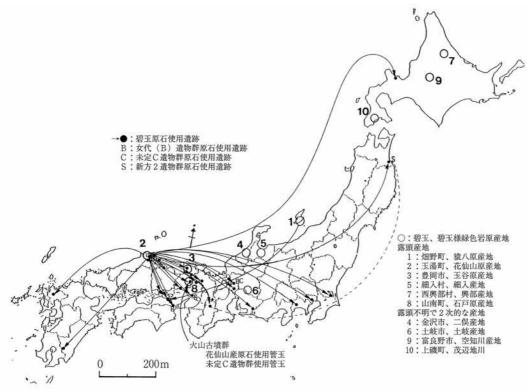
碧玉の蛍光 X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を第 4 図に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光 X線ピークも異同はあるものの第 4 図で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、A1/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr である。また Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zr の元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ce のピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いている。



第4図 花仙山産碧玉原石の蛍光 X 線スペクトル

4 碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を第5図に示す。佐渡猿八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、 産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質 の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何 ケ所か見られるが、今回分析した原石は猿八の各地点から表採したもの、および地元で提供された原石 などであり、また提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、それはグリーンタフ層の間に 約7 cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間 のものは31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石 の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、 多少色の違いがあっても分析した組成上には大きな差はみられなかった。出雲の花仙山は近世まで採掘 が行われた原産地で、所在地は②島根県八東郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は、濃緑色か ら緑色の緻密で剥離面が光沢をもつ良質の碧玉や淡緑色から淡白色のものなど様々で、他に硬度が低そ うなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがっ て比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のものは10個、2.599~ 2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の 合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域のものが分析されているのがわか る。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる分析組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、③兵 庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全 く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石 の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より緻密で 優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて



第5図 碧玉および碧玉様岩の原産地と古墳 (続縄文) 時代の碧玉製管玉の原材使用分布圏

注意深く行う必要がある。分析した玉谷産原石は、比重が2.644~2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、④石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。ここの河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。また元素組成は他の産地の組成と異なっており区別できる。しかし、この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか検証するために、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区にあり、そのグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。それは肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が分析した8個は2.25~2.12と非常に軽く、この比重の値で他の原産地と区別

表4-1 各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原 石群 名	分析 個数	A 1 / S i X _{a ν} ± σ	K∕S i X _{av} ±σ	Ca/K X _{aν} ±σ	T i / K X a ν ± σ	K∕F e X a ν±σ
興 部	31	0.011 ± 0.003	0.580 ± 0.320	0.123 ± 0.137	0.061 ± 0.049	0.022 ± 0.006
空知A1	42	0.039 ± 0.006	1.026 ± 0.281	2.728 ± 0.907	0.547 ± 0.119	0.042 ± 0.011
空知A2	46	0.021 ± 0.008	0.866 ± 0.447	0.797 ± 0.393	0.225 ± 0.050	0.032 ± 0.006
空知 B	47	0.064 ± 0.004	3.600 ± 0.328	0.088 ± 0.008	0.101 ± 0.009	0.242 ± 0.037
猿 八	36	0.046 ± 0.007	3.691 ± 0.548	0.049 ± 0.038	0.058 ± 0.011	0.370 ± 0.205
土 岐玉 谷	51	0.006 ± 0.004	0.361 ± 0.131	0.072 ± 0.063	0.098 ± 0.063	0.023 ± 0.005
	27	0.025 ± 0.009	0.625 ± 0.297	0.110 ± 0.052	0.476 ± 0.104	0.045 ± 0.014
花仙山1	27	0.019 ± 0.004	0.909 ± 0.437	0.171 ± 0.108	0.222 ± 0.098	0.059 ± 0.019
花仙山 2	33	0.023 ± 0.003	1.178 ± 0.324	0.157 ± 0.180	0.229 ± 0.139	0.055 ± 0.015
細入	8	0.019 ± 0.003	0.534 ± 0.284	0.991 ± 0.386	0.372 ± 0.125	0.031 ± 0.008
二 俣	4	0.043 ± 0.001	2.644 ± 0.183	0.337 ± 0.079	0.158 ± 0.009	0.312 ± 0.069
	4	0.019 ± 0.004	0.601 ± 0.196	0.075 ± 0.022	0.086 ± 0.038	0.154 ± 0.072
茂辺地川	4	0.031 ± 0.002	1.847 ± 0.246	0.077 ± 0.024	0.222 ± 0.052	0.092 ± 0.021
ケショマッフ゜1	44	0.040 ± 0.007	2.745 ± 0.957	0.234 ± 0.139	0.135 ± 0.030	0.067 ± 0.008

原石群名	分析 個数	Rb∕Fe Xav±σ	Fe/Zr Xaν±σ	R b / Z r $X_{av} \pm \sigma$	S r ∕ Z r X a v ± σ	Y/Z r X a v ± σ
興 部	31	0.070 ± 0.021	174.08 ± 124.9	16.990 ± 13.44	0.668 ± 0.435	1.801 ± 1.434
空知A1	42	0.124 ± 0.058	3.309 ± 1.295	0.353 ± 0.101	12.485 ± 3.306	0.032 ± 0.045
空知A2	46	0.039 ± 0.007	25.866 ± 11.50	1.023 ± 0.499	7.433 ± 4.531	0.378 ± 0.198
空知B	47	0.460 ± 0.055	2.137 ± 0.274	0.974 ± 0.110	0.190 ± 0.082	0.137 ± 0.022
猿 八	36	0.384 ± 0.153	1.860 ± 1.070	0.590 ± 0.185	0.139 ± 0.127	0.165 ± 0.138
土岐玉谷	51	0.096 ± 0.025	43.067 ± 23.28	4.056 ± 2.545	0.271 ± 0.308	0.159 ± 0.180
	27	0.151 ± 0.020	6.190 ± 1.059	0.940 ± 0.205	0.192 ± 0.170	0.158 ± 0.075
花仙山 1	27	0.225 ± 0.028	10.633 ± 3.616	2.345 ± 0.693	0.476 ± 0.192	0.098 ± 0.052
花仙山 2	33	0.219 ± 0.028	12.677 ± 2.988	2.723 ± 0.519	0.472 ± 0.164	0.132 ± 0.071
細 入	8	0.073 ± 0.020	12.884 ± 3.752	0.882 ± 0.201	1.879 ± 0.650	0.026 ± 0.032
二俣	4	0.338 ± 0.039	1.495 ± 0.734	0.481 ± 0.176	0.697 ± 0.051	0.088 ± 0.015
	4	0.170 ± 0.079	7.242 ± 1.597	1.142 ± 0.315	0.649 ± 0.158	0.247 ± 0.092
茂辺地川	4	0.190 ± 0.052	5.566 ± 1.549	0.980 ± 0.044	0.300 ± 0.032	0.171 ± 0.051
ケショマップ゜1	44	0.096 ± 0.007	5.720 ± 0.608	0.543 ± 0.034	0.489 ± 0.184	0.146 ± 0.027

_					
原 石群 名	分析 個数	Mn∕Fe Xav±σ	Ti/Fe X _{av} ±σ	Nb∕Zr Xav±σ	比 重 Xav±σ
興部	31	0.004 ± 0.003	0.001 ± 0.001	0.455 ± 0.855	2.626 ± 0.032
空知A1	42	0.028 ± 0.009	0.020 ± 0.005	0.007 ± 0.010	2.495 ± 0.039
空知A2	46	0.009 ± 0.003	0.006 ± 0.002	0.118 ± 0.167	2.632 ± 0.012
空知B	47	0.015 ± 0.002	0.022 ± 0.004	0.134 ± 0.024	2.607 ± 0.001
猿八	36	0.003 ± 0.001	0.018 ± 0.010	0.032 ± 0.014	2.543 ± 0.049
土芸谷	51	0.001 ± 0.001	0.001 ± 0.001	0.072 ± 0.160	2.607 ± 0.009
	27	0.006 ± 0.003	0.016 ± 0.003	0.054 ± 0.021	2.619 ± 0.014
花仙山 1	27	0.001 ± 0.001	0.009 ± 0.002	0.042 ± 0.034	2.570 ± 0.044
花仙山 2	33	0.001 ± 0.001	0.009 ± 0.004	0.035 ± 0.025	2.308 ± 0.079
細 入	8	0.003 ± 0.002	0.008 ± 0.002	0.021 ± 0.344	2.169 ± 0.039
二 俣 戸	4	0.007 ± 0.002	0.043 ± 0.010	0.043 ± 0.023	2.440 ± 0.091
石 戸	4	0.007 ± 0.001	0.009 ± 0.002	0.227 ± 0.089	2.598 ± 0.008
茂辺地川	4	0.003 ± 0.008	0.016 ± 0.001	0.132 ± 0.069	2.536 ± 0.033
ケショマッフ゜1	44	0.003 ± 0.001	0.009 ± 0.001	0.035 ± 0.018	2.287 ± 0.013

X a y : 平均值、 σ : 標準偏差値

表4-2 各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

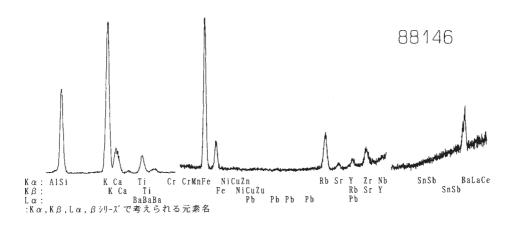
原石群名	分析 回数	A 1 / S i X a v ± σ	$\begin{array}{c} K / S \ i \\ X_{av} \pm \sigma \end{array}$	Ca∕K Xav±σ	T i / K X a v ± σ	K∕Fe X _{aν} ±σ
女未車車牟長長No.2000-1 代定塚塚田塚塚.2000-2 代定塚塚田塚塚.2000-2 南C 1 2辺()(2) 2000-2 No.2000-1 No.2000-1 No.2000-1 1 2 3 4 段東 1 2 3 1 3 2 奥 3 4 坊3-8 10 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	回数 68 58 33 45 58 47 45 32 28 32 32 40 44 40 38 42 51 67 30 39 51 41 40 42 48 48 45 46 40 48 45					
空兒 10 空兒 14 空兒 13 矢野 177 青青 177 青 東畑	48	0.100 ± 0.008	4.776 ± 0.117	0.064 ± 0.004	0.600 ± 0.007	0.078 ± 0.001

原石群名	分析 回数	Rb∕Fe Xav±σ	Fe∕Zr Xav±σ	Rb∕Zr Xav±σ	Sr∕Zr Xav±σ	$\begin{array}{c} Y / Z r \\ X_{av} \pm \sigma \end{array}$
名 B 女未車車牟長長No.2000-12 4 内で 12 辺(1)(2)(2)(2)(2)(2)(2)(2)(2)(2)(2)(2)(2)(3)(4)(4)(4)(4)(4)(4)(4)(4)(4)(4)(4)(4)(4)						
立見10 空見14 空見13 矢野 4 青田77 青田78	48 45 45 46 48 48 36	0.097±0.009 0.045±0.005 0.099±0.007 0.456±0.019 0.401±0.018 0.116±0.009 0.674±0.256	7.630 ± 0.039 7.429 ± 0.531 2.090 ± 0.151 0.911 ± 0.041 1.349 ± 0.077 1.643 ± 0.158 0.548 ± 0.131	0.139 ± 0.016 0.332 ± 0.035 0.206 ± 0.013 0.415 ± 0.016 0.540 ± 0.026 0.190 ± 0.021 0.337 ± 0.017	2.187 ± 0.074 0.220 ± 0.037 1.523 ± 0.108 0.173 ± 0.011 0.627 ± 0.035 1.583 ± 0.113 0.198 ± 0.096	0.020 ± 0.014 0.105 ± 0.032 0.028 ± 0.010 0.262 ± 0.023 0.143 ± 0.024 0.031 ± 0.019 0.103 ± 0.038

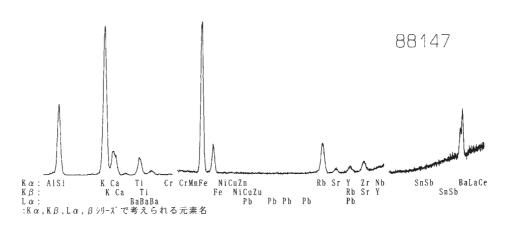
できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域であり、そこでは赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出している。このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地は、⑦北海道紋別郡西興部村にあり、その碧玉原石は鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は、⑧兵庫県氷上郡山南町地区にあり、その安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重は2.6以上が4個、2.6~2.5が5個、2.5~2.4が5個である。その碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質のもの碧玉を多数収集することは困難である。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉は不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表4-1に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取

原石	分析	M n∕F e	Ti/Fe	Nb/Zr	比 重
群名	回数	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X_{av} \pm \sigma$
女代南 B	68	0.011 ± 0.004	0.026 ± 0.009	0.034 ± 0.016	2.554 ± 0.019
未定C	58	0.002 ± 0.001	0.101 ± 0.019	0.019 ± 0.016	2.646 ± 0.023
車塚 1	33	0.002 ± 0.001	0.081 ± 0.013	0.033 ± 0.013	2.619 ± 0.019
車塚2	45	0.002 ± 0.001	0.109 ± 0.023	0.028 ± 0.013	2.616 ± 0.019
牟田辺	58	0.008 ± 0.003	0.067 ± 0.008	0.018 ± 0.010	2.1~
長塚(1)	47	0.005 ± 0.001	0.094 ± 0.013	0.022 ± 0.016	2.533 ± 0.016
長塚(2)	45	0.004 ± 0.001	0.047 ± 0.004	0.024 ± 0.013	2.569 ± 0.003
No.200-1	32	0.006 ± 0.001	0.033 ± 0.001	0.006 ± 0.009	2.308
長塚(1)	47	0.005 ± 0.001	0.094 ± 0.013	0.022 ± 0.016	2.533 ± 0.016
No.200-2	28	0.008 ± 0.001	0.038 ± 0.002	0.006 ± 0.010	2.277
No.200-3	28	0.014 ± 0.003	0.058 ± 0.003	0.002 ± 0.005	2.270
No.200-4	32	0.005 ± 0.001	0.068 ± 0.002	0.006 ± 0.008	2.256
No.200-6	32	0.011 ± 0.002	0.082 ± 0.003	0.038 ± 0.026	2.542
┃ 梅田 1	40	0.001 ± 0.000	0.009 ± 0.001	0.014 ± 0.019	2.579 ± 0.013
梅田2	44	0.005 ± 0.001	0.080 ± 0.011	0.035 ± 0.015	2.531 ± 0.007
梅田3	40	0.005 ± 0.001	0.121 ± 0.005	0.033 ± 0.027	2.511
梅田4	38	0.006 ± 0.001	0.039 ± 0.002	0.039 ± 0.010	2.446
上/段1	42	0.006 ± 0.001	0.019 ± 0.001	0.014 ± 0.018	2.636 ± 0.001
梅田東1	51	0.008 ± 0.001	0.095 ± 0.014	0.027 ± 0.018	2.541 ± 0.016
新方1	67	0.050 ± 0.020 0.010 ± 0.003	0.046 ± 0.006	0.027 ± 0.009	2.290 ± 0.018
新方 2 新方 3	30 39	0.010 ± 0.003 0.068 ± 0.027	$0.061\pm0.004 \\ 0.057\pm0.013$	0.032 ± 0.017 0.007 ± 0.007	2.546 ± 0.011 2.257 ± 0.024
利力 3 新井 1	51	0.084 ± 0.027	0.037 ± 0.013 0.035 ± 0.001	0.007 ± 0.007 0.021 ± 0.011	2.482
制升 I 亀井 3	41	0.004 ± 0.001 0.005 ± 0.001	0.033 ± 0.001 0.022 ± 0.002	0.021 ± 0.011 0.094 ± 0.020	2.462 2.530 ± 0.054
東船2	40	0.003 ± 0.001 0.001 ± 0.000	0.022 ± 0.002 0.002 ± 0.000	0.094 ± 0.020 0.115 ± 0.058	2.190 吸水
山ノ奥1	42	0.001 ± 0.000 0.010 ± 0.001	0.045 ± 0.002	0.027 ± 0.036	2.461
昼飯3	48	0.010 ± 0.001 0.002 ± 0.001	0.043 ± 0.002 0.070 ± 0.002	0.027 ± 0.010 0.035 ± 0.010	2.501
星飯 4	48	0.002 ± 0.001	0.083 ± 0.002	0.035 ± 0.015	2.579
	45	0.015 ± 0.001	0.070 ± 0.002	0.030 ± 0.013	2.554
笠見3-5	46	0.008 ± 0.001	0.044 ± 0.006	0.025 ± 0.005	2.249-2.098
■ 答見 8	40	0.008 ± 0.001	0.024 ± 0.001	0.023 ± 0.006	2.257
Ⅰ 笠見10	48	0.009 ± 0.001	0.046 ± 0.001	0.018 ± 0.005	2.278
笠見 4	45	0.059 ± 0.002	0.010 ± 0.001	0.049 ± 0.027	2.610
笠見13	45	0.008 ± 0.001	0.032 ± 0.001	0.024 ± 0.007	2.297
矢野 4	46	0.008 ± 0.001	0.064 ± 0.002	0.024 ± 0.016	2.456
青田77	48	0.004 ± 0.001	0.077 ± 0.003	0.033 ± 0.019	2.583
青田77 青田78	48	0.011 ± 0.001	0.051 ± 0.002	0.024 ± 0.009	2.403
菜畑	36	0.005 ± 0.002	0.129 ± 0.028	0.035 ± 0.016	2.521 ± 0.027

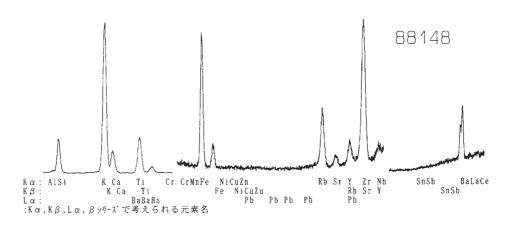
X。、平均値、σ:標準偏差値 比重2.29以下は緑色凝灰岩 女代南 B:女代南遺跡(豊岡市)、未定C:字木汲田遺跡(唐津市)、車塚1,2:車塚古墳(交野市)、年田辺:牟田辺遺跡(多久市)、長塚(1)、(2):長塚古墳(可児市)、№0.200-1~6:多摩ニュウタウン遺跡(東京都)、梅田1~4:梅田古墳(兵庫県和田山町)、梅田東1:梅田東古墳(兵庫県和田山町)、上ノ段1:上ノ段遺跡(兵庫県丹波市市島町)、新方1~3:新方遺跡(神戸市)、新井1:新井三丁目遺跡(東京都中野区)、亀川3:亀川遺跡(阪南市自然田)、東船1 実船遺跡(島根県今津町)、山ノ奥1:山ノ奥遺跡(岡川県)、昼飯3,4:昼飯大塚古墳(大垣市)、斉当坊6:市田斉当坊(京都府久御山町)、笠見3~13:笠見第3遺跡(鳥取県東伯町)矢野4:矢野遺跡(徳島市)、青田77、78:青田遺跡(新潟県加治川村)、菜畑(唐津市)で使用されている原石産地不明の玉類で作った群。



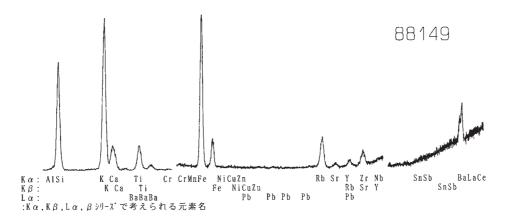
第6-1図 火山古墳群出土管玉(玉16)(88146)の蛍光 X線スペクトル



第6-2図 火山古墳群出土管玉9 (88147) の蛍光 X 線スペクトル



第6-3図 火山古墳群出土管玉11 (88148) の蛍光 X 線スペクトル



第6-4図 火山古墳群出土管玉4 (88149) の蛍光 X 線スペクトル

り扱った。原石群とは異なる遺物群は、例えば、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の玉の原材料で、この産地不明の玉材は玉作り工程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索するという目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B(女代(B))群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。また宇木汲田遺跡の管玉にも産地未発見の玉材で作られた管玉があり、この原材で作った未定 C(未定(C))群をそれぞれ原石群と同じように使用する。また、岐阜県可児市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚(1)、(2)の遺物群、多摩ニュウタウン遺跡、梅田古墳群、上ノ段遺跡、梅田東古墳群、新方遺跡などから出土した玉類および玉材剥片でそれぞれ遺物群を作り他の遺跡、墳墓から出土する玉類に組成が一致するか定量的に判定できるようにし、遺物群を表4-2に示した。この他、鳥取県の福部村多鯰池、鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。最近、兵庫県香住町の海岸から採取された親指大1個の碧玉様の玉材は貝殻状剥離がみられる緻密な石質で少し青っぽい緑の石材で玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光X線分析の結果では、興部産碧玉に似ているが、ESR信号および比重(2.35)が異なっているため、興部産碧玉と区別ができる。

5 火山古墳群出土の管玉と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉類、玉材は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原材産地の同定をするために、(1) 蛍光 X 線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2) また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

6 蛍光X線法による産地分析

これら玉類の蛍光X線分析のスペクトルを第 $6-1\sim4$ 図に示し、比重および管玉の蛍光X線分析から原材料の元素組成比を求めて結果を表5に示す。碧玉と分類した遺物は、緻密で、蛍光X線分析でRb, Sr, Y, Zr の各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。また、グリーンタフ製は比重が2.4に達

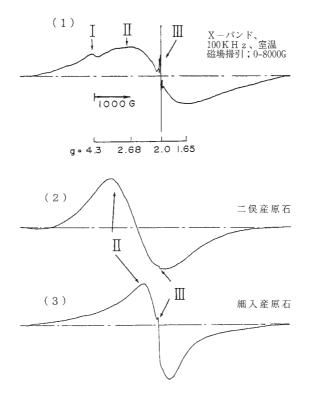
表5-1 火山古墳群出土管玉の分析結果

遺 物 番 号	分 析番号	Al/Si	K/Si	Ca/K	元 素 Ti/K	た K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
玉 16 管玉9 管玉11 管玉4	88146 88147 88148 88149	0.019 0.020 0.033 0.014	1.266 1.507 3.228 0.994	0.068 0.079 0.011 0.062	0.121 0.127 0.256 0.174	0.098 0.061 0.325 0.057	0.279 0.236 0.515 0.225	8.694 14.486 0.722 9.876	2.430 3.416 0.372 2.218
J.G.	-1 a)	0.056	3.412	0.785	0.230	0.112	0.264	3.740	0.986

表5-2 火山古墳群出土管玉の分析結果

遺 物 番 号	分 析番 号	Sr/Zr	元 Y/Zr	素。 Mn/Fe	比 Ti/Fe	Nb/Zr	重 量 gr	比 重
玉 16 管玉9 管玉11 管玉4	88146 88147 88148 88149	0.340 0.476 0.070 0.278	0.149 0.083 0.041 0.161	0.002 0.003 0.004 0.001	0.011 0.007 0.075 0.010	0.117 0.024 0.028 0.044	1.77520 3.92060 2.18420 3.33513	2.559 2.527 2.552 2.570
JG-	-1ª)	1.348	0.246	0.023	0.023	0.042		

a):標準試料、Ando,A., Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192.

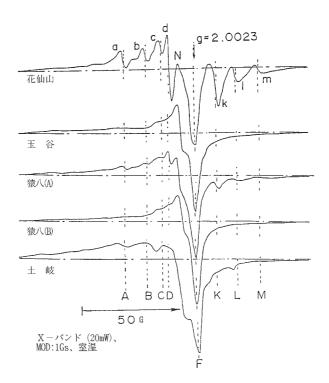


第7図 碧玉原石のESRスペクトル(花仙山、玉谷、猿八、土岐)

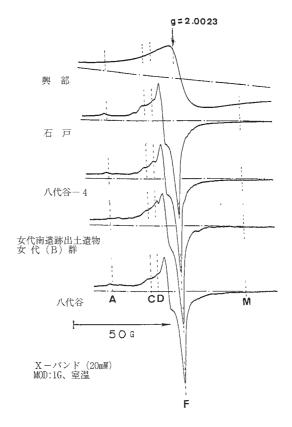
しない玉材が多い。これら遺物の元素組成比 の結果をの碧玉原石群(表4)の結果と比較 してみる。分析個数が少なくて統計処理がで きる群が作れなかった産地については、原石 の元素組成比を今回分析した遺物と比較した が一致するものは見られなかった。原石の数 が多く分析された原産地については、数理統 計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリ ングT2乗検定⁶⁾ により同定を行ったとこ ろ、分析番号88146、88147、88149番の3個 は花仙山産群に、分析番号88148番は未定 C 遺物群(車塚2遺物群は未定C遺物群に一致) にそれぞれ信頼限界の0.1%以上で帰属され、 花仙山群、未定C遺物群と判定する必要条件 は求められた。次に十分条件である他の全て の原石・遺物群(表4)について、信頼限界 の0.1%に達しないなど、一致ないことを全 ての群について実際に確率計算を行い証明し ているが、紙面都合上省略し、十分条件を満 たした原石・遺物群(表4)のみを抜粋して 示した。より正確に産地を特定するために E SR分析を併用して産地分析を行った。

7 ESR法による産地分析

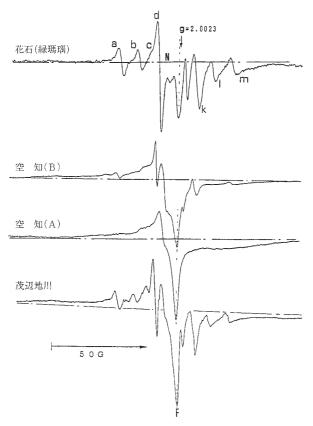
ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。第7図-(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(III)で構成されたている。第7図-(1)では、信号



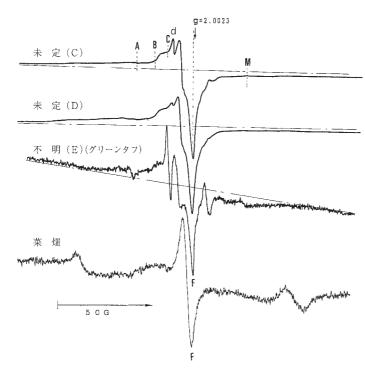
第8-1図 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル



第8-2図 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル

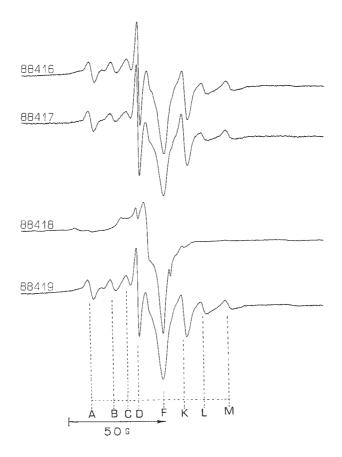


第8-3図 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル



第8-4図 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル

(Ⅱ)より信号(Ⅲ)の信号の高さが高く、 第7図-(2)、-(3)の二俣、細入原 石ではこの高さが逆になっているため、原 石産地の判定の指標に利用できる。今回分 析した玉類の中で信号(Ⅱ)が信号(Ⅲ) より小さい場合は、二俣、細入産でないと いえる。各原産地の原石の信号(Ⅲ)の信 号の形は産地ごとに異同があり産地分析の 指標となる。第8-1図に花仙山、猿八、 玉谷、土岐を第8-2図に興部、石戸、八 代谷-4、女代(B)遺物群、八代谷およ び第8-3図に富良野市空知川の空知(A)、 (B)、北海道今金町花石および茂辺地川の 各原石の代表的な信号(Ⅲ)のスペクトル を示す。第8-4図には宇木汲田遺跡の 管玉で作った未定C形と未定D形およびグ リーンタフ製管玉によく見られる不明E形、 碧玉では、独特の信号の形を示す菜畑形を 示した。ESR分析では玉材剥片と管玉の ESR信号の形が、それぞれ似た信号を示 す原石であったり、産地不明遺物群のES R信号形と一致した場合、そこの産地の可 能性が大きいことを示唆している。今回分 析した管玉のESR信号(III)の結果を第 9図に示す。分析番号88146、88147、88149 番の3個は花仙山形に、分析番号88148番 は未定 C 形(車塚 2 形は未定 C 形に一致) にそれぞれ一致し、これら管玉に花仙山産、 未定C遺物群原石が使用されていると同定 しても矛盾しない。ESRスペクトルが一 致した原石産地に管玉の原産地を特定する が、より正確な原石産地を推測するために 蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定 として、両方法でともに同じ原産地に特定 された場合のみ、そこの群の原石と同じも のが使用されているとして総合判定原石産 地の欄に結果(表6)を記した。



第9図 火山古墳群出土管玉の信号(Ⅲ)のESRスペクトル

分析 番号	遺物 番号	古墳	報告 No.	器種	原石産地(確率)	ESR信号形	総合判定
88146	玉 16	7号墳	J 2	管玉	花仙山(7%)	花仙山形	花仙山
88147	管玉9	9号墳	J15	管玉	花仙山(2%)	花仙山形	花仙山
88148	管玉11	9号墳	J17	管玉	車塚2遺物群(82%),未定 C 遺物群(66%), 車塚1遺物群(0.1%)	未定 C (車塚)形	未定 C (車塚)
88149	管玉4	10号墳	J97	管玉	花仙山(5%)	花仙山形	花仙山

8 結 論

分析した管玉の分析番号88146、88147、88149番の3個は花仙山産原石が、また、分析番号88148番は未定C遺物群原石に、蛍光X線分析、ESR分析の両結果がそれぞれ一致し、これら管玉を花仙山産原石、未定C遺物群原石が使用されていると同定しても矛盾しない。火山古墳群で使用された未定C群は弥生時代前期に使用された原石で、最近の分析で、古墳時代にもときどき見られるが、全て製品で剥片はまだ見つかっていない。

今回分析で明らかになった花仙山産原石の使用圏を本遺跡との関係をみるために以下に述べる(第 5 図)。花仙山産原石は弥生時代後期から使用され古墳時代になって本格的に、使用された原石で、佐渡 島猿八産原石製玉類と同時に花仙山産管玉が出土した古墳は香川県の野牛古墳で、女代南(B)群は花 仙山産原石と同時に出土した遺跡は、徳島県板野町、蓮華谷古墳群Ⅱの3世紀末の2号墳と島根県安来 市門生黒谷Ⅲ遺跡の4世紀末~5世紀初頭の管玉である。3世紀末から4世紀末にかけては女代南B群 の管玉から花仙山産管玉に移行する過渡期的な時期と思われ、移行させた社会情勢の変革を推測しても 産地分析の結果と矛盾しない。島根県東出雲町勝負遺跡の5世紀前半、安来市柳遺跡、奈良県橿原市曽 我遺跡の5世紀、岡山県川上村下郷原和田遺跡の玉材の剥片には花仙山産原石が使用されていた。時期 が進むに従って碧玉製管玉、勾玉は花仙山産原石製玉類の使用が広がり、余市町大川遺跡の7世紀、東 京都板橋区赤羽台遺跡の6世紀、神奈川県海老名市本郷遺跡の8世紀、愛知県豊川市上野第3号墳の7 世紀、大阪府高槻市塚原B42号墳6世紀末の管玉に使用されている。京都府園部町垣内古墳の4世紀の 鑿頭式石製鏃の石材として、また兵庫県神戸市では4世紀初頭の天王山4号墳出土管玉、4世紀末の大 歳山3号墳の勾玉、管玉4世紀の堅田1号墳の勾玉、6世紀初頭の鬼神山古墳、西神33-A、6世紀前 半の北神ニュウタウン、6世紀中葉の西石ヶ谷遺跡、6世紀末の柿谷2号墳出土の管玉にそれぞれ花仙 山産原石が使用されていた。兵庫県西紀町の箱塚4、5号墳、高川2号墳の6世紀後半の管玉に使用さ れ、岡山市甫崎天神遺跡の6世紀後半、斎富5、2号墳、徳島県板野町蓮華谷4、5墳の6世紀末、佐 賀県東背振町吉野ヶ里遺跡の管玉にそれぞれ使用されていた。花仙山産原石の使用の南限は、宮崎県新 富町祇園原115号墳出土の6世紀の管玉になっている。これら玉類に使用されている産地の原石が多い 方が、その産地地方との文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な管 玉を数多く分析することが重要で、今回行った産地分析は完全な非破壊である。碧玉産地に関する小さ な情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われる。

参考文献

- 1) 茅原一也(1964)、長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要6:1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。 橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』,14:95-109
- 4) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学,16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina (1992), Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 6) 東村武信(1976),産地推定における統計的手法。考古学と自然科学,9:77-90

第2節 火山古墳群出土鉄器の検討

出土した鉄器のうち、刀剣類・刀子・鑿について、若干の検討を加える。また鉄鏃の分類等については、一覧表に掲げる。

1 刀剣

火山古墳群からは大刀 2 本 (M 1・M 26)、大型刀子 4 本 (M 46・M 47・M 48・M 100)、剣 2 本 (M 25・M 143) の 8 本が出土している。

2号墳出土のM1と4号墳第2埋葬施設のM26の大刀について、若干の検討を加えておく。これらは茎長が共に16.0cmでありながら、M1が隅抉尻茎、M26が一文字尻茎と型式が異なる。この時、柄装具はどちらも楔形の柄頭をもつ型式であった。こうした相違は何を起因とするのだろうか。

刀身に楔形柄頭の柄装具を装着するには、柄装具の背側に溝を切り、茎を落としこむ方法を用いる。 素材が木質の場合、柄頭・柄間・柄縁装具を共造りすることができるが、鹿角の場合、素材自身の制約 によって、柄頭・柄間・柄縁装具を別造りにする。柄装具が共造りの場合、茎尻が真っ直ぐな一文字尻 茎の方が落としこむための溝を作りやすくはないだろうか。言い換えれば、別造りの柄頭を差し込んで 組みあげやすいのは隅抉尻茎の方である。

このように、柄装具の素材によって、茎の型式が選ばれてきた可能性がみえてきた。このことは単に、茎の型式で遺存しない柄装具の素材を想定できるだけでなく、装飾大刀の製作過程の一端を匂わせるものである。例えば、製作工房にくる注文は刀装具の型式だけでなく、素材の指定もあった。工房では指定に合わせた茎を選び、刀鍛冶へ依頼する——というように。

なお、本文では明言しなかったが、M1の鞘装具が鹿角製である可能性がある。柄装具と鞘装具は同じ素材で造られることから、隅抉尻茎が鹿角製柄装具に用いられることを示す一例といえよう。

従来より、刀子は工具として扱われており、火山古墳群でも大半の刀子は工具としている。しかし、刀身長が30cmに及ぶ大型刀子については武器として扱うことにした。というのも、M100には柄頭もしくは鞘尻に金属製の装具(M101)が施されていたようであり、明らかに他の刀子とは異なってくるからである。M100が副葬された時期には大型刀子に装飾を施す例が多い。これは大型刀子が工具ではなく、「刀剣」として扱われていたことを示すものといえよう。このように、工具から刀剣に「昇格」した大型刀子が社会的にどのような価値があったのかについては、今後の検討課題としたい。

剣は長剣(M25)と蛇行剣(M143)の2本が出土した。この2本を比べた時、M25は重厚で実用的であるのに対し、M143は非常に華奢で非実用的なものであることがよくわかる。

蛇行剣はその特異な形態と非実用的な造りから、祭器か威信財であることは早くからいわれていた。 最近の研究成果によると、蛇行剣はA~Cの3タイプに分類ができ、造形意図に基づいた2つの系譜が あること、5世紀から6世紀代にかけての南九州から関東に分布することがわかっている。M143が該 当するCタイプは、畿内~南九州を分布域とする最も類例の多いタイプで、その大半が南九州の地下式 横穴墓から出土するという特色がある。また、このタイプは身部長を最大限活用して屈曲するものを古 相、身部の一部に突出部を捻出するものを新相と細分することができ、M143は古相にあたる。

蛇行剣の分布が政権の中枢部ではなく、周辺域もしくは地方へと拡がっているうえに、それらの地域 が交通の要衝にあたるという共通点がみられることから、蛇行剣が畿内政権によって造られ、各地の首 長層に与えられたものであることが示唆されている(北山1999)。

これまでに兵庫県内で出土した蛇行剣は、管見では加西市亀山古墳の2本と朝来郡和田山町茶すり山 古墳の2本がある。今回、M143を出土した火山古墳群は県内5例目で、丹波国初の出土例となる。蛇 行剣が主要地域の交通の要衝を治める首長層に、威信財もしくは祭器として与えたものであるならば、 この地域から蛇行剣が出土したことは、この地域及び火山古墳群の被葬者と畿内政権との強い結びつき を匂わせている。

2 刀子

火山古墳群からは計17本の刀子が出土している。これらの刀子の特徴をあげておきたい。

第1に、茎元幅1.0cm、茎長4.0cmを基準に、A・B・Cの3タイプに分けられることである。Aタイプ(茎元幅1.0cm以下、茎長4.0cm以下)はM3・M32などが該当する。Bタイプ(茎元幅0.8cm以下、茎長4.0cm以上5.0cm以下)は7・9・10号墳の刀子のほとんどが当てはまり、Cタイプ(茎元幅0.8cm以下、茎長5.0cm以上)はM50・M121・M123などになる。一般的に、刀子は時代が下るにつれて、大型化する傾向にある。火山古墳群においても、小型の刀子は3・4号墳第1主体部といった古い時期の古墳から出土し、大型の刀子は新しい時期に比定できる遺物と共伴するなど、一般的な傾向が窺える。こうした刀子の傾向を丁寧に追うことで、追葬の順を判断することも可能である。

第2は柄である。柄の材質は木質が主で、M50だけが鹿角装である。柄の形式は、①筒状の柄に茎を差し込むタイプ ②板状の木質を繊維質の紐で巻きとめるタイプ ③茎を直接繊維質の紐で巻く…の3種類があった。各タイプの相違を比較する材料として、茎長・茎元幅・目釘孔の有無・茎尻があるが、目釘孔はすべての個体で確認できず、茎尻の形式もM51・M52が角尻の可能性がある以外はすべて栗尻となり、特徴が見出せなかった。ただ、茎元幅・茎長で比較した時、試料数が限られるため、確実性には乏しいものの、巻痕のあった刀子の茎長がどれも4.0cm代にあることは留意しておきたい。なお、M126のように、柄縁装具をもち、柄木の木質に巻痕らしきものがあるものもある。

第3に研ぎ減りとみられる刃の欠損である。火山古墳群では、17本中7本で研ぎ減りとみられる刃の欠損がみられた。不明の2本を差し引くと、完存していた分とほぼ同数になる。研ぎ減りがみられた刀子は3・4・7号墳に集中し、9・10号墳に研ぎ減りしていない刀子が集中するという偏りがみられる。こうした傾向が大きさによるものか、時期によるものか、副葬される刀子に対する意識の変化によるものか、ここで言及することはできないが、研ぎ減りの有無も被葬者の性格——ひいては、刀子そのものの性格の変化を考える上での着目点であることは確かである。

3 鑿

鑿は叩き鑿と突き鑿の2形式に分けることができる。叩き鑿は柄頭を叩いて材を穿つ荒削り用であり、 突き鑿は手の力で材を削る仕上げ用として使われている。このような機能差は構造にも表れ、叩き鑿は 強い打撃に耐えられる頑丈な造りになり、突き鑿は叩き鑿に比べて薄い造りとなる。

さて、火山古墳群では3基の古墳から、叩き鑿1本、突き鑿2本の計3本が出土した。叩き鑿(M27)は4号墳第1主体部、突き鑿は7号墳(M57)と9号墳(M119)からである。M27は鉄鎌・鉄斧・刀子・鑵子と他の農工具とのセット関係が認められるが、M57・M119は刀子ぐらいしか想定できず、むしろ、単独で副葬されたような印象を受ける。

7 出土鉄鏃一覧表

十一年力	**************************************	工工条件	1 1	7	4米十八田/	1,127	り 身 部	.12		頸部		奉	
中頃名	土体即寺	たずが辞	人形式	#2.tZ	间体数	鏃身外形		個体数	頸部の有無	関部	個体数	茎部の有無	
2号墳	第1埋葬施設	無茎・短茎鏃群	А	_	1			1	斯 ·		1	無素	M2
							無関	14	申	白形類	14	有圣	M4~M9 · M10~M12 · M17 ~M19 · M23
3号墳	是擴內	長頸鏃群	C-片刃鏃	Ħ	16	一片刃形	角関		国	将署		有条	M14 • M15
							無関	1	月.	斜翼	1	相条	M16
		無茎・短茎鏃群	А		_			1	#i-			無機	M33
	第 1 埋葬施設	長頸絲群			œ	(欠損)		œ	申 ·	無関	1	有圣	
		T-1-7-10/1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-			0	MIN		ס	里.	角関	2	有茎	M35 • M36
i		無茎・短茎鏃群	А			:		-)洪		-		M37
4号墳		腸抉三角形鏃群		_	2	長三角形	逆刺	2	有		2	有茎	M40 • M41
	いる田塔格当							1	有		1	有茎	M39
	7.7.4.4.温及	巨硒锑群	第一七一二	E	Ľ	1 日 日	一座和	c	有	斜関	2	有茎	M42 • M45
		大型数年	YMV ローン	=	0	77.77		c	有	台形関	1	有茎	M44
							逆刺なし	1	有	角関か	1	有茎	M43
									有	角関	4	有茎	M58 • M60 • M70
		腸抉三角形鏃群		П	11	長三角形		11	車	台形関	2	有茎	M62 • M66 • M67 • M68
									有	棘状関	2	有茎	M59 • M61 • M64 • M65 • M69
		二年万铢野	В	-	1	巨二角形	無関	1	有	棘状関	1	有茎	M72
		——————————————————————————————————————	D	-	4	X-AN	角関	4	有	角関	4	有茎	M73 • M74 • M75 • M76
7号墳	松阳									台形関	1	有茎	M77
			A-三角形鏃	>	3	二角形		3	有	無関	1	有茎	M78
		*#************************************								棘状関	1	有茎	M79
		収型崇拝					<i>4</i> . ⊞		卓	角関	2	有孝	M83
			B-長川毎別織	2	10	長二角形	用圏	10	早	華光麿	4	有菜	M82 • W84 • W86
					}	<u> </u>	無関	}	—	棘状関	4	有数	• M87
1	1	775 VIV 227	B-長三角形鏃	\geq		長三角形	角翼		· 早	棘状関	-	有数	1
8 岩墳	附至	長頸鏃群	C-TA線	; III		万万形	無置	-	一	棘 大 関	-	有琴	M93
			Vine () ()				1			神光暦	-	有某	M105
		三角形鏃群	Ω	_	2	長三角形	角関	2	世	角関		本	M106
İ			1	;	(1	336 45.0		早	色質		有菜	M111
9号墳	石室	701 440 121	A-三角形鏃	>	က	三角形	運河	က	T 1	棘状関	2	有幸	M109 • M110
		校型崇群	きなり	F	ı	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	角関	4	· 神	棘状関	4	有茶	M112~M115
			8-収川風方鬃	Λ	C		無関	1	有	棘状関	1	有茎	M116
		丰頭鏃群	В	П	1	圭頭形		1	無	角関	1	有茎	M127
			4	_	2	長二角形	華	2	無	無関	1	有茎	M128
		二年形絲群			1		To lawr	1	#	角関		有圣.	M129
Ē		THY 80/11	D	_	2	長三角形	角関	2	恒	位形 加 加	_	村村	M140
105項	 								□		-	世	
		1 11 11		,		1	77		恒	角関	2	大	• M139
		腸祆二角杉鏃群		_	6	長二角形	 	6	自	口売園	2	祖 美	M131~M134 • M135
									有	棘状関	2	有著	M137 • M138
		長頸鏃群	B-長三角形鏃	Ν	_	長三角形	角関	-	卓	棘状関	-	有茎	M142
			A-三角形鏃	Ν	1	三角形	角関	1	有	(欠損)	1	(欠損)	
							毎関	٧	重.	角関	2	有茎	M145 • M148~M151
						:	K		重	棘状関	-	有達	M146
13号擂	2 1 字休部	長姫雛群	B-長三角形鏃	Ħ	10	長三角形	撫関	1	重.	無関		有茎	M152
X 1.01				_			大田	er.	重.	無関		有茎	
									重:	瀬瀬	5	有整	M154 • M155
				E	0	平と形	推開	1	有	角関		有圣	M147
			VINC / I / O		1	71(5/1/	J. W. W.	1	有	無関	_	有茎	M159

第3節 火山古墳群出土土器の検討

火山古墳群は8基の木棺直葬墳(1~6・12・13号墳)と5基の横穴式石室墳(7~11号墳)からなり、大半の古墳から須恵器を中心とする供献土器が出土しているため、出土土器の検討を通じて古墳群の変遷を明らかにすることができる。ただし2号墳以外の木棺直葬墳では、埋葬施設に明確に伴う土器がないため、墳丘の供献土器で時期を判断する。また横穴式石室では、数次の追葬および石室内の土器の掻き出しがあり、本来の副葬履歴は失われているため、土器の型式差によってグループ化する。

出土土器のうち、個体数が最も多く、型式変化も認識しやすい須恵器蓋杯を中心に観察し、他の器種も補助的に用いた結果、I~V期の時期区分を設定した。さらにV期はV-1期とV-2期に細分した。 設定した時期の年代観については、『陶邑』における「田辺編年」(田辺1981)、および播磨地域の「永井編年」(永井1995)に比定して示す。

I期

3号墳の蓋杯(5~9)は古墳群中で最も古い形態を示す一群で、蓋の口縁部と天井部の境界には稜線が突出し、蓋・身とも口縁端部に匙面をもつ。器壁も薄く、丁寧に調整されている。口径は蓋が約13 cm、身が11.4cm。

2・4号墳には時期を云々できる蓋杯はないが、壺(3・11)は断面三角形のシャープな突帯をもち、 やはり I 期に属する。

5号墳の須恵器は前者に比べるとやや調整が甘く、時期的には後出するものと思われる。

時期は「田辺編年」のTK23~TK47型式、「永井編年」ではI期からやや遡る時期を含む。

Ⅱ期

7号墳裾小土坑の蓋杯(108・113)は7~11号墳出土土器の中で最も古い特徴をもち、むしろ10号墳の成立に関わる時期のものである。蓋の口縁部と天井部の境界は明瞭で、蓋・身とも口縁端部に内側に傾く面をもつ。

10号墳の蓋杯(173・175・185~187)は身の立ち上がり部が短い、口径の小さいものがある、端部を丸く収めるなど、前者に比べて細部に新しい様相が認められる。他の器種については不明だが、環状の把手をもつ提瓶(217)はこの時期に属する可能性がある。

Ⅰ期とⅡ期の間には型式的に開きがあり、編年観の上では「田辺編年」のTK10型式、「永井編年」のII期2小期に相当する。

Ⅲ期

7号墳の杯身(49~54)は立ち上がり部の長さが1 cm強で、石室内では最も古い一群である。特に49~51は立ち上がり部の伸び・角度から、III期の中でも古く位置付けられる。口径はおよそ12~14cm、器高4~4.5cm。杯蓋(31・32・35・37・38)は口縁部と天井部の境界が不明瞭となる。形態上、III期とIV期の区別は困難であるが、回転ヘラケズリが頂部に達しているのを1つの目安としておく。口径はおよそ14~15cm、器高4~4.5cm。

10号墳の蓋杯(174・176~181・188~192)にもやや先出(188・189・192)と後出(190・191)の傾向をもつものがある。なお蓋の口縁部内側をつよくナデて、段状に仕上げる癖が共通して認められ、この時期以降にも引き継がれる。また S X01の蓋杯(228・229)もこの時期の古い段階にあたるため、 S X

01の共伴土器(230~232)の他、角状の把手をもつ提瓶(218・219)もこの時期に属すると考えられる。 その他、有蓋高杯(195~203)のセットは、いずれも前庭部下の西側テラスからの出土で、一括の供献 土器とみられる。

時期は「田辺編年」のTK43型式、「永井編年」のⅡ期3小期に相当する。

[[]]

9号墳の杯身(145・146)は形態的にやや古い様相が残るが、回転ヘラケズリの省略が大きく、IV期の古相とする。

7号墳の杯身(55~63)・9号墳の杯身(147~150・155)は立ち上がり部の長さが1 cm弱で、内傾化が強まる。これらのうち回転ヘラケズリが頂点に達しない58・60・155を後出要素とする。口径はおよそ12~14cm、器高3.5~4.5cm。

7号墳の杯蓋 (33・34・36・39~41)・9号墳の杯蓋 (141・143) は形態上、Ⅲ期とⅣ期の区別が困難なため、回転ヘラケズリが頂部に達していないのを1つの目安としておく。口径はおよそ13~14.5cm、器高3.5~4.5cm。

10号墳の蓋杯 (182・183・193・194) も回転ヘラケズリが頂部に達していないのは前2者と同様である。さらに蓋 (182・183) の口縁端部に観察されるヤスリ状の調整痕も7号墳の33・34と共通している。10号墳はこの段階で追葬を終えているようで、新しい要素をもつ提瓶 (220・221) はこの時期に属するとみられる。

時期は「田辺編年 | のT K 209型式、「永井編年 | のⅡ期 4 小期のある段階に相当する。

V-1期

蓋杯の矮小化が進み、回転ヘラケズリは施されなくなる。

7号墳の杯身(64~67)・9号墳の杯身(156~158)は立ち上がり部の長さが5 mm 前後で、受け部が短く外へ開く。口径はおよそ11~12cm、器高3.5cm前後。

7号墳の杯蓋(42・43)・9号墳の杯蓋(142・144)も法量の小型化が進む。口径はおよそ12.5~13 cm、器高3.5~4cm。

時期は「田辺編年」のTK217型式の古段階、「永井編年」のⅡ期5A小期に相当する。

V**─2期**

法量のうち、口径の小型化がより進む。

7号墳の杯身 (68~77) ・8号墳の杯身 (131~136) は立ち上がりの基部が y 字形に接合して、受け部が溝状を呈する。7号墳は口径がおよそ10~11cm、器高3.2~4.4cmなのに対し、8号墳の132~136は口径10cm未満、器高4cm未満。

7号墳の杯蓋(44~48)は口径がおよそ11~12cm、器高3.5~4cm。8号墳の杯蓋(125~130)は口縁部が直立気味に仕上げられ、口径10~11cm、器高3.5~4cm。

全体的に7号墳より、8号墳の方がさらに後出の傾向を示し、11号墳の蓋(233)はその最終段階に 位置付けられる。

時期は「田辺編年」のTK217型式の新段階、「永井編年」のⅡ期5B~C小期に相当する。

第4節 火山古墳群の形成と変遷

1 火山古墳群の形成過程

火山古墳群は割竹形木棺を納めた木棺直葬墳から矮小化した横穴式石室まで、古墳時代中期末から終 末期に至る各段階の古墳を網羅する古墳群である。前節で検討したように、出土した土器から、各古墳 の築造時期をおさえることができる。各古墳の築造時期については第3節で説明したが、再度須恵器の 詳細な検討を踏まえて、より細かな築造の先後関係まで検討してみよう。

木棺直葬墳の築造時期

土器から見て最も古いのは、 I 期古段階に位置づけられる 3 号墳である。 4 号墳も I 期の範疇におさまる。 3 号墳と 4 号墳のどちらの古墳が先行して造られたかは判断が難しい。立地を見ると、 4 号墳の方が高所を占めているが、先後関係を決める決め手にはならない。墳丘では 3 号墳が埴輪を持ち規模でも優位であるが、副葬品では 4 号墳が優位であり、古墳の格からも判断が難しい。唯一比較できる材料としては副葬品がある。鉄鏃はいずれも長頸片刃箭式を主体としているが、 4 号墳のものは逆刺がしっかりと作られているのに対し、 3 号墳のものは逆刺が明確ではない。これを時期差と理解するなら、 3 号墳よりも 4 号墳に古い型式の鉄鏃が副葬されていることになり、 4 号墳が先行する可能性が高くなる。結論としては、 4 号墳 \rightarrow 3 号墳の順に築造されたものであると考えておく。

これらの古墳に続くのは I 期新段階の土器を副葬する 2 号墳である。 5 号墳の須恵器は田辺編年のM T 15型式に相当すると思われるので、 2 号墳よりもさらに築造時期が下る。 6 号墳は古墳かどうかさえ明らかではないが、古墳であれば立地から見て 5 号墳に後続するものであろう。 1 号墳は土器が出土していないため、時期決定が困難であるが、立地から見て 2 号墳に後続すると考えられる。

以上のように尾根上に立地する $1\sim6$ 号墳の 6 基の木棺直葬墳については、 4 号墳 \rightarrow 3 号墳 \rightarrow 2 号墳 \rightarrow 1 号墳・5 号墳 \rightarrow (6 号墳)という順序で築かれたと考えられる。 1 号墳と 5 号墳については、先後 関係を比較する材料に乏しいため、順序は不明である。

この他に木棺直葬墳としては12号墳、13号墳が古墳群の最も高所を占めて立地しているが、この両古墳とも土器が出土しておらず、時期の決定が難しい。13号墳の副葬品の内、鉄鏃は長頸柳葉式が主体をなしており、少数長頸片刃箭式が混じる。火山古墳群では、横穴式石室から出土する長頸鏃は柳葉式もしくは腸抉柳葉式が大半であり、3・4号墳の片刃箭式主体のあり方とは対照的な様相を見せる。13号墳の鉄鏃の組成は、3・4号墳の鉄鏃組成から7号墳などの横穴式石室墳の鉄鏃組成への過渡的な様相と理解できるので、13号墳は3・4号墳よりは新しく、横穴式石室導入よりは古い時期、すなわち6世紀初頭に位置づけられよう。

横穴式石室墳の築造時期

横穴式石室墳のうち、石室自体が最も古い形態を示すのは10号墳である。この古墳は木棺直葬墳と同様に尾根上に築造されており、5号墳ないしは6号墳に続いて築かれたものと理解できる。その築造時期は石室内の出土土器からはII期新段階と判断できる。ただしここで、検討しておかなくてはならいのが、7号墳の墳丘周辺(墳丘裾や周溝)から出土している土器である。これらの土器はII期古段階にまで遡るものがあり、10号墳の石室内から出土した土器よりも明らかに古い時期のものである。これが7号墳に伴うものであるとすれば、10号墳よりも7号墳が先行して築造されたことになるが、石室の型式





第10図 火山古墳群全体図

学的検討の面でも古墳の立地の面でも、7号墳が先行するとは考えがたい。これらの土器は7号墳に伴うものと考えるよりは、直上に立地する10号墳の石室内から追葬時に掻き出され、その後転落してきたものであると考えるのが妥当であろう。よって10号墳の築造がⅡ期古段階まで遡る可能性も考えられる。

このように 7 号墳の墳丘周辺から出土している古手の土器を10 号墳に由来するものであると解釈すれば、7 号墳の時期は石室内の遺物が決定することになる。石室内の土器で最も古いのはIII 期古段階であり、これが 7 号墳の築造時期であると言える。 7 号墳に続くのは 9 号墳であり、IV 期に築造されたものである。その後 V-1 期に築かれたものはなく、V-2 期になって古段階に 8 号墳、新段階に11 号墳が築造される。

以上をまとめると、横穴式石室墳は、10号墳 \rightarrow 7号墳 \rightarrow 9号墳 \rightarrow 8号墳 \rightarrow 11号墳の順に築造されたことになる。

横穴式石室墳の追葬

 $7 \sim 11$ 号墳の 5 基の横穴式石室のうち、 7 号から10号墳の 4 基の古墳については、石室内での副葬品の片付けや石室外への掻き出しが認められ、出土遺物に時期幅が認められるので、追葬が行われたことがうかがえる。 7 号墳については、初葬がIII 期古段階であり、その後、IV 期、V 期と埋葬が継続して行われ、最低 3 回以上の追葬が行われている。最終の埋葬はV-2 期である。

8号墳は初葬がV-2期であり、同じ時期の内に1回以上の埋葬が行われている。9号墳はIV期が初葬であり、以後V-1期まで2回以上の追葬が行われている。10号墳は初葬がII期であり、以後III期、IV期と2回以上の追葬がおこなわれている。11号墳は小型の石室であり、おそらく単葬墓であろう。

古墳群の形成過程

以上の古墳の築造時期と追葬の時期をまとめると下の表のようになる。

表8 火山古墳群における築造・追葬の時期と土器編年の対応

	I期		Ⅱ期	Ⅲ期	IV期	V-1期	V-2期
田辺編年	TK23-TK47	MT15	TK10	TK43	TK209	TK217(古)	TK217(新)
永井編年	I期	Ⅱ期1	Ⅱ期2	Ⅱ期3	Ⅱ期4	Ⅱ期5A	Ⅱ期5B-C
4号墳	• 🛦						
3号墳	•						
2号墳	•						
13号墳		•					
1号墳		•					
12号墳		•					
5号墳		•					
6号墳		•					
10号墳			•	A	A		
7号墳				•	A	A	A
9号墳					• 🛦	A	
8号墳							•
11号墳							•

●築造 ▲追葬

前頁の表のように、火山古墳群では5世紀後半から7世紀前半まで、古墳の築造、埋葬がほとんど途切れることなく続けられたことが分かる。4号墳、3号墳が築かれたあと、2号墳、13号墳と築かれるが、木棺直葬墳が築造される時期には大きく3グループに墓域を分割して群形成を行っている。すなわち3号墳→2号墳→1号墳と続く、尾根の最も北側を占めるグループ、4号墳→5号墳→6号墳と続く、尾根の南側を占めるグループ、13号墳→12号墳と続く、丘陵の最高部を占めるグループの3グループである。しかしこれらのグループが、古墳群を築いた人々の集団構成を反映するものでもなさそうである。というのは、木棺直葬から横穴式石室に移行して以降、古墳はほぼ1世代を経過する毎に新たに1基づつ古墳を築いていくという経過をたどって、古墳群が成長していくのであって、木棺直葬墳の3グループがそれぞれ横穴式石室墳に転換していくという様子はうかがえない。

つまり木棺直葬墳の占地の違いは、血縁集団がさらに小単位に分節され、それぞれが独立して造墓活動をおこなったことを示すのではなく、ひとつの血縁集団が世代毎に火山の3箇所の造墓適地から適当な葬地を選び、そこに古墳を築造したことを示すのであろう。

横穴式石室に転換して以降は、 $\Pi \sim IV$ 期にかけて1世代1基程度のペースで古墳が作られる。ところがV-1期には、追葬は盛んに行われているものの、新たな古墳が築かれない。次に古墳が築かれるのは、10号墳と9号墳の追葬が途絶え、7号墳でも最後の埋葬が行われていたV-2期である。この時期に8号墳が築かれ、わずかな期間追葬が行われたのちに、単葬の小型の石室をもつ11号墳が築造され、これをもって火山における古墳の築造は終焉する。

2 横穴式石室の構造の変遷

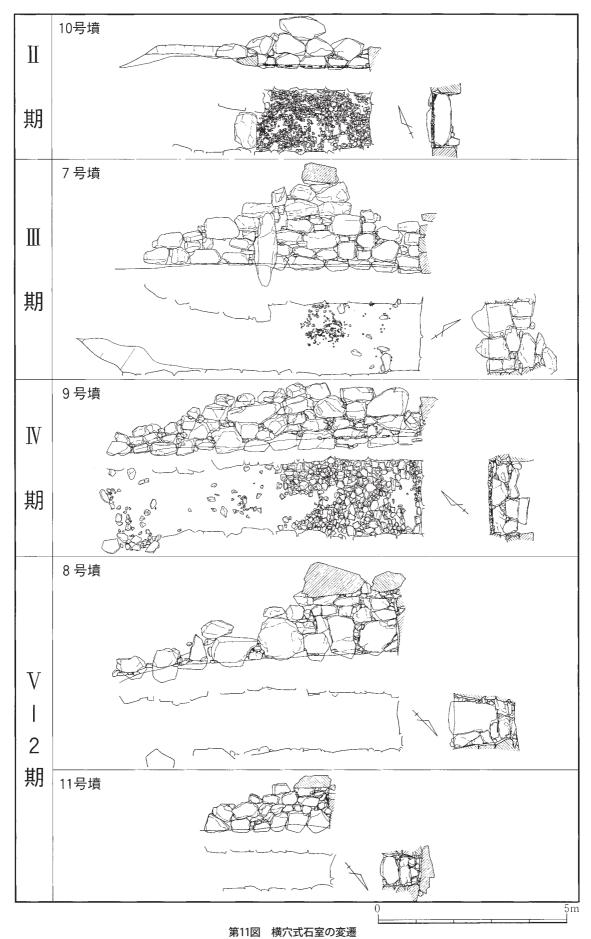
火山古墳群では6世紀前半の導入期の横穴式石室から、7世紀の終末期の横穴式石室まで5基の横穴 式石室墳を調査したが、その結果、丹波地域における横穴式石室の変遷を知ることができた。石室はい ずれも玄室幅と玄室長の比が1対2という、畿内型横穴式石室に共通な平面プランをもつが、それぞれ の構造は大きく異なる。

10号墳の石室は玄門外側に框石を置き、玄室が羨道よりも1段下がる、羨道部が未発達で墳丘を掘りくぼめた墓道をもつ、という特徴をもち、竪穴系横口石室の系譜につながるものである。この石室は春日町では6世紀前半の春日町多利向山C2号墳(兵庫県教委1986)に続く時期のものであり、導入期の横穴式石室が畿内型の横穴式石室へと移行してゆく過程を考える上で貴重な資料である。

7号墳の石室は平面プランこそ一般的な畿内型の横穴式石室に近いが、羨道が開く・羨道側壁の基底部が床面より高い・閉塞を玄門のすぐ外側で行う・袖石は大型の石材1石で構成される、などの特徴をもつ。これと共通する特徴を持つ古墳は京都府竹野郡丹後町大成7・8号墳・上野1号墳や同与謝郡野田川町高浪古墳、兵庫県篠山市ずえが谷西1号墳(兵庫県教委2002a)など丹後・丹波地域に散見される。畿内型横穴式石室と在地の竪穴系横口式石室が融合した、近畿地方北部に特有な横穴式石室の1バリエーションととらえることができる。

9号墳の石室は無袖の横穴式石室であるが、玄門付近がくびれ羨道が開くという特徴をもつ。同様な特徴を持つ古墳としては京都府竹野郡網野町相谷古墳・岡1号墳があげられる。これも丹後・丹波地域に特有なものと考えられる。

8号墳では大型の石材で壁面を構成すること、石室の平面プランが狭長であること、石室構築前に基 底部の造成を大規模に行いそれにともない列石で土留めを行うこと、以上三つの点が先行する古墳と異



— 87 —

なる点である。石材の大型化、平面プランの狭長化は畿内の横穴式石室と共通する変化であり、9号墳までの横穴式石室に見られたローカル色は払拭されている。墳丘の基底部の大規模な造成は斜面に直交して石室を築くための工夫と考えられるが、それに伴い列石を構築する例は現在までのところ確実な例は他にはない。ただ墳丘内に列石が観察された例がこの時期に他に存在する(多可郡中町東山古墳群)(中町教委2001)ので、列石によって土留めを行いながら墳丘を構築するという技法が存在する可能性も考えられる。

11号墳は小型の横穴式石室をもつ古墳であり、このような古墳は姫路市西脇古墳群(兵庫県教委1995)など終末期の古墳群で類例がある。石室の構築技法は8号墳とは差がない。

以上のように、火山古墳群では、畿内型石室の影響を受けた竪穴系横口式石室(10号墳)⇒竪穴系横口式石室の伝統を残した横穴式石室(7号墳)⇒丹後・丹波地域に特有な横穴式石室(9号墳)⇒在地色を失った横穴式石室(8・11号墳)という変化が見られる。このような変化は、篠山市灰高古墳群・ずえが谷西古墳群(兵庫県教委2002b)でも認められており、地方における横穴式石室の変遷を考える上で重要な資料が得られたといえる。

3 火山古墳群と古墳時代の氷上郡

火山古墳群の所在する丹波市春日町は、丹波市内(旧氷上郡内)では唯一前方後円墳が築かれた地域であり、古墳時代における氷上郡の中心地であったことは間違いない。野上野の二間塚古墳と桂谷寺古墳、黒井の稲塚大塚古墳、坂の坂1号墳などの前方後円墳が存在する(氷上郡教委1995)。いずれも発掘調査を経ていないため、正確な時期は不明であるが、墳丘や遺物、石室の観察から5世紀後半~6世紀の時期のものと考えられる。前方後円墳はいずれも小型のものであるが、春日町域に拠点を有する首長がヤマト政権との関係で氷上郡の他地域の首長よりも優位な立場にあったことを物語るのであろう。特に二間塚古墳、桂谷寺古墳が所在する黒井川と竹田川の合流点付近は、弥生時代に丹波屈指の大集落である七日市遺跡(兵庫県教委1990a・2004b)が営まれ、8世紀には氷上郡衙の別院であった山垣遺跡(兵庫県教委1990b)・七日市遺跡が所在するなど、氷上郡東部(由良川水系竹田川流域)の中心地であった。

これらの首長墓以外にも丹波市春日町域には、近畿自動車道舞鶴線の建設に伴い調査した松ノ本古墳群(兵庫県教委1985)、多利向山古墳群(兵庫県教委1986)など多くの古墳がある。これらの古墳群は松ノ本古墳群のように木棺直葬墳のみからなる古墳群もあるが、多利向山古墳群は火山古墳群同様に木棺直葬墳から横穴式石室まで続いている。春日町域の古墳群の特色としては、現在の集落に対応するような形で、背後の丘陵上や山裾に古墳群が営まれていることである。古墳群の規模は火山古墳群の13基というのは最も大きな部類であり、ほとんどは10基未満の古墳からなる。しかもどの古墳群も直径10m程度の古墳からなり、大型の古墳で構成されるような古墳群は存在しない。このような古墳のあり方は、40基以上の古墳からなり、群内に直径20mクラスの大型古墳を含む七ツ塚古墳群や氷上郡最大の横穴式石室をもつ藤の目4号墳が所在する柏原町・氷上町など氷上郡西部の古墳のあり方と大きく異なる。

氷上・柏原の古墳が数を増し、大型化するのは6世紀後半以降であり、春日町域で前方後円墳の築造が終わってからである。6世紀後半に爆発的に古墳が増加する氷上・柏原地域に対して、春日町域は火山古墳群のように5世紀後半から安定して古墳を築造し、7世紀の古墳の終焉まで連綿と続くのが通常のあり方であると言えるのではないだろうか。このような違いは、弥生時代に七日市遺跡が営まれ、早

くから開発が進んでいた春日地域と、それまで未開の部分が多く、古墳時代後期に新たな開発をおこなうことにより、人口の増加が生じた柏原・氷上地域との開発の歴史の違いを反映するのではないだろうか。伝統的首長のもと安定していた氷上郡東部と、新興首長のもと古墳時代後期に急激な発展を遂げた氷上郡西部の差は東西の力関係を逆転させ、古墳時代後期には加古川流域が優勢となり、その結果、律令期においては氷上郡衙が氷上郡西部に置かれるに至ったのだろう。火山古墳群は、氷上郡東部における「長期安定形成型」の古墳群の典型であると言えるだろう。

第5節 火山城跡の検討

1 概要

火山城跡は、丹波の名城「黒井城」より南方約 2 kmの北向きの尾根線上に位置し、最高部の標高は約160mで、麓の水田部との比高差はおよそ60mである。城跡としての遺構が認識できる範囲は山頂部を中心とした南北約60m、東西約25mの限られた範囲で、調査で見つかった遺構も尾根線を整形した曲輪群(第 $1\sim5$ 郭)と斜面の各所に設けられた平坦地 7 箇所、それに西側斜面の平坦地をつなぐ帯曲輪などに過ぎない。

以上のように火山城跡は、比較的単純な遺構で構成された小規模な山城と言えるが、このような城跡が類型的・時代的にとのように位置付けられるか、検討してみたい。

2 遺構

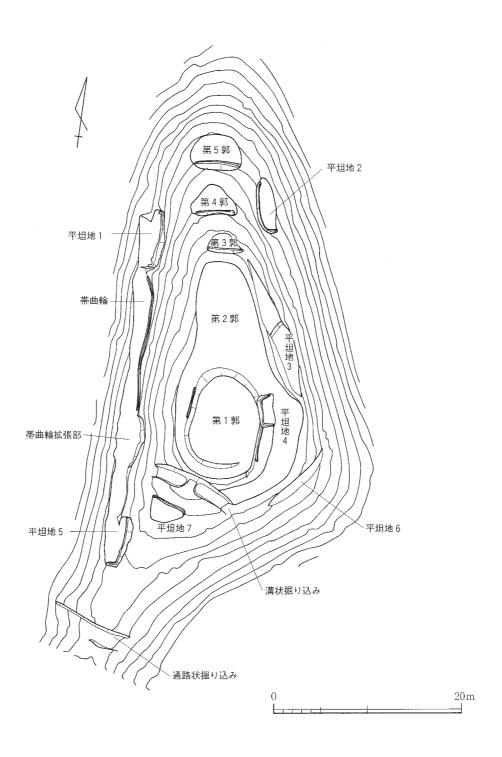
尾根線の曲輪群のうち、第1郭は円墳(13号墳)を利用したもので、墳丘の裾部を切り立てて通路部分を作り出した以外は、大きな改変を行っていない。特に古墳の墳頂部には埋葬施設が残っている状態で、曲輪の上面を平坦化しようとする意識は薄いようにみられる。つまり第1郭では曲輪上面の利用よりも、第2郭と同レベルでつながる第1郭周囲の通路部分の活用に重点が置かれているといえる。

逆に第2郭では平坦面の確保が強く意識されており、12号墳の削平と整地によって、曲輪群の中で最も広い、約60㎡の平坦面を有している。ここからは第1郭西側の通路・東側の平坦地4などとスムーズに連絡を取ることができる。

第1・2郭に対して第3~5郭や平坦地1~7は、立地・規模・構造などの上で大きな変わりがなく、両者は同様の性格をもつスペースと考えられる。ただし尾根線の西側斜面では、帯曲輪が平坦地1・5 および自身の拡張部の3つを連絡している。この帯曲輪には第1郭背後の鞍部から下りて行くことができ、有機的なつながりをもつエリアを形成している。

鞍部の最も低い所には通路状の掘り込みがあり、尾根を切通し状に横断している。ここには現代の山道も取り付いていて、掘り込み自体の時期は不明であるが、城への登り口の1つであろうことは当然考えられる。

上記の山頂部の遺構以外に、第1郭から南東方向へ延びる尾根の鞍部に時期不明の盛土遺構があり、 現代でも斜面からの寄りつきを遮っていた。これが城跡に伴うものかどうかは判らないが、山城の遺構 が残る山頂部分以外にも、実際に利用される範囲が広がっていたことは充分に考えられる。



3 遺物

出土遺物の中で山城に伴うとみられる時期のものは数少なく、図化しえた土器は土師器小皿 (238)、 瓦質土器鍋 (246)、土師質もしくは瓦質擂鉢 (247) のみである。甕・壺などの貯蔵具は出土しなかった。土器の年代は15世紀後半~16世紀代にかけてのものであるが、時期を限定できるだけの資料はない。 他に鉄火箸 (M171) は、類品が三田市中尾城跡第1曲輪(兵庫県教委1989)・神戸市兵庫津遺跡浜 崎地区の井戸SE02(兵庫県教委2004a)の出土品などにあり、15~16世紀代の年代が与えられ、城跡に伴う遺物である可能性が高い。

4 小結

火山城跡は尾根線に階段状の曲輪、斜面の各所に簡易な平坦地を設け、西側斜面にのみ帯曲輪を備える。構造は単純で、土塁・堀切・虎口といった防御施設を伴わない。造成に要した土量も、帯曲輪で切り盛りした数量が試算で10数㎡(註1)、他に第2郭で幾分ボリュームがあるとはいえ、全体でも大きな数量にはならない。

こうした簡素な構造で造成規模の貧弱な山城の調査例として、近い所では篠山市内場山城跡(兵庫県教委1993)が挙げられる。内場山城跡では尾根線の曲輪群・帯曲輪の他に、尾根先端と帯曲輪付け根の斜面に平坦地を設けている(註2)。城跡の時期は15世紀後半~16世紀後半で、16世紀後半代に改修を受けたとされる。

その他にも県内では豊岡市朝日城跡(豊岡市教委2002)・朝来町木之内城跡(兵庫県教委2001)、県外では広島市北谷山城跡(広島県教委1986)・広島県新市町四五迫城跡(新市町教委1992)三重県渡会郡玉城町山神城跡(三重県教委1992)などの類例がある。これらの諸城は曲輪が未発達で、斜面に造り出した平坦地を利用するという特徴を共有しており、15世紀後半~16世紀中頃の年代を示す。ただし曲輪・堀切・竪堀などが発達した豊岡市朝日城跡のみは16世紀後半にまで下るものである。

近年調査された豊岡市耕地谷城跡(兵庫県教委2003)はさらに小規模な遺跡で、尾根線の古墳群にほとんど手を加えず、斜面に造成した段状遺構を主な利用スペースとしている。出土遺物は皿・擂鉢のみで、貯蔵具を含まない点が火山城跡と似通っており、長期間の居住を想定していない。

丹波市氷上町穂壺城跡(氷上郡教委2004)では、斜面を階段状に造成した曲輪で、永楽銭を原材料に した鋳造などの鍛冶をしており、平坦地の用途の一端を示している。

このように戦国時代に山の斜面を段状にカットして平坦地を造成した遺構の調査例が増加しており、 火山城跡もその脈絡の中で理解することができる。上記の類例から導き出される年代は15世紀後半~16世紀中頃を中心としており、火山城跡についても、城郭遺構が発達を見せる16世紀後半の山城の範疇に は当てはまらないものと考えられる。

火山城跡については、その立地的な面から黒井城との関係が注目された。またそれに関連して隣接する朝日城・茶臼山城とのつながりも意識の内にあった。しかしここまでの検討の中で、横堀や複雑な虎口を特徴とする織豊系の陣城とは構造的に大きく隔たっており、「明智の丹波攻め」と結び付ける証拠は認められない。

むしろ先にも述べたように、城跡出土の土器が小皿・鍋・擂鉢といった供膳具・調理具のみで、壺・ 甕などの貯蔵具が見当たらない点からみて、一定期間生活をしていたというよりは、一時的な活動拠点 としての役割を担っていたと評価できる。その際に、黒井城などと有機的な関わりをもっていたかどう かは、現時点では判断できない。

註

- (1) 平坦地1・5、帯曲輪拡張部の盛土の断面積の平均に、総延長38mを乗じて約11㎡の数量を算出した。
- (2) 報告書の段階では弥生~古墳時代の竪穴住居跡と区別できなかったため、住居跡として掲載しているが、 $3 \cdot 12 \cdot 16 \sim 18 \cdot 25 \cdot 27 \sim 30$ 号住居跡の一部は山城に伴うものであった可能性があると山上雅弘氏より指摘を受けた。また他の県内外の類例についても同様に教示頂いた。

第6節 おわりに

今回の調査では、古墳時代中期末から終末期に至る古墳群と、中世の遺跡、戦国時代の山城の調査を行った。火山古墳群は、約150年にわたり連綿と続いた古墳時代の墓地であり、ひとつの古墳群を全て調査したことにより、丹波における古墳の埋葬施設の変遷をたどる良好な資料を得ることができた。また長期にわたり安定的に古墳を築き続ける古墳群のあり方は、「群集墳」とひとくくりにされることが多い後期の古墳群にも、地域の歴史的な背景によって様々な個性が存在することを示すものであった。これらの成果は今後の古墳研究に大いに貢献するとともに、丹波、氷上郡の歴史に新たな資料を提供するものとなるだろう。

また戦国時代に築かれた山城の調査は、近年研究の進展が著しい中世の城郭研究に新たな資料を加えることになった。築城主体が誰なのか、黒井城との関係をどう考えるかなど残された課題は多いが、今後新しい資料の増加により解明されることを期待したい。

参考文献

春日町1993 『史跡黒井城跡保存管理計画策定報告書』

加美町教育委員会1999 『奥豊部1号墳』加美町文化財報告3

北山峰生1999「副葬された蛇行剣―意義と特質に関する予察―」『石ノ形古墳』袋井市教育委員会

佐藤政則1979「古墳時代の釵子・鑷子について」『河内太平寺古墳』河内考古刊行会

新市町教育委員会1992 『四五迫城跡』新市町文化財調査報告第5集

杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8 奈良県立橿原考古学研究所

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

寺沢 薫1991「収穫と貯蔵」『古墳時代の研究』 4 生産と流通 I 雄山閣

豊岡市教育委員会2002 『中郷朝日遺跡群』豊岡市文化財調査報告書第33集

永井信弘1995「播磨における古墳時代須恵器の変遷」『小谷遺跡(第6次)』加西市教育委員会

中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室2001 『東山古墳群Ⅱ』中町文化財報告25

氷上郡教育委員会1995 『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(2) ―兵庫県氷上郡春日町―』

氷上郡教育委員会2004 『穂壺城跡現地説明会資料』

兵庫県教育委員会1985 『松ノ本古墳群』兵庫県埋蔵文化財調査報告第26冊

兵庫県教育委員会1986 『多利向山古墳群』兵庫県埋蔵文化財調査報告第35冊

兵庫県教育委員会1989 『中尾城跡』兵庫県埋蔵文化財調査報告第67冊

兵庫県教育委員会1990a 『七日市遺跡(I)』兵庫県埋蔵文化財調査報告第72冊

兵庫県教育委員会1990b 『山垣遺跡』兵庫県埋蔵文化財調査報告第75冊

兵庫県教育委員会1993 『内場山城跡』兵庫県埋蔵文化財調査報告第126冊

兵庫県教育委員会1995 『西脇古墳群』兵庫県埋蔵文化財調査報告第141冊

兵庫県教育委員会2001 『木之内城跡』兵庫県埋蔵文化財調査報告第214冊

兵庫県教育委員会2004a 『兵庫津遺跡II (浜崎・七宮地区の調査)』兵庫県埋蔵文化財調査報告第270冊

兵庫県教育委員会2004 b 『七日市遺跡(Ⅲ)』兵庫県埋蔵文化財調査報告第271冊

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2002a 「ずえが谷古墳群」『平成13年度 年報』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2002b 「灰高古墳群」『平成13年度 年報』

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003 『ひょうごの遺跡』48号

広島市教育委員会1986 『北谷山城跡発掘調査報告』広島市の文化財第34集

古瀬清秀1991「農工具」『古墳時代の研究』 8 古墳 Ⅱ 副葬品 雄山閣

三重県教育委員会1992 「Ⅲ.山神城跡」『近畿自動車道(勢和~伊勢)埋蔵文化財調査報告―第2分冊―』

表9 土器一覧表

図版	報告No.	種 別	器 種	地 区	遺構		層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
59	1	須恵器	杯	2 号墳			西斜面畦内	最大径	(2.5)	_
00								(12.0)		
	2	須恵器	壺	2号墳			西斜面畦内 墳頂	-	(3.8)	_
	3	須恵器	直口壺	2号墳			西側裾斜面	(10.0)	(14.6)	-
	3	須恵器	直口壺	2号墳	第1埋葬施設		墓壙内	-	(14.6)	13.85
	4	須恵器	壺	2号墳	第1埋葬施設		墓壙内	- (10.0)	(11.45)	-
	5 6	須恵器 須恵器	杯蓋 杯蓋	3号墳 3号墳			東側裾東斜面	(12.8)	(4.05)	_
	7	須恵器	杯蓋	3 号墳 3 号墳			東側裾	(12.0)	(2.8)	_
	8	須恵器	杯蓋	3号墳			東斜面	(14.0)	(2.75)	-
	9	須恵器	杯身	3号墳			2103 1100	(11.4)	(3.45)	最大径 (13.7)
	10	須恵器	短頸壺	4号墳	第3埋葬施設		覆土	(9.0)	(1.9)	-
	11	須恵器	壺	4号墳	第1埋葬施設			(17.45)	(4.4)	-
	12	須恵器	器台	4号墳			北裾	(28.1)	(4.85)	-
	13 14	須恵器 須恵器	無蓋高杯 蓋	5号墳 5号墳2区			西斜面 墳裾・くびれ部	(15.0) (23.6)	(4.4)	_
	15	須恵器	提瓶	6号墳			西側斜面	(23.0)	(3.4)	_
	16	土師質	馬形埴輪(鞍?)	3号墳			東側裾	縦(6.4)	横(5.85)	厚2.6
	17	土師質	家形埴輪?	3号墳				縦(4.15)	横(4.75)	厚1.0
60	18	土師質	円筒埴輪	3号墳			東側周溝 東斜面	(22.0)	(6.05)	-
	19	土師質	円筒埴輪	3号墳			埴輪④	(20.0)	(3.95)	-
	20	土師質	円筒埴輪	3号墳			西側斜面	(26.85)	(18.4)	-
	21	土師質	円筒埴輪	3号墳			墳頂	(25.3)	(8.1)	_
	22	土師質	朝 顔 形円筒埴輪	3号墳			埴輪③	- -	(10.6)	-
	23	土師質	円筒埴輪	3号墳			西側斜面	最大径 (23.2)	(14.2)	-
	24	土師質	円筒埴輪	3号墳			埴輪②	最大径 (21.0) 最大径	(12.05)	
	25	土師質	円筒埴輪	3号墳			西側トレンチ	(19.6)	(19.15)	
	26	土師質	円筒埴輪	3号墳			墳頂	(21.9)	(12.4)	
	27	土師質	円筒埴輪	3号墳			西斜面	最大径 (23.0)	(7.8)	(10.0)
	28 29	土師質	円筒埴輪 円筒埴輪	3 号墳 3 号墳			東斜面西斜面	_	(11.95)	(16.2)
								最大径		(20.6)
0.1	30	須恵質 須恵器	円筒埴輪杯蓋	3号墳 7号墳	玄室3・4区東	I群	東側周溝 床面直上	25.3	(27.2)	_
61	32	須恵器	杯蓋	7号墳	玄室4区東	I群	//八四四工	14.6	4.15	-
	33	須恵器	杯蓋	7号墳	3区墳丘裾		暗灰色土	14.6	4.3	-
	34	須恵器	杯蓋	7号墳3区	墳丘裾傾斜変換点 羨道1区西、2区東 玄室3区東			14.5	4.1	-
	35	須恵器	杯蓋	7号墳	羨道2区西	B群		14.0	4.4	-
	36	須恵器	杯蓋	7号墳	羨道2区西 玄室1区西 3区石室南側前庭部	B群	暗灰色土	13.9	4.15	-
	37	須恵器	杯蓋	7号墳	玄室4区東Ⅰ群			14.2	4.25	-
	38	須恵器	杯蓋	7号墳	玄室4区東・西		床面直上	13.85	3.95	-
	39 40	須恵器 須恵器	杯蓋 杯蓋	7号墳 7号墳	羨道2区西羨道2区西玄室1区東・西	B群 B群	玄門付近床面直上	13.3	3.8	_
	41	須恵器	杯蓋	7号墳	玄室2~4区東 羨道2区東	- "		(13.8)	4.0	_
	42	須恵器	杯蓋	7号墳	玄室2区東 玄室3区西			12.9	4.2	-
	43	須恵器	杯蓋	7号墳	玄室2・3区西	E群		12.4	4.2	-
	44	須恵器	杯蓋	7号墳	玄室2区西	C群		12.1	3.65	-
	45 46	須恵器	杯蓋 杯蓋	7 号墳 7 号墳	玄室2・3区西 玄室3・4区東・西	E群		12.0 12.1	3.8	_
	46 47	須恵器 須恵器	M 益 杯蓋		<u> </u>	上併	床面直上 床面直上	11.65	3.9	_
	48	須恵器	杯蓋	7号墳 7号墳	玄室3区東・西	E群	/N四世上	11.3	3.7	-
	49	須恵器	杯身	7号墳	羨道2区西	A群		(14.05)	4.2	-
	50	須恵器	杯身	7号墳	玄室4区東	I群		(12.55)	4.4	9.9
	51	須恵器	杯身	7号墳	玄室4区東	I群		12.3	4.4	-
	52 53	須恵器 須恵器	杯身 杯身	7 号墳 7 号墳	玄室4区東 羨道2区東1区西 玄室2・3区東 玄室3区西	I群 A群	床面直上	12.0 12.95	3.7 4.05	-
	54	須恵器	杯身	7号墳	墳丘裾		暗灰色土	12.3	4.45	_
	~ -	00.00	11.23	. 7.2%	玄室1区西・2区東		床面直上	1		

56 東北部 中央 7 円舟 大変主任所 日前 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本	図版	報告No.	種別	器 種	地 区	遺構		層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
S7 須田縣 杯身 7号項 総治1 - 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	61		須恵器	杯身	7号墳		H群				10.9
58 38 38 38 7 79 38 28 28 38 4.6 -1.5 4.6 -1.5 4.6 6.0 38 38 48 7 79 58 58 58 48 7 79 58 58 58 48 7 79 68 58 58 61 38 58 48 7 79 78 62 28 61 38 63 48 7 79 78 62 28 63 48 7 79 78 79 78 79 78 79 78 79 78 79 79			7,7 (-2.7.1)				H群				
59 類似的 杯身 7号地 玄空 区本 日曜 12.5 4.6 6.6 60 類似的 杯身 7号地 次空 区本 日曜 12.6 3.45 5.6 61 類似的 杯身 7号地 次空 区本 日曜 12.2 3.45 5.6 62 類似的 杯身 7号地 次空 区本 日曜 11.8 3.95 5.6 63 類似的 杯身 7号地 次空 区本 日曜 11.8 3.95 5.6 64 須北部 杯身 7号地 次空 区本 日曜 日曜 11.15 3.5 5.4 65 類似的 杯身 7号地 文空 乙木麻 日曜 日曜 11.15 3.5 5.4 66 須北部 杯身 7号地 文空 乙木麻 日曜 日曜 11.15 3.5 5.4 67 須北部 杯身 7号地 文空 乙木麻 日曜 11.15 3.5 5.4 68 須北部 杯身 7号地 文空 乙木麻 日曜 11.12 3.6 5.4 70 須北部 杯身 7号地 文室 区本 区本 日曜 11.12 3.6 5.4 70 須北部 杯身 7号地 文室 区本 区本 日曜 11.12 4.4 5.6 71 須北部 杯身 7号地 文室 区本 区本 区本 日曜 11.10 3.3 5.3 73 須北部 杯身 7号地 文室 区本 区本 日曜 11.10 3.3 5.3 74 須北部 杯身 7号地 文室 区本 区本 区本 区本 区本 区本 区本 区		57	須恵器	杯身				暗褐色土	(13.0)	3.95	-
60				1114							-
61 須銀勝 科身 7号項 後遊区K齊 A群 12.6 3.45 3.45 62 須銀勝 科身 7号項 後遊区K章 D群 12.2 3.85 3.65 3.288 科身 7号項 後遊区K章 B群 12.2 3.85 3.65 3.288 科身 7号項 交至SK東 左群 床面直上 11.75 3.6 6.4 66 須銀勝 科身 7号項 交至SK東 子野 11.2 3.6 5.6 3.288 科身 7号項 交至SK東 子野 11.2 3.6 5.6 3.288 科身 7号項 交至SK東 子野 11.2 3.6 5.6 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8 5.8											
62 須忠陽 杯身 7号地 交至2 区東 D藤 11.2 3.85 1.66 3.85 6.4 須忠陽 杯身 7号地 交至3 区東 万世 11.8 3.55 1.65 6.6 須忠陽 杯身 7号地 交至3 区東 万世 11.15 3.5 1.66 3.85 1.66 3.85 1.65 3.85 1.65 3.85 1.65 3.85 1.85 3.55 1.85 3.55 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 1.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.85 3.											- 0.7
63 祖志器											_
65 須恵器 杯身 7号頭 玄変2 2 4 Kgm 11.15 3.5 5 6 6 須恵器 杯身 7号頭 玄変2 2 4 Kgm 11.2 3.6 5 6 6 須恵器 杯身 7号頭 玄変2 Kgm 11.2 3.6 5 6 6 須恵器 杯身 7号頭 玄変2 Kgm Fff 11.2 3.6 5 6 6 3 3 5 7 5 5 5 5 5 5 5 5											-
66		64	須恵器	杯身	7号墳		E群	床面直上	11.75	3.6	6.4
60 34 35 45 45 45 45 45 45		65	須恵器	杯身	7号墳		F群		11.15	3.5	-
68 須康器 杯身 7号頃 玄室3区町 上曜 11.2 4.4 7.7 7.9 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7.7 7		66	須恵器	杯身	7号墳				11.2	3.6	-
69 須恵器 杯身 7号墳 玄宮2・4 区東 11.1 3.9 3.8 6.4 71 須恵器 杯身 7号墳 玄宮1万円 E群 10.9 3.8 6.4 71 須恵器 杯身 7号墳 玄宮1万円 E群 10.8 3.75 6.1 72 須恵器 杯身 7号墳 玄宮1 3 区東 10.8 3.75 6.1 73 須恵器 杯身 7号墳 玄宮2 3 区東 10.4 3.5 7.4 74 須恵器 杯身 7号墳 玄宮3 区西 E群 11.05 3.2 7.1 75 須恵器 杯身 7号墳 玄宮3 区西 E群 10.4 3.5 7.4 75 須恵器 杯身 7号墳 玄宮3 区西 E群 10.4 3.5 7.4 76 須恵器 杯身 7号墳 玄宮3 区西 E群 10.4 3.5 7.4 77 須恵器 杯身 7号墳 玄宮3 4 区東 E群 10.2 3.9 -						- 1-44					6.6
70 須恵器 杯身 7号墳 玄空3区西 日曜 10.9 3.8 6.4 71 須恵器 杯身 7号墳 玄空3区面 日曜 10.8 3.75 6.1 72 須恵器 杯身 7号墳 玄空3区面 日曜 10.8 3.8 6.5 73 須恵器 杯身 7号墳 玄空3区面 日曜 10.4 3.5 7.4 74 須恵器 杯身 7号墳 玄空3区面 日曜 10.4 3.5 7.4 75 須恵器 杯身 7号墳 玄空3区面 日曜 10.4 3.5 7.4 76 須恵器 杯身 7号墳 玄空3区面 日曜 10.4 4.1 6.2 77 須恵器 杯身 7号墳 玄空3区面 日曜 10.4 4.1 6.2 78 須恵器 杯身 7号墳 玄空3区面 日曜 10.4 4.1 6.2 79 須恵器 麻寿谷 7号墳 玄空3区面 日曜 10.4 4.1 6.2 79 須恵器 無端高杯 7号墳 玄空3区面 日曜 10.4 4.1 6.2 80 須恵器 無端高杯 7号墳 玄空3区面 日曜 10.4 4.1 4.4 80 須恵器 無端面 7号墳 玄空3区面 日曜 11.4 4.4 81 須恵器 短頭壺 7号墳 玄空3区面 日曜 11.4 4.4 82 須恵器 短頭壺 7号墳 玄空3区面 日曜 10.0 5.7 - 1.8 83 須恵器 短頭壺 7号墳 玄空3区面 日曜 10.0 5.7 - 1.8 84 須恵器 短頭壺 7号墳 玄空3区面 日曜 日.0.0 5.7 - 1.8 85 須恵器 陳仁 7号墳 玄空3区面 日曜 日.0.0 5.7 - 1.8 86 須恵器 陳仁 7号墳 玄空3区面 日曜 日.0.0 5.7 - 1.8 87 須恵器 陳仁 7号墳 玄空3区面 日曜 日.0.0 5.7 - 1.8 88 須恵器 即付き検 7号墳 玄空3区面 日曜 日.0.0 5.7 - 1.8 89 須恵器 即付き検 7号墳 玄空3区面 日曜 日.0.0 1.1 5.6 90 須恵器 原仁 7号墳 玄空3区面 日曜 日.0.0 1.1 5.8 91 須恵器 直口壺 7号墳 玄空3区面 日曜 日曜 日.0.0 1.8 1.5 1.1 92 須恵器 直口壺 7号墳 玄空3区面 日曜 日曜 日.0 1.6 1.7 1.8 93 須恵器 原口壺 7号墳 玄空3区面 日曜 日曜 日曜 日曜 日曜 日曜 日曜 日	62						E群				
71 須恵器 科身 7号墳 玄童 1 3 区東 10.8 3.75 6.1 72 須恵器 科身 7号墳 玄童 1 次							T2 #P4				
72 須恵器 杯身 7号墳 玄電 1 反							上群				
73 須恵器 杯身 7号墳 玄室3区両 上野 11.05 3.2 7.1 74 須恵器 杯身 7号墳 玄室3区両 上野 10.4 3.5 7.4 75 須康器 杯身 7号墳 玄室3区両 上野 10.4 3.5 7.4 76 須康器 杯身 7号墳 玄室3区両 上野 10.4 4.1 6.2 77 須康器 杯身 7号墳 玄室3区両 上野 10.2 3.9 -7 78 須康器 杯身 7号墳 玄室3区両 上野 10.2 3.9 -7 79 須康器 麻斎杯 7号墳 玄室3区両 上野 10.2 3.9 -7 79 須康器 麻斎杯 7号墳 玄室3区両 上野 10.2 3.9 -7 80 須康器 麻鰯南 7号墳 玄室3区両 上野 10.2 3.9 -7 80 須康器 麻鰯南 7号墳 英道1区両 日本 1.4 4.4 81 須康器 加頭蘭 7号墳 英道1区両 11.4 4.4 82 須康器 加頭蘭 7号墳 英道1区両 9.65 5.85 9.2 83 須康器 短頭蘭 7号墳 玄室3区庫 上野 8.0 5.7 -7 84 須康器 極 7号墳 玄室3区庫 上野 8.0 5.7 -7 85 須康器 極 7号墳 玄室3区庫 上野 10.0 5.7 -7 86 須康器 極 7号墳 玄室3区庫 上野 10.0 5.7 -7 87 須康器 極 7号墳 玄室3区庫 上野 10.2 4.4 5.6 86 須康器 極 7号墳 玄室3区庫 上野 11.9 4.8 7.2 87 須康器 横 7号墳 玄室3区庫 上野 11.9 4.8 7.2 88 須康器 脚付き椀 7号墳 玄室3区庫 上野 11.9 4.8 7.2 90 須康器 直口庫 7号墳 英宮3区庫 上野 11.6 17.0 服務 91 須康器 直口庫 7号墳 玄室3区庫 上野 上野 11.6 17.0 服務 92 須康器 広口庫 7号墳 玄室3区庫 上野 日藤 日藤 日藤 13.8 11.5 11.1 93 須康器 広口庫 7号墳 玄室3区庫 上野 日藤 日藤 13.8 11.5 11.1 94 須康器 広口庫 7号墳 玄室2区庫 上野 石塚田上上層 (8.2) (16.2) 16.6 95 須康器 加頭蘭 7号墳 玄室2区庫 上野 石塚田上上層 (8.2) (16.2) 16.6 96 須康器 福服 7号墳 玄室2区庫 上野 日藤 上野 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0 10.0							C群				
74 須恵器 杯身 7号墳 玄変2 3区東 10.4 3.5 7.4 7.5 須惠器 杯身 7号墳 玄変3区東 E群 (10.45) 3.95 6.15 7.6 須惠器 杯身 7号墳 玄変3区西 E群 10.2 3.9 7.7 7.7 須惠器 杯身 7号墳 玄変3 4区東 E群 10.2 3.9 7.7 7.8 須惠器 所務 7号墳 玄変3 4区東 E群 10.2 3.9 7.7 7.8 須惠器 所務 7号墳 文室2区西 E群 10.2 3.9 7.5											
75 須恵器 杯身 7号墳 玄室3 区西 E群 10.4 4.1 6.2 76 須恵器 杯身 7号墳 玄室3 区西 E群 10.2 3.9 78 須恵器 杯身 7号墳 玄室3 区西 E群 10.2 3.9 78 須恵器 杯身 7号墳 玄室3 区页 E群 10.2 3.9 79 須恵器 無蓋高杯 7号墳 玄室3 区页 E群 12.05 7.4 8.15 79 須恵器 無蓋高杯 7号墳 玄室3 区页 E群 12.05 7.4 8.15 80 須恵器 無頸壺蓋 7号墳 炭道1 区西 9.65 5.85 9.2 81 須恵器 無頸壺蓋 7号墳 交室3 区西 9.65 5.85 9.2 82 須恵器 短頸壺 7号墳 玄室3 区西 日群 9.65 5.85 9.2 83 須恵器 短頸壺 7号墳 玄室3 区西 日群 10.0 5.7 84 須恵器 椀 7号墳 玄室3 区西 E群 床面直上 10.0 5.7 85 須恵器 椀 7号墳 玄室3 区西 E群 京面 10.2 4.4 5.6 86 須恵器 椀 7号墳 玄室3 区西 E群 日.0 日.2 4.4 5.6 88 須恵器 柳付き椀 7号墳 玄室3 区西 E群 11.95 4.8 7.2 89 須恵器 柳付き椀 7号墳 玄室3 区西 E群 11.95 4.8 7.2 90 須恵器 廊口壺 7号墳 玄室3 区西 田暦 日.1 1.1 1.55 1.1 91 須恵器 直口壺 7号墳 玄室3 区西 田暦 日.1 1.0 1.0 1.6 92 須恵器 直口壺 7号墳 玄室3 区西 田暦 日.1 1.0 1.0 1.6 93 須恵器 広口壺 7号墳 玄室3 区西 田暦 日.1 1.0 1.0 1.6 94 須恵器 広口壺 7号墳 玄室4 区東 西暦 日.1 1.6 17.0 18.6 95 須恵器 郷頭壺 7号墳 玄室4 区東 西暦 日.1 1.6 17.0 18.6 96 須恵器 郷頭壺 7号墳 玄室4 区東 西暦 日.1 日.1 1.6 17.0 18.6 96 須恵器 郷頭壺 7号墳 玄室4 区東 田暦 日.1 日.1 1.0 1.1 1.1 98 須恵器 郷頭壺 7号墳 玄室4 区東 田暦 日.1 日.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1 1.1						玄室2・3区東	Биј				7.4
76 須恵器 杯身 7号墳 玄室3 1 両 E 群 10.4 4.1 6.25		75	須恵器	杯身	7 号墳		E群		(10,45)	3.95	6.15
77 須恵器 杯身 7号墳 玄宝3・4区東 E群 10.2 3.9 - 78 須恵器 孫裔杯蓋 7号墳 玄宝3区東 五字 11.4 4.4 4.4 4.4 4.4 4.4 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.5 4.	-			111-4					,		6.25
79 須恵器 無額商杯 79項 東側周海 11.0 11.0 11.0 14.0 80 須恵器 無額壺蓋 79項 安室2区町 2至3区町 11.4 11.4 1.4 1.4 1.5 1.5 1.1 81 須恵器 無額壺蓋 79項 安室3区域・西 E群 8.0 5.7 9.6 5.85 9.2 82 須恵器 短頸壺 79項 安室1区西 C群 7.9 7.5 11.0 11.4 1.4 1.5 11.1 1.4 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 11.1 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1.5 1				杯身					10.2	3.9	-
19 20 20 20 20 20 20 20 2		78	須恵器	高杯蓋	7号墳			暗灰色土	14.3	4.8	
81 須惠器 無頸壺 7号墳 美道 区西 8.0 5.7		79	須恵器	無蓋高杯			E群		12.05	7.4	8.15
82 須恵器 短頸壺 7号墳 玄室3 区西 C群 7.9 7.5 下 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.0 1.											
83 須恵器 短頸壺 7号墳 玄室1区西 C											9.2
Record		82	須恵器	短頸壺	7号墳	玄室3区東・西	E群		8.0	5.7	- nt= 477
84 須恵器 椀 7号墳 玄室3区西 E群 床面直上 10.0 5.7 - 85 須恵器 椀 7号墳 玄室3区西 10.2 4.4 5.6 86 須恵器 椀 7号墳 玄室2区雨 E群 9.5 5.15 87 須恵器 椀 7号墳 玄室2区雨 E群 11.95 4.8 7.2 88 須恵器 脚付き椀 7号墳 玄室3区西 E群 11.95 4.8 7.2 89 須恵器 脚付き椀 7号墳 玄室3区西 暗灰色土 (12.8) (8.45) - 90 須恵器 脚付き椀 7号墳 玄室3区面 E群 床面直上 14.0 9.1 9.2 91 須恵器 直口壺 7号墳 玄室1区東 西 中間色土 11.6 17.0 腹径 92 須恵器 直口壺 7号墳 玄室2区西 D群 - (11.0) (8.5 93 須恵器 広口壺 7号墳 玄室2区西 東		83	須恵器	短頸壺	7号墳		C群		7.9	7.5	腹径 11.0
RS 須恵器 椀 7号墳 玄室3 区西 日 日 日 日 日 日 日 日 日		84	須恵器	椀	7号墳	玄室3区東・西	E群	床面直上	10.0	5.7	-
60 規志器 税 7号墳 玄室3区東 E# 9.3 3.13 87 須惠器 椀 7号墳 玄室2区東 F群 11.95 4.8 7.2 88 須惠器 脚付き椀 7号墳 玄室3区西 E群 13.8 11.15 11.1 89 須惠器 脚付き椀 7号墳 玄室1~4区東 時灰色土 (12.8) (8.45) - 90 須惠器 直口壺 7号墳 玄室1~4区東 床面直上 14.0 9.1 9.2 91 須惠器 直口壺 7号墳 玄室2区東・西 日群 床面直上 14.0 9.1 9.2 92 須惠器 直口壺 7号墳 玄室2区東・西 D群 - (11.0) (8.5 93 須惠器 広口壺 7号墳 玄室2区東 D群 - (13.95) 腹径 94 須惠器 広口壺 7号墳 玄室2区東 D群 - (10.0) 14.3 94 須惠器 海馬器 石戸童 工房道 玄室2区東		85	須恵器	椀	7号墳				10.2	4.4	5.6
88 須恵器 脚付き椀 7号墳 玄室3区西 E群		86	須恵器	椀	7号墳	玄室2区西 玄室3区東	E群		9.5	5.15	
89 須恵器 脚付き椀 7号墳 交室1~4 区東 安面直上 14.0 9.1 9.2 90 須恵器 脚付き椀 7号墳 交室2~3 区西 接道2 区西 時褐色土 11.6 17.0 18.6 91 須恵器 直口壺 7号墳 交室2 区西 時褐色土 11.6 17.0 18.6 92 須恵器 直口壺 7号墳 交室2 区西 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日		87	須恵器	椀	7号墳		F群		11.95	4.8	7.2
90 須恵器 脚付き椀 7号墳 玄室1~4区東 玄変2区西 E群 床面直上 14.0 9.1 9.2 91 須恵器 直口壺 7号墳 羨道1区東・西 暗褐色土 11.6 17.0 腹径 18.6 92 須恵器 直口壺 7号墳 玄室2区東 五字 五字 五字 五字 五字 五字 五字 五		88					E群		13.8	11.55	11.1
90 須恵器 脚付き椀 7号墳 玄室2~3区西 接道1区東・西 接道2区車 暗褐色土 14.0 9.1 9.2 91 須恵器 直口壺 7号墳 菱道2区東・西 接道2区東・西 接道2区東・西 接道2区東・西 接道2区東・西 接道2区東・西 接道2区東・西 接道2区東・西 接道2区東・西 大家道2区東・西 安室2区西 玄室3区東・西 玄室4区東 西 玄室4区東・西 大麻面直上 石室里土上層 - (13.95) 腹径14.4 63 95 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室3区東・西 玄室2区東 D群 - (10.0) 腹径9.2 - (14.65) - 区域25.2 96 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室2区東 E群 F藤面直上 中福色土 床面上0石の周辺 (12.7) 16.1 - (14.65) - 区室22区東 B群 F藤面上0石の周辺 (12.7) 16.1 98 須恵器 是那 子力 7号墳 玄室1・3区西 安室2区東 B群 F藤面上0石の周辺 (12.7) 16.1 - (10.0) 腹径(7.2 99 須恵器 提瓶 7号墳 玄室3区東 B群 F藤田上0石の周辺 (12.7) 16.1 - (14.65) - 区室2区東 B群 F群 (5.6) (9.2) 度径(7.2 100 須恵器 提瓶 7号墳 玄室3区東 E群 B群 F藤田上0石の周辺 (12.7) 16.1 - (14.65) - 区室2区東 B群 F群 BT. 100 須恵器 提瓶 7号墳 玄室3区東 B群 B群 (6.2) 17.7 - 10.1 - (14.65) - 区室2区東 BT. 100 須恵器 提瓶 7号墳 玄室3区東 B群 B群 (6.2) 15.2 - 10.2 - (14.65) - 区域20.2 100 須恵器 提瓶 7号墳 玄室3区西 E群 (6.2) 15.2 - 区域20.2 102 須恵器 提瓶 7号墳 玄室2区東 F群 A群 (6.2) 15.2 - 11.5		89	須恵器	脚付き椀	7号墳3区			暗灰色土	(12.8)	(8.45)	-
91 須恵器 直口壺 7号墳 羨道 1 区東・西		90	須恵器	脚付き椀	7号墳	玄室2~3区西	E群	床面直上	14.0	9.1	9.2
92 須恵器 直口壺 7号墳 玄室1区東 玄室2区東・西 溪道2区東 D群 - (11.0) (8.5) 93 須恵器 広口壺 7号墳 玄室2区東 玄室3区東・西 玄室4区東 G群 - (13.95) 腹径 14.4 94 須恵器 広口壺 7号墳 玄室2区東 D群 - (10.0) 腹径 14.3 95 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室3区東・西 玄室4区東・西 玄室2区東 E群 - (14.65) - 96 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室1・3区西 玄室2~4区東 麻面止 暗褐色土 床面上の石の周辺 (12.7) 16.1 - 97 須恵器 惠 7号墳 玄室1・3区西 玄室2 × 4区東 B群 麻面上 暗褐色土 床面上の石の周辺 (12.7) 16.1 - 98 須恵器 是瓶 7号墳 玄室3区東 玄室3区東 暗灰色土 (5.6) (9.2) 腹径 (7.2 99 須恵器 提瓶 7号墳 玄室3区西 玄室2区東 日群 5.85 (20.2) - 100 須恵器 提瓶 7号墳 玄室3区西 玄室3区西 E群 長大径 6.35 17.7 - 101 須恵器 提瓶 7号墳 玄室4区東 日群 (6.2) 15.2 - 102 須恵器 提瓶 7号墳 玄室2区東 F群 4.0 11.5 腹径 6.35		91	須恵器	直口壺	7 号墳	羨道1区東・西		暗褐色土	11.6	17.0	腹径
93 須恵器 広口壺 7号墳 玄室2区西 玄室3区東・西 玄室4区東・西 玄室4区東・西 玄室4区東・西 玄室4区東・西 大面直上 石室埋土上層 - (13.95) 腹径14.4 94 須恵器 広口壺 7号墳 玄室2区東 D群 - (10.0) 腹径14.3 95 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室3区東・西 左至4区東・西 左至4区東・西 左至4区東・西 左至4区東 上層 - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.6		92				玄室1区東	D群		_		(8.5)
94 須恵器 広口壺 7号墳 玄室2区東 D群 - (10.0) 腹径14.3 63 95 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室3区東・西 玄室4区東・西 云室埋土上層 玄室4区東 臣群 石室埋土上層 (8.2) (16.2) 腹径6. (16.2) 腹径6. 96 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室2区東 臣群		93	須恵器	広口壺	7号墳	玄室2区西 玄室3区東・西	G群		-	(13.95)	腹径 14.4
63 95 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室3区東・西玄室4区東・西玄室4区東・西石室埋土上層 (8.2) (16.2) 腕径6. 96 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室2区東 E群 - (14.65) - 97 須恵器 座 7号墳 玄室1・3区西玄空1・3区西安全2~4区東 展稿色土 保面上 日報色土 保面上の石の周辺 (12.7) 16.1 - 98 須恵器 ミニチュア産 7号墳3区 玄室2区東 医子 日報 日本		94	須恵器	広口壺	7号墳		D群		_	(10.0)	腹径 14.3
96 須恵器 細頸壺 7号墳 玄室2区東 E群 - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14.65) - (14	63	95	須恵器	細頸壺	7号墳	玄室3区東・西 玄室4区東・西	E群		(8.2)	(16.2)	腹径(16.2) 底径(5.3)
97 須恵器 座 7号墳 玄室1・3区西 安室2~4区東 安華2~4区東 宝華福色土 東面上 中間福色土 東面上 中間福色土 東面上の石の周辺 東京 工 テル 大 東面上の石の周辺 東京 工 大 東京 工 大 東京 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工		96	須恵器	細頸壺	7号墳	玄室2区東	E群		-	(14.65)	
98 須恵器 ミニチュ ア廛 7号墳3区 羨道南側前庭部 玄室3区東・西 玄室2区東 暗灰色土 (5.6) (9.2) 腹径 (7.2) 99 須恵器 提瓶 7号墳 大空2区東 玄室2区東 A群 5.85 (20.2) - 100 須恵器 提瓶 7号墳 玄室3区西 E群 最大径 6.35 17.7 - 101 須恵器 提瓶 7号墳 玄室4区東 I群 (6.2) 15.2 - 102 須恵器 提瓶 7号墳 玄室2区東 F群 4.0 11.5 腹径 9.35		97	須恵器	曃	7号墳	玄室 2 ~ 4 区東	B群	暗褐色土	(12.7)	16.1	-
99 須恵器 提瓶 7号墳		98	須恵器	ミニチュア腺	7号墳3区	羨道南側前庭部 玄室3区東・西			(5.6)	(9.2)	腹径 (7.2)
100 須惠器 提瓶 7号頃 玄至3区四 E併 6.35 17.7 - 101 須惠器 提瓶 7号墳 玄室4区東 I 群 (6.2) 15.2 - 102 須惠器 提瓶 7号墳 玄室2区東 F群 4.0 11.5 腹径 9.35		99	須恵器	提瓶	7号墳	羨道1・2区西	A群		5.85	(20.2)	-
102 須恵器 提瓶 7号墳 玄室2区東 F群 4.0 11.5 腹径 9.35		100	須恵器	提瓶	7号墳	玄室3区西	E群			17.7	-
102 风总的 提問 1万頃 五至20米 下冊 4.0 11.3 9.35		101	須恵器	提瓶	7号墳	玄室4区東	I群		(6.2)	15.2	
9.50		102	須恵器	提瓶	7号墳	玄室2区東	F群		4.0	11.5	腹径
1110 須見森 平勝 / 云道 ダシノ以田 12計 - (11 5) 0 以		103	須恵器	平瓶	7号墳	玄室2区東	F群		_	(11.5)	9.35

63	104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122	須恵 器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器	要 壺 甕壺蓋杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯	7 号墳 7 号墳 7 号墳 7 号墳 7 号墳墳 7 号号墳 項 墳 項 墳 墳 墳 墳 墳 墳 墳 墳 墳 墳 墳 墳 墳 墳 5 号号号	2・3区域原理 2・3区域原理 2・3区域原理 2・3区域原理 2 区域 2 区域原理 2 区域 1 区域原理 2 区域丘枢域 2 区域丘枢域 2 区域丘枢域 3 区域后枢域 3 区域原料 点 3 区域解类点 3 区域解类点 3 区域解类点 4 区域解类点 4 区域原料 换点 4 区域原料 换点 4 区域原料 换点 3 区域域原产 4 区域原产 4	月間	暗灰色土 暗灰色土 暗灰色土 暗灰色土 暗灰色土	(25.0) (13.7) (13.05) 10.95 14.0 14.5 14.9 14.4 13.9 12.8 13.0	(12.45) (28.3) 17.3 9.9 4.3 4.0 4.5 4.1 3.4 5.0 4.5	腹径 (39.0) - - - - - - -
	106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121	土師師思 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器	要 虚	7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳	文室 3 区西 3 区西 3 区西 3 区	I 基 工 群 工 群	暗灰色土 暗灰色土 暗灰色土 暗灰色土	(13.05) 10.95 14.0 14.5 14.9 14.4 13.9 12.8	17.3 9.9 4.3 4.0 4.5 4.1 3.4	(39.0) - - - - -
	107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121	土類 類 類 類 惠 惠 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器 器	壺蓋杯蓋杯蓋杯蓋茶蓋茶蓋茶茶杯杯杯杯杯杯杯杯杯杯杯杯杯杯杯杯AABBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB	7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳	玄室 4 区東	I群	暗灰色土 暗灰色土 暗灰色土	10.95 14.0 14.5 14.9 14.4 13.9 12.8	9.9 4.3 4.0 4.5 4.1 3.4 5.0	- - - -
65	108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121	須須須須東忠 器器 器器 器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器	杯蓋 杯 葢 蓋 杯 葢 蓋 杯 杯	7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳	4 区墳丘裾 墳丘裾 墳丘裾 3 区傾斜変換点 3 区傾斜近裾 墳丘裾 3 区傾斜索 4 区墳丘裾 4 区墳丘裾 3 区傾斜变裾 点 3 区傾斜变裾	11.	暗灰色土 暗灰色土 暗灰色土	14.0 14.5 14.9 14.4 13.9	4.3 4.0 4.5 4.1 3.4 5.0	
65	109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121	須恵 思 器 器 器 題 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵 恵	杯蓋 杯蓋 杯蓋 杯 蓋 杯 身 杯 身 杯 身 杯 身 杯 解身	7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳	墳丘裾 3 区傾斜変換点 3 区傾斜変換点 項丘裾 3 区傾斜変換点 3 区傾斜変換点 4 区墳丘裾 3 区傾斜変換点 4 区墳丘裾 3 区傾斜変換点	Ĩ.	暗灰色土 暗灰色土 暗灰色土	14.5 14.9 14.4 13.9 12.8	4.0 4.5 4.1 3.4 5.0	
65	110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121	須恵器 須恵恵 器 獨東 恵恵恵恵 と 選 恵恵恵恵 と と は ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま	杯蓋 杯蓋 杯蓋 杯 類 身 身身身身 杯 杯 身 杯 杯 系 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯 杯	7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳	3 区傾斜変換点 3 区填后裾 境后裾 3 区傾斜変換点 境斜変換点 4 区墳丘裾 4 区墳后裾 3 区傾斜変換点 3 区傾斜変換点	Ĩ.	暗灰色土 暗灰色土 暗灰色土	14.9 14.4 13.9 12.8	4.5 4.1 3.4 5.0	
65	111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121	須恵器 須恵惠器 須恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵 須恵恵郡器 須恵恵郡器 須恵郡器	杯蓋 杯 身 杯 身 杯 身 杯 身 杯 身 杯 身 杯 身	7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳	3区墳丘裾 墳丘裾 境丘裾 3区傾斜変換点 3区傾斜変換点 4区墳丘裾 3区傾斜変換点 3区傾斜変換点	Ĩ.	暗灰色土暗灰色土	14.4 13.9 12.8	4.1 3.4 5.0	-
65	112 113 114 115 116 117 118 119 120 121	須恵 思器 須恵 思器 須恵恵 思路 須恵恵 恵恵 思路 須恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵思	杯蓋 杯身 杯身 杯身 杯身 杯身 杯身 杯身	7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳	3 区傾斜変換点 墳丘裾 3 区傾斜変換点 4 区頃后裾 3 区傾斜変換点 3 区頃台変換点	į	暗灰色土	13.9	3.4	-
65	113 114 115 116 117 118 119 120 121	須恵器 須恵惠器 須恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵 須恵恵恵恵恵恵恵恵恵	杯身 杯身 杯身 杯身 杯身 杯身	7号墳 7号墳 7号墳 7号墳 7号墳	3 区傾斜変換点 4 区墳丘裾 墳丘裾 3 区傾斜変換点 3 区墳丘裾			12.8	5.0	_
65	114 115 116 117 118 119 120 121 122	須恵器 須恵惠思 須恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵恵	杯身 杯身 杯身 杯身 杯身 無蓋高杯	7号墳 7号墳 7号墳 7号墳	4区墳丘裾 墳丘裾 3区傾斜変換点 3区墳丘裾		暗灰色十			
65	115 116 117 118 119 120 121	須恵器 須恵器 須恵器 須恵器 須恵器 須恵器	杯身 杯身 杯身 杯身 無蓋高杯	7号墳 7号墳 7号墳	3区傾斜変換点 3区墳丘裾	Ŕ	暗灰色十	13.0	4.5	_
65	115 116 117 118 119 120 121	須恵器 須恵器 須恵器 須恵器 須恵器 須恵器	杯身 杯身 杯身 杯身 無蓋高杯	7号墳 7号墳 7号墳	3区墳丘裾	3.		10.0		
65	116 117 118 119 120 121	須恵器 須恵器 須恵器 須恵器	杯身 杯身 杯身 無蓋高杯	7号墳 7号墳			暗灰色土	12.0	4.2	_
65	117 118 119 120 121	須恵器 須恵器 須恵器 須恵器	杯身 杯身 無蓋高杯	7号墳			<u> </u>	13.0	4.2	_
65	118 119 120 121 122	須恵器 須恵器 須恵器	杯身 無蓋高杯		3区墳丘裾		暗灰色土	12.4	3.7	_
65	120 121 122	須恵器			3区墳丘裾		暗灰色土	12.3	3.6	-
65	121 122		短頸壺	7号墳	3区墳丘裾		暗灰色土	11.6	(4.3)	-
65	122	須恵器	,, <u></u>	7号墳	3区墳丘裾		暗灰色土	(7.5)	10.7	-
65			脚付き壺	7号墳	墳丘裾 3区傾斜変換点	Ē	暗灰色土	9.4	10.85	8.5
65	123	須恵器	直口壺	7号墳	3区墳丘裾 3区傾斜変換点	Ŕ	暗灰色土	(8.5)	12.9	(6.2)
65		須恵器	脚付き壺	7号墳	3区墳丘裾 3区傾斜変換点	Ŕ	暗灰色土	_	(12.8)	(12.5)
65	124	須恵器	甕	7号墳	東側周溝 石室南側前庭部		暗灰色土 床面直上	(18.8)	(29.25)	-
\vdash	125	須恵器	杯蓋	8号墳	3区南石室	A群	石室埋土	11.6	4.15	-
	126	須恵器	杯蓋	8号墳	2区南石室	A群		11.05	4.1	_
	127 128	須恵器 須恵器	杯蓋 杯蓋	8号墳 8号墳	3区南 石室 2区南 石室	A群 A群		10.9	4.2	_
	129	須恵器	杯蓋	8号墳	3区南石室	C群		10.7	3.6	_
	130	須恵器	杯蓋	8号墳	4区南石室	C群		10.05	3.55	-
	131	須恵器	杯身	8号墳	4区南 石室 4区北 石室	C群	埋土	10.7	3.25	8.1
	132	須恵器	杯身	8号墳	3区 石室	B群		9.9	3.7	-
L	133	須恵器	杯身	8号墳	2区南 石室	A群		9.9	3.8	5.9
_	134	須恵器	杯身	8号墳	2区南石室	A群		9.7	3.55	6.2
_	135	須恵器	杯身	8号墳	2区南 石室	A群		(9.9)	3.2	(7.0)
	136 137	須恵器 須恵器	杯身	8号墳 8号墳	4 区北 石室 3 区北 石室	B群 B群		9.55	3.5 (4.35)	6.1
	138	須恵器	庭 高杯脚部	8号墳	4 区北東 斜面 1 区南東 周溝	D ft+	黒色土	-	(4.33)	(8.5)
	139	須恵器	細頸壺	8号墳	3区南 石室	A群		8.2	21.7	-
	140	須恵器	杯B底部	8号墳	1 区北西 斜面			-	(1.9)	(10.5)
	141	須恵器	杯蓋	9号墳	石室2区	D群	第1床面	14.0	4.4	-
	142	須恵器	杯蓋	9 号墳	石室2区	D群	第1床面	12.8	3.5	-
	143	須恵器	杯蓋	9号墳	石室	B群	第1床面	13.7	4.4	-
	144	須恵器 須恵器	杯蓋 杯身	9号墳 9号墳	石室 2 区 石室内 3 区	D群 C群	第1床面	(12.6) 13.45	3.65	-
\vdash	146	須恵器	杯身	9号墳		D群	第1床面 第1床面	12.75	4.35	8.45
	147	須恵器	杯身	9号墳	1至40 石室	C群	第1床面	13.25	3.8	-
	148	須恵器	杯身	9号墳		~ 111	第1床面	12.75	3.8	6.5
	149	須恵器	杯身	9号墳		A群	第1床面	12.35	3.7	-
	150	須恵器	杯身	9号墳	石室	B群	第1床面	12.1	4.0	-
L	151	須恵器	高杯蓋	9号墳	石室	B群	第1床面	16.2	5.05	-
	152	須恵器	高杯蓋	9号墳3・4区	工党 4 団		黒色粗砂層	(15.8)	4.7	-
\vdash	153 154	須恵器 須恵器	高杯蓋 有蓋高杯	9 号墳 9 号墳	石室 4 区 前庭部		中層 礫の下	14.95 14.0	5.5 (5.7)	-
00	155	須恵器	杯身	9号墳		B群	第1床面	11.45	4.2	_
66	156	須恵器	杯身	9号墳	石室	B群	第1床面	12.05	3.65	7.25
	157	須恵器	杯身	9号墳	石室2区	D群	第1床面	11.65	3.6	-
- 1	158	須恵器	杯身	9号墳	石室内1区	D群	中層	11.65	3.25	7.6
	100	須恵器	脚付き椀	9号墳	石室2区	C群		11.8	11.0	11.4
	159	須恵器	短頸壺蓋	9号墳	石室	A #PE	公1 トーニ	0 05	1 2 0	_
		須恵器	短頸壺	9号墳	石室	A群 B群	第1床面 第1床面	8.95 6.95	3.0 9.1	_

図版	報告No.	種別	器 種	地区	遺構		層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
66	163	須恵器	短頸壺	9号墳	石室2区	C群		8.3	6.7	腹径 10.6
	164	須恵器	短頸壺	9号墳		B群	第1床面	8.15	8.05	-
	165	須恵器	異形提瓶	9号墳		A群	第1床面	-	(20.25)	-
	166	須恵器	提瓶	9 号墳 10号墳	前庭部 墳丘1区		礫の下 表土	-	(15.85)	-
	167	須恵器	提瓶	9 号墳	石室前庭部		褐色粗砂混じり シルト	(6.2)	(18.05)	腹径 (7.45)
	168	須恵器	壺	9号墳3区	周溝?		暗褐色シルト	(20.9)	(5.5)	-
	169	須恵器	脚付き壺	9号墳4区	前庭部		礫の下 黒色粗砂	-	(10.0)	腹径 (16.7)
	170	土師器	杯	9号墳2区 ・1区	S H01 カマド		上層中世包含層	12.0	5.0	-
	171	土師器	高杯	9号墳	4.11.77.4.17.77.		第1床面下層	- (10.05)	(4.85)	- 10.15
	172 173	土師器 須恵器	小型甕 杯蓋	9号墳 10号墳	中世落ち込み 4区西側テラス		黒灰色粗砂 暗灰色土	(10.65) 14.6	14.25 4.3	13.15
67					4区西側テラス		暗灰色土			
	174	須恵器	杯蓋	10号墳	羨道北側		盛土?内	14.25	4.3	-
	175	須恵器	杯蓋	10号墳	石室3区南	G群		13.95	4.6	-
	176 177	須恵器 須恵器	杯蓋 杯蓋	10号墳 10号墳	石室1区南 石室2区南	A群 E群		14.1	4.3	_
	178	須恵器	杯蓋	10号墳	4区西側テラス	E 付十	暗灰色土	14.2	3.65	
	179	須恵器	杯蓋	10号墳	石室1区南	G群	FINCLE	13.65	4.6	4.85
	180	須恵器	杯蓋	10号墳	4 区西側テラス 石室周辺		暗灰色土 表土	(12.65)	(4.5)	-
	181	須恵器	杯蓋	10号墳	11至周辺 羨道北側		盛土?内	14.0	4.3	_
	182	須恵器	杯蓋	10号墳	石室1区南	A群	111111111111	12.9	3.8	-
	183	須恵器	杯蓋	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	13.05	3.6	-
	184	須恵器	杯蓋	10号墳	石室1区南	A群		13.85	4.55	-
	185	須恵器	杯身	10号墳	石室3区南	G群		12.2	5.3	
	186	須恵器	杯身	10号墳	石室3区南	G群	時 に な「	11.9	4.9	-
	187 188	須恵器 須恵器	杯身 杯身	10号墳 10号墳	4 区西側テラス 4 区西側テラス		暗灰色土 暗灰色土	(13.4)	4.15 (3.85)	_
	189	須恵器	杯身	10号墳	石室2区南	D群	明灰色工	11.75	4.3	6.1
	190	須恵器	杯身	10号墳	石室1区南	A群		13.2	4.0	-
	191	須恵器	杯身	10号墳	石室1区南	A群		12.5	4.15	-
	192	須恵器	杯身	10号墳	石室1区南	A群		13.05	4.0	-
	193	須恵器	杯身	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	(12.0)	(3.6)	-
	194	須恵器	杯身	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	12.4	4.15	-
	195 196	須恵器 須恵器	高杯蓋	10号墳	4 区西側テラス 4 区西側テラス		暗灰色土 暗灰色土	(14.1) 13.45	4.85 5.45	_
	197	須恵器	高杯蓋	10号墳	玄室奥壁付近 4 区西側テラス		暗灰色土	(12.4)	4.8	_
	198	須恵器	有蓋高杯	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	(12.5)	(8.0)	(8.3)
	199	須恵器	有蓋高杯	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	(12.2)	(8.05)	(8.5)
	200	須恵器	有蓋高杯	10号墳	4 区西側テラス 西側斜面下の方		暗灰色土	(13.6)	7.45	(8.6)
	201	須恵器	有蓋高杯	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	(11.2)	7.7	(8.4)
	202	須恵器	有蓋高杯	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	(12.0)	7.5	8.3
	203	須恵器	有蓋高杯	10号墳	4 区西側テラス 西側斜面下の方		暗灰色土	_	(5.2)	(8.8)
	204	須恵器	無蓋高杯	10号墳	石室3区南	G群		9.3	7.4	7.6
	205	須恵器	無蓋高杯	10号墳	石室1区南 前庭部	A群		(12.0)	16.1	10.6
	206	須恵器	無蓋高杯	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	12.1	14.7	10.3
68	207	須恵器	直口壺	10号墳	石室3区北F群			9.8	15.0	14.0
	208	須恵器	壺蓋	10号墳	石室周辺 石室前庭部		表土	6.4	4.25	-
	209	須恵器	壺蓋	10号墳	石室1区南				90	3.25
	210	須恵器	壺蓋	10号墳	4区西側テラス	A群	暗灰色土	8.8	4.2	-
	211	須恵器	短頸壺	10号墳	石室3区南 玄室	G群		5.8	8.5	-
	212	須恵器	短頸壺	10号墳	前庭部	A 704		6.95	7.95	-
	213	須恵器 須恵器	短頸壺	10号墳 10号墳	石室1区南	A群 G群		6.65	7.5	-
	214 215	須忠器 須恵器	短頸壺	10号頃 10号墳	石室3区南 石室1区北	B群		7.6	8.5 9.8	6.5
	216	須恵器	虚	10号墳	4区西側テラス	口什	暗灰色土	-	(12.15)	-
	217	須恵器	提瓶	10号墳	石室3区南	G群	"F//\C_L	6.6	12.3	14.9
	218	須恵器	提瓶	10号墳	石室3区南	G群		6.6	18.2	-
	219	須恵器	提瓶	10号墳	石室前庭部 玄室			-	(14.75)	-
	220	須恵器	提瓶	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	(5.9)	14.2	_
			提瓶	10号墳	表道入口 万安 1 区 1k	D 批				_
	221	須恵器		10万頃	石室1区北	B群		(8.8~9.65)	(23.25)	-

図版	報告No.	種別	器 種	地 区	遺構		層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
69	222	須恵器	趣	10号墳	石室3区南 玄室奥壁付近	G群		14.1	15.5	-
	223	須恵器	不明	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	-	(1.65)	-
	224	須恵器	広口壺	10号墳	4区西側テラス		暗灰色土	(12.2)	(9.5)	腹径 20.0
	225	須恵器	甕	10号墳	4 区北側周溝		暗灰色土	(22.0)	(7.3)	-
	226	土師器	直口壺	10号墳	石室3区北	F群		(10.3)	13.2	-
	227	土師器	小型甕	10号墳	前庭部 玄室			(10.1)	(8.7)	-
	228	須恵器	杯蓋	10号墳3区	S X 01			13.3	4.05	-
	229	須恵器	杯身	10号墳3区	S X01			12.7	4.2	三位2000
	230	須恵器	横瓶	10号墳3区	S X01			7.0	22.4	長径23.8 短径18.9
	231	須恵器	広口壺	10号墳3区	S X01			(16.75)	(23.4)	- UE/37
	232	須恵器	提瓶	10号墳3区	S X01			6.1	17.7	腹径 15.1
	233	須恵器	蓋	11号墳	石室内		灰黒色極細砂	(11.0)	(3.4)	-
70	234	須恵器	杯蓋	第2郭 5区			地山直上 中世盛土	(13.2)	(1.4)	-
	235	須恵器	杯蓋	第2郭(東) 12号墳第1主体部			北側土坑	(12.8)	(1.6)	-
	236	須恵器	椀	第2郭(東)	S K 04		山城盛土	(15.6)	4.9	5.8
	237	須恵器	小皿	第2郭(南側)				(8.2)	(1.65)	- (0.7)
	238	土師器	小皿	第2郭(西)			H-HF-62 L.	(7.9)	(1.7)	(3.7)
	239 240	須恵器 須恵器	こね鉢	第2郭(東)			中世盛土 排土中	(31.6)	(2.2)	_
	241	須恵器	こね鉢		S K 03		世十. 理十.	(29.4)	(7.6)	_
	242	須恵器	こね鉢		S K 02		埋土.	(29.7)	(6.2)	_
	243	須恵器	こね鉢	平坦地 4 下斜面	3 102		黄灰褐色土	(25.4)	(4.4)	_
	244	須恵器	こね鉢	第2郭(東)			AMIGUE	-	(2.75)	-
	245	須恵器	こね鉢	第2郭(西)			地山直上	-	(1.85)	(9.7)
	246	瓦質土器	鍋	第5郭				(22.4)	(4.7)	-
	247	土師器	擂鉢	西側斜面			表土	-	(5.9)	-
	248	黒色土器	椀	尾根の先端	S K 01			(14.7)	5.9	7.3
	249	須恵器	小皿	2号墳			北側	7.25	1.65	5.1
71	250	須恵器	椀	9号墳南拡張 区			黒色粗砂層 黒色細砂質シルト (12c 代包含層)	(16.5)	4.65	(6.55)
	251	須恵器	椀	9号墳2区			黒色粗砂層	(16.6)	(4.6)	(6.1)
	252	須恵器	椀 (墨書土器)	9号墳	P — 6			縦(3.1)	横(5.15)	
	253	瓦器	椀	9号墳南拡張区	溜まり状遺構			(15.6)	5.5	(6.8)
	254	瓦器	椀	9号墳	P — 1			14.6	5.25	6.7
	255	土師器	杯	9号墳2・3区間	ないよっていませ		11111111111111111111111111111111111111	(14.3)	3.1	(8.95)
	256	瓦器	小皿	9号墳南拡張区	溜まり状遺構		中世包含層	8.5	1.6	7.55
	257	瓦器	小皿	9号墳			黒色細砂質シルト (12c 代包含層)	8.6	1.55	4.9
	258	瓦器	小皿	9号墳南拡張区	溜まり状遺構			7.5	1.55	5.1
	259 260	須恵器	小皿	9号墳南拡張区 9号墳2·3区間				(8.4) 7.85	1.2	(6.4) 6.85
	261	土師器 土師器	小皿	9号墳2・4区			黒色粗砂層	(7.9)	1.4	(6.4)
	262	須恵器	小皿 提瓶	9号墳2区			黒色粗砂	6.9	1.0 5.8	- (0.4)
	263	瓦器	紅皿	9号墳2区			黒色粗砂	縦2.8	横5.05	厚2.2
	264	土師器	羽釜	9号墳	石室内2区		埋土最上層	(21.1)	(6.1)	-
	265	土師器	鍋	9号墳2区	周溝		暗褐色土 中世包含層 黒色粗砂混じりシルト	(22.9)	(11.1)	-
	266	土師器	鍋	9号墳2•3区間			黒色粗砂混じりシルト	(18.2)	(6.25)	-
	267	土師器	鍋	9号墳	石室内2区		埋土最上層	(29.5)	(4.9)	-
	268	須恵器	こね鉢	9号墳南拡張区			焼土層より上	(31.0)	(5.4)	-
	269	丹波焼	擂鉢	9号墳2区	石室内		上層	(29.4)	(8.15)	-
	270	丹波焼	擂鉢	9号墳南拡張区			焼土層より上 黄褐色細砂	(34.9)	(10.45)	
	271	瀬戸美濃	天目茶碗	9号墳2区			(水田の床土)	(11.8)	5.4	5.05
	272	青磁	碗	9号墳南拡張区			焼土付近	(11.3)	(4.5)	-

[凡例] $7\sim11$ 号墳の墳丘の地区名は、羨道から向かって右奥の四分割から時計回りに $1\sim4$ 区と呼称している。石室内の地区名は、奥壁から 1 mごとに $1\sim4$ 区と呼称している。

表10 金属器一覧表

図版	報告No.	種別	器 種	地区	遺	構	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
72	M1	武器	大刀	2号墳	埋葬施設	11.2	棺内	68.85	4.6	1.0~1.6	645
12	M2	武器	鉄鏃	2 号墳	埋葬施設		棺内	4.73	3.41	0.7	6.3
	M3	工具	刀子	3号墳	埋葬施設		棺内	5.17	1.57	0.4~0.6	4.9
	M4~M9	武器	鉄鏃	3号墳	埋葬施設		墓壙内	16.97	2.83	0.28~0.9	52.0
	M10~M13	武器	鉄鏃	3号墳	埋葬施設		墓壙内	15.5	2.75	0.2~0.95	32.4
	M14~M15	武器	鉄鏃	3号墳	埋葬施設		墓壙内	14.55	1.95	0.4~0.55	15.4
	M16	武器	鉄鏃	3号墳	埋葬施設		墓壙内	14.85	1.1	0.3~0.8	8.9
	M17	武器	鉄鏃	3号墳	埋葬施設		墓壙内	11.2	1.17	0.4~0.42	7.6
	M18	武器	鉄鏃	3号墳 3号墳	埋葬施設 埋葬施設		墓壙内	10.83	0.99	0.3~0.5	6.1
	M19 M20	武器	鉄鏃	3 写頃 3 号墳	理 理 葬 施 設		墓壙内 墓壙内	10.45 8.0	1.15	0.15~0.95 0.4	7.4 5.2
	M21	武器	鉄鏃	3 号墳 3 号墳	埋葬施設		墓壙内	7.3	0.9	0.4~0.7	4.1
	M22	武器	鉄鏃	3号墳	埋葬施設		墓壙内	10.85	1.1	0.5~0.9	6.9
	M23	武器	鉄鏃	3号墳	埋葬施設		墓壙内	7.45	1.12	0.4~0.8	5.2
	M24	武器	鉄鏃	3号墳	埋葬施設		墓壙内	6.15	1.1	0.3~0.95	4.4
73	M25	武器	鉄剣	4号墳	第1埋葬施設		棺内	74.32	4.52	1.8~0.6	530
13	M26	武器	大刀	4号墳	第2埋葬施設		棺内	82.45	4.15	0.5~2.1	597.5
74	M27	工具	鉄鑿	4号墳	第1埋葬施設		棺内	24.3	2.6	0.9~3.2	186
, ,	M28	工具	鉄斧	4号墳	第1埋葬施設		棺内	12.76	6.77	3.55	243
	M29	工具	鉄斧	4号墳	第1埋葬施設		棺内	8.0	4.85	2.75	129
	M30	工具	鎌	4号墳	第1埋葬施設		棺内	14.9	3.3	0.3~1.35	64.5
	M31	工具	刀子 毎マ	4号墳	第1埋葬施設		棺内	8.79	1.8	0.4~0.5	9.8
	M32	工具	鑷子	4号墳	第1埋葬施設		棺内	11.08	2.18	0.31~0.8	15.2
75	M33 M34	武器	鉄鏃 鉄鏃	4 号墳 4 号墳	第1埋葬施設 第1埋葬施設		相内 棺内	6.9 9.7	3.5 1.35	0.55~0.8 0.45~1.4	14.1
	M35	武器	鉄鏃	4号墳	第1埋葬施設		棺内	10.28	1.1	0.45 01.4	7.5
	M36	武器	鉄鏃	4号墳	第1埋葬施設		棺内	10.20	1.32	0.41~1.1	10.6
	M37	武器	鉄鏃	4号墳	第2埋葬施設		棺内	6.35	3.52	0.9	11.4
	M38~M41	武器	鉄鏃	4号墳	第2埋葬施設		棺内	18.3	3.95	0.5~1.1	77.5
	M42	武器	鉄鏃	4号墳	第2埋葬施設		棺内	17.5	1.2	0.35~0.79	17.2
	M43	武器	鉄鏃	4号墳	第2埋葬施設		棺内	16.6	1.35	0.5~0.65	15.6
	M44	武器	鉄鏃	4号墳	第2埋葬施設		棺内	15.7	1.52	0.4~0.51	10.4
	M45	武器	鉄鏃	4号墳	第2埋葬施設		棺内	15.75	1.75	0.5~1.3	15.2
76	M46	武器	大型刀子	7号墳	玄室2区西	A群		34.3	3.05	1.05~1.1	185
	M47	武器	大型刀子	7号墳	玄室2区西	B群		9.9	2.1	0.45~0.85	22.8
	M48	武器	大型刀子	7号墳	玄室3区東	E群		27.5 +16.55	2.7 3.35	0.85~1.1 0.45~0.95	124.5 84.5
	M49	金具	飾金具	7 号墳	玄室3区西	H群		4.45	2.9	0.43 0.33	12.8
	M50	工具	刀子	7号墳	玄室4区東	F群		9.55	1.65	0.7 2.0	12.4
	M51	工具	刀子	7号墳	玄室 4 区東	F群		7.1	1.95	0.45~0.85	9.3
	M52	工具	刀子	7号墳	玄室1区西	C群		7.5	1.4	0.4~0.5	6.3
	M53	工具	刀子	7号墳	玄室2区東	D群		7.1	1.5	0.65~0.7	10.2
	M54	工具	刀子	7号墳	玄室3区東			7.45	1.75	0.5~0.55	12.4
	M55	工具	刀子	7号墳	玄室1区西	C群		5.7	1.8	0.75	9.5
77	M56	工具	鎌	7号墳	玄室1区西			11.9	4.6	0.38~0.4	29.6
						VII 1114		+3.41	2.54		
	M57 M58	工具	鉄鑿	7号墳	玄室4区西	H群		10.8	1.2	0.55~0.6 0.45~0.65	10.2
	M59	武器	鉄鏃	7号墳 7号墳	玄室1区東 玄室3区西	D群 F群		12.95 12.1	3.55	0.45~0.65	29.4 19.8
					玄室4区東	1. 4十					
	M60	武器	鉄鏃	7号墳	3区西			13.7	2.8	0.5~0.6	23.8
	M61	武器	鉄鏃	7号墳	玄室3区西	E群		8.7	2.95	0.45~0.6	17.2
	M62	武器	鉄鏃	7号墳	玄室4区西	H群		13.05	3.55	0.5~0.85	18.6
	M63	武器	鉄鏃	7号墳	玄室4区東	F群		7.3	3.95	0.4~0.85	14.4
	M64	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区西	D群		7.3	3.05	0.4~0.5	9.8
78	M65	武器	鉄鏃	7号墳	玄室4区西	H群		12.45	2.8	0.45~0.55	20.0
	M66	武器	鉄鏃	7号墳	玄室4区西	H群		10.25	2.55	0.25~0.4	9.5
	M67	武器	鉄鏃	7号墳	玄室3区西	E群		11.05	2.0	0.35~0.65	10.4
	M68	武器	鉄鏃	7号墳	玄室3区西	E群		9.95	2.8	0.3~0.45	11.6
	M69	武器	鉄鏃	7号墳	玄室3区西	E群		9.75	2.7	0.45~0.25	9.3
	M70	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区西	C群		8.05	2.5	0.3~0.38	7.9
	M71	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区西	D群		5.25	1.9	0.45~0.55	5.2
	M72	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区西	C群		11.3	2.75	0.5	16.4
- 1	M73 M74	武器	鉄鏃	7号墳	玄室4区東	I群		12.45	3.8	0.4~0.6	20.2
	IVI / 4	武器 武器	鉄鏃	7 号墳 7 号墳	玄室 2 区東 玄室	F群	床面直上	12.0	3.01	0.4~0.45 0.7~0.75	19.0
		1PL ZS	鉄鏃	1万頃		D 104	小山巨工	7.9 5.7	3.35		25.0 7.9
	M75		針鉱	7 是擠	女名 3 区 田	1124					
70	M75 M76	武器	鉄鏃 鉄鏃	7 号墳 7 号墳	玄室2区西	D群 E群			2.25	0.55~0.95	
79	M75 M76 M77	器 武器	鉄鏃	7号墳	玄室3区西	E群		15.05	2.25	0.4~0.6	12.2
79	M75 M76	武器			+						

図版	報告No.	種別	器 種	地区	遺	構	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
	M81	武器	鉄鏃	7号墳	玄室4区東	G群	/自匹	15.9	1.2	0.35~0.45	10.6
79	M82	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区西	C群		15.3	1.1	0.3~0.5	10.6
	M83	武器	鉄鏃	7 号墳	玄室4区西	H群		12.3	1.4	0.25~0.45	12.2
	M84	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区西	C群		11.5	1.2	0.35~0.45	9.9
	M85	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区東	D群		9.4	1.1	0.3~0.5	5.0
	M86	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区東	D群		13.97	1.05	0.38~0.8	6.9
	M87	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区西	C群		14.4	1.25	0.3~0.6	10.2
	M88	武器	鉄鏃	7号墳	玄室2区東			13.1	0.9	0.22~0.5	6.7
	M89	武器	鉄鏃	7号墳	玄室1区西	C群		12.25	0.95	0.3~0.41	9.1
	M90	武器	鉄鏃	7号墳	玄室3区東	E群		7.0	1.0	0.3~0.35	3.5
	M91	武器	鉄鏃	7号墳	玄室2区東	D群		5.6	0.9	0.25~0.3	2.4
	M92	武器	鉄鏃	8号墳	石室7区北			15.7	1.3	0.35~0.45	9.7
	M93	武器	鉄鏃	8号墳	石室5区南	- 70/	file I ame	15.3	1.07	0.28~0.4	9.8
80	M94	馬具	轡	9号墳	石室	D群	第1床面	18.5	26.2		
81 _	M95	馬具	鐙靼	9号墳	石室	D群	第1床面	27.4	5.05	0.6	
H	M96	馬具	鐙靼	9号墳	石室2区	C群	第1床面	19.45	4.0	0.5	
-	M97	馬具	鐙吊金具	9号墳	石室	D群	第1床面	8.0	4.4	0.9	
-	M98	馬具	鐙吊金具	9号墳 9号墳	石室 石室2区	C群_ C群	第1床面	7.6	3.8	1.0	
\rightarrow	M99		鞍金具				第1床面		4.5 3.0	0.77~2.9	04 5
82	M100	武器	大型刀子	9号墳	石室	B群	第1床面	19.63 +32.75	2.55	0.77~2.9	84.5 105
F	M101	武器	刀装具	9号墳	石室	B群	第1床面	2.6	3.1	2.4	15.6
	M102	工具	刀子	9号墳	石室2区	C群	第1床面	12.1	2.2	0.5~0.75	25.8
	M103	工具	刀子	9号墳	石室	B群	第1床面	9.3	1.45	0.4~0.5	12.4
_	M104	工具	刀子	9号墳	石室	B群	第1床面	15.3	1.64	0.4~0.57	26.8
83	M105	武器	鉄鏃	9号墳	石室2区	D群	第1床面	10.68	2.41	0.3~0.4	10.4
05	M106	武器	鉄鏃	9号墳	石室2区	D群	第1床面	6.4	2.45	0.25~0.35	6.2
	M107	武器	鉄鏃	9号墳	石室	C群	第1床面	5.9	1.9	0.45~0.55	6.2
	M108	武器	鉄鏃	9号墳	石室2区		第1床面	6.25	1.8	0.4	6.0
	M109	武器	鉄鏃	9号墳	石室	C群	第1床面	9.2	1.8	0.35~0.4	8.2
	M110	武器	鉄鏃	9号墳	石室	B群	第1床面	12.1	1.95	0.25~0.45	9.3
_	M111	武器	鉄鏃	9号墳	石室	C群	第1床面	14.42	1.4	0.3~0.43	13.4
	M112	武器	鉄鏃	9号墳	石室2区	D群	第1床面	14.78	1.2	0.4~0.46	14.0
-	M113	武器	鉄鏃	9号墳	石室2区	D群	第1床面	13.6	1.15	0.25~0.6	11.6
_	M114	武器	鉄鏃	9号墳	石室2区		第1床面	16.3	1.0	0.37~0.5	13.6
-	M115	武器	鉄鏃	9号墳	石室1区	D #¥	断ち割り時	12.35	1.15	0.45~0.55	13.4
-	M116	武器	鉄鏃 ett-ett	9号墳	石室2区	D群	第1床面	8.4	1.2	0.25~0.35	6.4
\vdash	M117 M118	武器 工具	鉄鏃 鉄鑿	9号墳 9号墳	石室 石室	C群_ B群	第1床面	4.35 8.6	0.5	0.25~0.45	4.6 5.4
-	M119	工具	鉄鑿	9号墳	石室	A群	第1床面	7.82	1.15	0.47~0.5	7.7
84	M120	馬具	轡	10号墳	石室1区南	D群	カ1 小田	20.5	33.6	0.47 -0.3	1.1
								17.2	2.15	0.35~0.45	28.0
85	M121	工具	刀子	10号墳	石室2区南	E群		+4.9	1.5	0.4	4.8
	M122	工具	刀子	10号墳	羨道	A群		18.5	1.9	0.47~0.52	23.8
	M123	工具	刀子	10号墳	石室2区南	E群	床面直上	15.5	1.9	0.5~0.75	32.0
	M124	工具	刀子	10号墳	石室2区北	C群		11.3	1.6	0.4~0.6	16.2
	M125	工具	刀子	10号墳	石室2区南	E群		9.57	1.8	0.2~0.7	10.4
	M126	工具	刀子	10号墳	石室2区北	C群		9.7	1.95	0.4~1.7	13.2
	M127	武器	鉄鏃	10号墳	石室1区南	D群		15.88	3.6	0.5~0.6	26.8
	M128	武器	鉄鏃	10号墳	石室1区南	D群		15.0	3.35	0.45	30.2
-	M129	武器	鉄鏃	10号墳	石室1区南	D群		13.1	3.09	0.4~0.92	26.0
	M130	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区南	D群		11.3	3.65	0.45~0.5	20.6
86	M131	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区北	C群		13.79	3.49	0.32~0.4	17.6
	M132	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区南	E群		9.85	3.7	0.65~0.8	22.4
	M133	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区南	E群		9.9	3.9	0.3~0.45	17.0
	M134	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区南	D群		8.75	3.45	0.3~0.45	13.6
	M135	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区北	C群		11.45	3.49	0.3~0.5	15.0
-	M136	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区南	D群		11.7	4.1	0.4~0.5	19.6
	M137	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区南	D群		12.0	2.37	0.35~0.5	15.2
-	M138	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区北	C群		11.45	2.5	0.35~0.6	12.6
	M139	武器	鉄鏃 鉄鏃	10号墳 10号墳	石室1区南	D群		11.3	2.1	0.25~0.5 0.35~0.4	10.2
	M140	武器	鉄鏃	10号頃 10号墳	石室2区南 石室3区南	D群 G群		9.2 8.4	3.0	0.35~0.4	12.6 12.4
-	1/1/1/1	此盃	少大现状	10万頃				上 7.9	1.4	0.4~0.7	5.2
	M141				1	C群					3.7
	M141 M142	武器	鉄鏃	10号墳	石室2区北	C 11+		N K 11h	1 1 05	U 37	
05	M142					C 11+	植内	下 6.05 71 9	1.05	0.35	
87	M142 M143	武器	蛇行剣	13号墳	埋葬施設	0 111	棺内	71.9	4.9	0.6~0.65	355
87	M142 M143 M144	武器 武器	蛇行剣 鉄鏃	13号墳 13号墳	埋葬施設 埋葬施設	CHT	棺内	71.9 6.23	4.9 1.98	0.6~0.65 0.4~0.7	355 6.1
87	M142 M143 M144 M145	武器 武器 武器	蛇行剣 鉄鏃 鉄鏃	13号墳 13号墳 13号墳	埋葬施設 埋葬施設 埋葬施設	CHT	棺内 棺内	71.9 6.23 15.7	4.9 1.98 1.55	0.6~0.65 0.4~0.7 0.35~0.51	355 6.1 13.6
87	M142 M143 M144	武器 武器	蛇行剣 鉄鏃	13号墳 13号墳	埋葬施設 埋葬施設	CH	棺内	71.9 6.23	4.9 1.98	0.6~0.65 0.4~0.7	355 6.1

図版	報告No.	種別	器 種	地 区	遺 構	ŧ }	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
87	M149	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	15.85	1.2	0.25~0.35	9.7
"	M150	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	14.83	1.0	0.3~0.55	8.2
	M151	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	13.55	1.1	0.3~0.35	7.9
88	M152	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	14.45	1.0	0.3~0.9	9.8
	M153	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	15.3	1.15	0.3~0.4	9.8
	M154	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	13.82	1.0	0.25~0.4	2.0
	M155 M156	武器	鉄鏃 鉄鏃	13号墳 13号墳	埋葬施設 埋葬施設		棺内 棺内	13.8 14.1	0.95 1.3	0.35~0.4 0.3~0.4	8.1 6.9
	M157	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	11.9	1.0	0.4~0.45	6.5
	M158	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	12.45	1.05	0.35	7.2
	M159	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	11.61	1.1	0.4~0.52	8.0
	M160	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	10.1	1.13	0.36~0.47	6.2
	M161	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	11.1	1.0	0.4~0.85	6.1
	M162	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	6.9	1.05	0.4~0.45	4.1
	M163	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	6.25	1.2	0.3~0.7	4.3
89	M164	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	10.8	0.85	0.35~0.55	6.0
	M165	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	11.45	0.9	0.4~0.6	6.6
-	M166 M167	武器	鉄鏃 鉄鏃	13号墳 13号墳	埋葬施設 埋葬施設		棺内 棺内	7.75 8.4	0.85 1.65	0.4~0.5 0.5~1.1	4.6 10.6
	M168	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	8.1	0.75	0.3	4.3
	M169	武器	鉄鏃	13号墳	埋葬施設		棺内	7.2	0.9	0.4~0.45	4.1
	M170	不明	不明鉄製品	13号墳	埋葬施設		棺内	12.85	3.05	0.25~0.7	22.2
	M171	雑具	火箸	火山城跡	第2曲輪		東肩部	32.47	1.0	0.6~0.76	57.0
	M172	発火具	火切り金	9号墳南拡張区	溜まり状遺構		検出面	8.1	3.15	1.05	34.4
	M189	銅銭	寛永通寶	10号墳	石室		上面				
90	M173	装身具	耳環	7号墳	玄室4区西	H群		2.9	3.2	タテ0.695 ヨコ0.75	20.6
	M174	装身具	耳環	7号墳	玄室3区西	E群		2.9	3.2	タテ0.74 ヨコ0.74	22.6
	M175	装身具	耳環	7号墳	玄室3区西	E群		2.7	3.0	タテ0.61 ヨコ0.75	19.4
	M176	装身具	耳環	7号墳	玄室3区東	E群		2.6	2.9	タテ0.62 ヨコ0.795	11.6
	M177	装身具	耳環	7号墳	玄室3区東	E群		26	2.6	タテ0.59 ヨコ0.77	14.4
	M178	装身具	耳環	7号墳	玄室2区東			2.,55	2.6	タテ0.56 ヨコ0.77	15.8
	M179	装身具	耳環	9号墳	石室3区		第1床面	3.05	3.4	タテ0.8 ヨコ0.84	31.2
	M180	装身具	耳環	9号墳	石室	D群	第1床面	295	3.4	タテ0.81 ヨコ0.85	30.0
	M181	装身具	耳環	9号墳	石室	D群	第1床面	2.85	3.2	タテ0.68 ヨコ(0.62)	12.4
	M182	装身具	耳環	9号墳	石室	D群	第1床面	2.85	3.2	タテ(0.63) ヨコ(0.61)	12.0
	M183	装身具	耳環	9号墳	石室	D群	第1床面	2.8	3.2	タテ0.65 ヨコ0.65	17.0
	M184	装身具	耳環	9号墳	石室	C群	第1床面	2.65	2.9	タテ0.59 ヨコ0.62	13.4
	M185	装身具	耳環	9号墳	石室	D群	第1床面	2.6	2.9	タテ0.5 ヨコ0.51	11.2
	M186	装身具	耳環	9号墳	石室	C群	第1床面	2.6	2.75	タテ0.55 ヨコ0.53	12.8
	M187	装身具	耳環	9号墳	石室1区		敷石直上	2.45	2.8	タテ0.525 ヨコ0.52	4.9
	M188	装身具	耳環	9号墳	石室	B群	第1床面	2.45	2.65	タテ0.54 ヨコ0.53	5.9

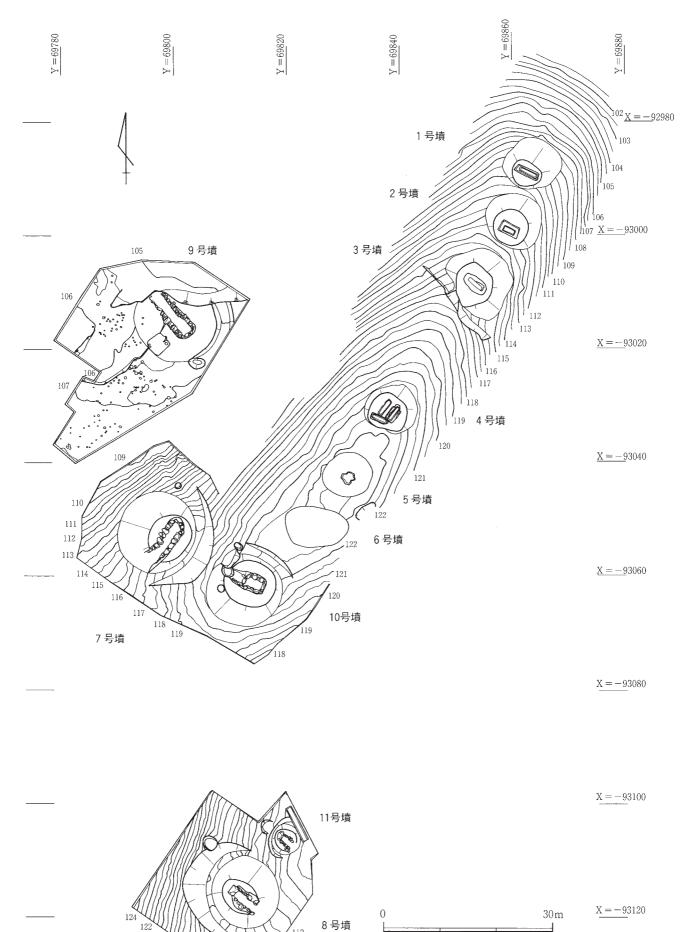
表11 玉類一覧表

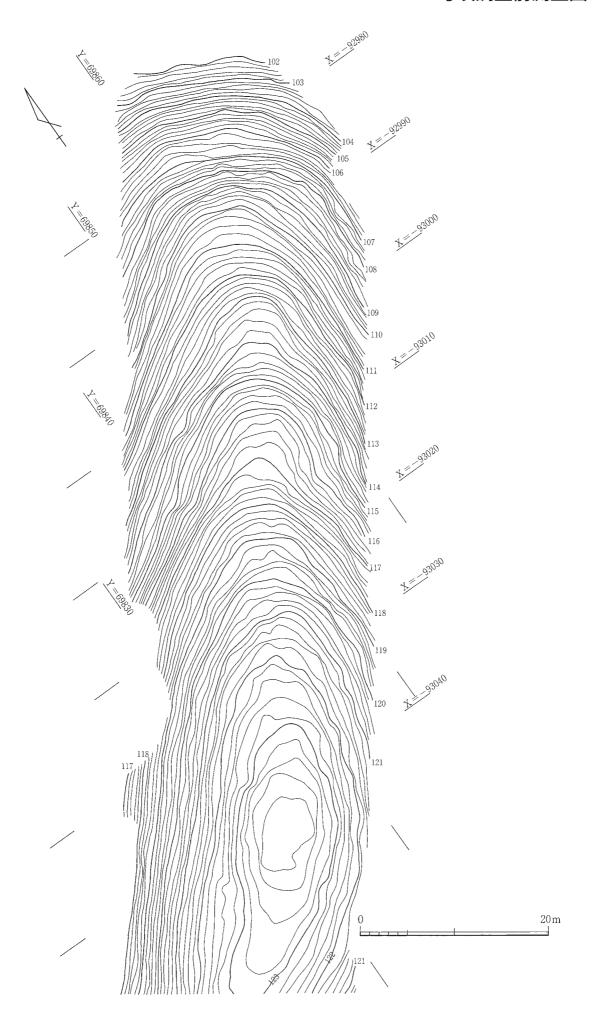
図版	報告№.	材 質	器 種	地区	遺	構	層 位	長(mm)	径(mm)	重量(g)	色調
91	J1	碧玉	管玉	7号墳	玄室		床面直上土ふるい	27.5	10.0	4.72	濃緑
01	J2	碧玉	管玉	7号墳	玄室4区西	9		18.0	7.0	1.78	濃緑
	Ј3	水晶	管玉	7号墳	玄室3~4	1区	土ふるい	21.5	7.5	2.15	半透明
	J4	ガラス	小玉	7号墳	玄室		床面直上土ふるい				青緑
	J5	碧玉	管玉	9号墳	石室2区	D群	第1床面	30.0	11.0	7.71	濃緑
	J6	碧玉	管玉	9号墳	石室1区		中層	30.0	10.0	6.87	濃緑
	J7	碧玉	管玉	9号墳	石室1区		第1床面	30.0	11.0	6.62	濃緑
	J8	碧玉	管玉	9号墳	石室		第1床面	29.5	9.5	5.58	濃緑
	Ј9	碧玉	管玉	9号墳		C群	第1床面	29.0	9.0	5.14	濃緑
	J10	碧玉	管玉	9号墳	石室1区		第1床面	27.0	12.0	7.05	濃緑
	J11	碧玉	管玉	9号墳	石室1区		第1床面	27.0	10.0	5.71	濃緑
	J12	碧玉	管玉	9号墳		C群	第1床面	26.0	10.0	5.32	濃緑
	J13	碧玉	管玉	9号墳	石室1区		礫床土	25.5	10.0	4.97	濃緑
	J14	碧玉	管玉	9号墳	石室1区		第1床面	21.5	9.0	3.36	濃緑
	J15	碧玉	管玉	9号墳		B群	第1床面	20.0	11.0	3.93	濃緑
	J16	緑色凝灰岩	管玉	9号墳		C群	第1床面	22.5	10.0	3.44	汚れた緑
	J17	軟玉	管玉	9号墳		B群	第1床面	22.0	8.0	2.19	明青灰
	J18	瑪瑙	管玉	9号墳		B群	第1床面	25.0	8.0	2.97	赤褐 (半透明
	J19	ガラス	小玉	9号墳		C群	第1床面				
	J20	ガラス	小玉	9号墳		C群	第1床面				
	J21	水晶	切子玉	9号墳			排土中	15.0	11.0	2.57	半透明
	J22	水晶	切子玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	14.0	12.0	2.58	半透明
	J23	水晶	算盤玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	15.0	14.0	3.85	半透明
	J24	水晶	算盤玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	14.0	10.05	1.92	半透明
	J25	水晶	丸玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	8.5	12.0	2.15	半透明
	J26	琥珀	棗玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	22.0	14.0	1.61	灰茶複
92	J27	軟玉	丸玉	9号墳	石室4区		第1床面	12.2	14.0	3.24	明緑色
02	J28	土製品	丸玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	6.5	8.5	0.40	黒っぱしが
	J29	ガラス	丸玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	5.0	8.0	0.40	コバルトブルに白筋
	J30	土製品	丸玉	9号墳	石室1区		第1床面	10.0	11.0	1.37	黒褐
	J31	ガラス	小玉	9号墳	石室1区	D群	第1床面	2.9	3.95	0.07	深緑
	J32	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.6	3.6	0.06	深緑
	J33	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.15	4.05	0.06	深緑
	J34	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	1.3	3.4	0.03	深緑
	J35	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.6	3.6	0.04	深緑
	J36	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.15	3.85	0.04	深緑
	J37	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.7	3.85	0.05	深緑
	J38	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.2	3.55	0.04	深緑
	J39	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.4	3.25	0.03	深緑
	J40	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.2	3.15	0.03	深緑
	J41	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.5	4.0	0.05	淡い綺
	J42	ガラス	小玉	9号墳	石室2区		第1床面	2.0	3.2	0.04	淡い緑
	J43	ガラス	小玉	9号墳	石室4区	C 70/	第1床面	1.6	2.5	0.01	淡い緑
	J44	ガラス	小玉	9号墳	石室3区	C群	第1床面	2.0	3.5	0.03	淡い緑
	J45	ガラス	小玉	9号墳	石室3区	C群	第1床面	1.6	3.0	0.03	淡い約
	J46	ガラス	小玉	9号墳	石室3区	C群	第1床面	2.4	4.0	0.05	淡い綺
	J47	ガラス	小玉	9号墳	石室3区	C群	第1床面	2.5	3.5	0.03	淡い緑
	J48	ガラス	小玉	9号墳	石室3区	C群	第1床面	2.0	3.0	0.03	淡い約
	J49	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.5	3.5	0.04	淡い約
	J50	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	3.0	2.3	0.03	淡い約
	J51	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.0	3.5	0.03	緑
	J52	ガラス	小玉	9号墳	石室1区		第1床面	2.0	4.0	0.03	青緑
	J53	ガラス	小玉	9号墳	石室1区	- 707	第1床面	2.5	3.0	0.04	淡い約
	J54	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.0	3.5	0.04	青緑
	J55	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.5	4.0	0.06	青緑
	J56	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.0	3.5	0.03	青緑
	J57	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.8	3.5	0.04	青緑
	J58	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.0	3.5	0.04	青緑
	J59	ガラス	小玉	9号墳	石室1区		第1床面	2.8	3.5	0.04	青緑
	J60	ガラス	小玉	9号墳	石室1区		第1床面	2.0	3.1	0.02	青緑
	J61	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.4	3.55	0.06	深緑
	J62	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	1.05	2.5	0.01	緑
	J63	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.0	4.0	0.05	深緑
	J64	ガラス	小玉	9号墳	石室2区		第1床面	2.1	3.0	0.02	深緑
	J65	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.55	3.3	0.03	深緑
	J66	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.0	3.65	0.04	深緑
	J67	ガラス	小玉	9号墳	石室2区		第1床面	1.95	3.3	0.05	深緑
	J68	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	1.6	3.0	0.01	深緑
		ガラス	小玉	9号墳	石室2区	C群	第1床面	2.05	3.5	0.05	深緑

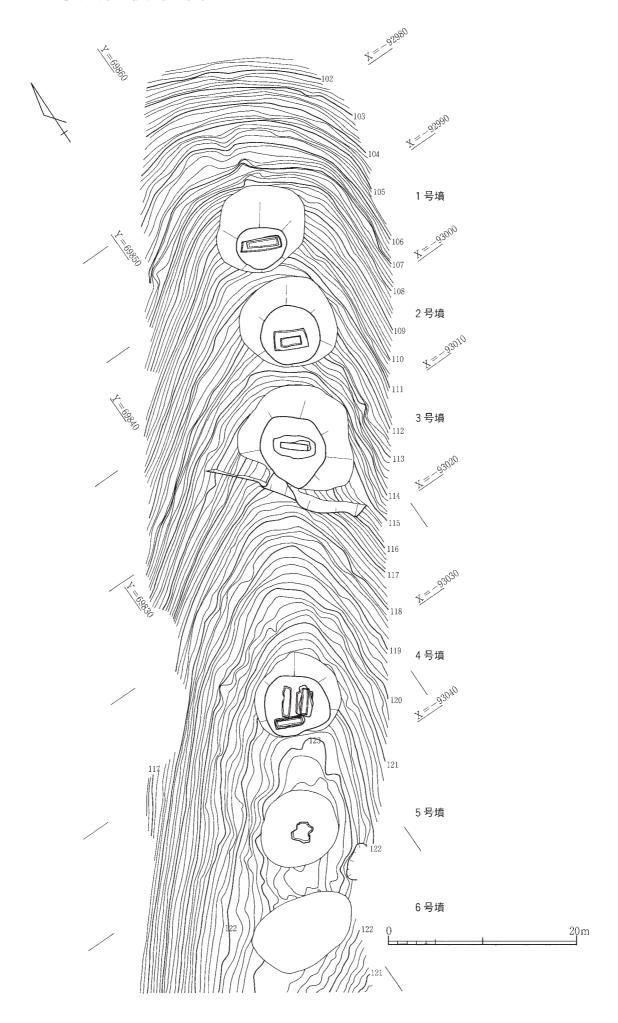
図版	報告No.	材質	器 種	地区	遺構	層位	長(mm)	径(mm)	重量(g)	色 調
92	J70	ガラス	小玉	9号墳	石室2区 C群	第1床面	1.75	3.5	0.02	深緑
92	J71	ガラス	小玉	9号墳	石室2区 C群	第1床面	2.5	3.2	0.04	淡い緑
	J72	ガラス	小玉	9号墳	石室2区 C群	第1床面	2.2	3.0	0.04	淡い緑
	J73	ガラス	小玉	9号墳	石室2区 C群	第1床面	3.0	3.1	0.05	淡い緑
	J74	ガラス	小玉	9号墳	石室2区 C群	第1床面	1.5	2.8	0.01	淡い緑
	J75 J76	ガラス ガラス	小玉	9号墳 9号墳	石室2区 C群 石室2区 C群	第 1 床面 第 1 床面	2.8	3.7	0.06 <0.01	淡い緑淡い緑
	J76 J77	ガラス	小玉	9号墳	石室2区 C群	第1床面	1.6	3.2	0.02	淡い緑
	J78	ガラス	小玉	9号墳	石室2区 C群	第1床面	1.5	3.0	< 0.01	淡い緑
	J79	ガラス	小玉	9号墳	石室2区 C群	第1床面	1.7	3.2	0.02	淡い緑
	J80	ガラス	小玉	9号墳	石室2区	第1床面	3.0	3.7	0.05	淡い緑
	J81	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	2.6	4.25	0.06	深緑
	J82	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	1.75	3.2	0.02	緑
	J83	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	2.0	3.5	0.03	緑
	J84 J85	ガラス ガラス	小玉 小玉	9号墳 9号墳	石室1・2区 石室1・2区	第1床面(土ふるい) 第1床面(土ふるい)	3.7	4.0 3.25	0.07	紐組
	J86	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	2.2	3.3	0.03	緑
	J87	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	1.7	3.2	0.03	緑
	J88	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	1.95	3.7	0.03	深緑
	J89	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	2.2	4.3	0.06	深緑
	J90	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	2.2	3.7	0.04	緑
	J91	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	2.0	3.0	0.03	深緑
	J92	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	1.25	2.8	0.01	緑
	J93	ガラス	小玉	9号墳	石室1・2区	第1床面(土ふるい)	1.7	3.2	0.03	緑
	J94 J95	ガラス ガラス	小玉	9号墳 9号墳	石室 2 区 石室 3 区	第1床面 床面	1.2	3.15	0.03	深緑緑緑
	J95 J96	碧玉	管玉	10号墳	石室2区南		33.5	11.5	8.32	淡緑
93	J97		管玉	10号墳	石室2区南		27.0	8.5	3.36	淡緑
	J98	碧玉	管玉	10号墳	石室2区南		26.0	9.0	3.76	濃緑
	J99	碧玉	管玉	10号墳	石室2区北		26.5	9.0	3.64	濃緑
	J100	碧玉	管玉	10号墳	石室3区北		25.5	7.5	2.34	淡緑
	J101	碧玉	管玉	10号墳	玄室	土ふるい	24.5	10.5	4.71	淡緑
	J102	碧玉	管玉	10号墳	石室3区北		21.0	9.0	2.79	淡緑
	J103	水晶	勾玉	10号墳	玄室	土ふるい	23.0	14.5 厚7.5	3.19	半透明
	J104	水晶	切子玉	10号墳	石室2区南		17.0	13.0	3.32	半透明
	J 105	水晶	丸玉	10号墳	石室3区北	130.1	8.5	10.5	1.19	半透明
	J106	ガラス	小玉	10号墳	石室	水洗中	3.0	4.0	0.07	青緑
	J107 J108	ガラス ガラス	小玉	10号墳 10号墳	石室1区南	床面直上(土ふるい)	3.2	3.5 5.8	0.07	青青
	J108	ガラス	小玉	10号墳		床面直上(土ふるい)	5.0	6.0	0.23	深緑
94	J110	瑪瑙	勾玉	13号墳	埋葬施設	/KIIIEL (1.0.0)	32.0	20.0	7.27	白~茶褐
	J111	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設		2.2	厚9.0 2.2	0.02	淡い青
	J112	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設3区		2.5	2.5	0.03	淡い青
	J113	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	南北セクション	2.2	2.7	0.04	淡い緑
	J114	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設		1.8	2.8	0.01	青
	J115	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設		1.6	2.8	0.02	淡い青
	J116 J117	ガラス ガラス	小玉	13号墳 13号墳	埋葬施設 埋葬施設		2.0	2.8	0.01	淡い緑 淡い緑
	J117 J118	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設		2.1	2.8	0.02	淡い緑
	J119	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設		2.0	2.9	0.02	淡い緑
	J120	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設		2.0	2.8	0.01	青緑
	J121	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設		2.0	2.8	0.04	青緑
	J122	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	4.5	6.0	0.24	青
	J123	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	3.0	0.01	青緑
	J124	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.5	2.8	0.01	青緑
	J125	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	3.0	0.04	淡い緑
	J126	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.8	0.01	青緑
	J127	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.5	2.2	0.01	青緑
	J128 J129	ガラス ガラス	小玉	13号墳 13号墳	埋葬施設 埋葬施設	東西セクション東側 東西セクション東側	2.0	2.8	0.01	青緑青
	J129	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.85	2.75	0.02	青緑
	J131	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.7	0.01	緑青
	J132	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.8	0.01	青緑
	J133	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	2.8	0.01	明るい青
	J134	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.8	0.01	青緑
	J135	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	2.8	0.02	青緑
	J136	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設 埋葬施設	東西セクション東側	2.25	2.8	0.03	青緑
	J137 J138	ガラス ガラス	小玉 小玉	13号墳 13号墳	埋葬施設 埋葬施設	東西セクション東側 東西セクション東側	1.75	2.7	0.01 <0.01	若草 若草
	1100	ハノヘ	11上	口りり場	生并他叹	米四モノノヨノ果側	1./	L 4.0	\U.UI	口半

図版	報告No.	材 質	器種	地区	遺構	層位	長(mm)	径(mm)	重量(g)	色調
94	J139	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.6	2.7	0.01	群青
34	J140	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.7	2.5	0.01	青緑
	J141	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.9	2.7	0.01	青
	J142	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.7	2.5	0.01	青緑
	J143	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.1	2.7	0.02	青
	J144	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.7	2.35	0.01	群青
	J145	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.9	2.5	< 0.01	青緑
	J146	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.7	2.6	0.01	青緑
	J147	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.6	3.4	0.03	群青
	J148	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.8	0.02	青緑
	J149	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	2.6	0.02	青緑
	J150	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.5	0.03	青緑
	J151	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	3.0	0.01	青緑
	J152	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.0	< 0.01	黄緑
	J153	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.5	2.5	< 0.01	黄緑
	J154	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.2	2.5	< 0.01	青
	J155	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.5	0.02	青緑
	J156	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.5	0.01	青緑
	J157	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.5	0.02	青緑
	J158	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	3.0	2.5	0.02	群青
	J159	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.5	< 0.01	青
	J160	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	2.6	0.01	青緑
	J161	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	2.65	0.01	青緑
	J162	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.95	2.55	0.02	青緑
	J163	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.2	2.3	< 0.01	青
	J164	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.55	0.02	青緑
	J165	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.9	2.4	0.01	
	J166	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.1	2.9	0.02	水
	J167	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	2.55	0.02	黄緑
	J168	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	3.75	0.03	黄緑
	J169	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.55	2.8	0.01	水
	J170	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.2	2.5	< 0.01	青
	J171	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	2.9	0.01	青
	J172	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	3.0	4.2	0.07	青
	J173	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	3.0	0.01	青緑
	J174	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.5	2.8	0.02	青緑
	J175	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	2.5	0.01	青緑
	J176	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.8	2.8	0.02	青緑
	J177	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.5	0.02	青緑
	J178	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	3.0	3.0	0.04	青
	J179	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.1	2.8	0.01	青緑
	J180	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.7	2.8	0.02	青緑
	J181	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.95	2.5	0.02	青緑
	J182	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.4	2.5	0.01	紺
	J183	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.0	2.7	0.02	青緑
	J184	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.9	2.5	0.01	黄緑
	J185	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	1.9	2.5	0.01	黄緑
\Box	J186	ガラス	小玉	13号墳	埋葬施設	東西セクション東側	2.85	3.0	0.04	水

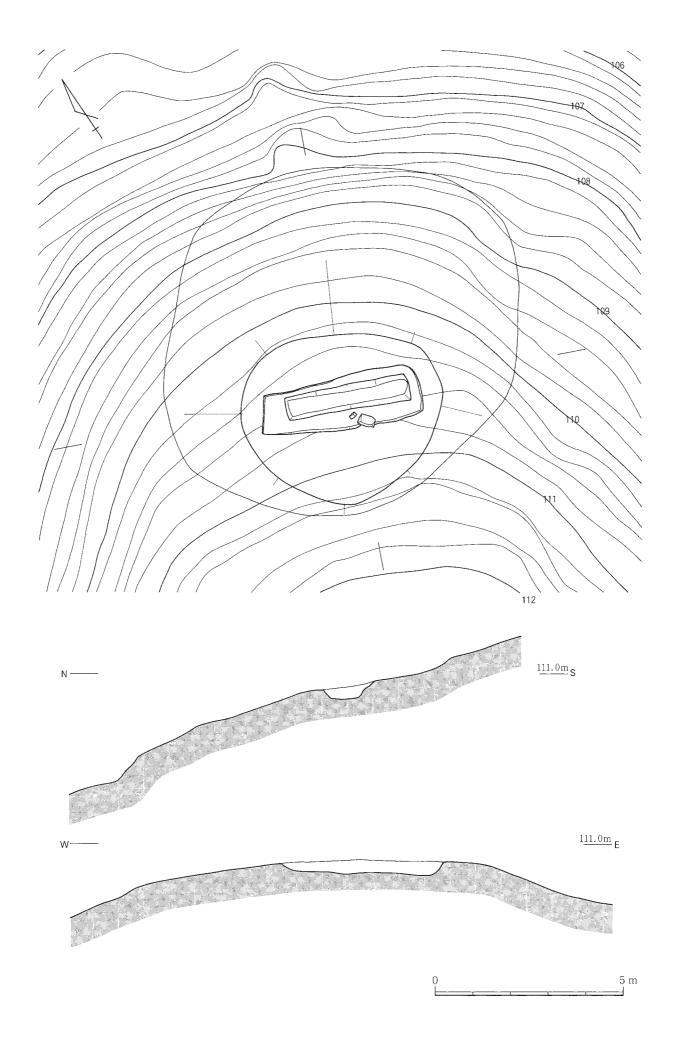
図 版

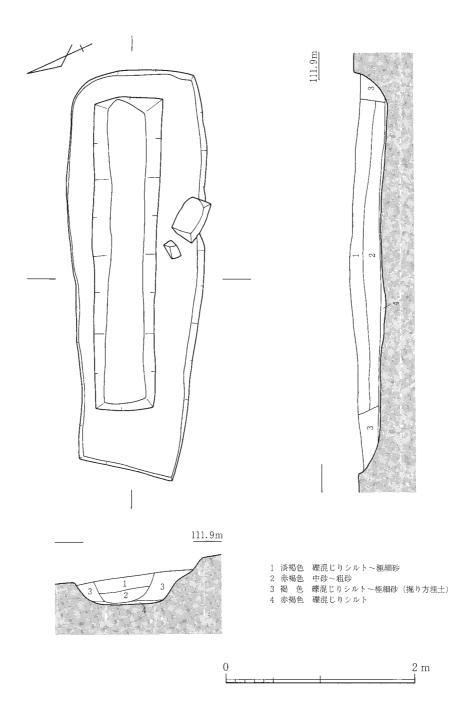




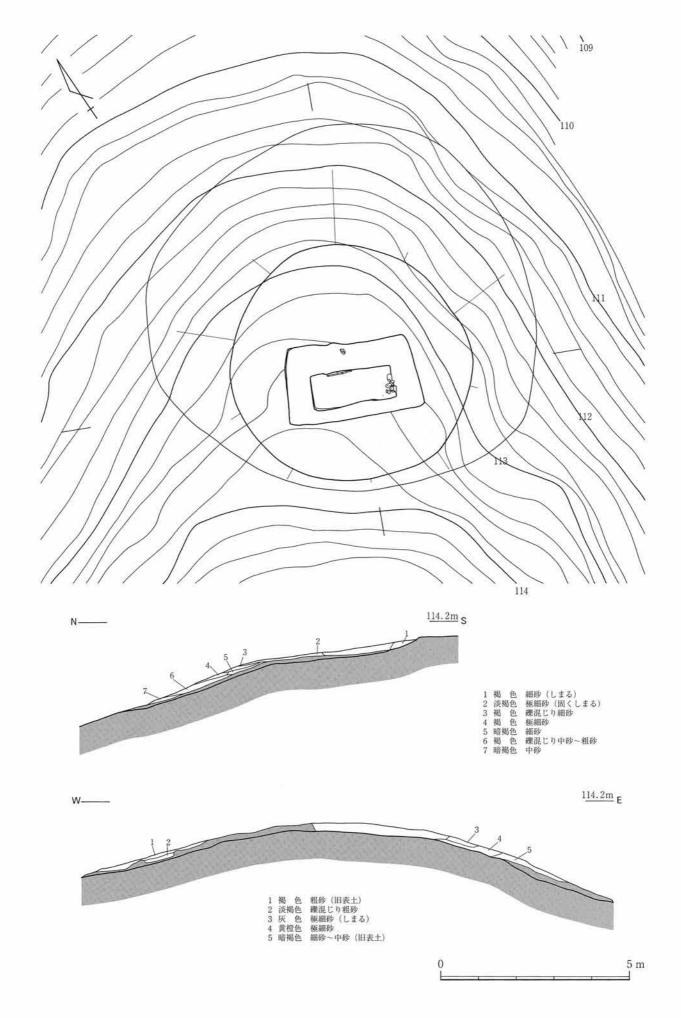


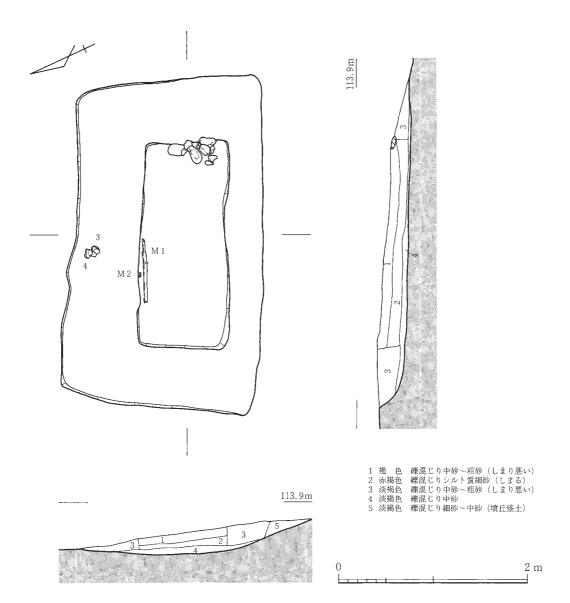
図版 4 1号墳墳丘

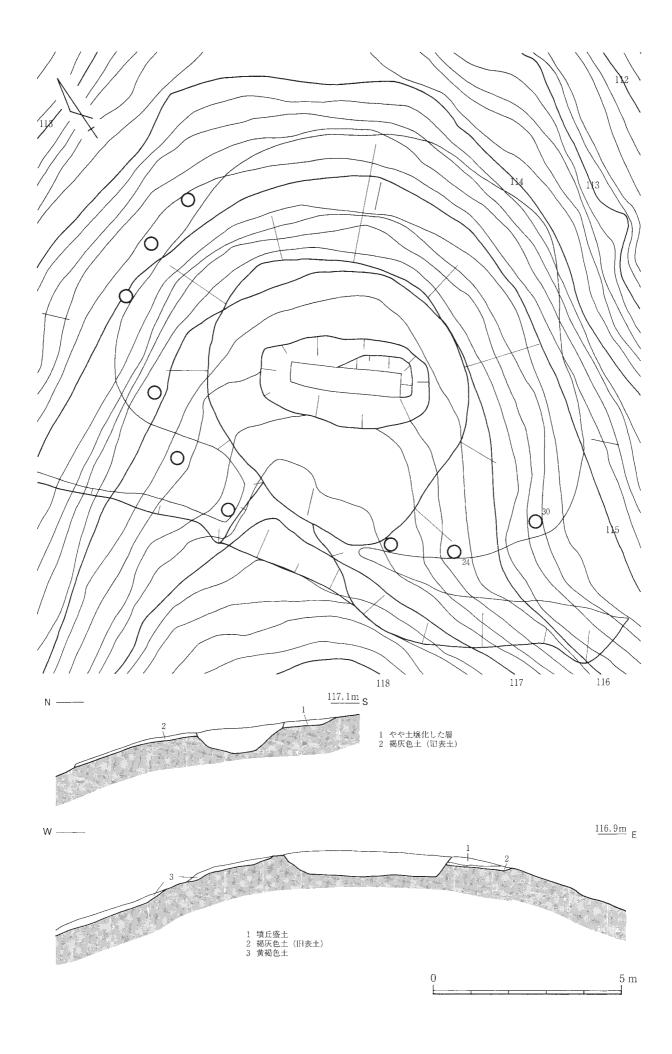


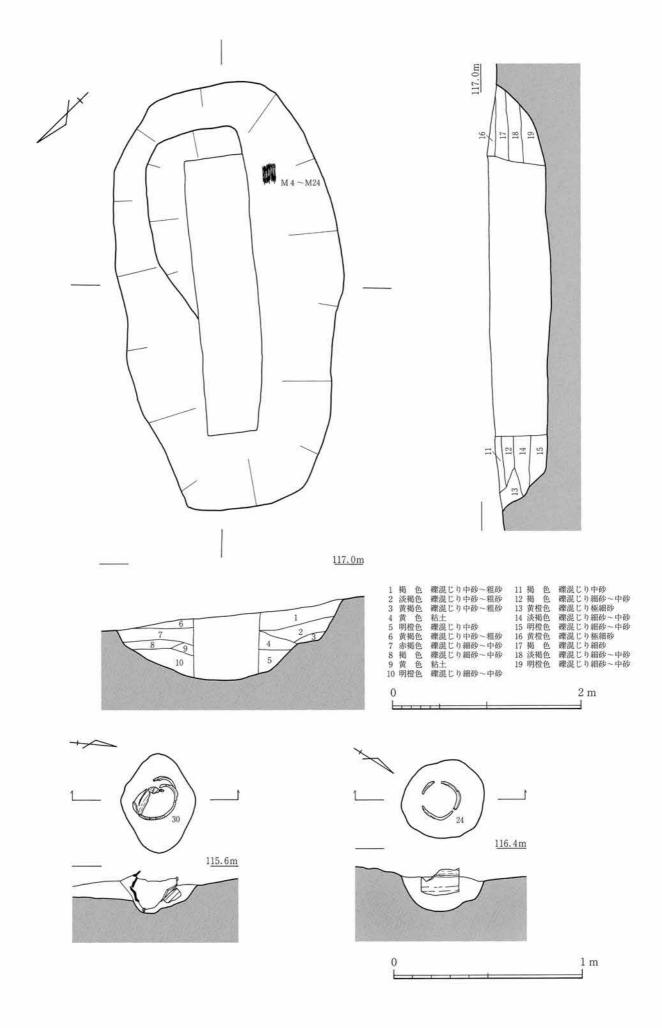


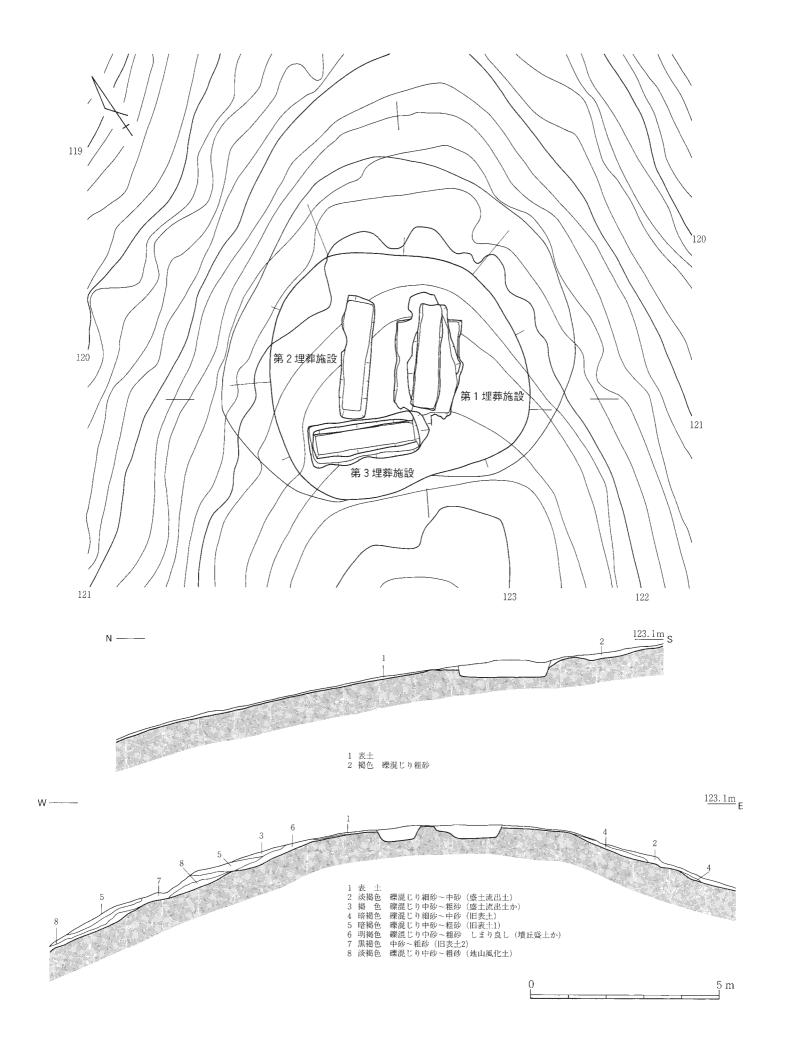
図版 6 2号墳墳丘

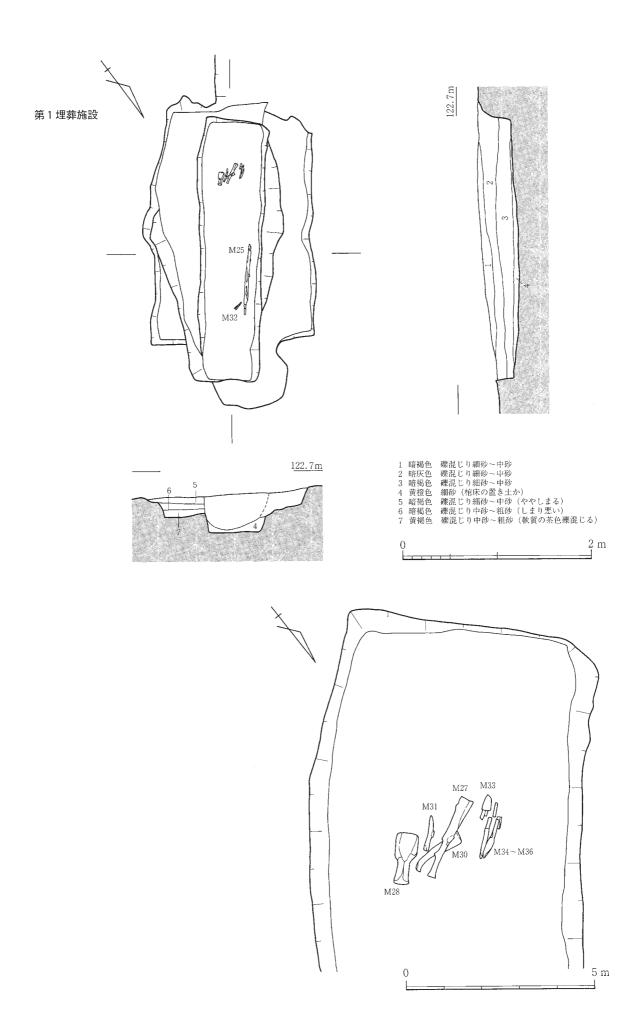




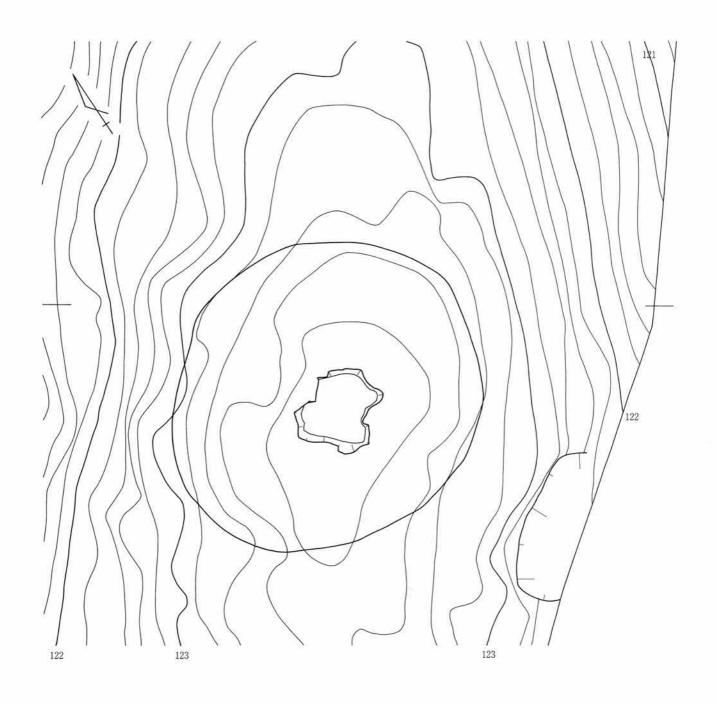


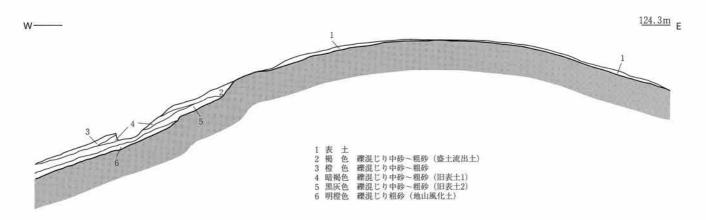




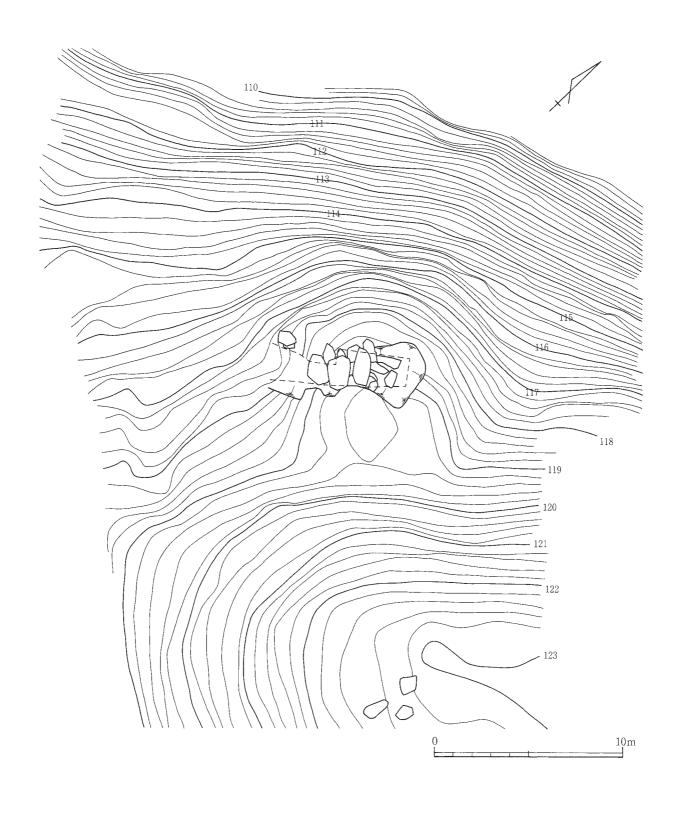


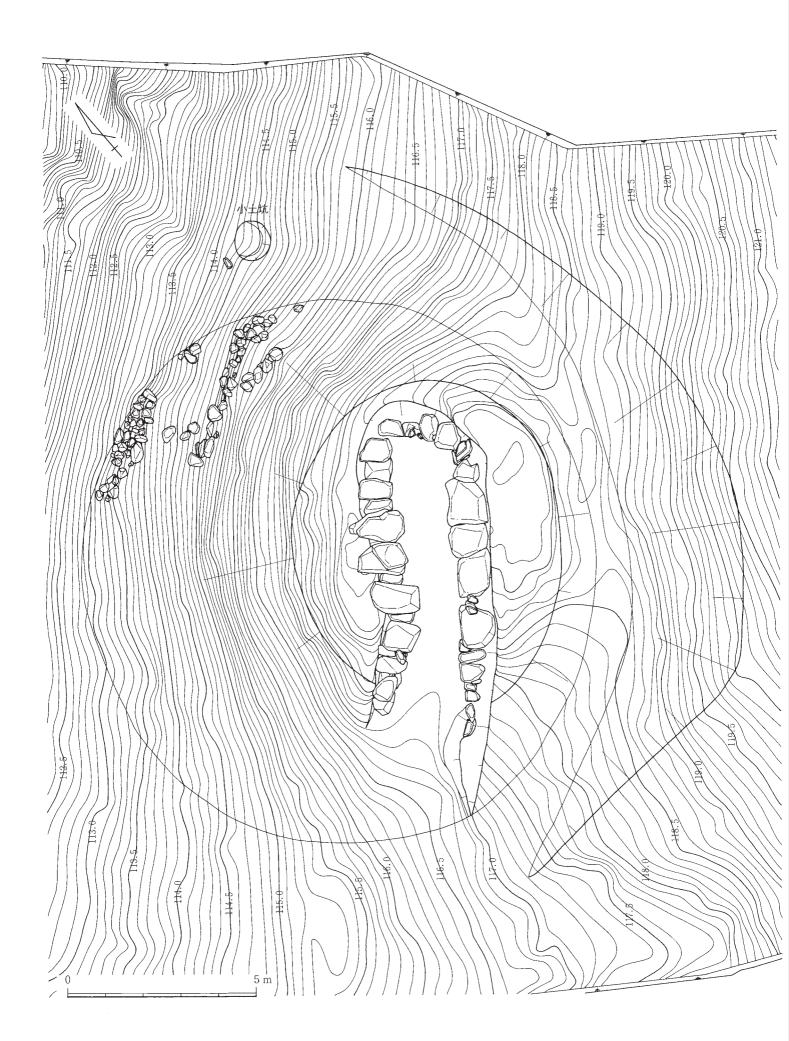
第2埋葬施設 M37~M45 122.6m 1 暗褐色(やや橙色気味) 糜混じり細砂〜中砂(しまり悪い) 2 赤褐色(やや黄色気味) 礫混じり細砂〜中砂(ややしまる) 第3埋葬施設 1<u>22.6m</u> 1 暗褐色 礫混じり中砂〜粗砂 2 橙 色 礫混じり中砂〜粗砂 3 黄 色 シルト〜細砂(棺床置き土) 2



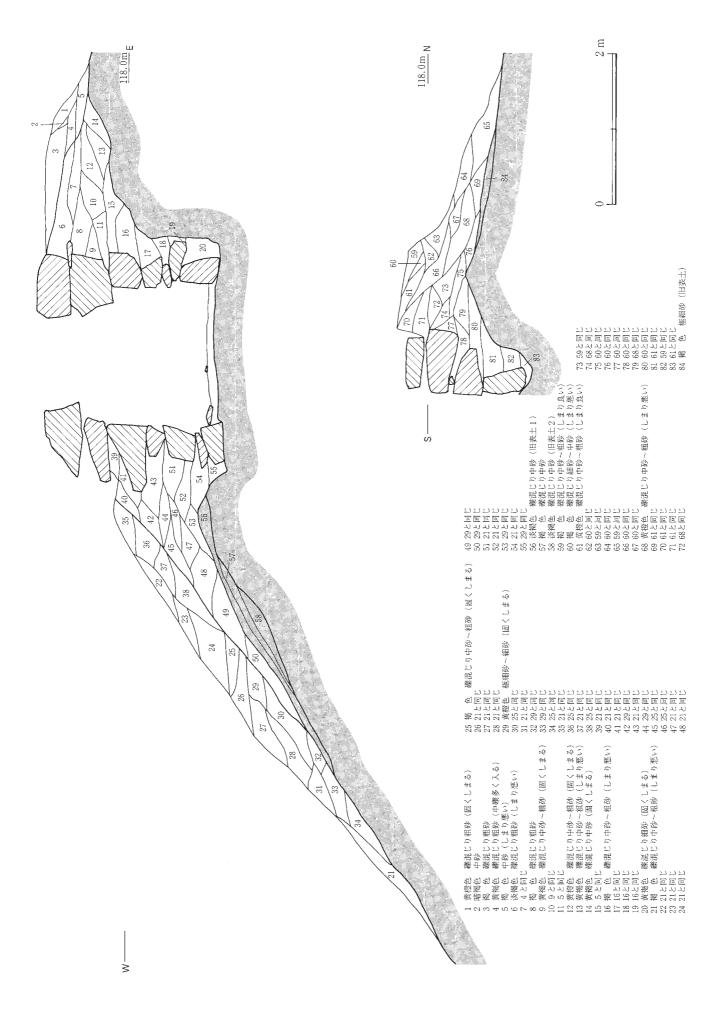


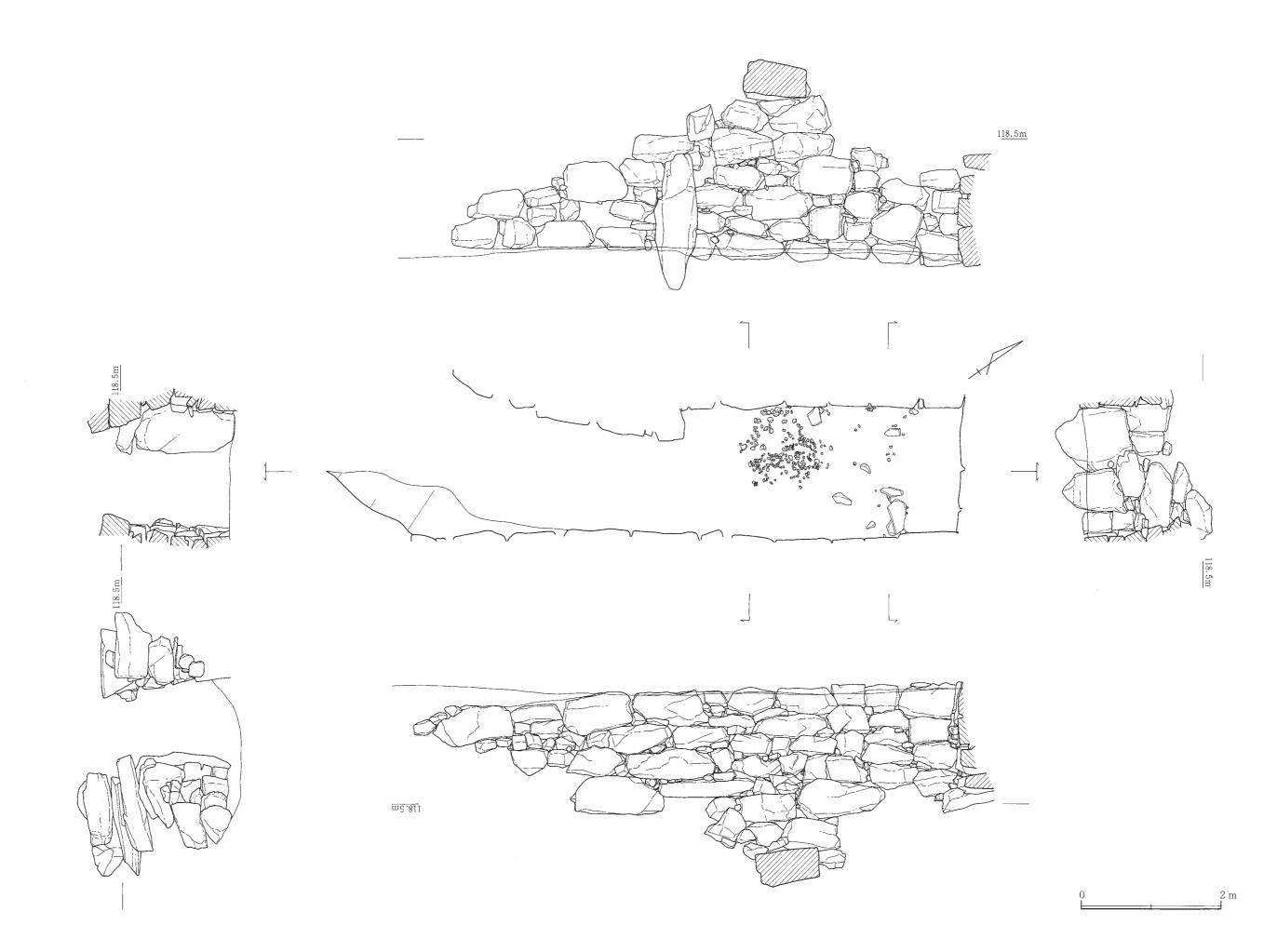
0 5 m

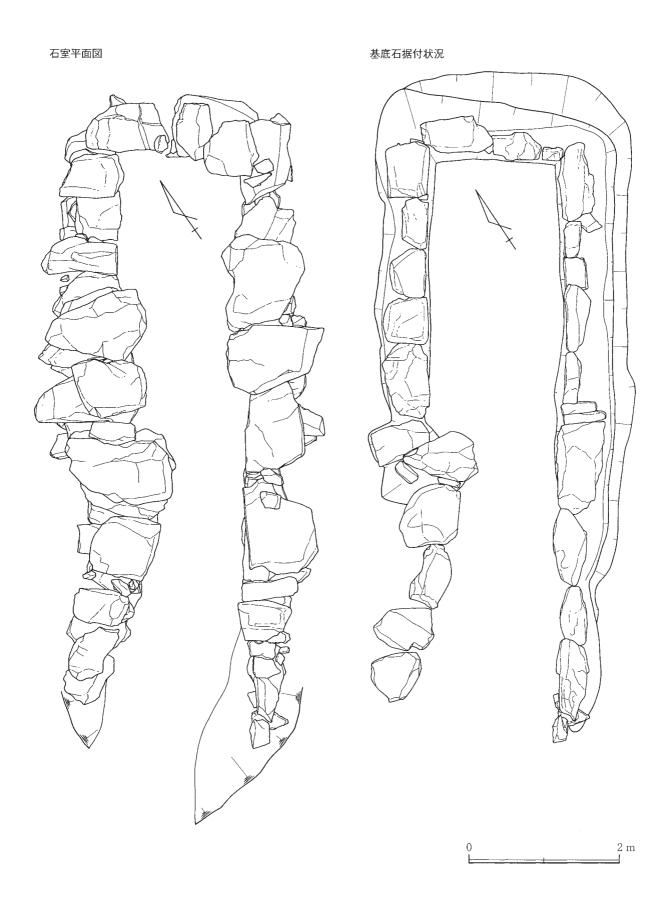


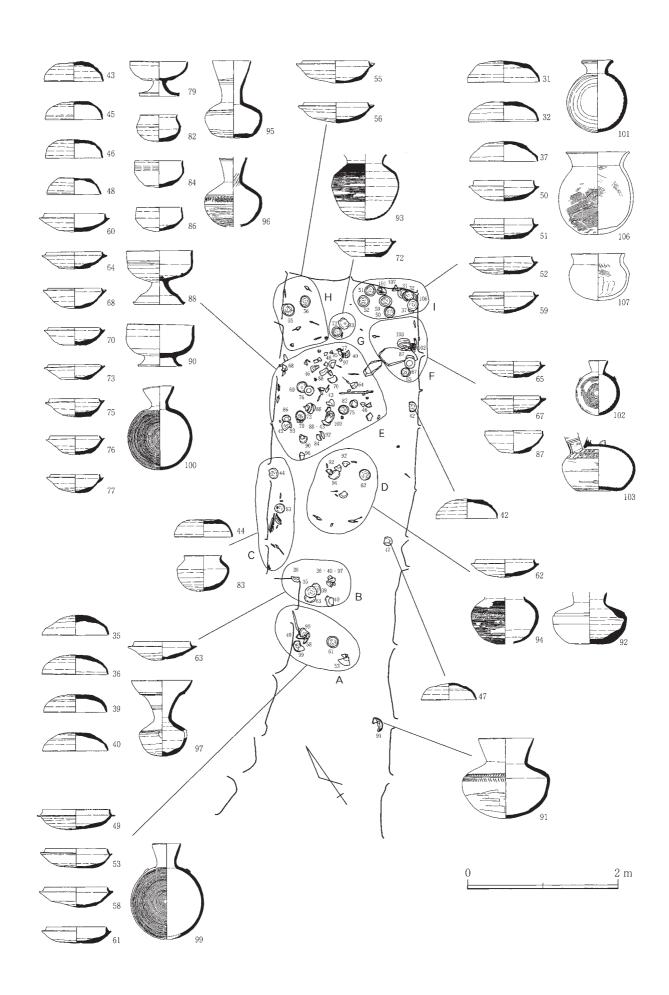


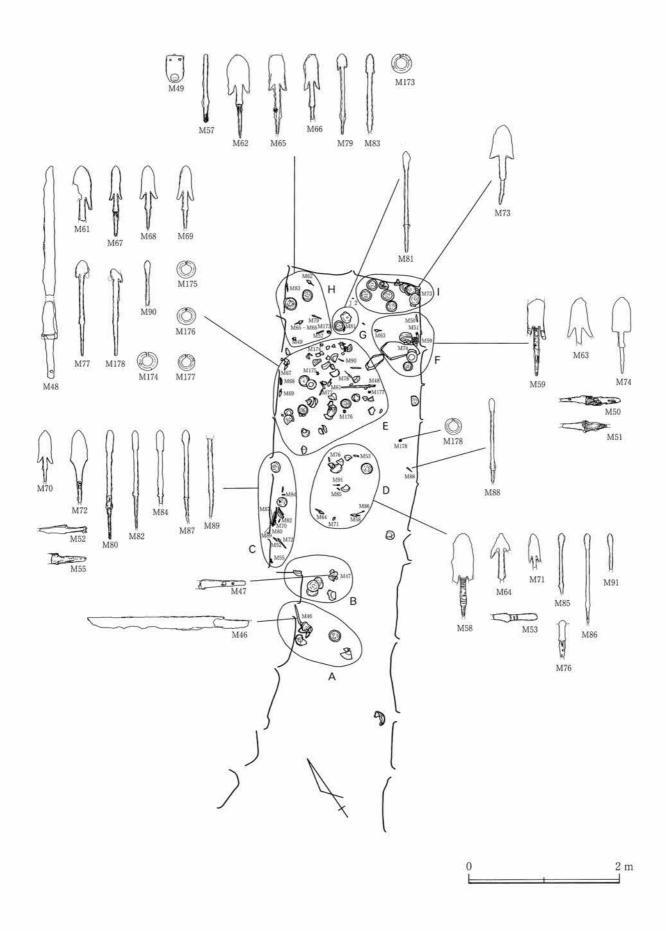
図版 16 7号墳墳丘断面

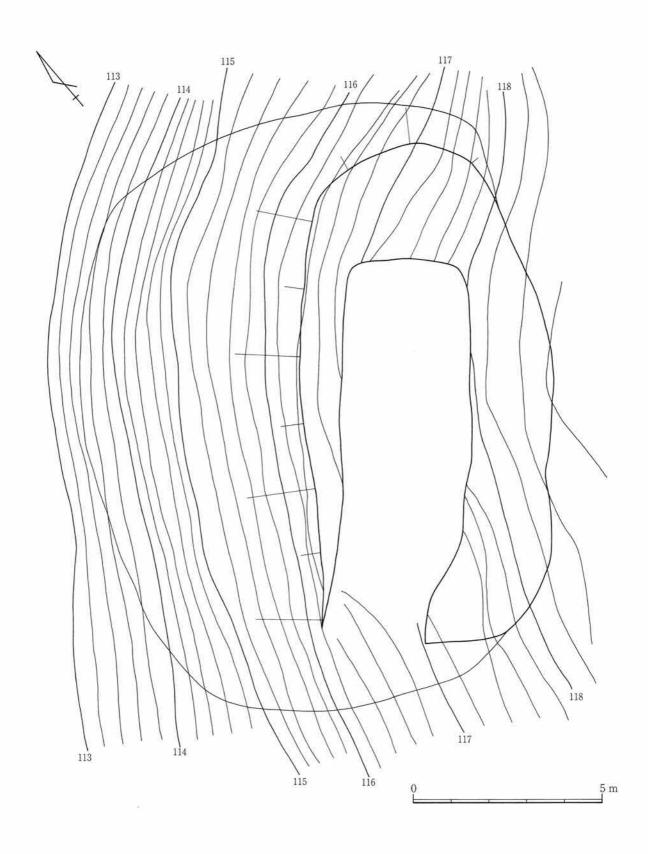


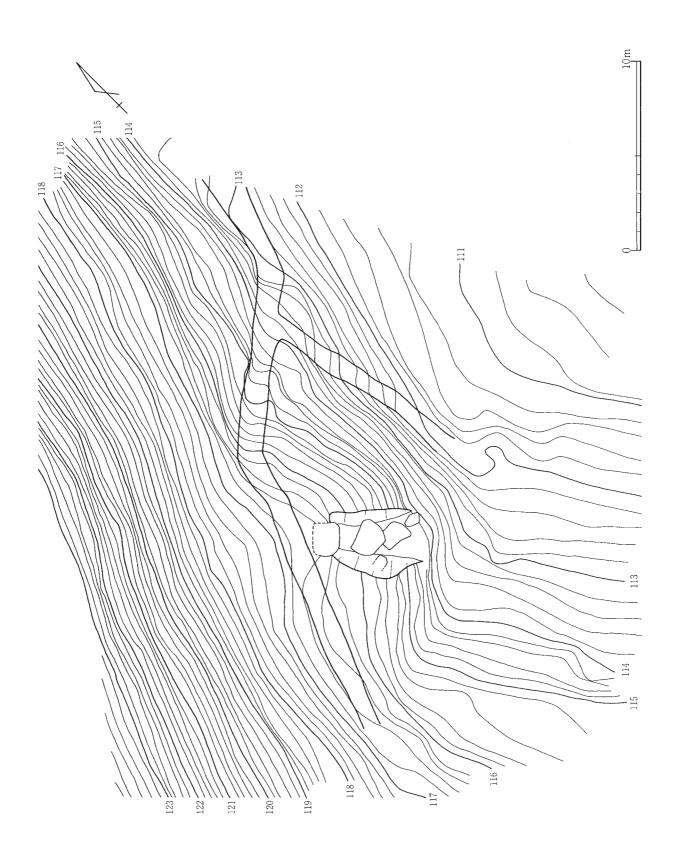


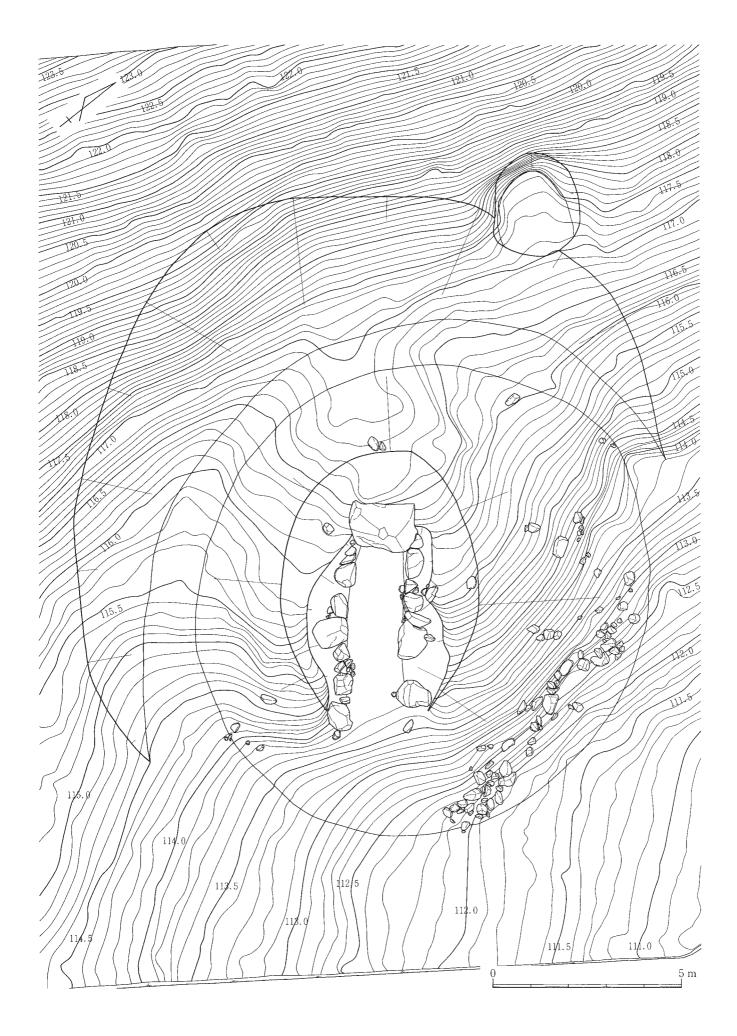


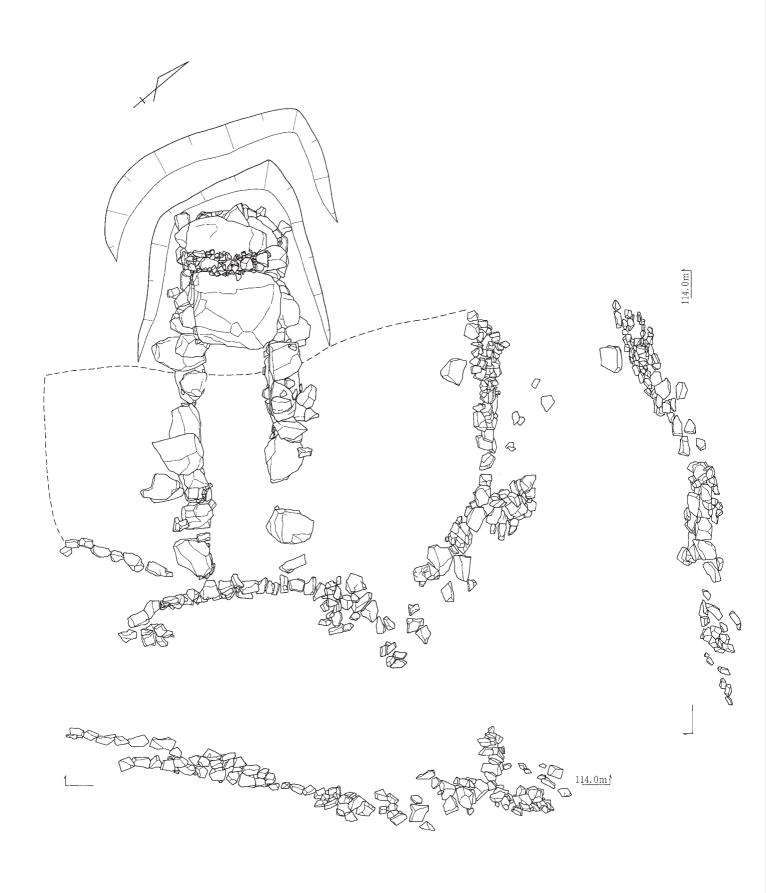




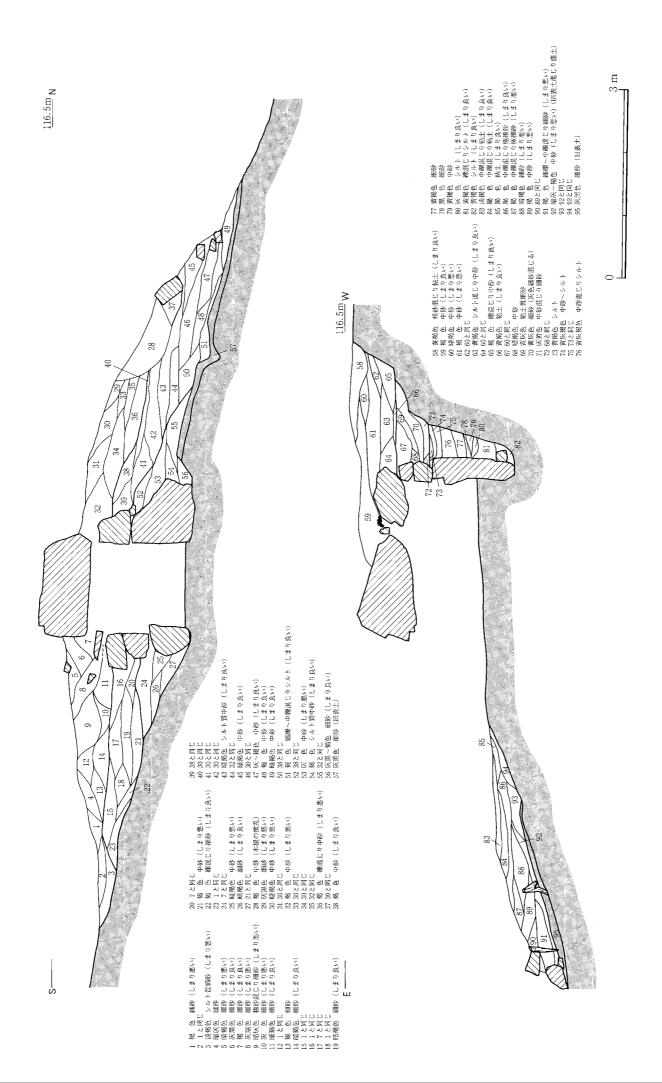


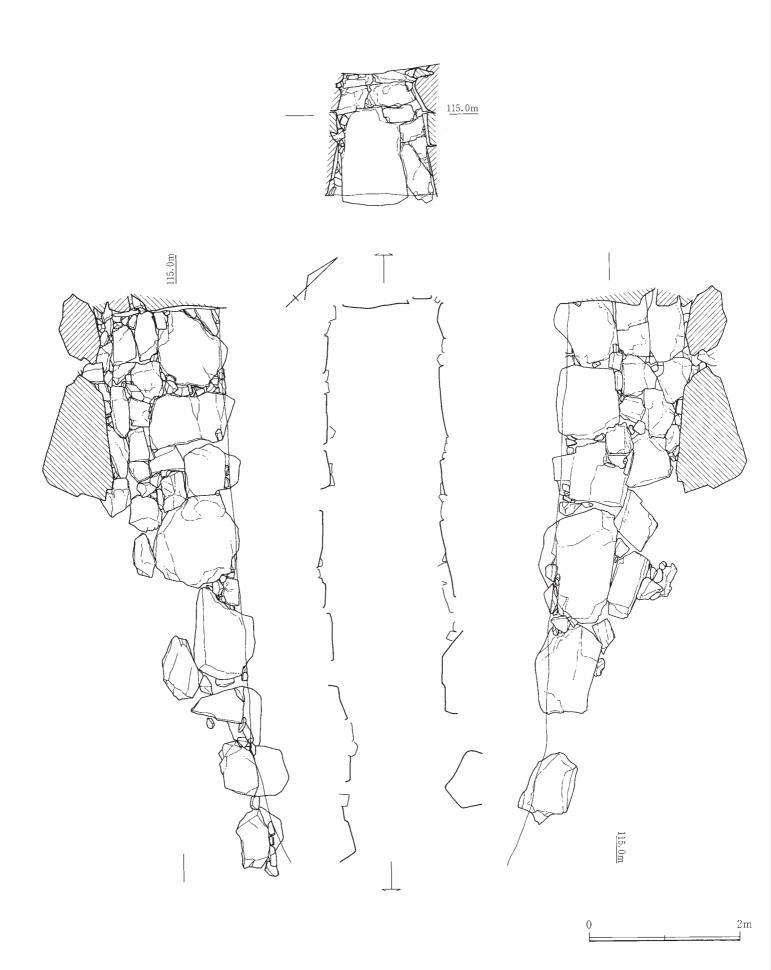


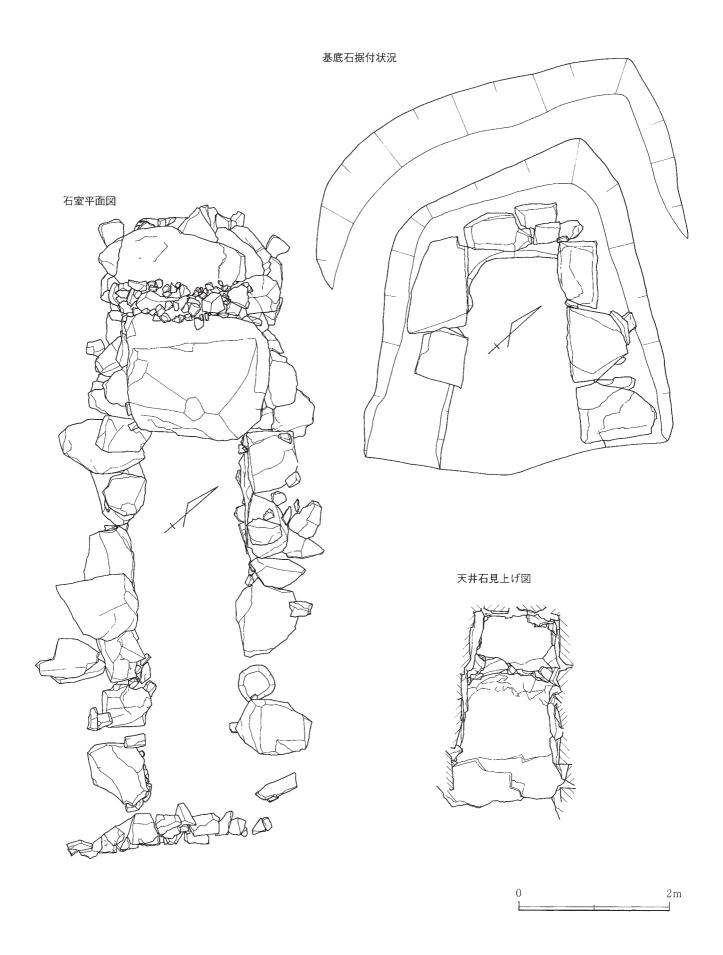


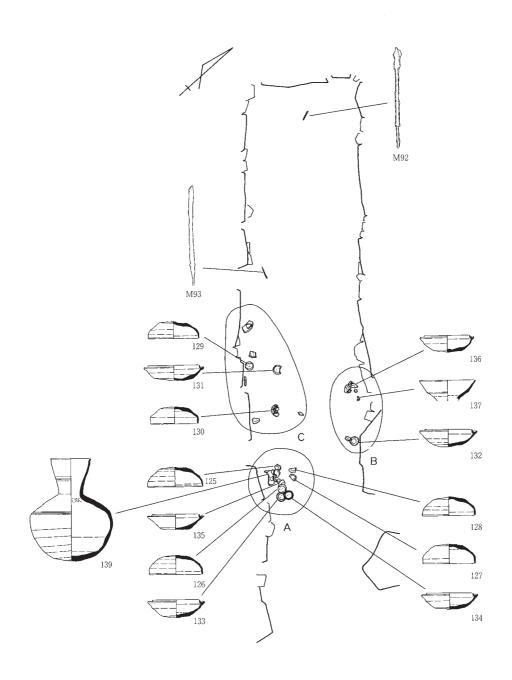


Q 4 n

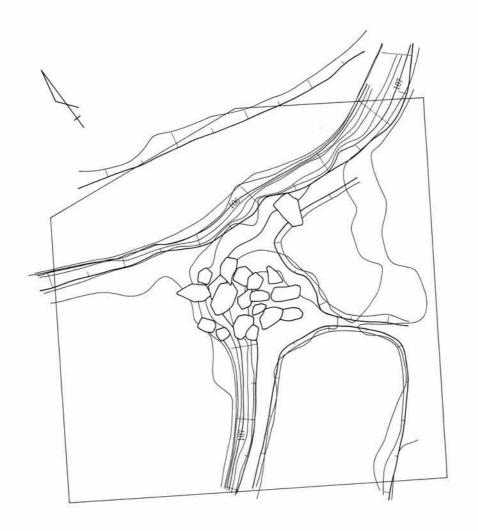




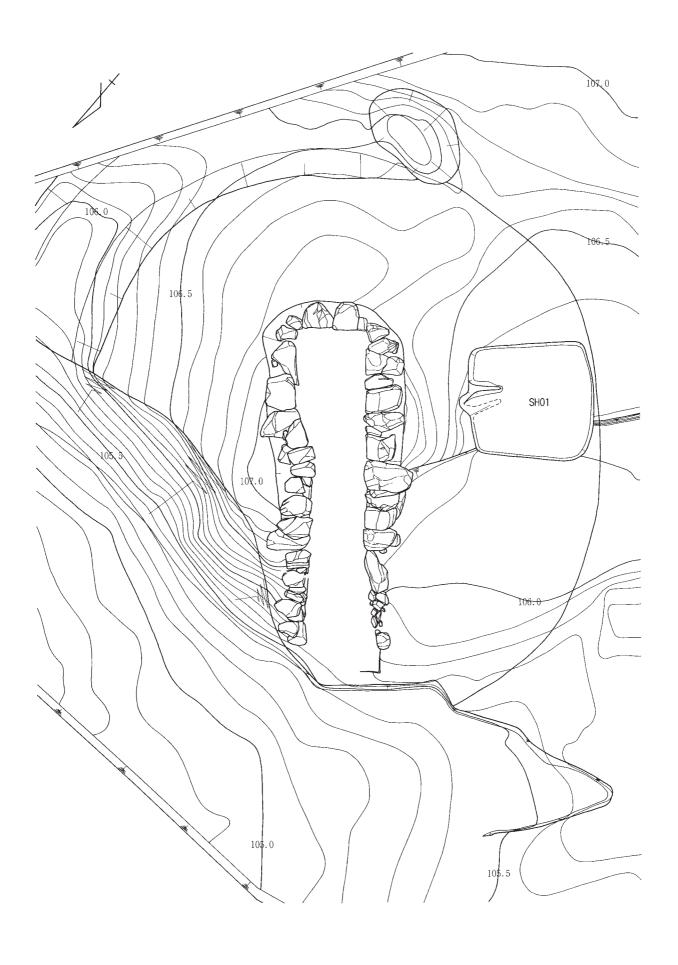




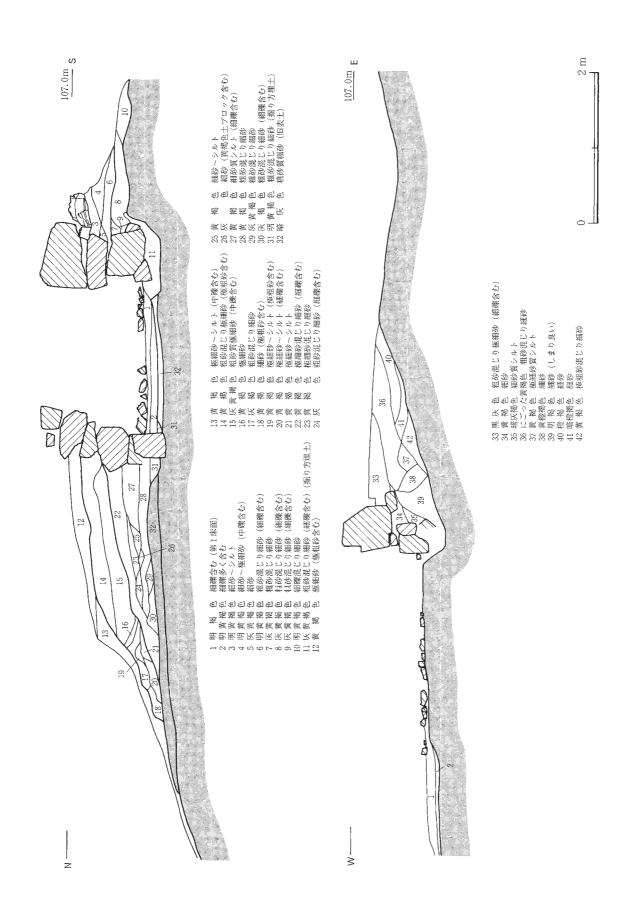


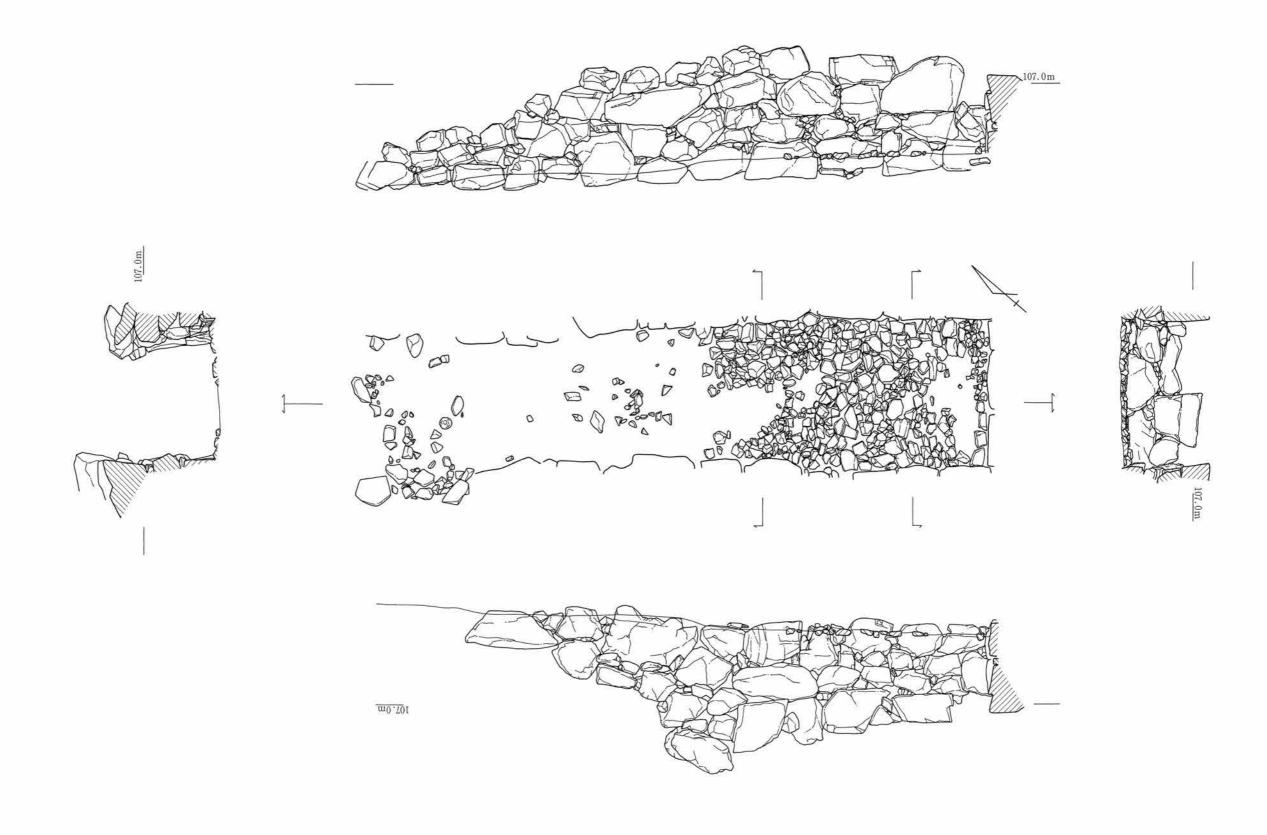








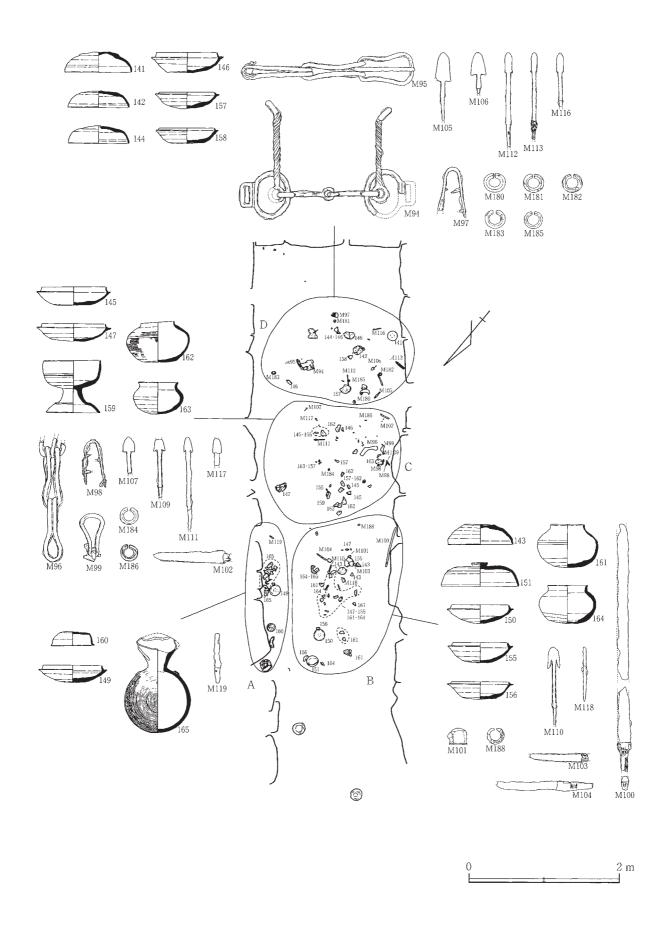


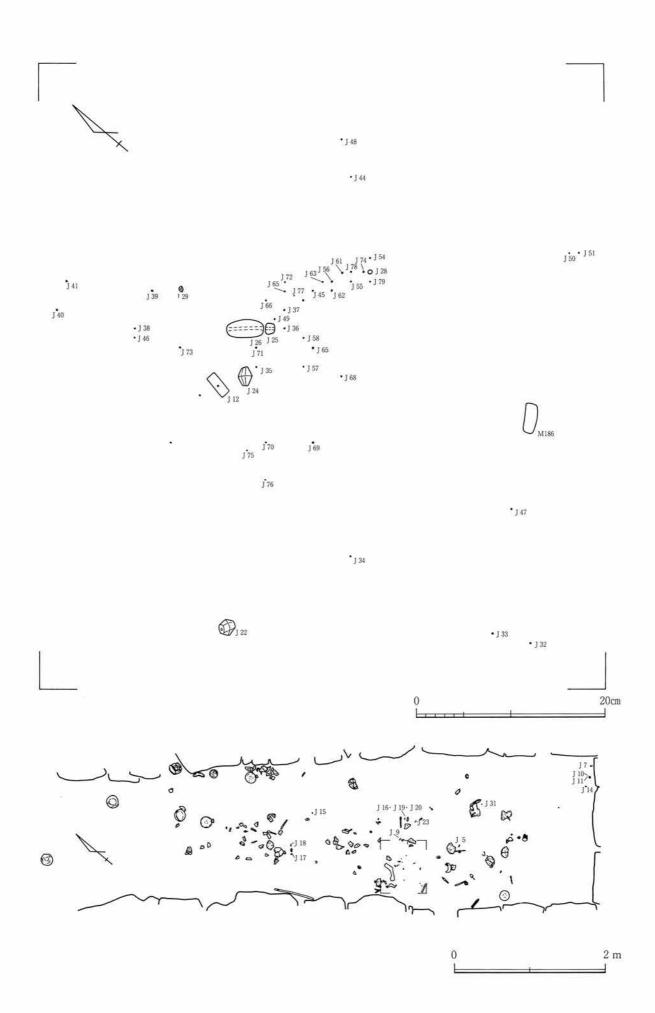


2 m



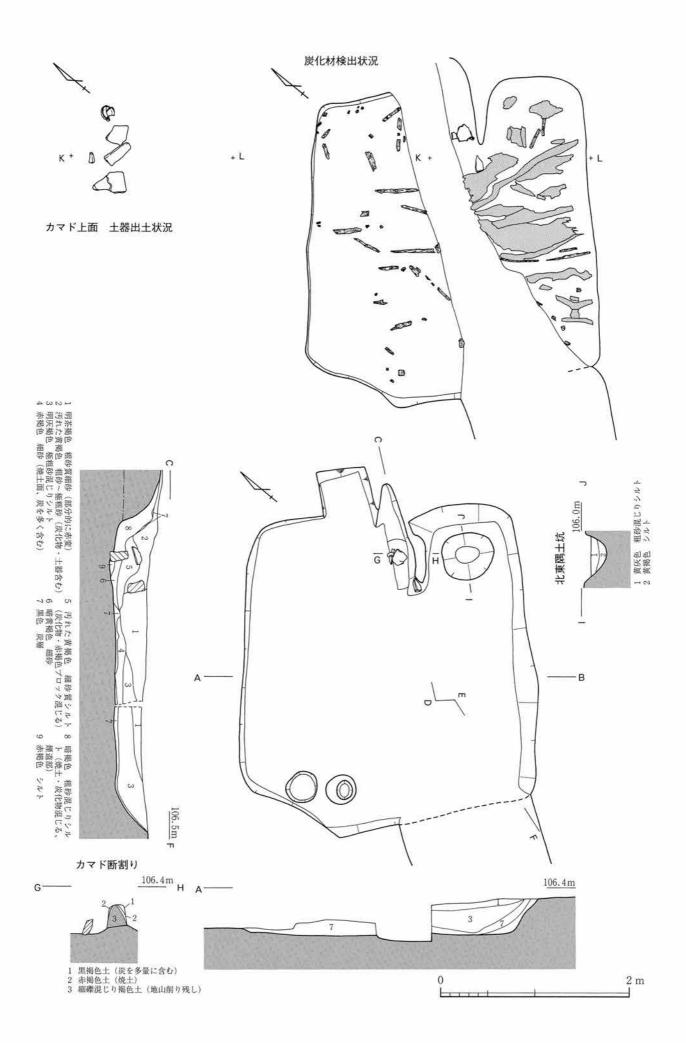
0 2 m

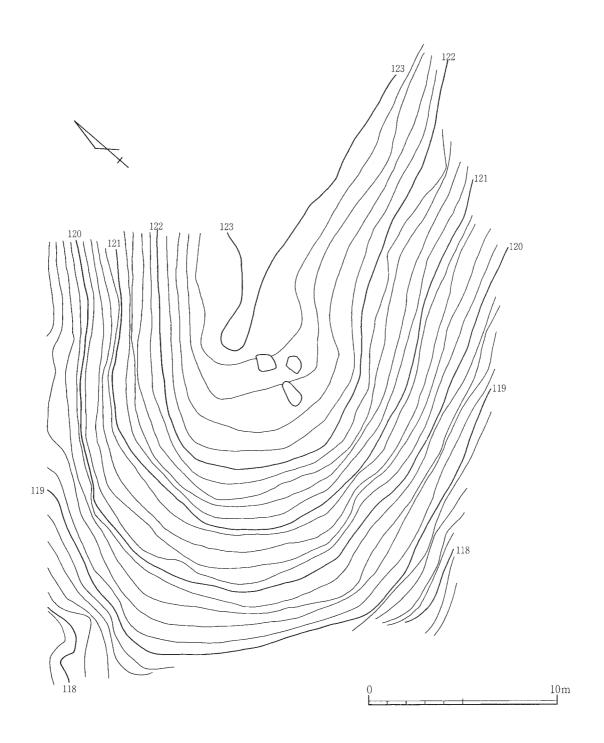






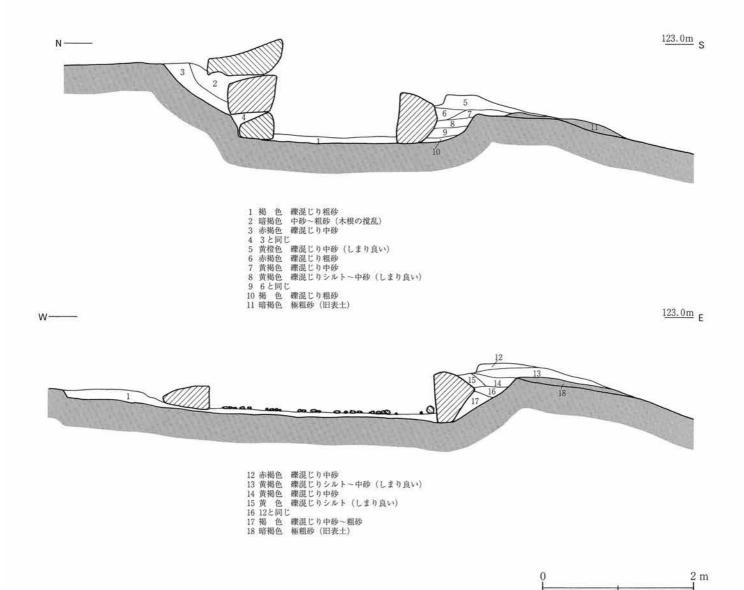


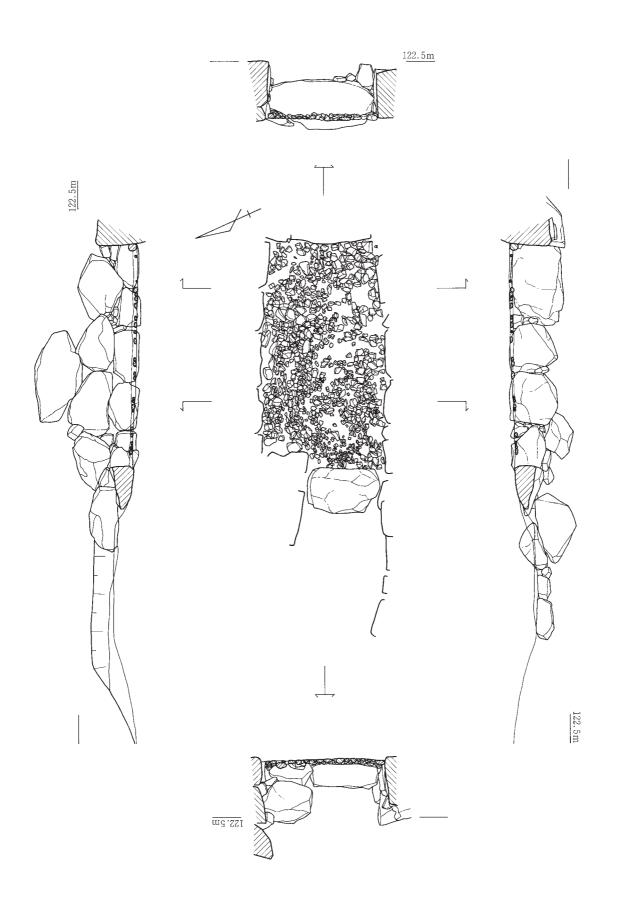






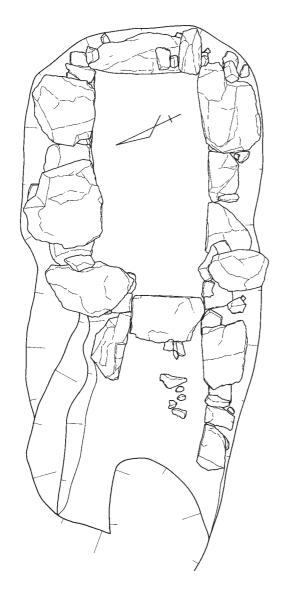
図版 40 10号墳墳丘断面



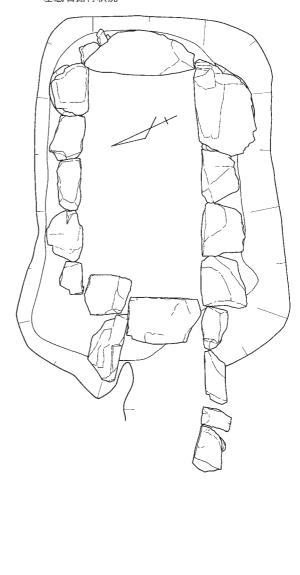


2 m

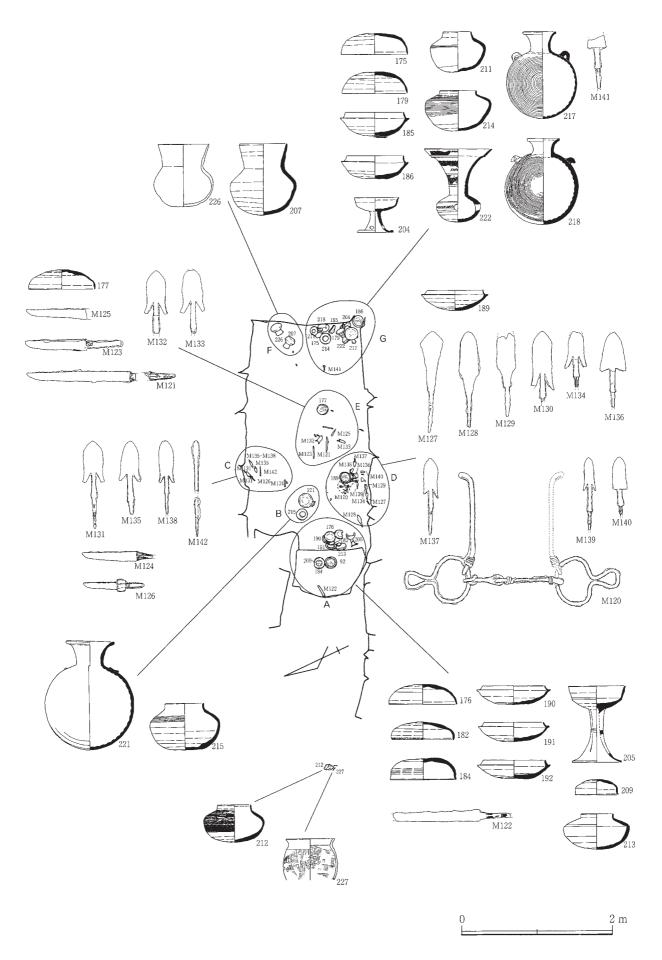
石室平面図

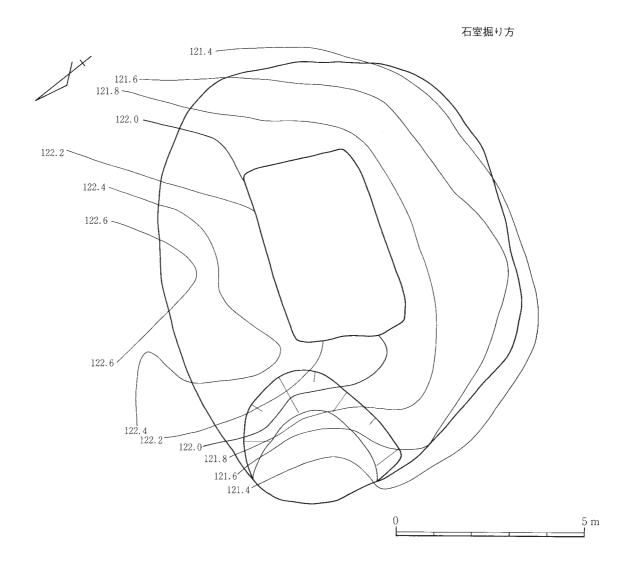


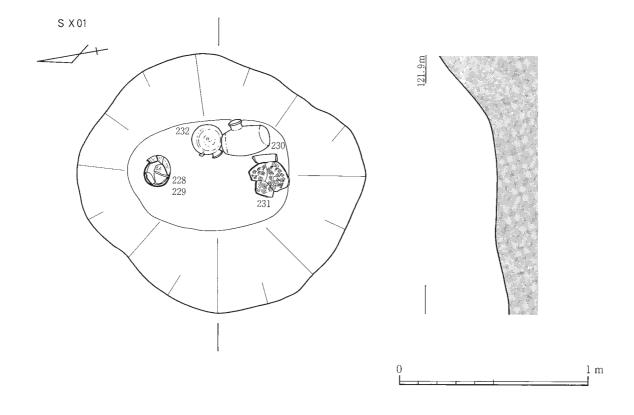
基底石据付状況

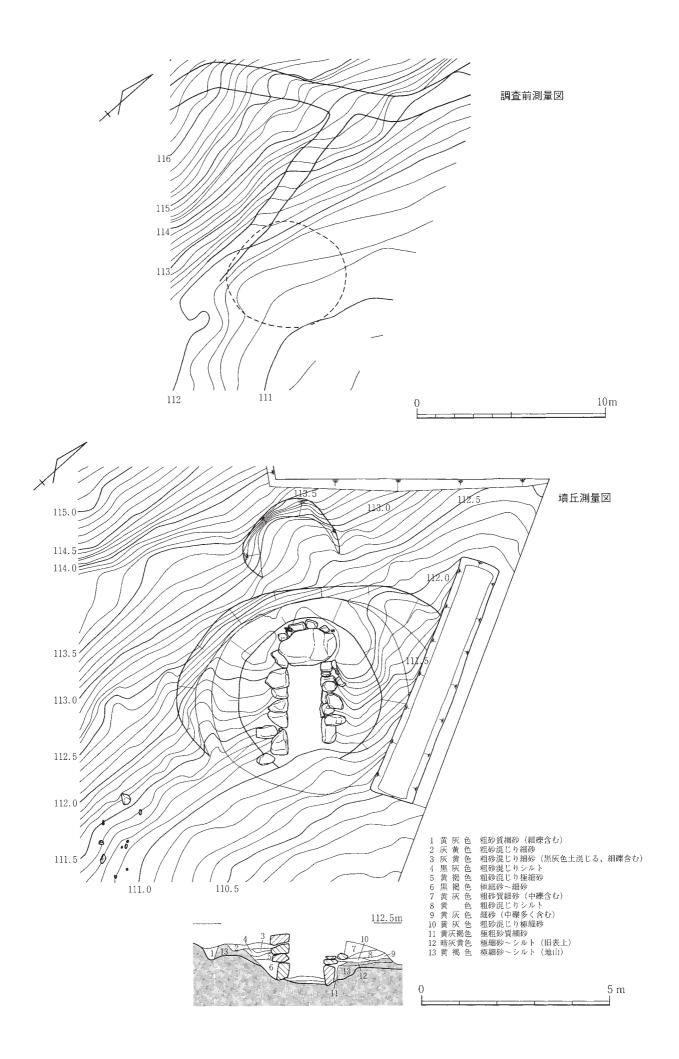


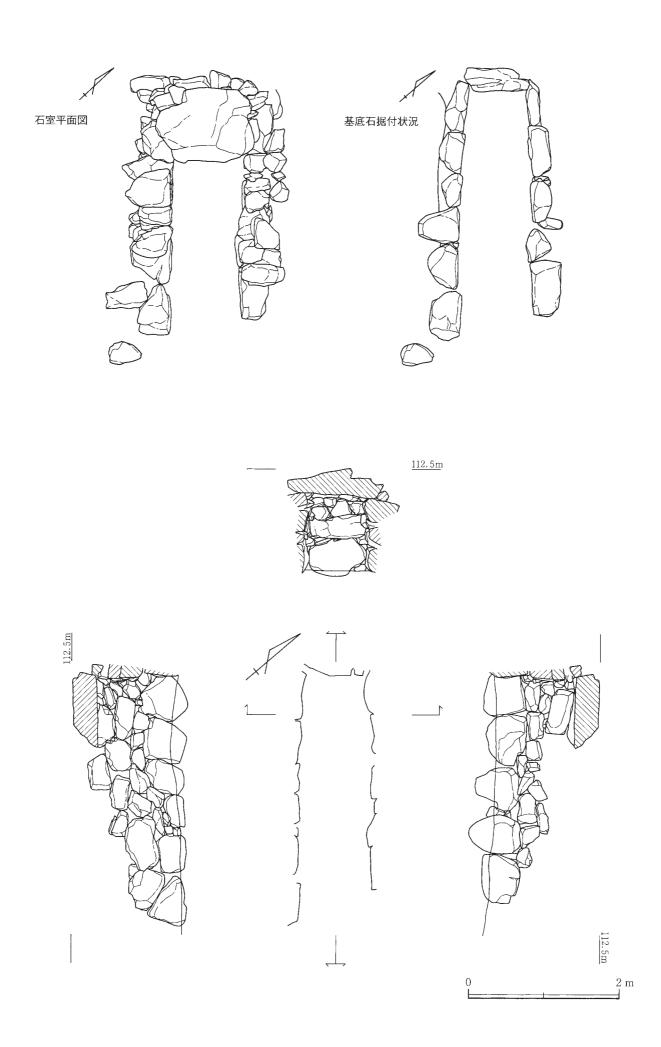
2 m

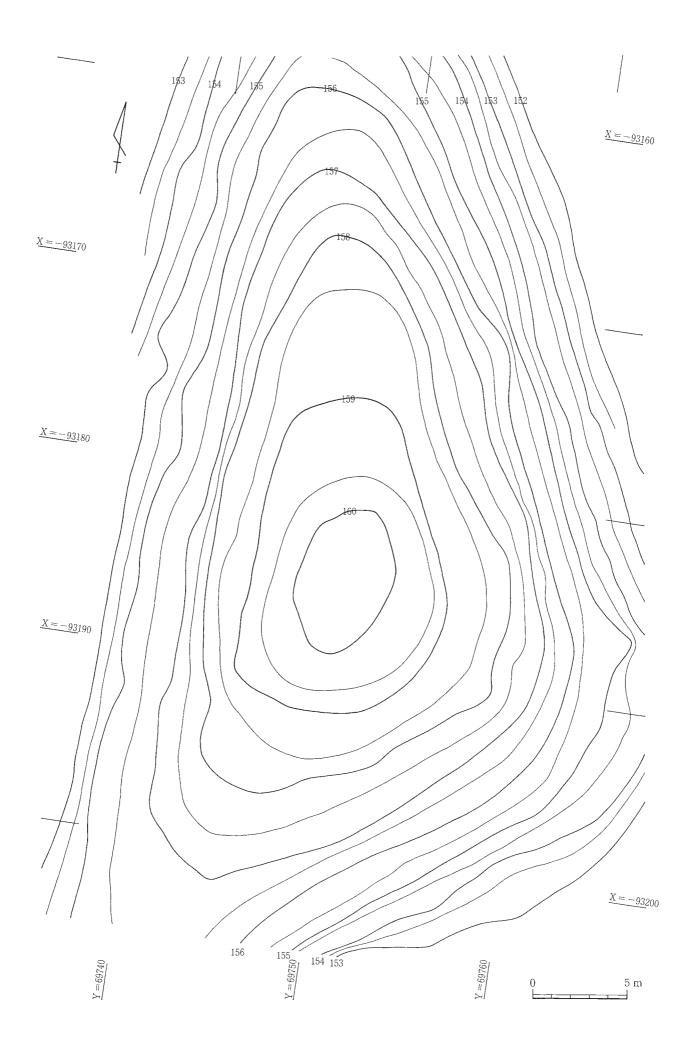


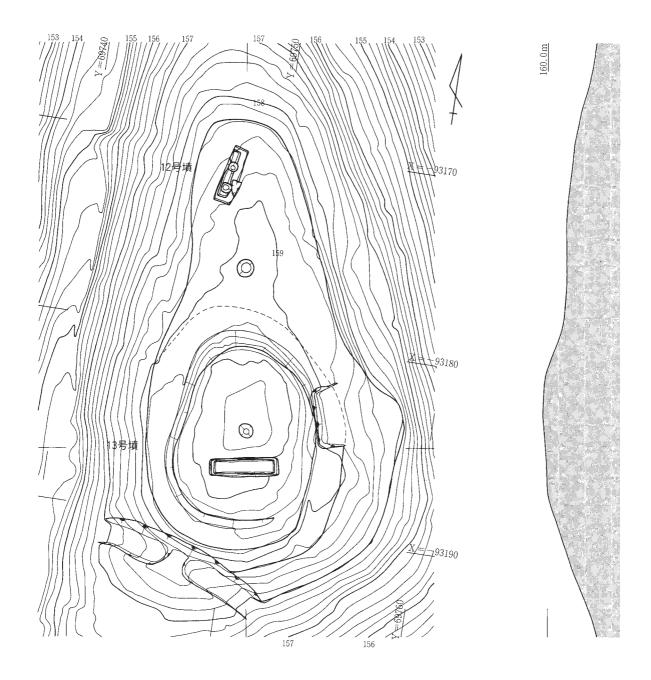


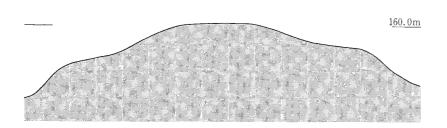






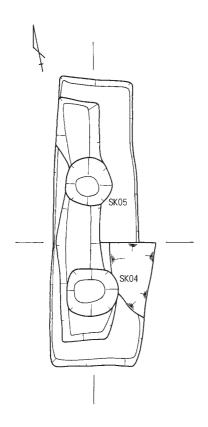


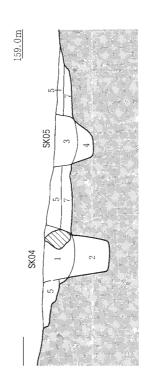


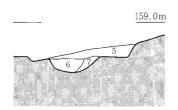


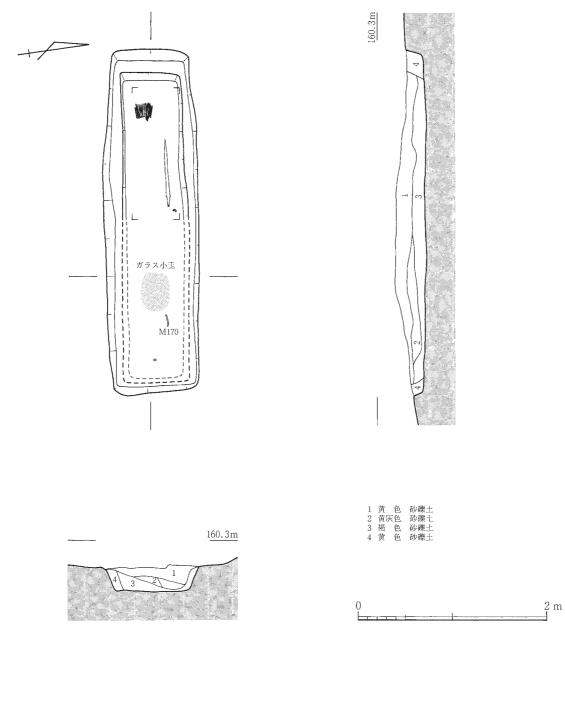


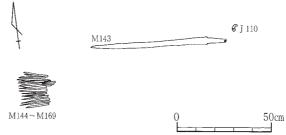
12号墳埋葬施設 図版 49

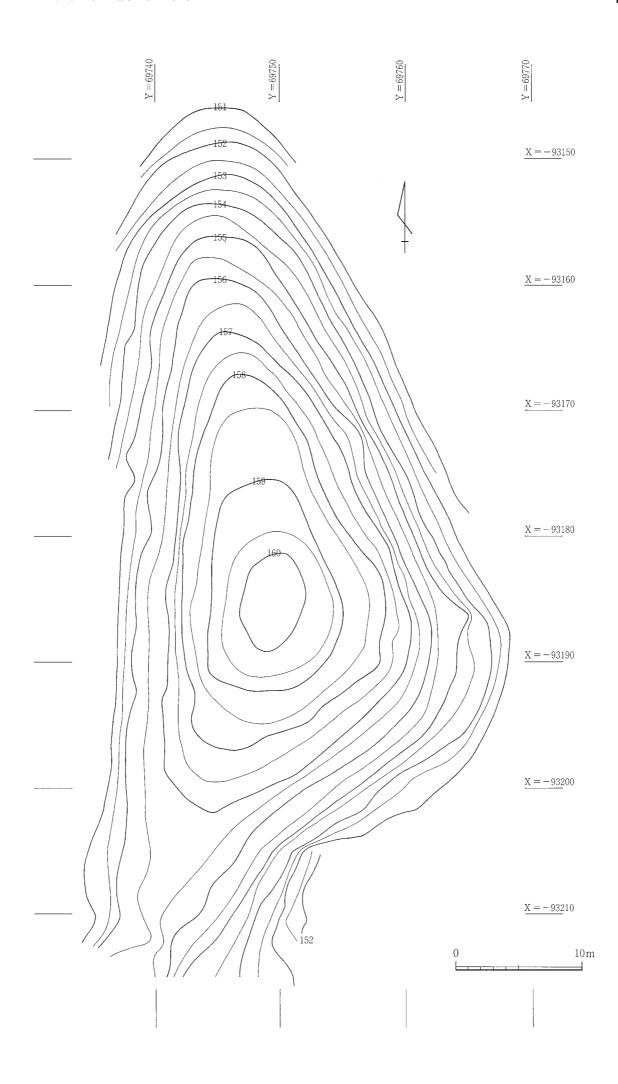


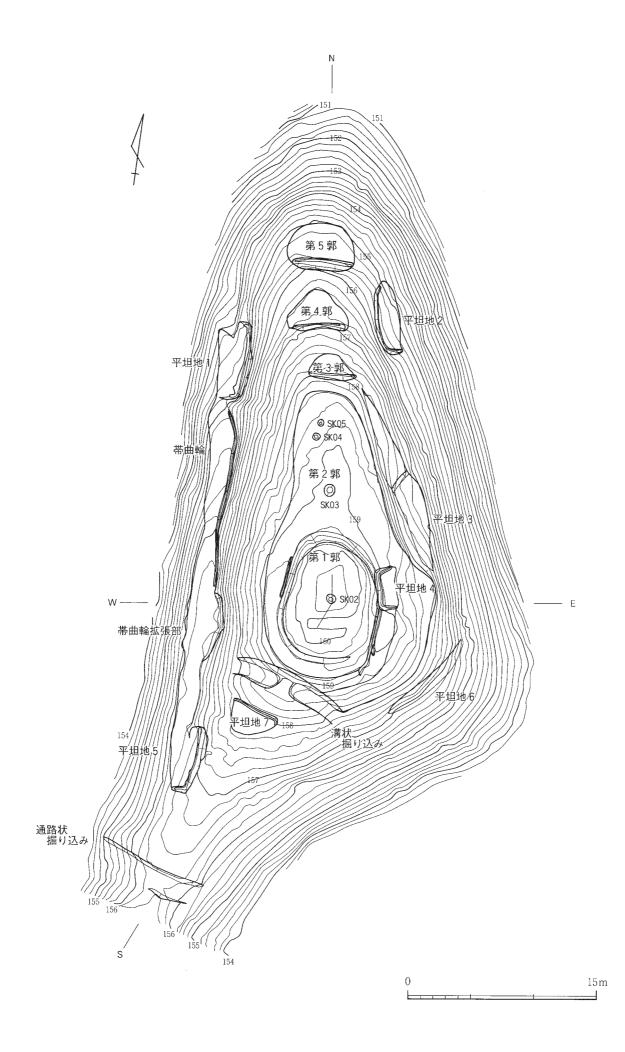


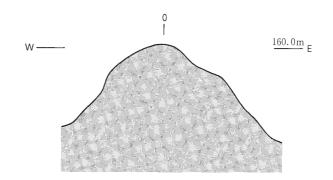


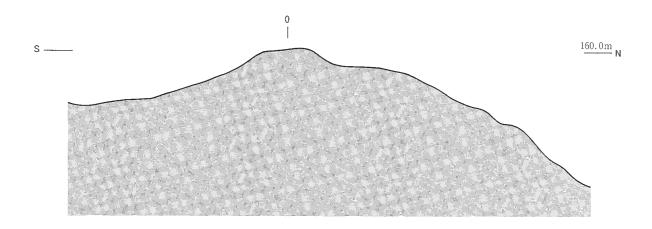


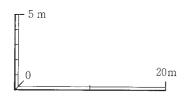


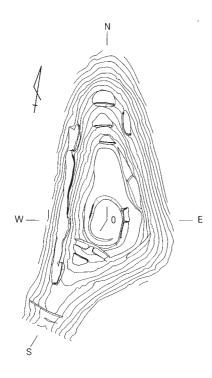


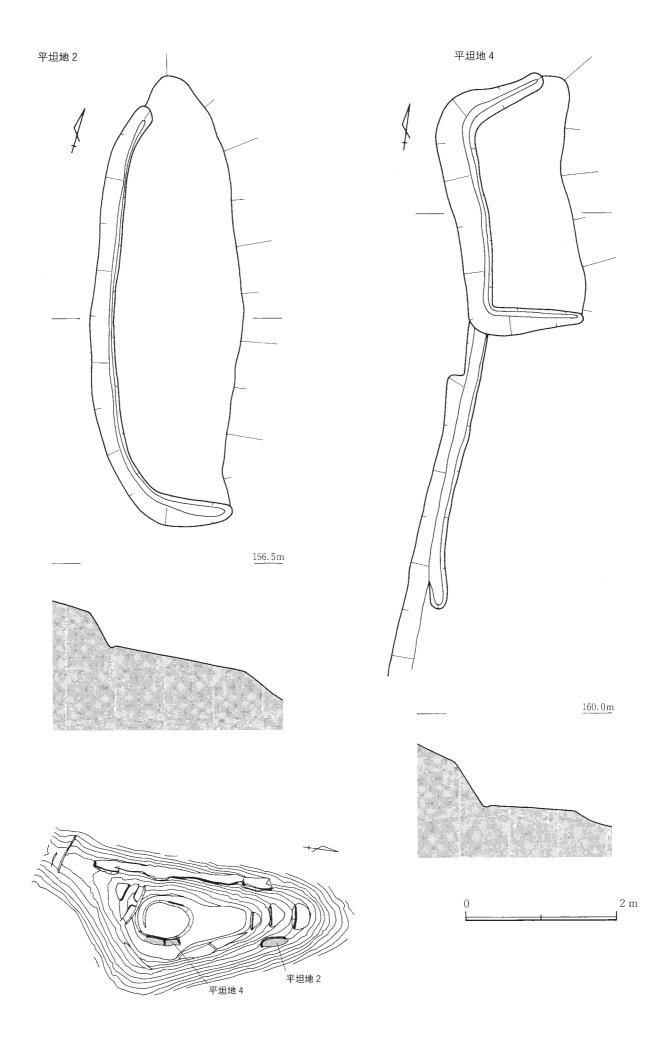


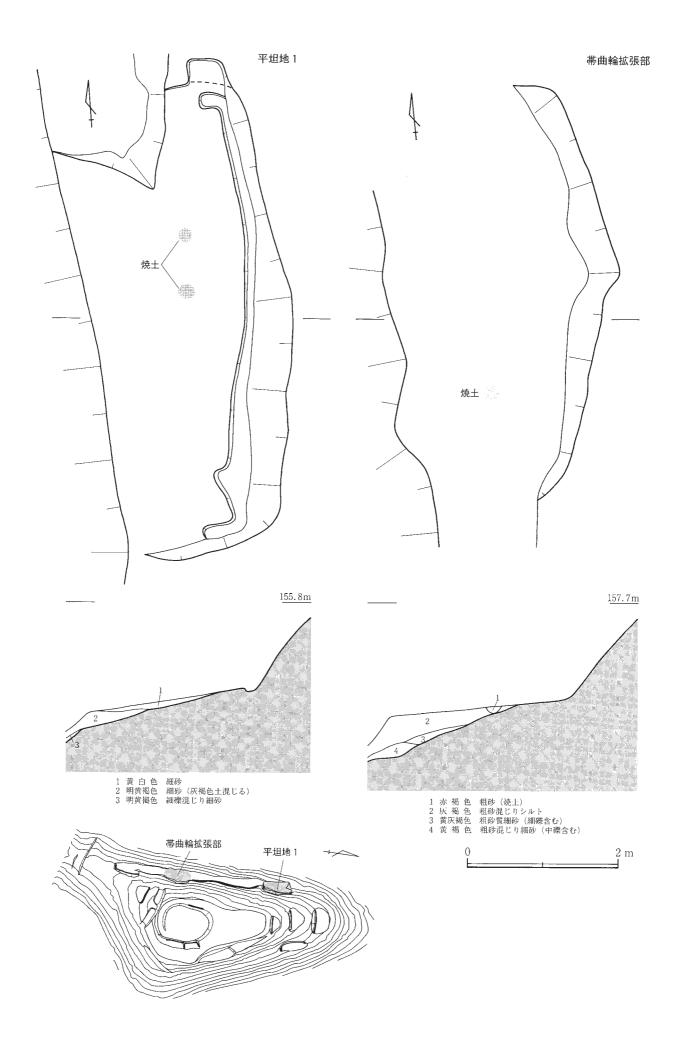


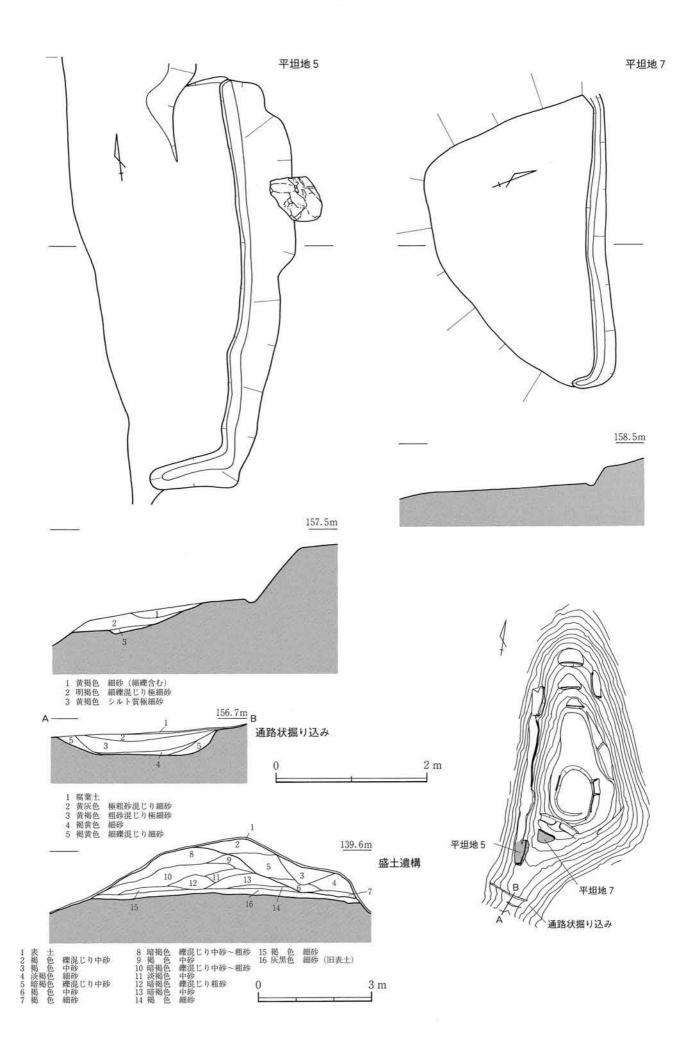


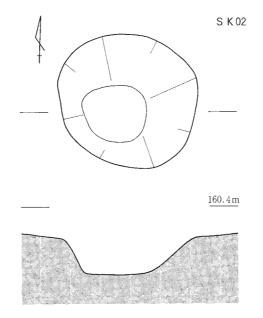


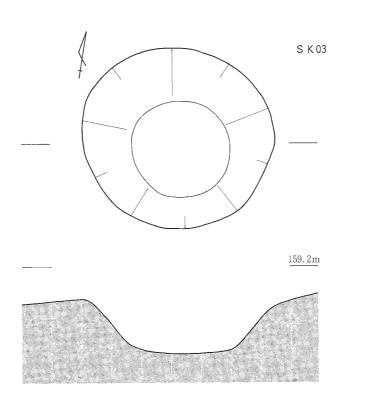




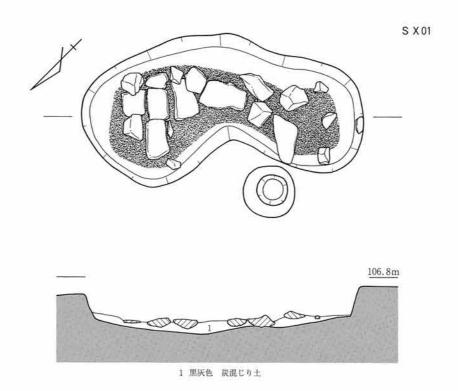


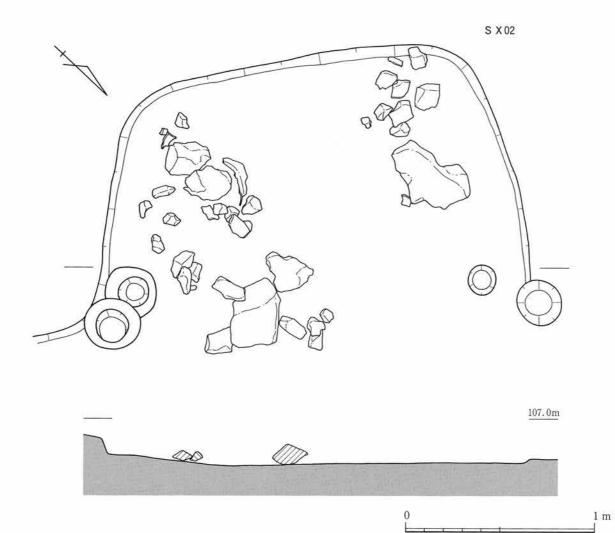




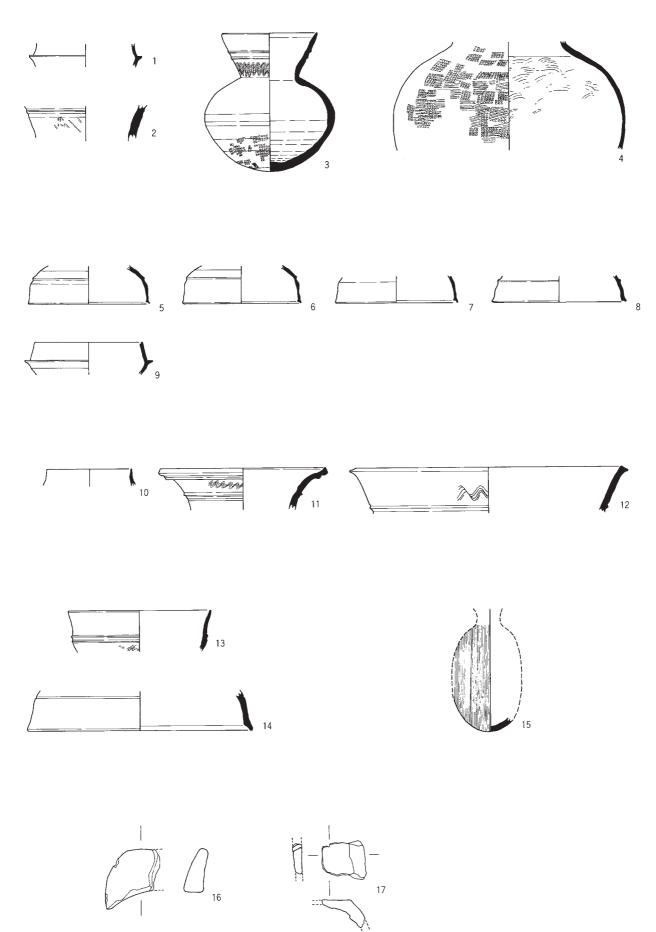


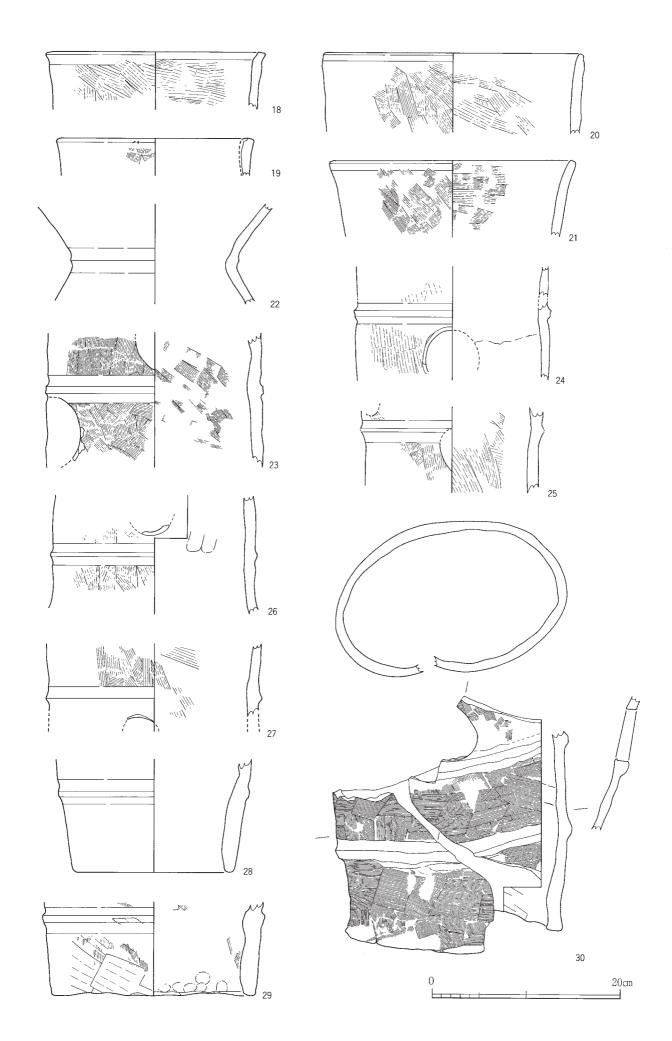
0 1 m

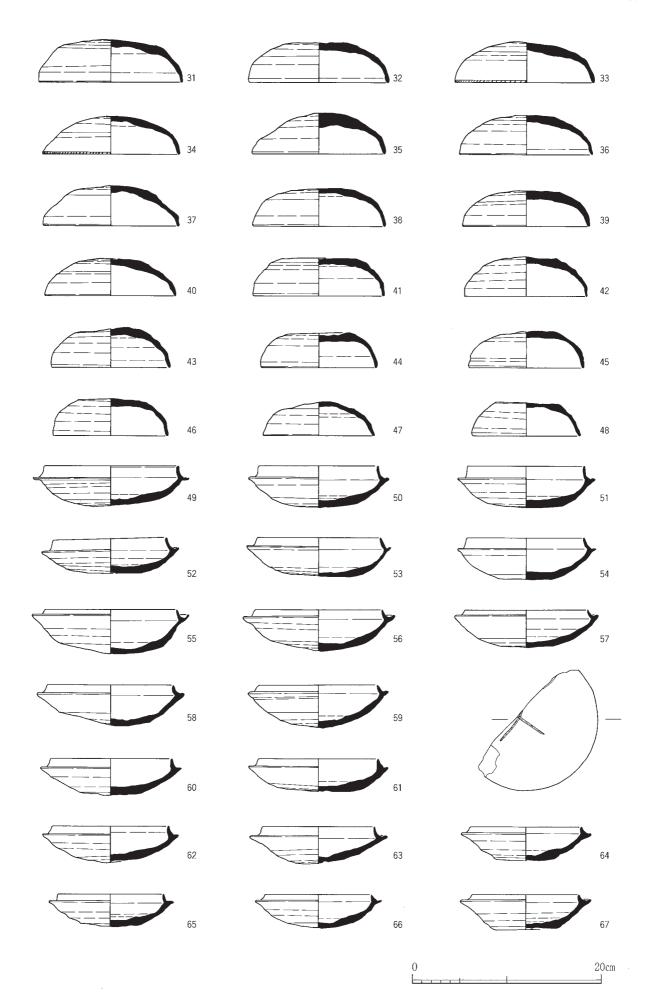


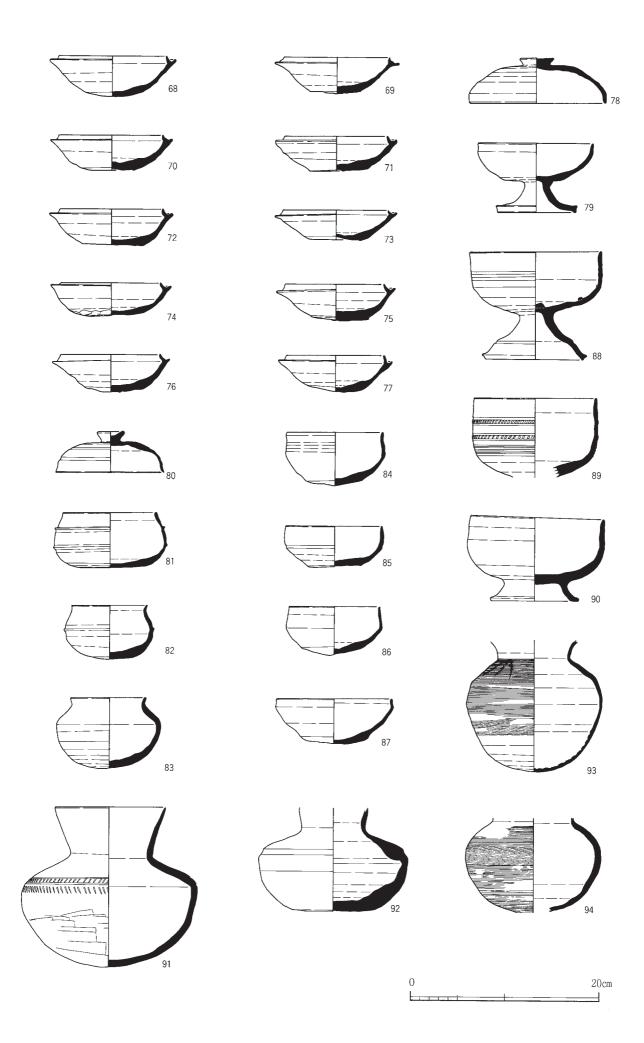


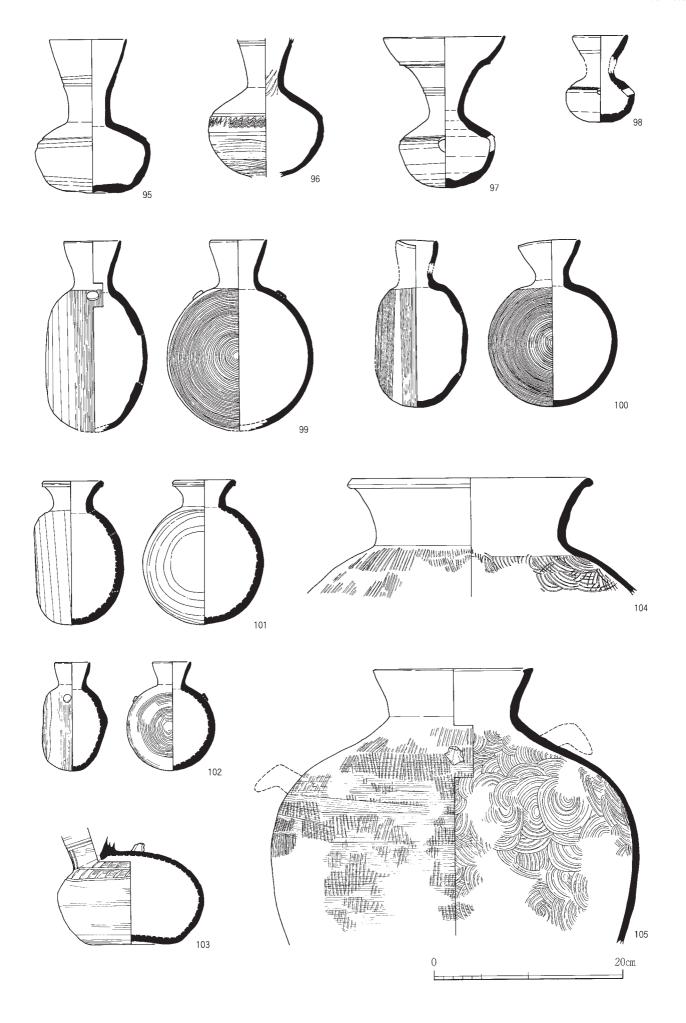
20cm

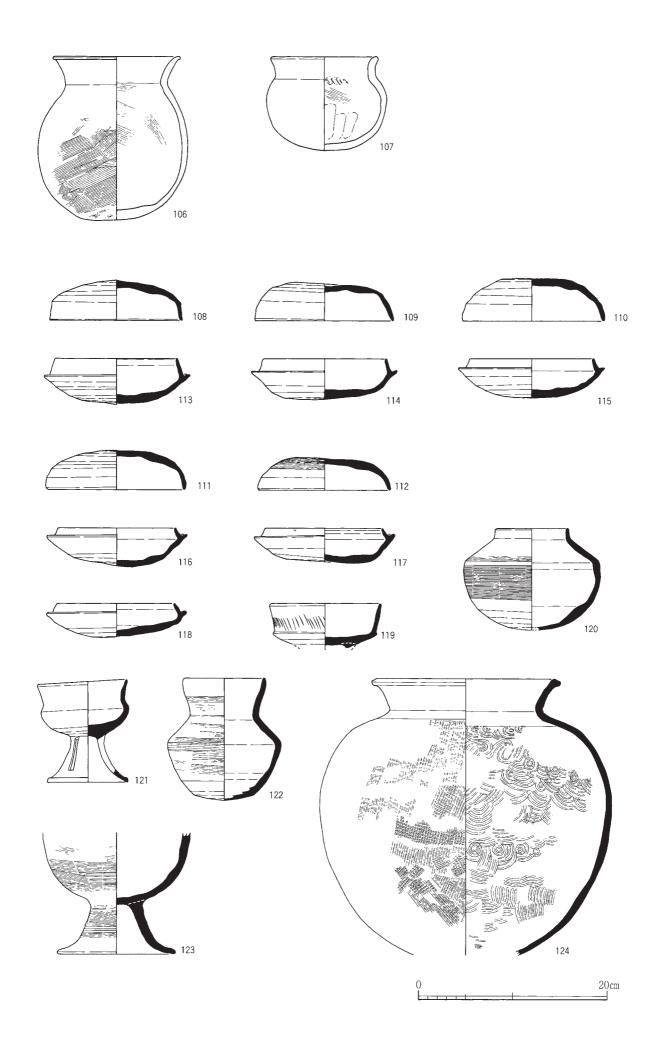


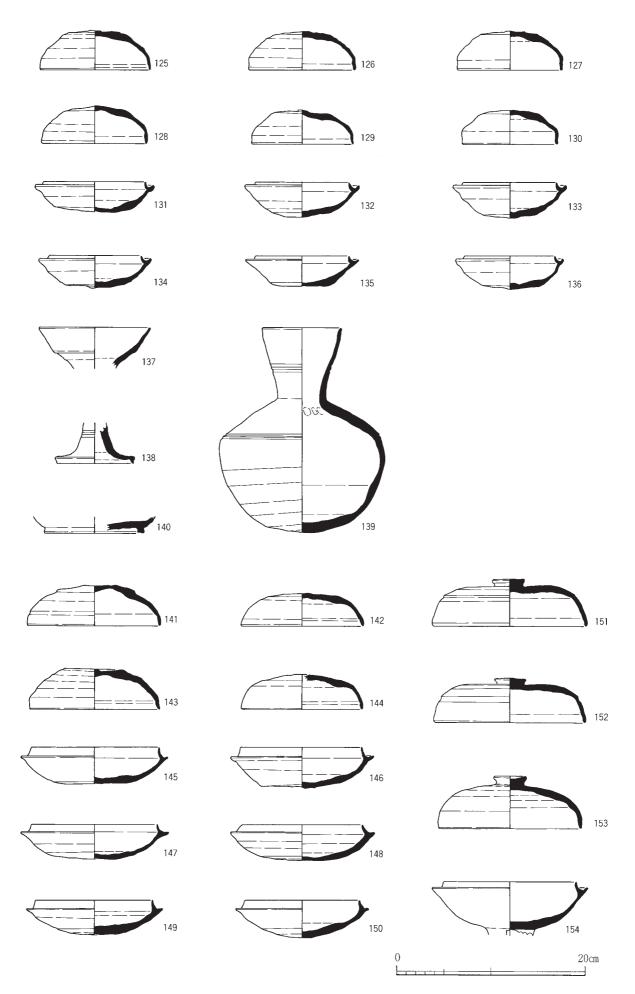


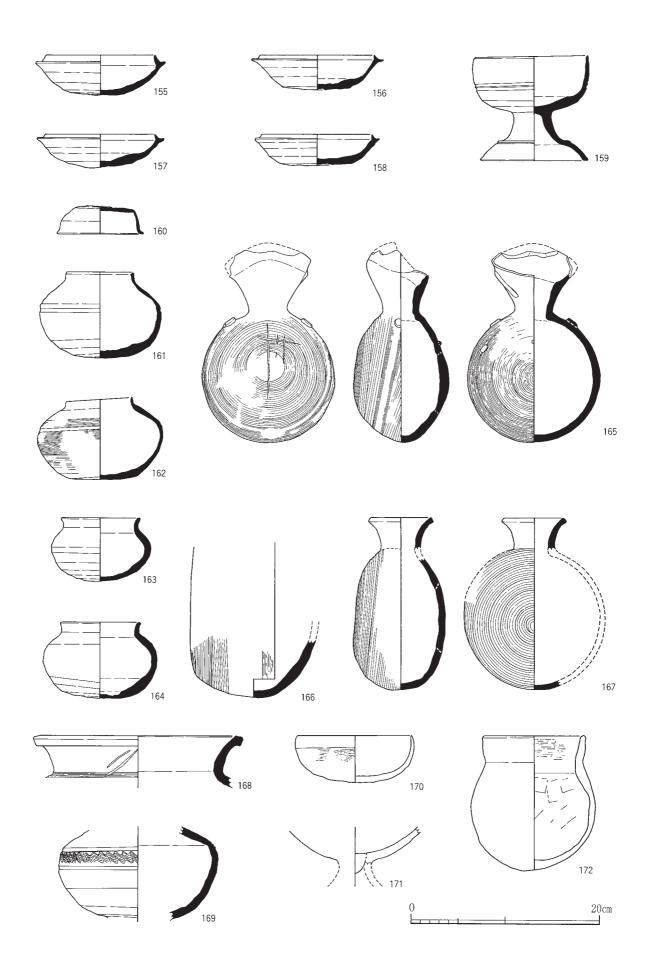


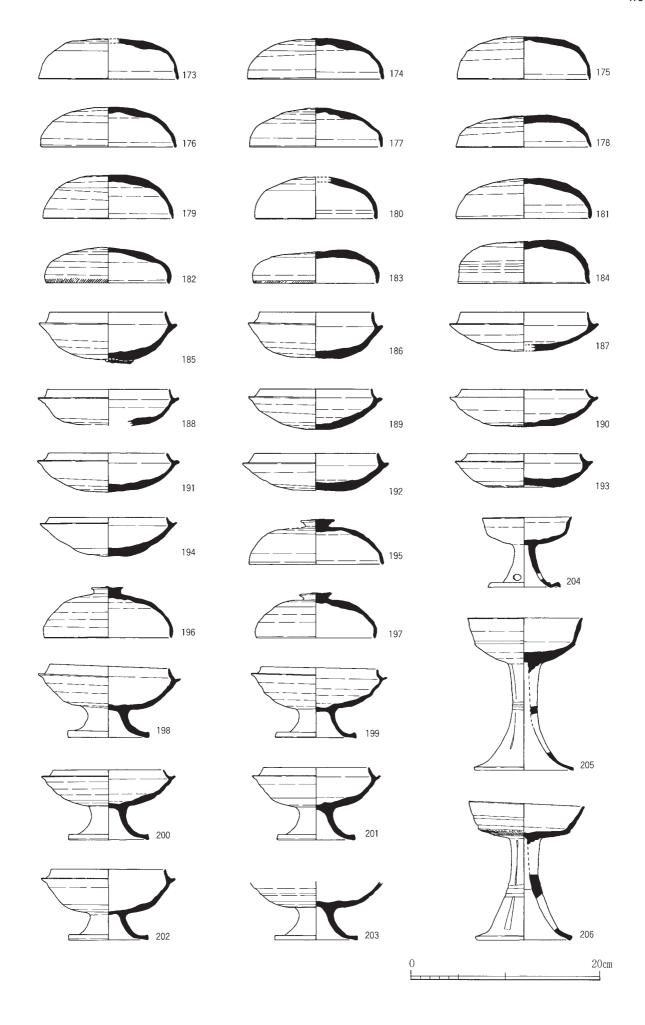


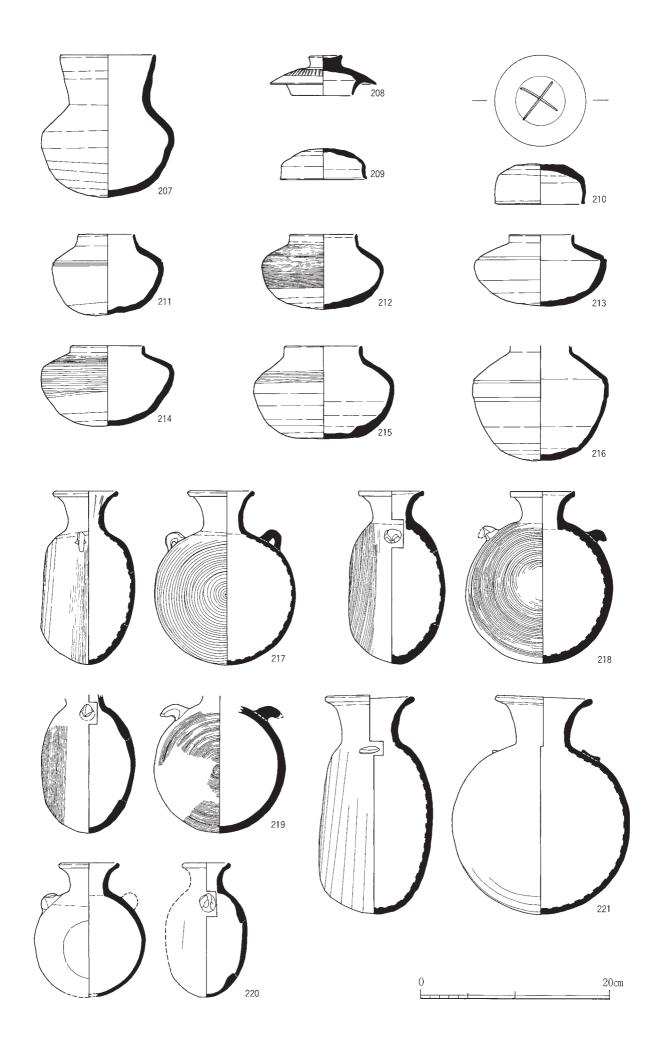


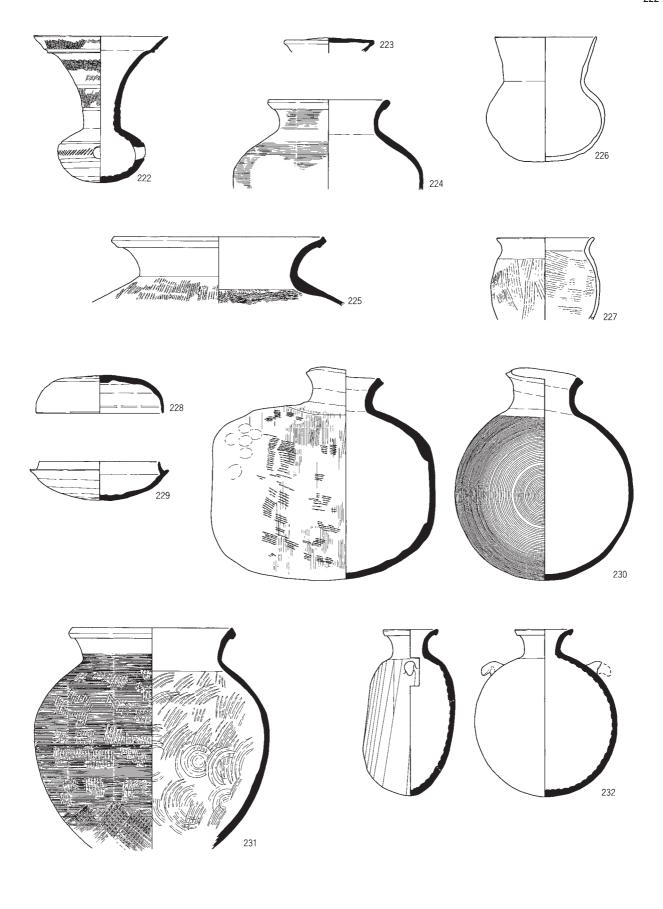






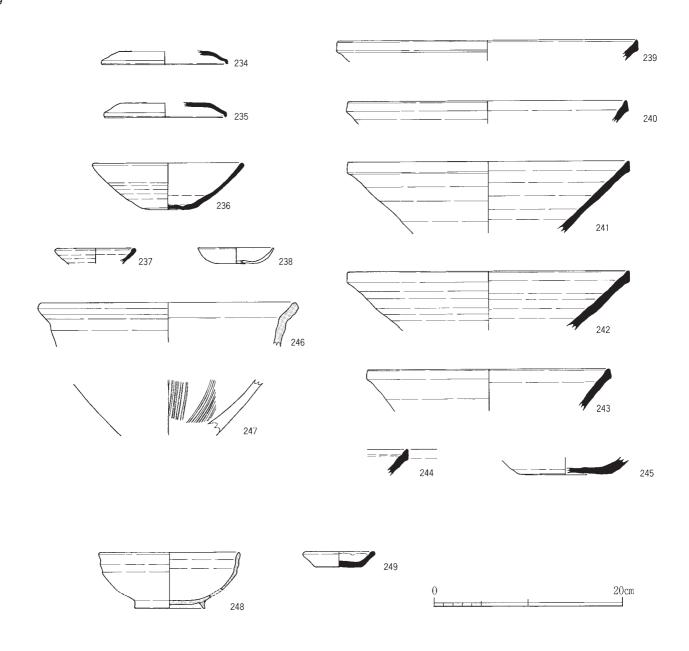


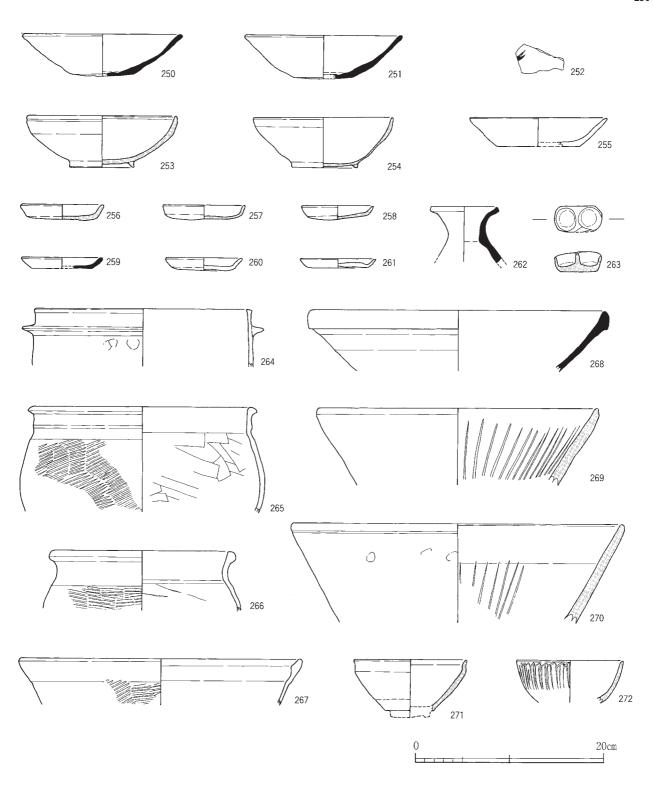


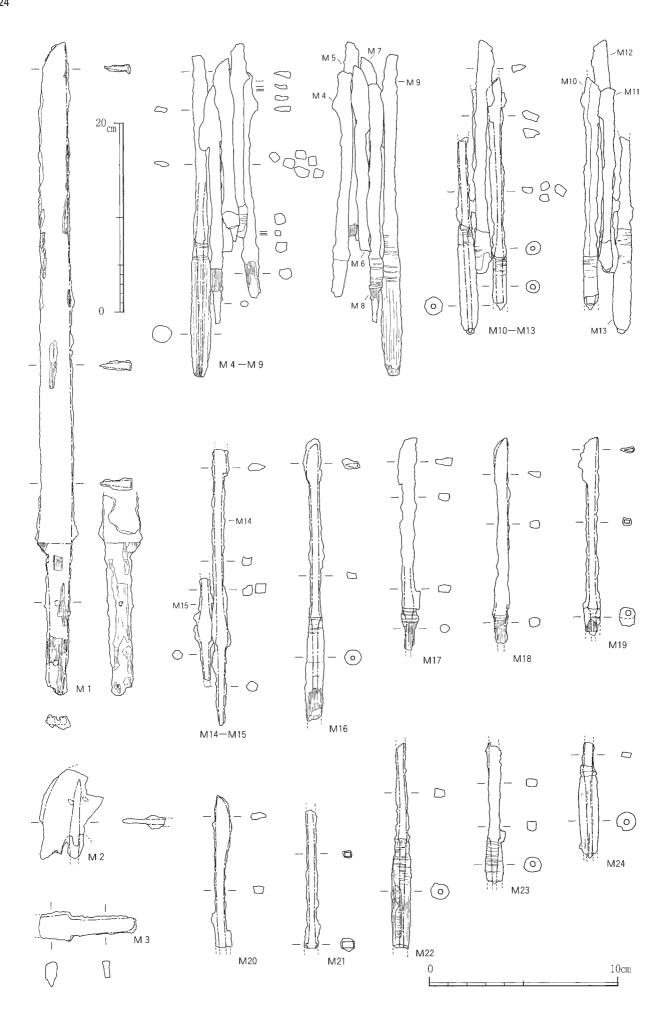






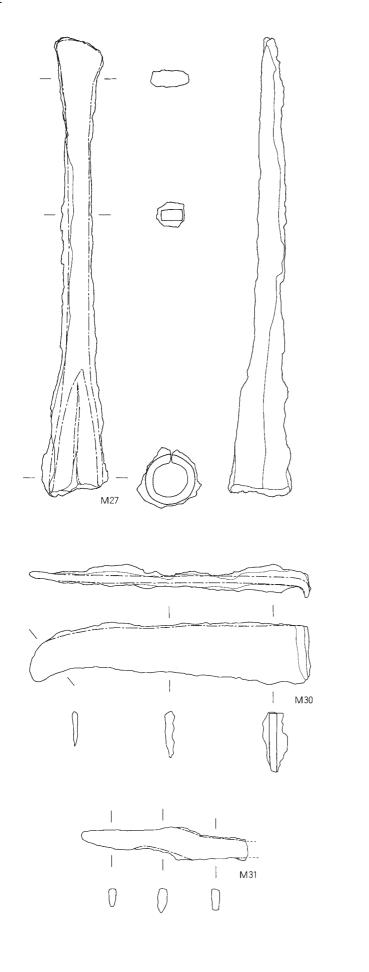


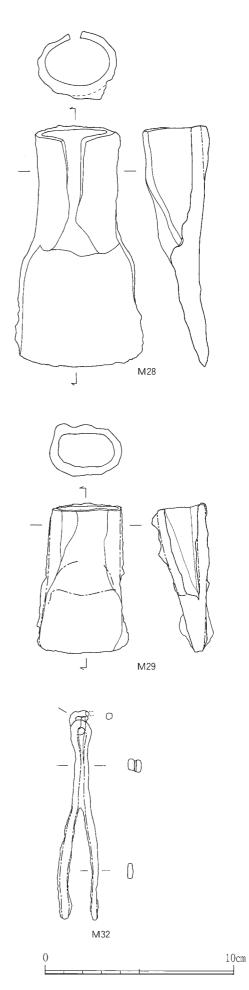


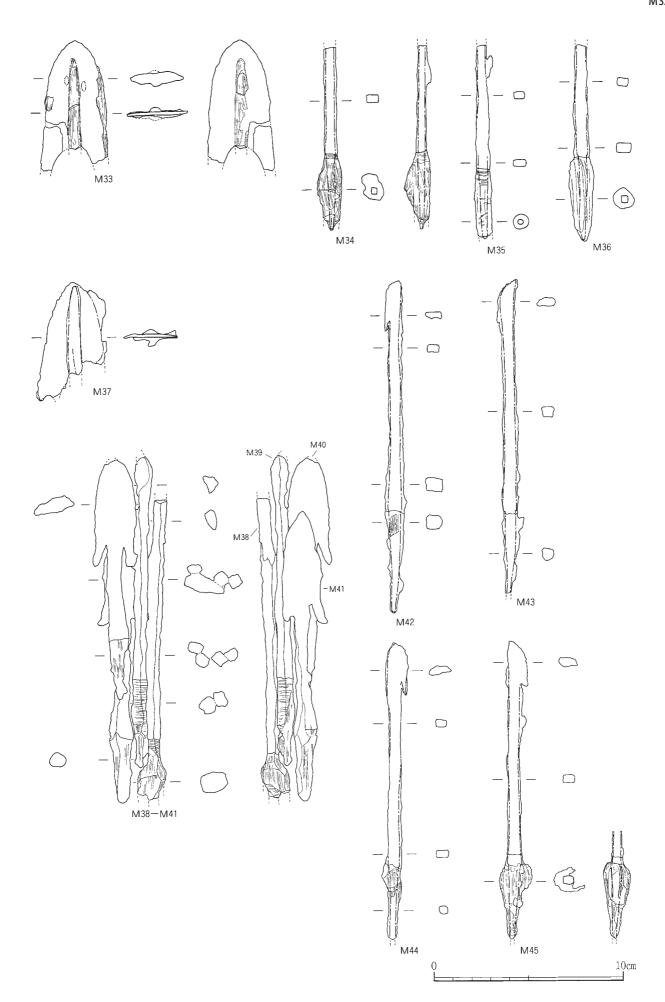




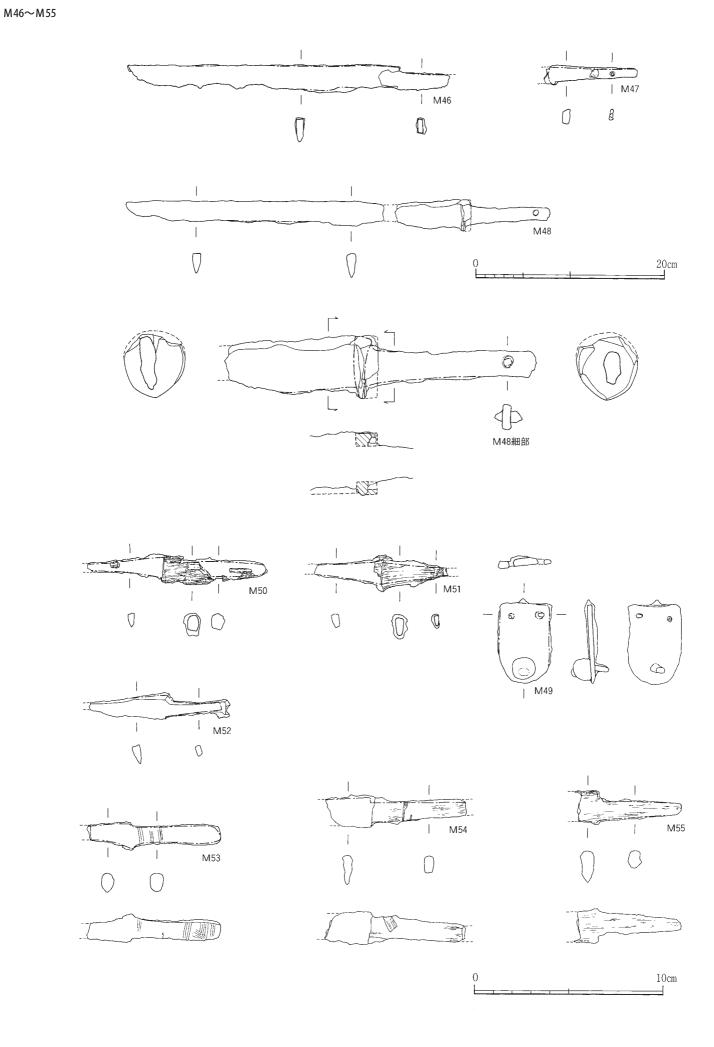
M27~M32

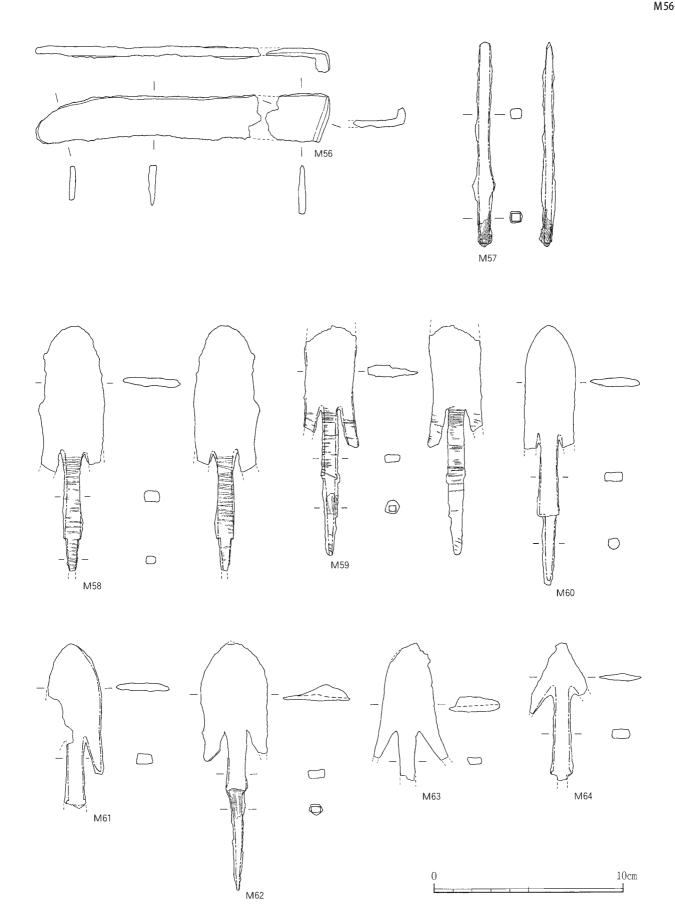


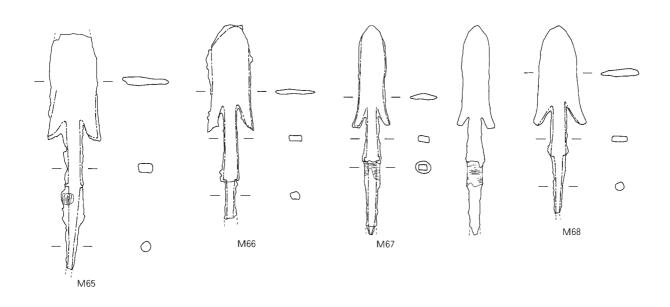


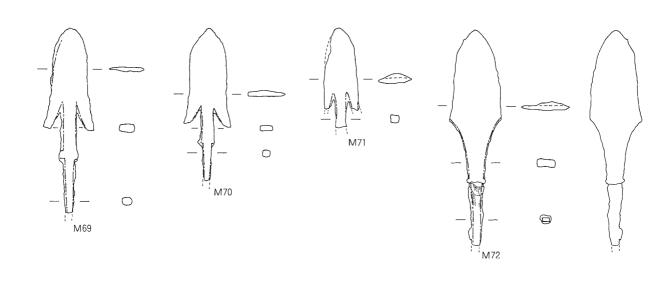


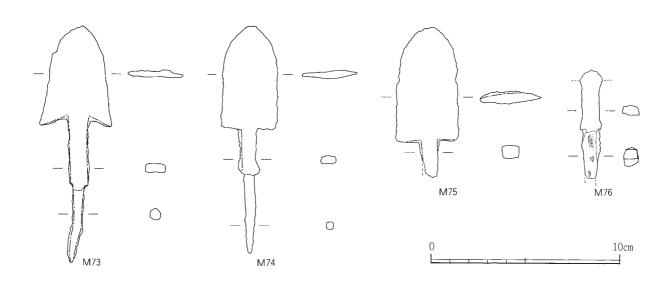
7号墳 鉄器(1)

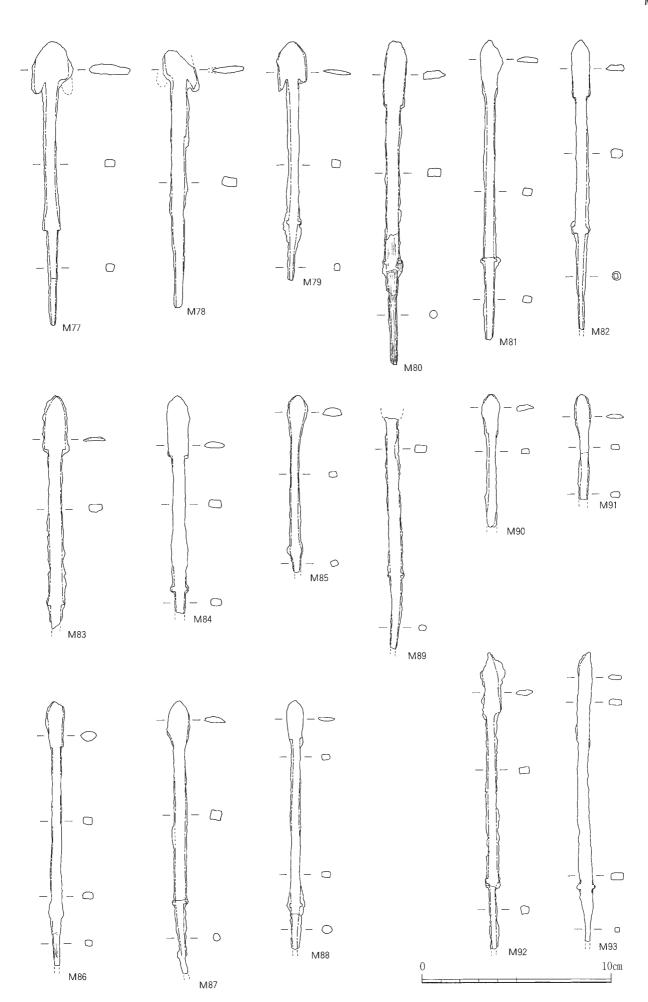




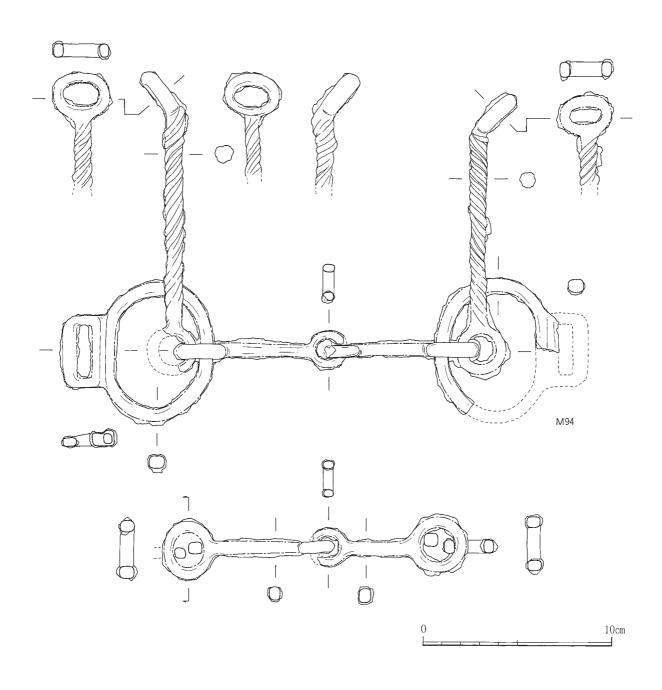


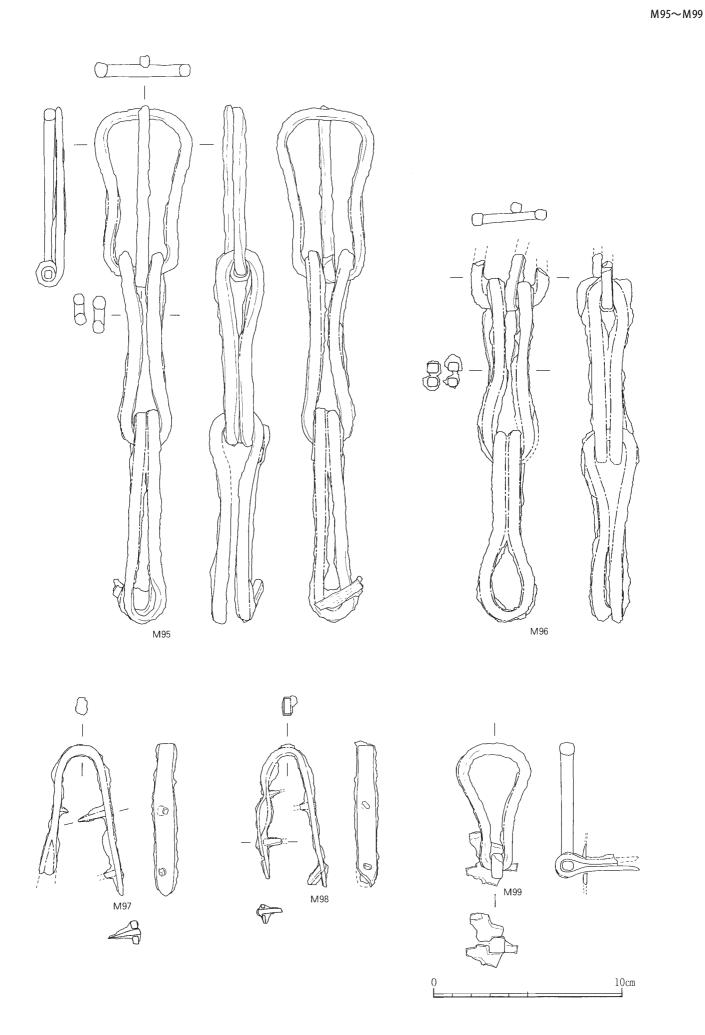


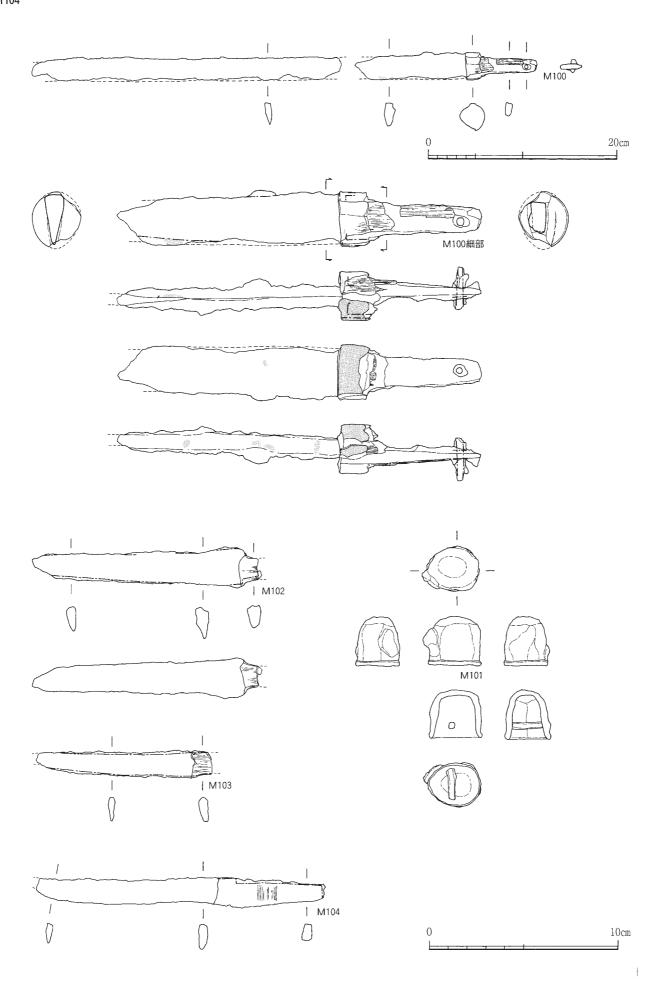




M94

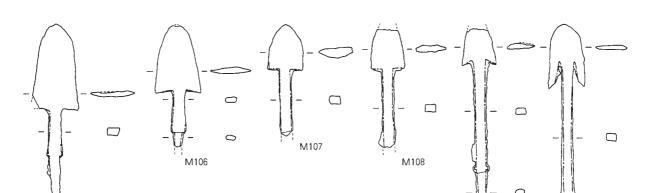




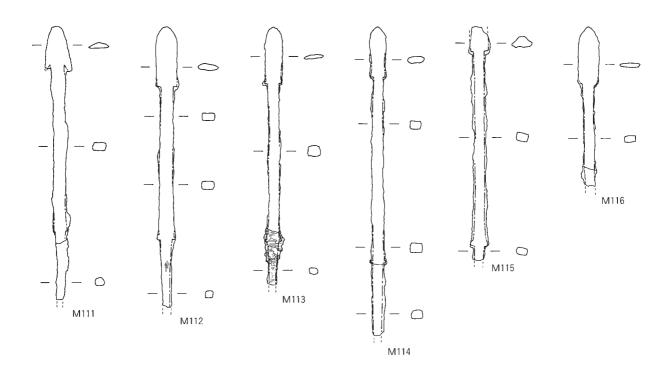


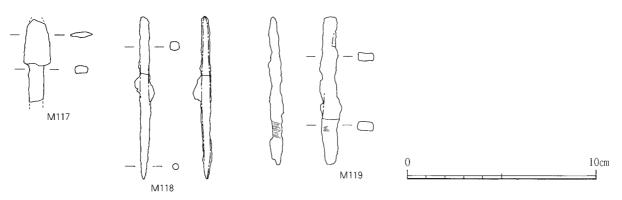
. M105 0

M110

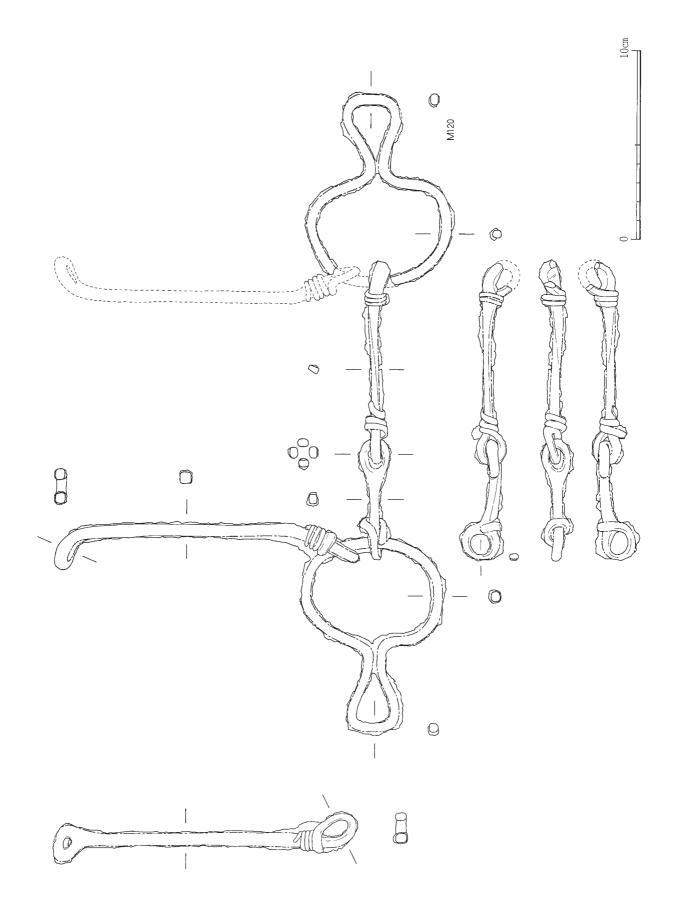


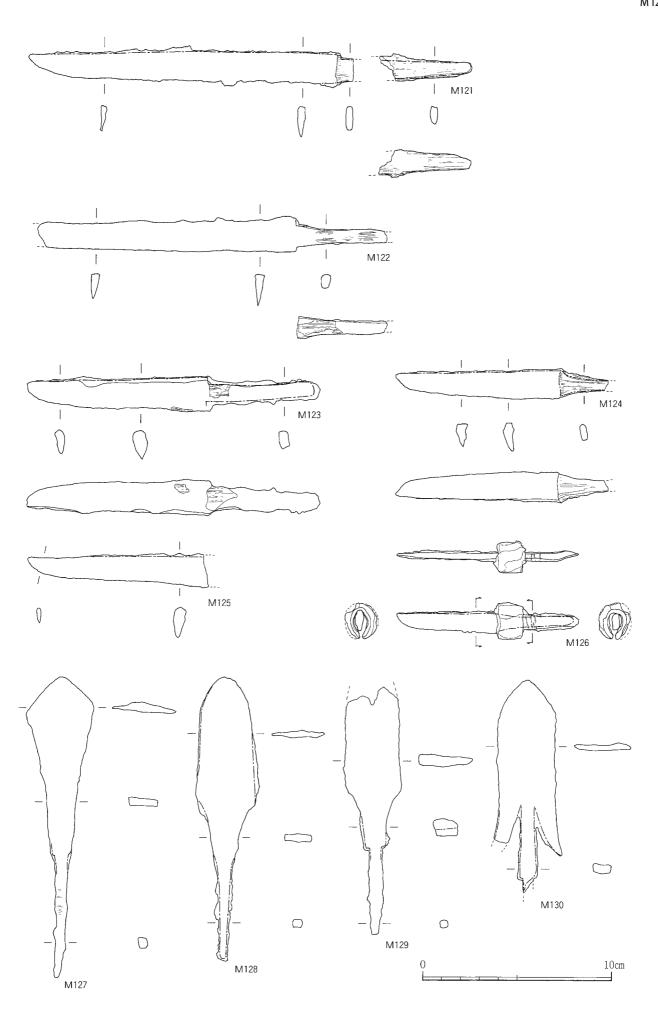
M109

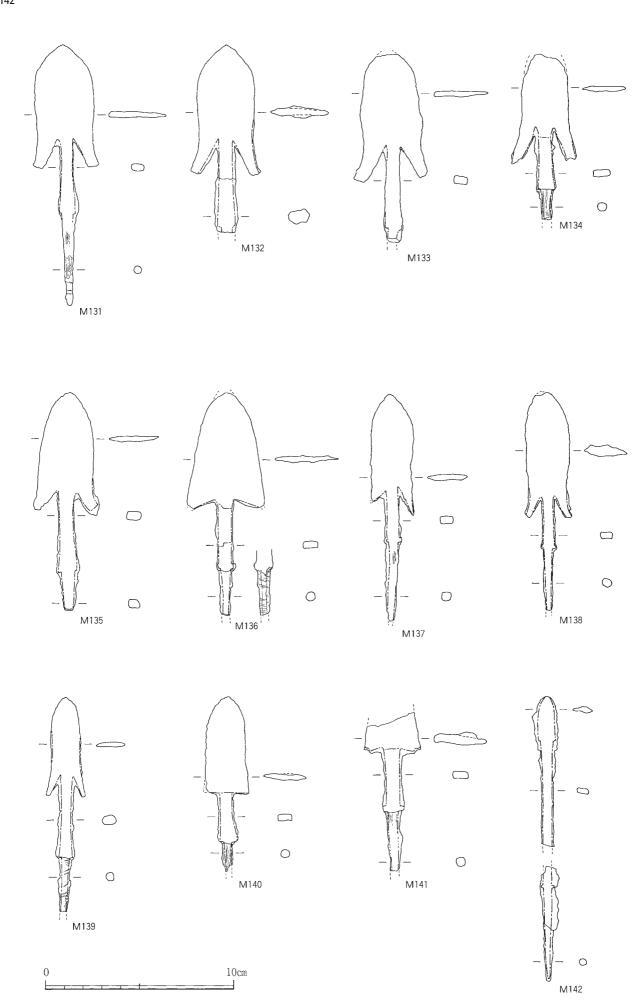


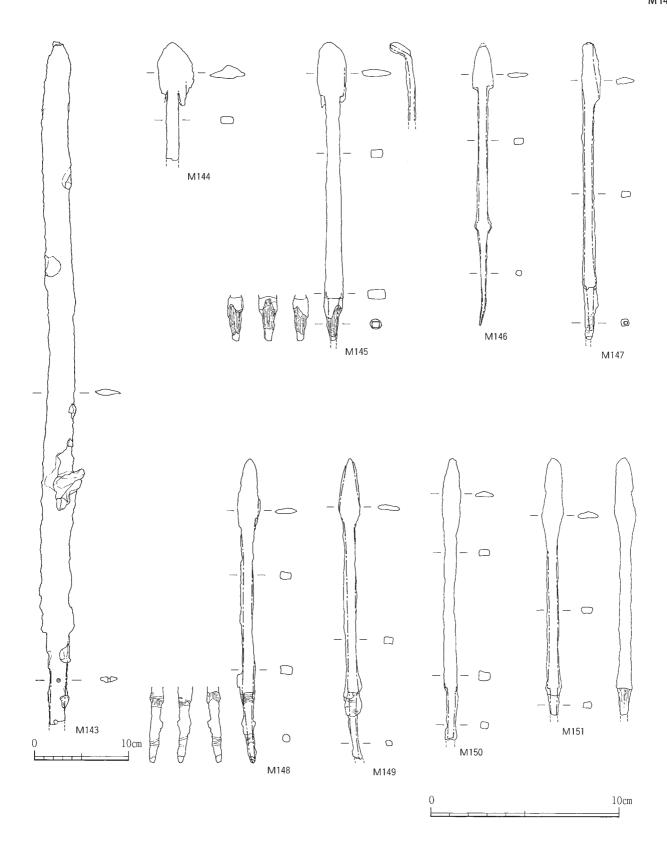


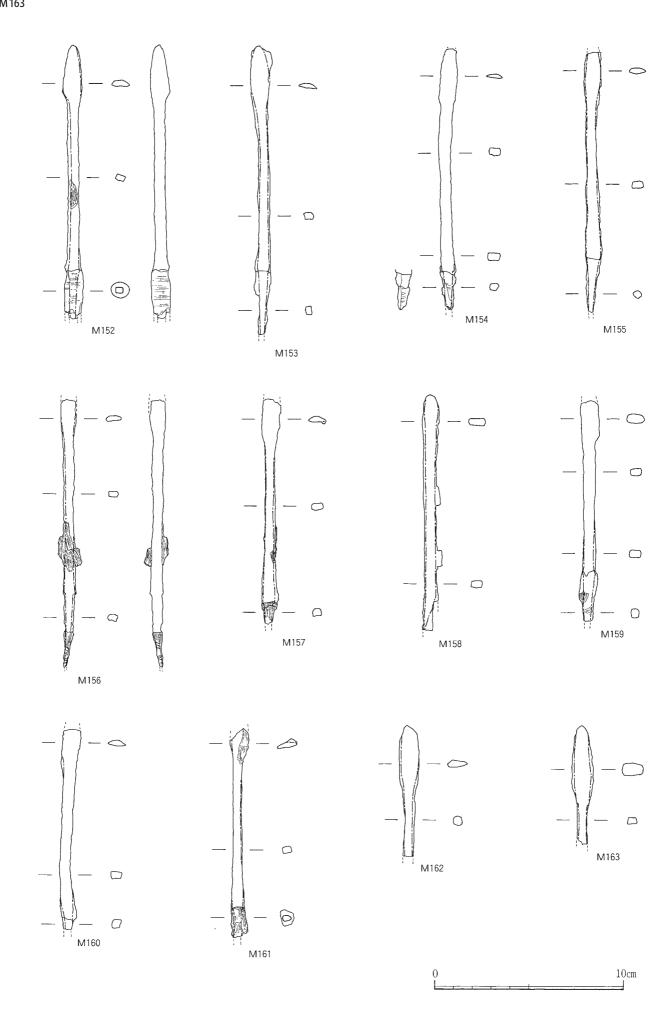
M 120

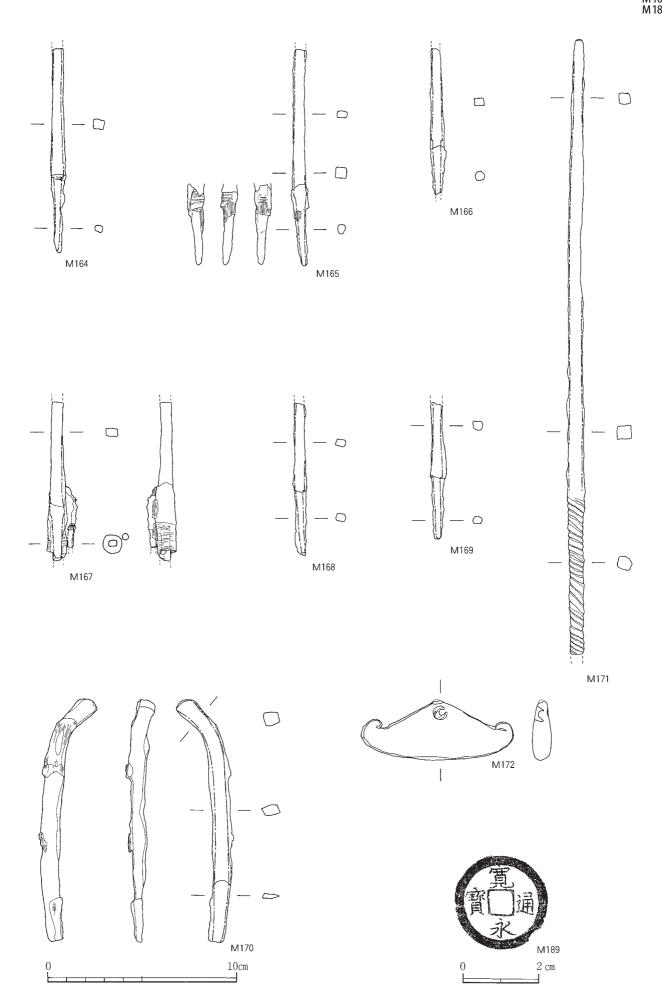




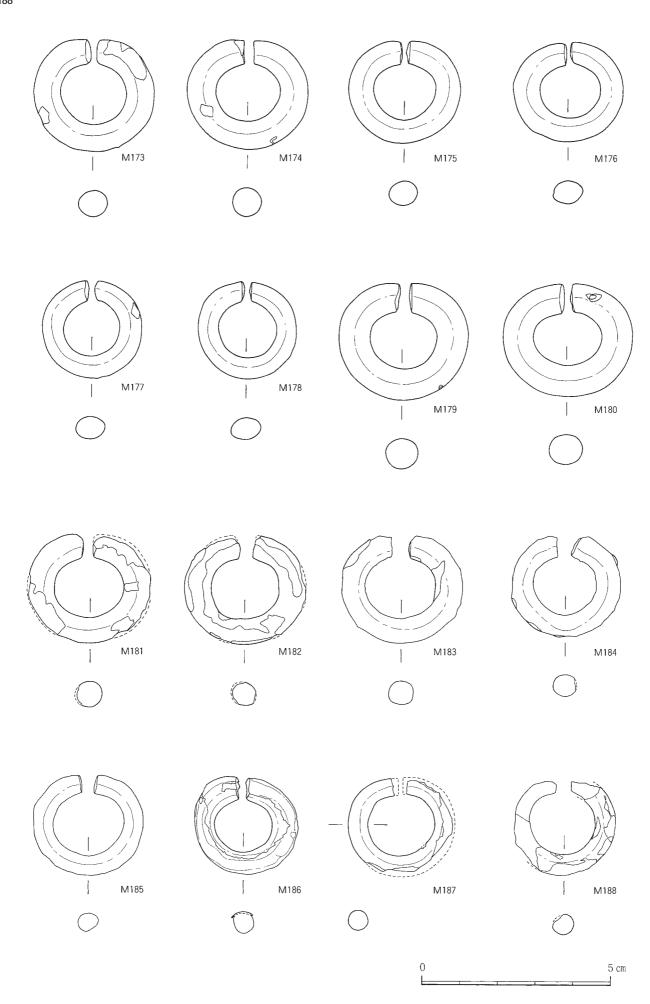


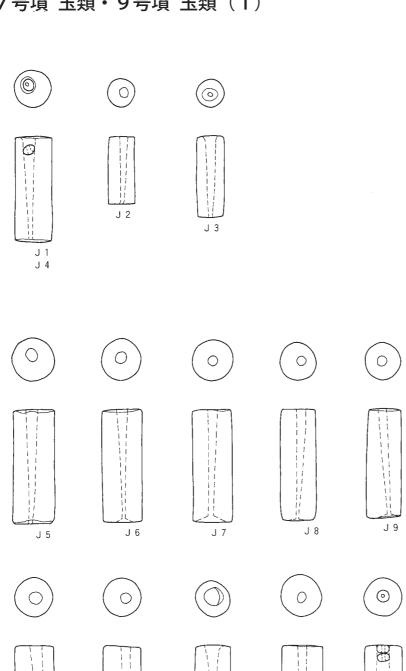


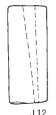






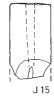


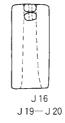


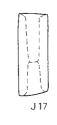




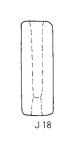








J 10















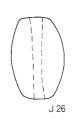






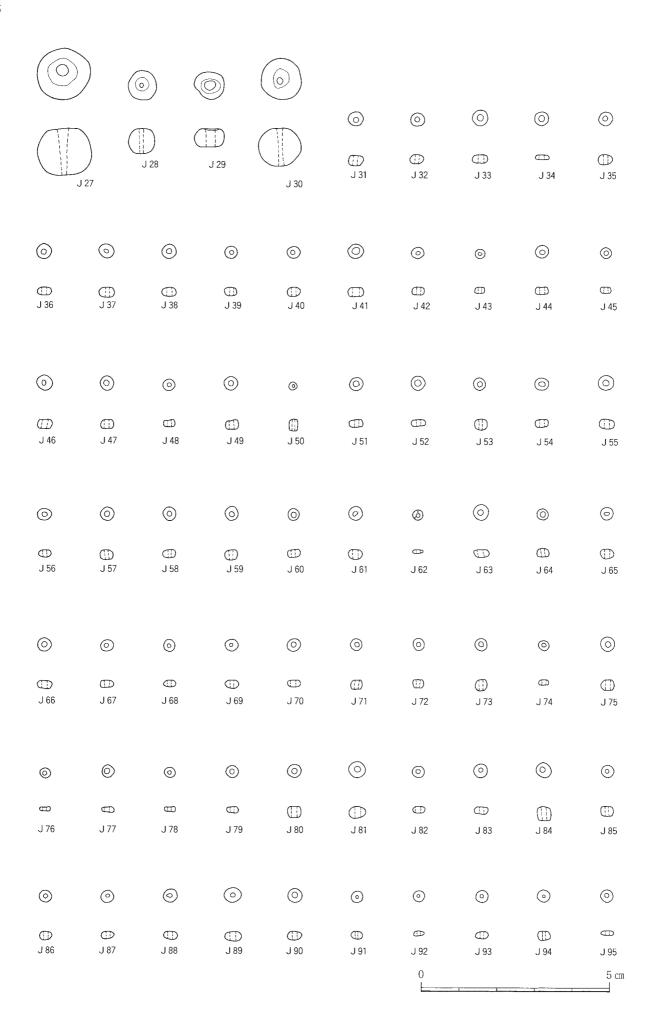






5 cm

J 27∼ J 95



J 96∼ J 109







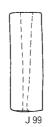




































0













0

 \Box

J 129

0

0

J 139

0

0

J 149

0

D J 159

0

0

J 169

0

(1)

J 179

0

0

J 130

0

0

J 140

0

 \bigcirc

J 150

0

① J 160

0

Θ

J 170

0

0

J 180

	© J1
	⊕ J 1

J 110

0

0

J 132

0

0

J 142

0

0

J 152

0

① J 162

0

① J 172

0

 Θ

J 182

0

J 183

0

0

J 184

0

 \bigcirc

J 185 0 0

0

J 186

5 cm

0

(1)

J 131

0

(

J 141

0

0

J 151

0

(D) J 161

0

0

J 171

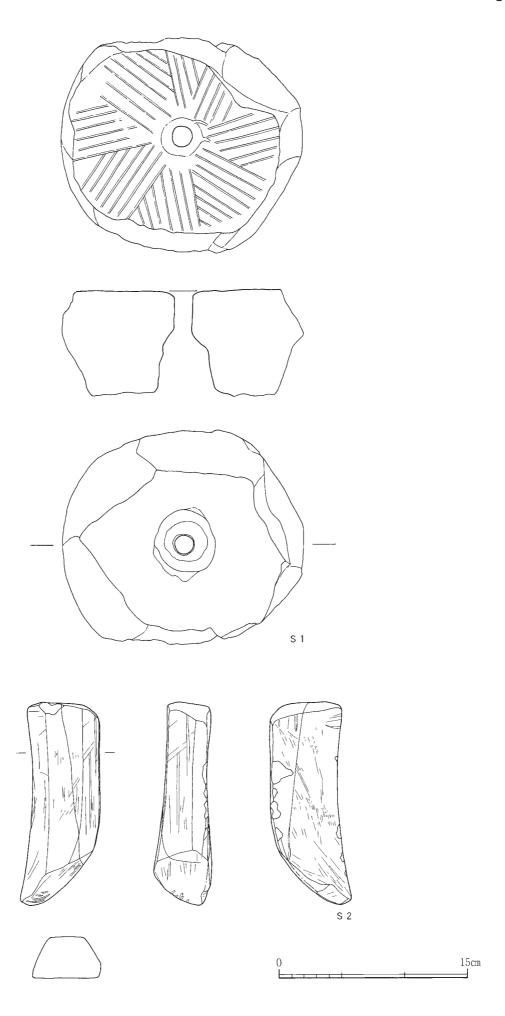
0

0

J 181

0	0	o	0	o	•
(1)	Ø	①	⊕	⊕	⊕
J 111	J 112	J 113	J 114	J 115	J 116
©	©	o	0	0	
⊕	①	⊕	Ш	∰	J 122
J 117	J 118	J 119	Ј 120	J 121	
(©	0	©	o	0
⊕	①	⊕	①	ம	⊕
J 123	J 124	J 125	J 126	J 127	J 128
0	0	o	\odot	©	0
⊕	①	①	◯	◯	Ф
J 133	J 134	J 135	J 136	J 137	J 138
0	0	0	©	o	•
①	∰	⊕	⊕	①	①
J 143	J 144	J 145	J 146	J 147	J 148
©	0	0	o	0	0
⊕	⊕	①	①	⊕	J 158
J 153	J 154	J 155	J 156	J 157	
0	0	o	©	©	0
⊕	⊕	∰	①	∰	⊕
J 163	J 164	J 165	J 166	J 167	J 168
©	0	0	0	0	0
⊕	⊕	⊕	⊕	(1)	J 178
J 173	J 174	J 175	J 176	J 177	

S 1~S 2



写 真 図 版



写真図版 2 1~6号墳



1 調査前全景 (北西から)



2 調査前全景 (北から)



1~6号墳 写真図版 3



1 調査後全景 (西から)



2 調査後全景 (北から)



3 調査後全景 (南から)

写真図版 4 1~6号墳



1 2・3号墳表土掘削後(北から)



2 1号墳表土掘削後(西から)



3 1・2号墳間周溝断面(西から)



4 2・3号墳間周溝断面(西から)



3・4号墳間周溝断面(西から)

1号墳 写真図版 5



1 全景 (南から)



2 埋葬施設 (南から)



3 埋葬施設 調査状況 (北西から) 写真図版 6 1号墳



1 埋葬施設 棺内短軸断面 (西から)



2 埋葬施設 墓壙断割り状況 (南から)



3 墓壙断割り状況 (西から)

2号墳 写真図版 7



1 墓壙検出状況 (北から)



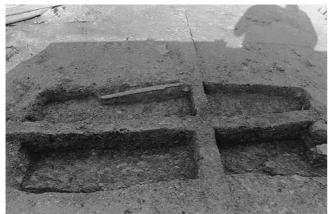
2 全景(北から)



写真図版 8 2号墳



埋葬施設 (西から)



3 埋葬施設棺内長軸断面(南から)



墳丘・墓壙断割り状況(南東から)



墓壙断割り状況(西から)





4 埋葬施設棺内短軸断面(西から)



墳丘断割り断面 (西から)



8 墓壙断割り状況(南から)

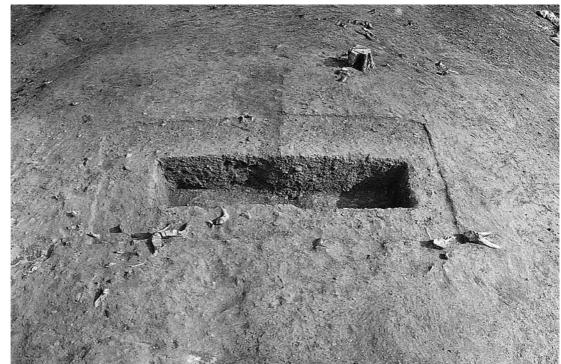
3号墳 写真図版 9



1 墓壙検出状況 (南から)



2 全景 (北から)



写真図版10 3号墳



墓壙断割り状況(北東から)



墓壙断割り状況(西から)



墓壙内鉄鏃出土状況(北から)



埴輪列検出状況(北から)



5 埴輪24断割り断面(東から)



6 埴輪30断割り断面(東から)



7 墳丘断割り状況(南から)



8 墳丘断割り断面(西から)

4号墳 写真図版 11



1 全景(南から)



2 墓壙検出状況 (南から)



3 第1~3 埋葬施設 (北から)





棺内南側副葬品出土状況(東から)



全景(南から)



4 棺内長軸断面(北西から)



5 棺内短軸断面(北から)

4号墳第2・3埋葬施設



1 第2埋葬施設全景(南から)



4 第3埋葬施設全景(東から)



2 第2埋葬施設副葬品出土状況(西から)



3 第2埋葬施設棺内短軸断面(南から)



5 第3埋葬施設棺内短軸断面(西から)

写真図版14 5号墳



1 墓壙検出状況 (北から)



2 埋葬施設 調査状況 (東から)



7号墳



1 調査前全景(北から)



調査前全景(北から)



3 調査前全景(南西から)



4 調査前全景(東から)





石室の崩落石除去後(南から)



前庭部埋土断面(南西から)



8 東周溝断面(南から)

写真図版 16 7号墳



調査後全景 (南から)

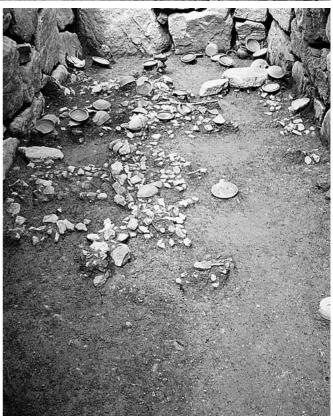




 前庭部から 玄室内を望む (南から)



2 奥壁上から玄室内を望む(北から)



3 床面の状況(南から)





西側壁北側(東から)



床面中央(南から)



西側壁南側(東から)



袖石付近(東から)



礫床・棺台検出状況(北から)



6 床面奥半(北から)

7号墳横穴式石室 写真図版 19



1 前庭部・玄門(南から)



2 奥壁(南から)



3 玄門(石室内から)



西側壁(北東から)



西側壁(東から)



右片袖部(東から)



6 羨道西側壁(南東から)



3 北東隅持ち送り状況(南西から)



東側壁(北西から)



7 羨道東側壁(南西から)

写真図版 21 7号墳



1 墳丘全景(南西から)



墳丘全景(北西から)



墳丘断割り断面(南から)



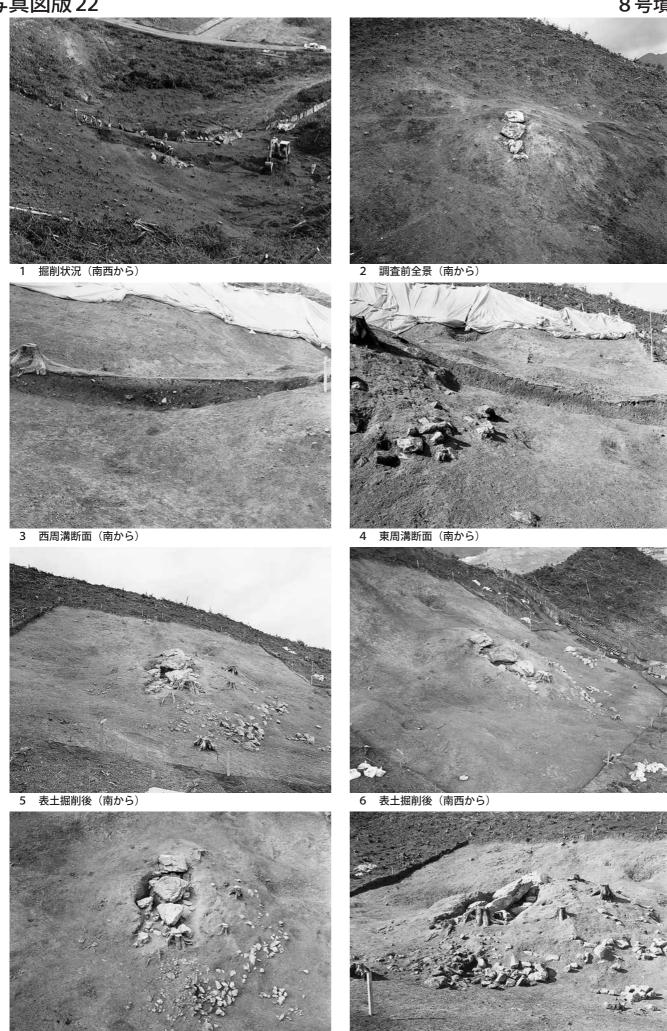


5 石室基底石(南から)



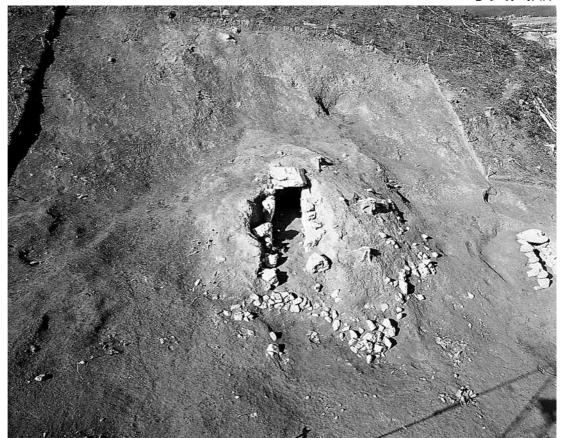
6 石室掘り方(南から)

写真図版22 8号墳



7 石室検出状況(南から) 8 墳丘内列石検出状況(南東から)

写真図版23 8号墳



1 調査後全景 (南から)



2 石室と列石(南から)

3 石室全景(南から)



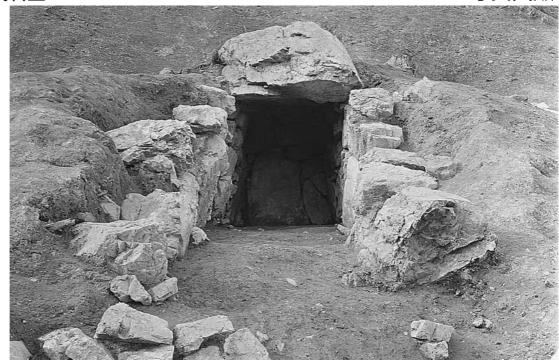
 前庭部から 玄室内を望む (南から)



 奥壁上から 玄室内を望む (北から)



3 玄門部西側 (東から)



1 前庭部・玄門 (南から)



2 奥壁 (玄門から)



3 玄門 (石室内から)



西側壁(南東から)



東側壁 (南西から)



西側壁(東から)



東側壁 (西から)





羨道東側壁 (南西から)



7 前庭部前面列石(南から)



8 南東側墳裾列石(南東から)

写真図版 27 8号墳



墳丘内列石検出状況(南から)



南東側墳丘内列石(南から)



墳丘断面と前庭部前面列石(南から)



南東側墳丘内列石(南から)



5 墳丘断割り断面(南から)



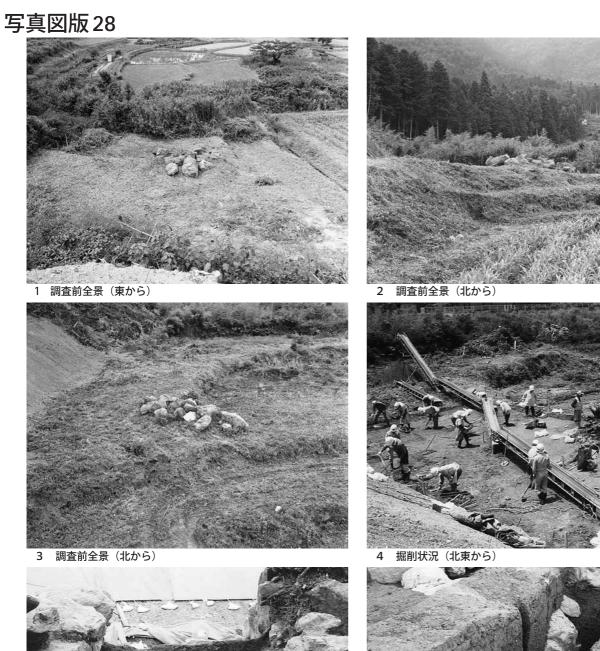


7 石室北半基底石(南から)



奥壁裏込め断面(東から)

9号墳

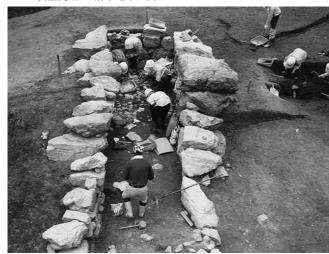




石室内埋土断面(西から)



東墳丘断面(北東から)



石室内作業状況(西から)

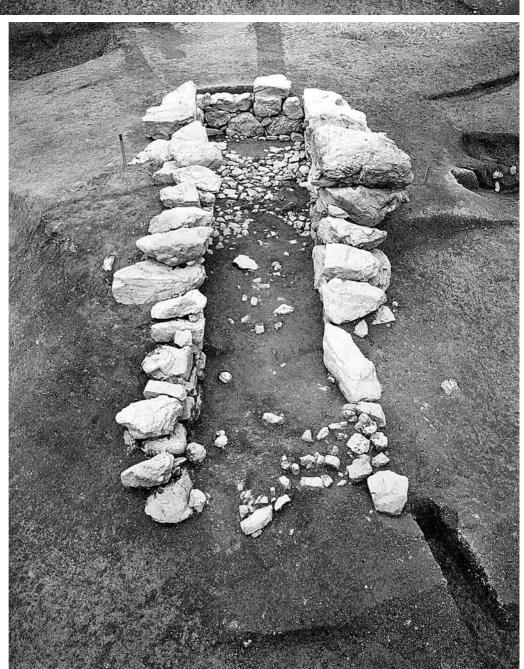


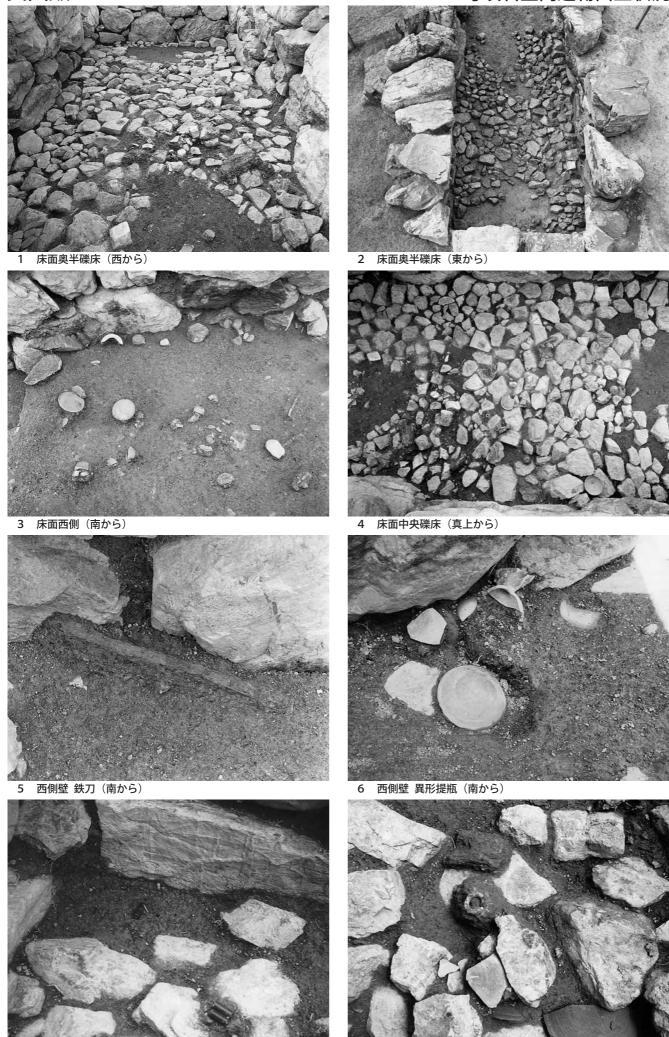
8 石室床面作業状況 (東から)

9号墳 写真図版 29



1 調査後全景 (西から)





奥壁隅 管玉 (南西から)

8 礫床上 耳環 (真上から)

9号墳横穴式石室______写真図版_31



1 石室全景 (西から)



2 前庭部から 玄室内を望む (西から)

写真図版32 9号墳

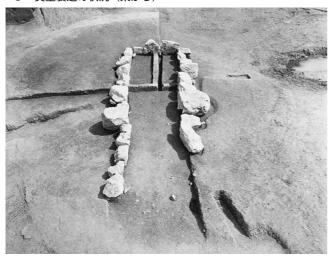




北側墳丘断割り断面(西から)



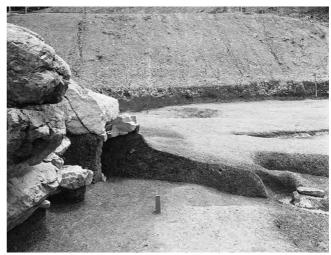
奥壁裏込め状況 (東から)



7 石室基底石 (西から)



2 墳丘断面(西から)



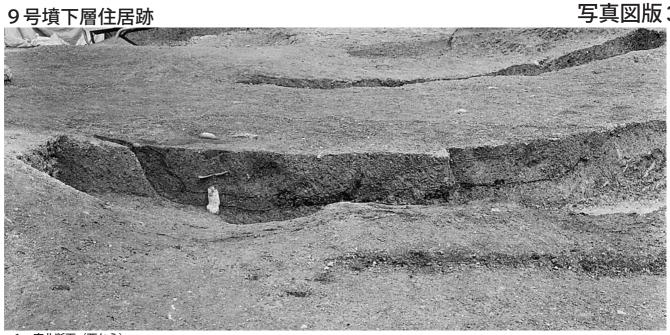
4 南側墳丘断割り断面(西から)



東側墳丘断割り断面(南から)



8 石室掘り方(西から)



南北断面(西から)



カマド上面出土土師器



東西断面(南から)



カマド検出状況(南から)



カマド断面(西から)



1 炭化材検出状況 (南から)



2 炭化材検出状況 (西から)



3 完掘状況 (南西から)

写真図版35 10号墳



表土掘削後(南西から)





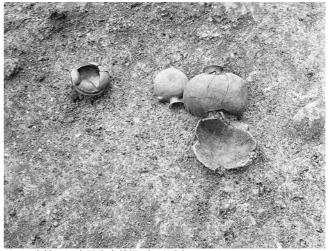
北周溝断面(西から)



南周溝断面(西から)



5 石室調査状況(西から)



土坑SX01土器出土状況(西から)



7 土坑SX01土器出土状況(南東から)

写真図版 36 10号墳



1 調査後全景 (西から)



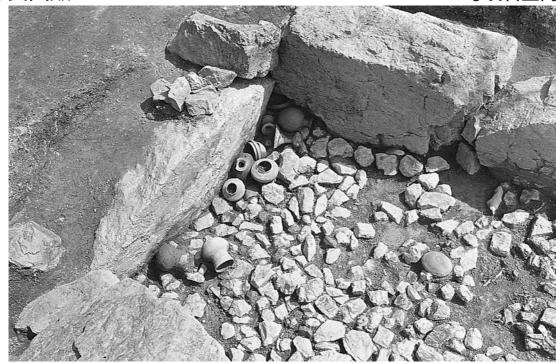
2 前庭部から 玄室内を望む (西から)





1 奥壁上から 玄室内を望む (東から)





1 奥壁付近 (北西から)



2 奥壁付近 (西から)



3 床面中央 (北から)

写真図版39





北側壁(南から)



6 框石 (東から)



奥壁(西から)



玄門(石室内から)





7 羨道南側壁(北から)

写真図版 40 10号墳



1 北側墳丘断割り断面(西から)



2 南側墳丘断割り断面(西から)



3 墳丘断面(南西から)



4 東側墳丘断割り断面(南から)



5 石室基底石 (西から)



6 石室掘り方(西から)

11号墳 写真図版 41

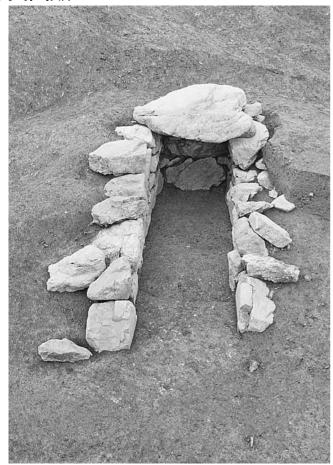


1 8号墳(左) との位置関係 (南西から)



2 石室検出状況 (南から)





1 石室全景(南から)



4 前庭部から玄室内を望む(南から)



6 西側壁 (南東から)



2 石室内埋土断面(南から)



3 石室内埋土断面(西から)

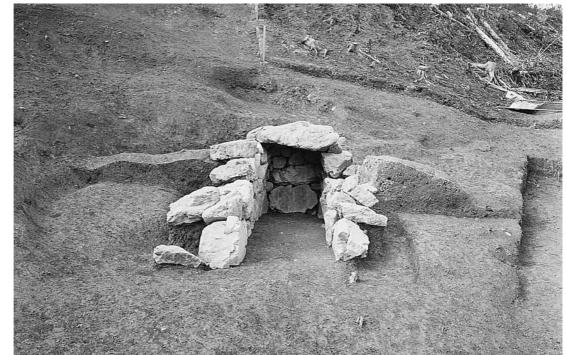


5 奥壁と天井石(南から)



7 東側壁 (南西から)

11号墳 写真図版 43



1 墳丘断面 (南から)



2 石室基底石 (南から)



3 石室掘り方 (南から)

写真図版 44 12号墳



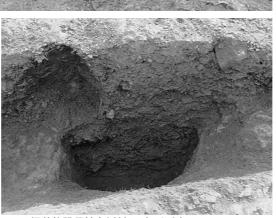
1 埋葬施設 (東から)



2 埋葬施設断面 (西から)



埋葬施設長軸北側断面(西から)

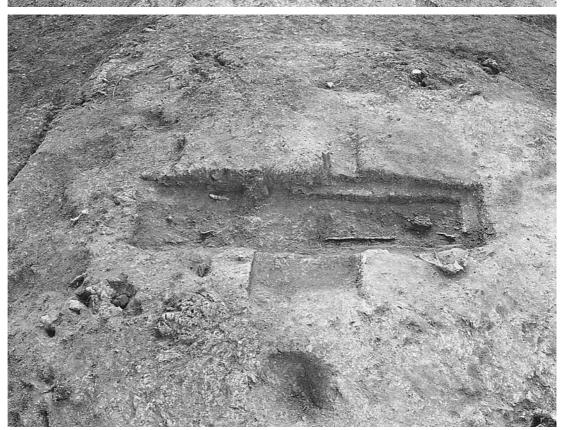


4 埋葬施設長軸南側断面(西から)

13号墳 写真図版 45



1 全景 (北から)

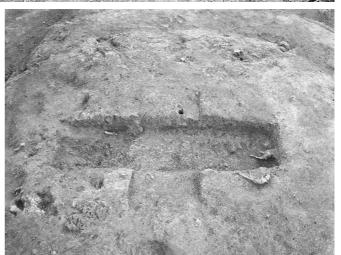


 埋葬施設 (北から)

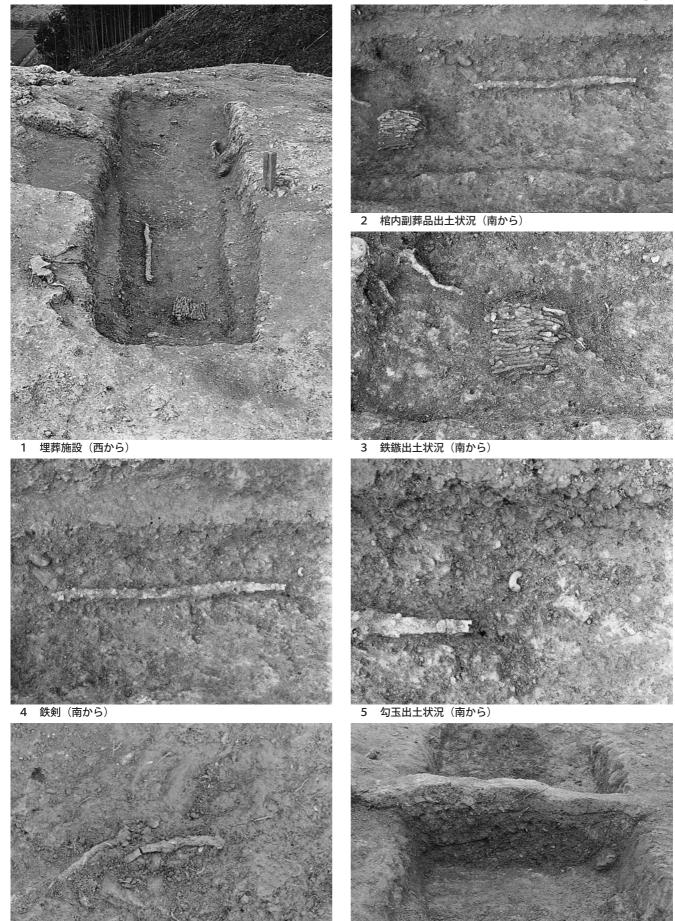


3 埋葬施設調査状況(西から)





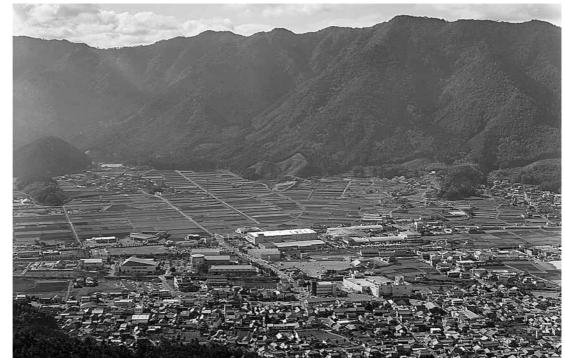
写真図版 46 13号墳



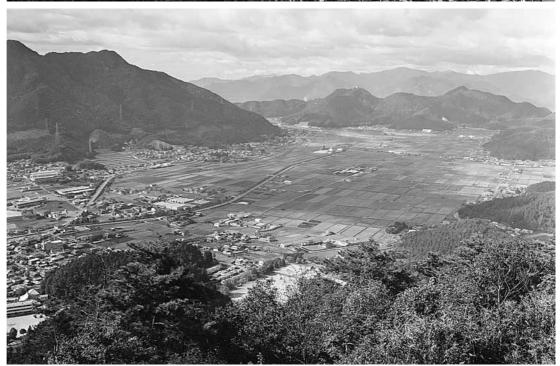
6 不明鉄製品出土状況(南から)

7 棺内短軸断面 (西から)

火山城跡 写真図版 47



1 黒井城跡から 火山城跡を望む (北から)



2 黒井城跡から 水分かれ方面を 望む(北東から)



写真図版 48 火山城跡



1 調査前遠景 (北から)



2 調査前全景 (東から)



火山城跡 写真図版 49





3 西側斜面調査状況(南から)



5 西帯曲輪覆土断面(南から)



7 西帯曲輪覆土断面(南から)



2 尾根部調査状況(南から)



4 第2郭付近調査状況(南から)



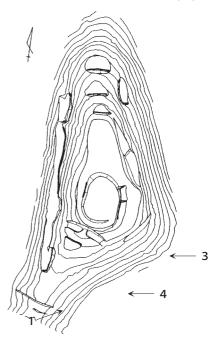
6 尾根上東肩部覆土断面(南西から)



8 東側斜面覆土断面(南西から)

写真図版 50 火山城跡







- 1 東尾根線からの通路(南西から)
- 2 東尾根線鞍部の盛土 (東から)



3 東尾根線からの全景(東から)

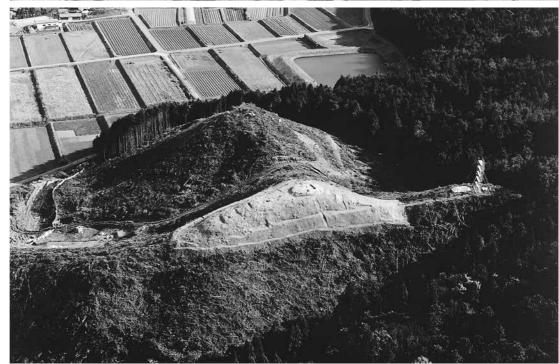


4 尾根上鞍部の通路 (東から)

火山城跡航空写真 写真図版 51



1 遠景(北東から)



2 全景 (西から)

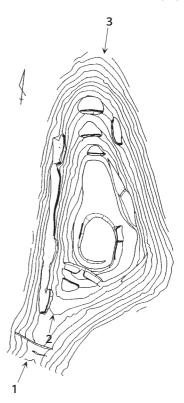


3 火山城跡(手前) から黒井城跡を 望む(南から)

写真図版52

火山城跡







- 1 調査後全景(南から)
- 2 調査後南半部(南から)



写真図版53 火山城跡



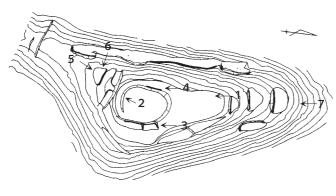
第1~2郭(北から)



3 第1郭東側平坦地4(北から)



5 平坦地7 (南から)





2 第1郭南側通路(北から)



第1郭西側切土(北から)

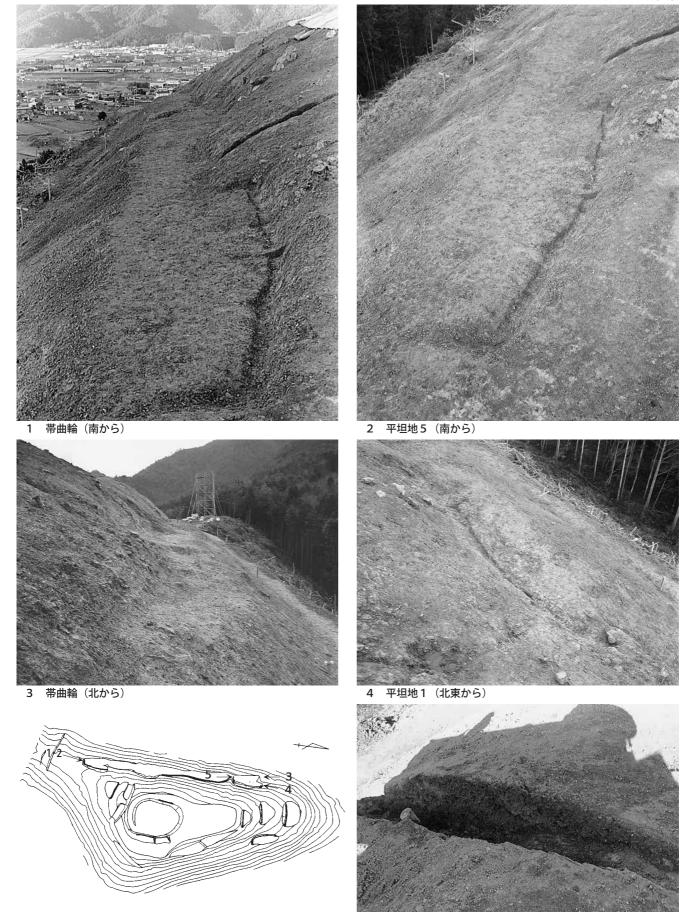


6 平坦地7埋土断面(西から)



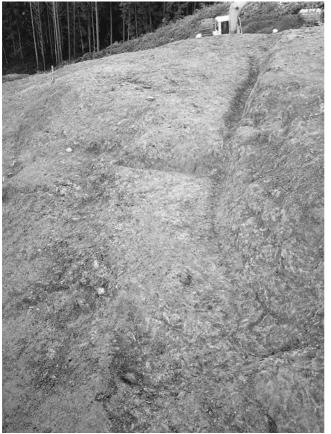
7 第3~5郭(北から)

写真図版 54 火山城跡



平坦地1焼土断ち割り(南から)

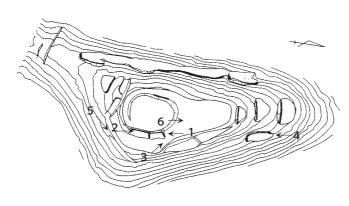
火山城跡 写真図版 55



1 平坦地4 (北から)



4 平坦地2 (北から)





2 平坦地4(南から)



3 平坦地3 (南から)



5 平坦地6 (南西から)



6 第2郭東側盛土断面(南から)

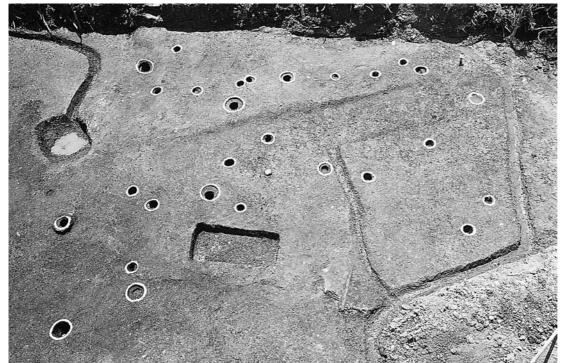
写真図版 56 火山遺跡



1 全景(南から)



2 北半部(南から)



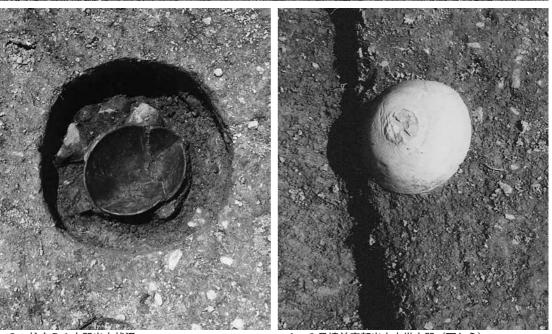
火山遺跡 写真図版 57



1 土坑SX01 (西から)

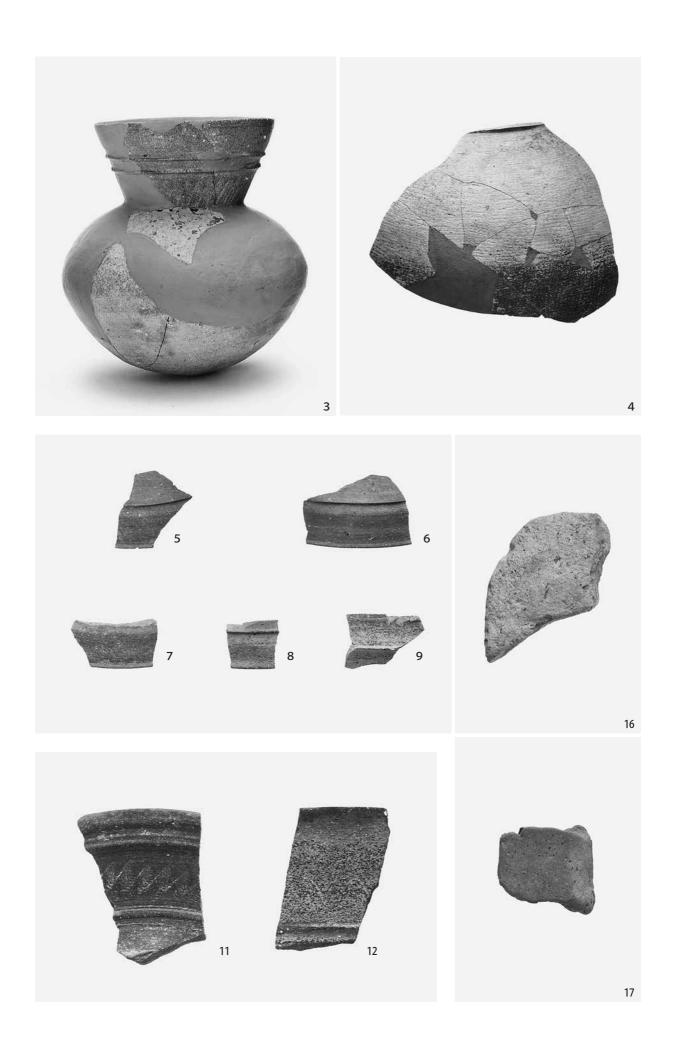


 土坑SX02 (西から)

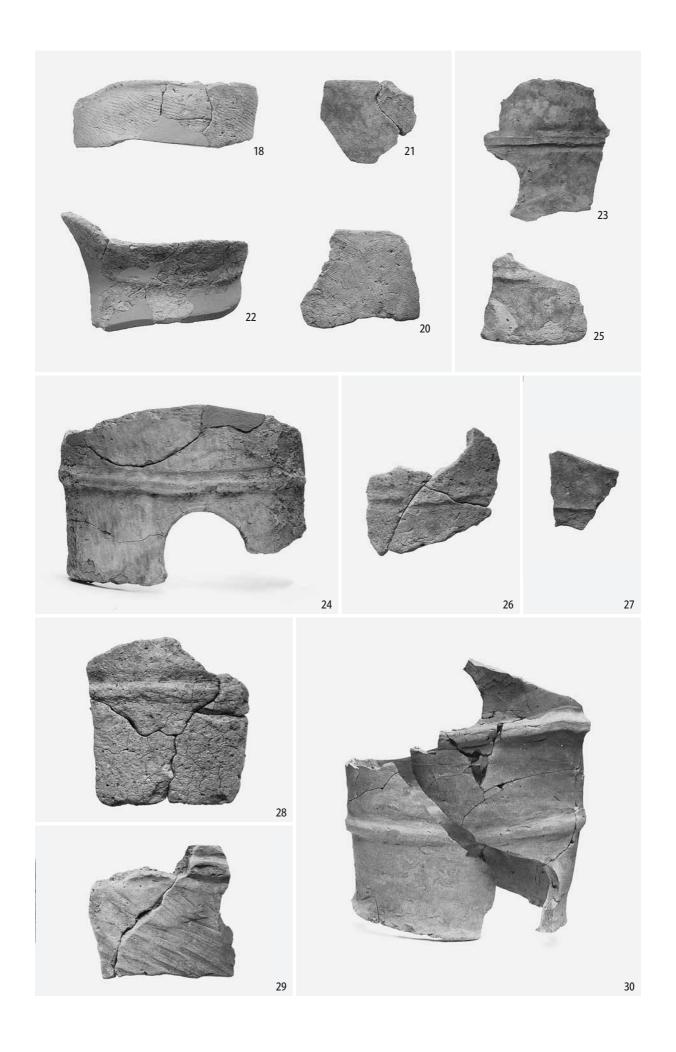


柱穴 Р 1 土器出土状況

9号墳前庭部出土中世土器(西から)



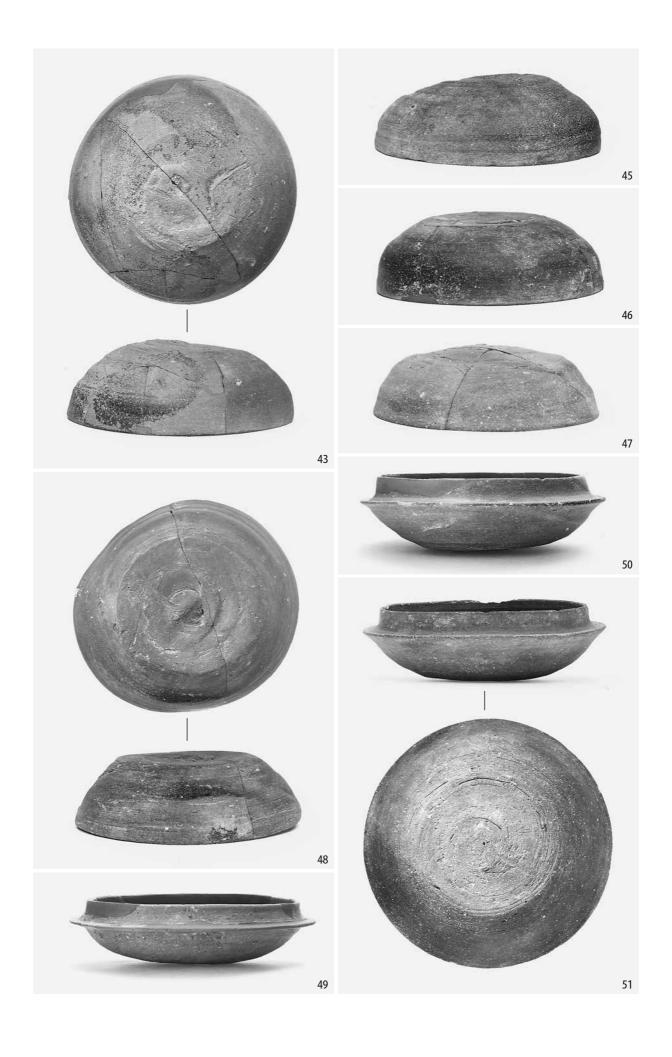
3号墳 埴輪 写真図版 59



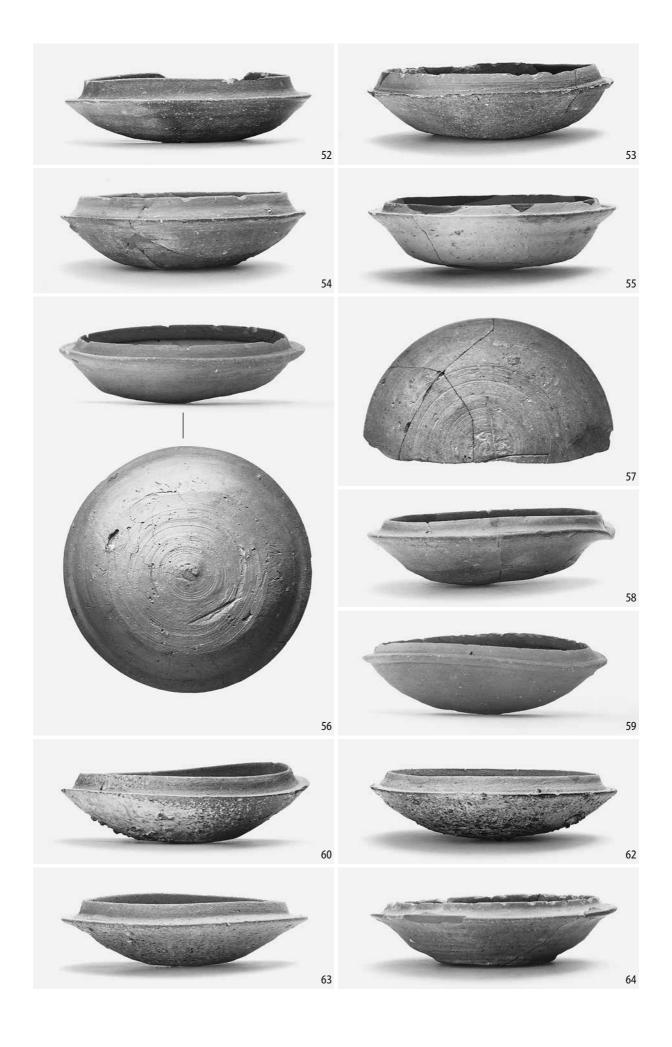
写真図版 60 7号墳 土器 (1)

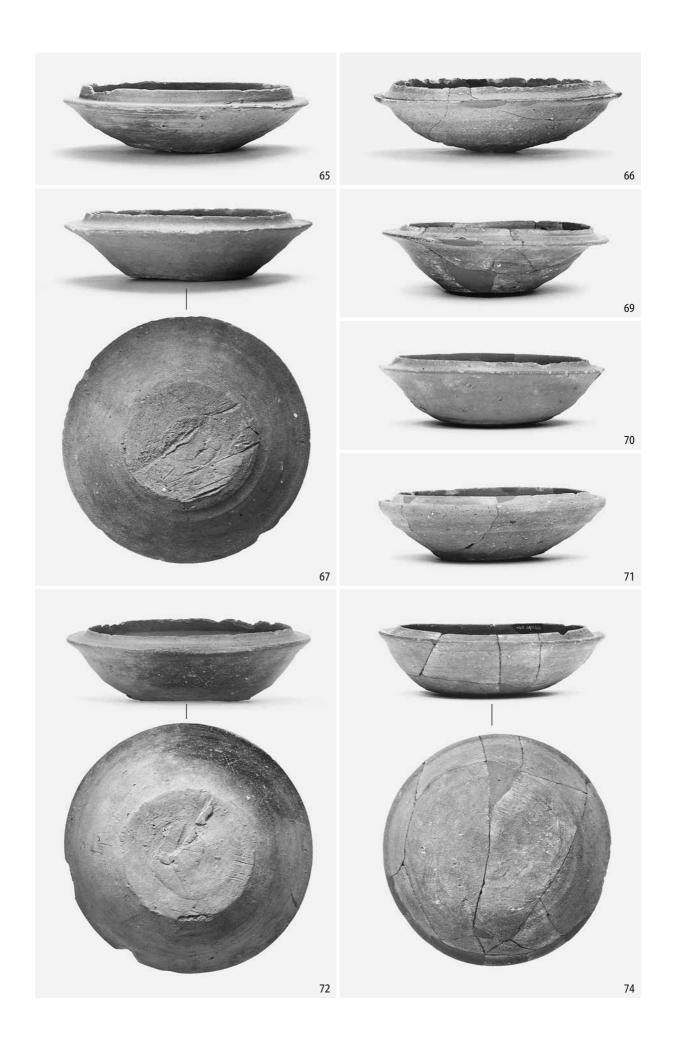


7号墳 土器 (2) 写真図版 61

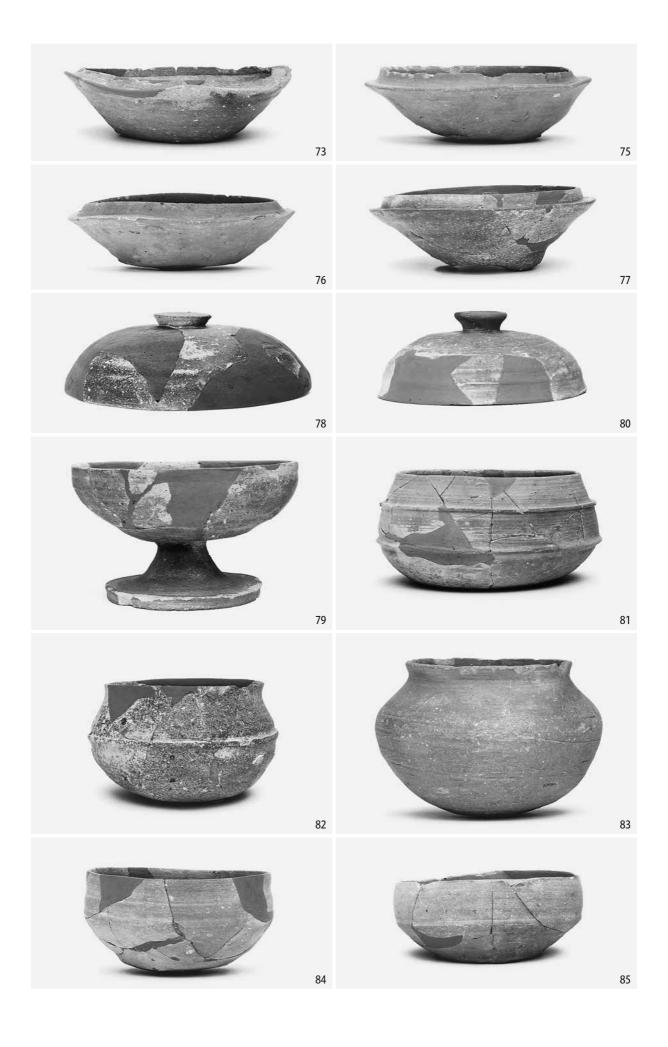


写真図版 62 7号墳 土器 (3)

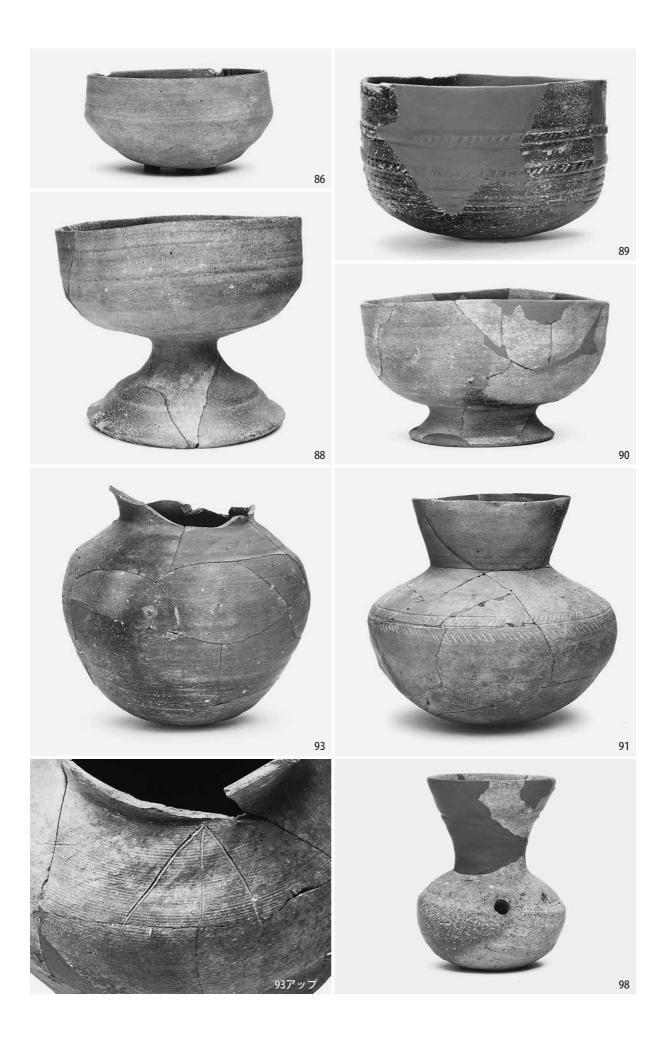




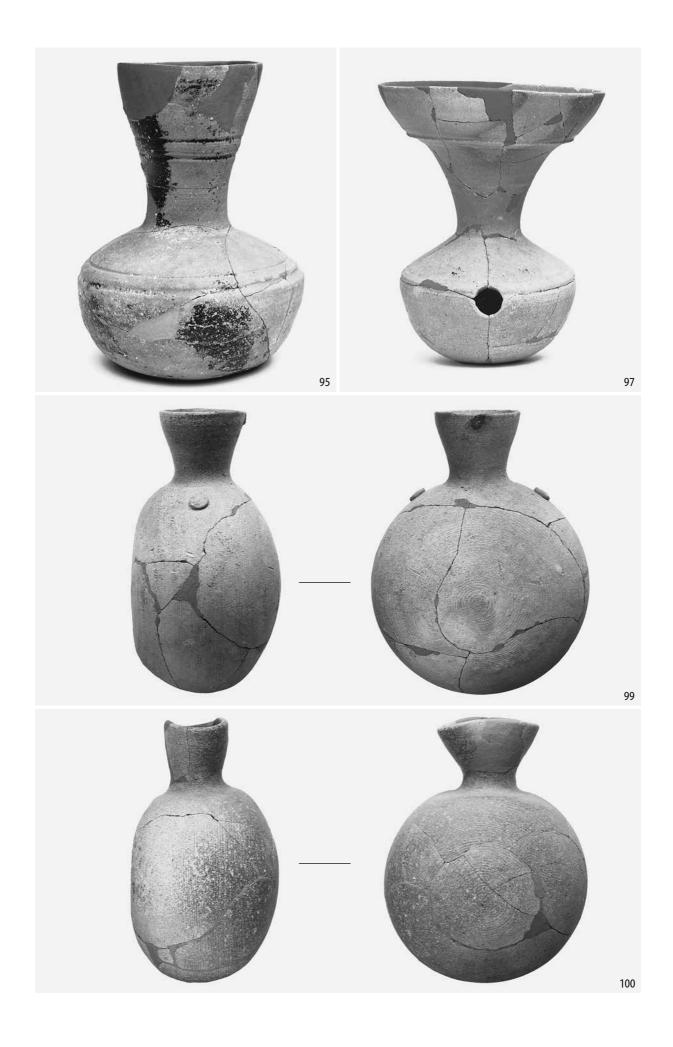
写真図版 64 7号墳 土器 (5)



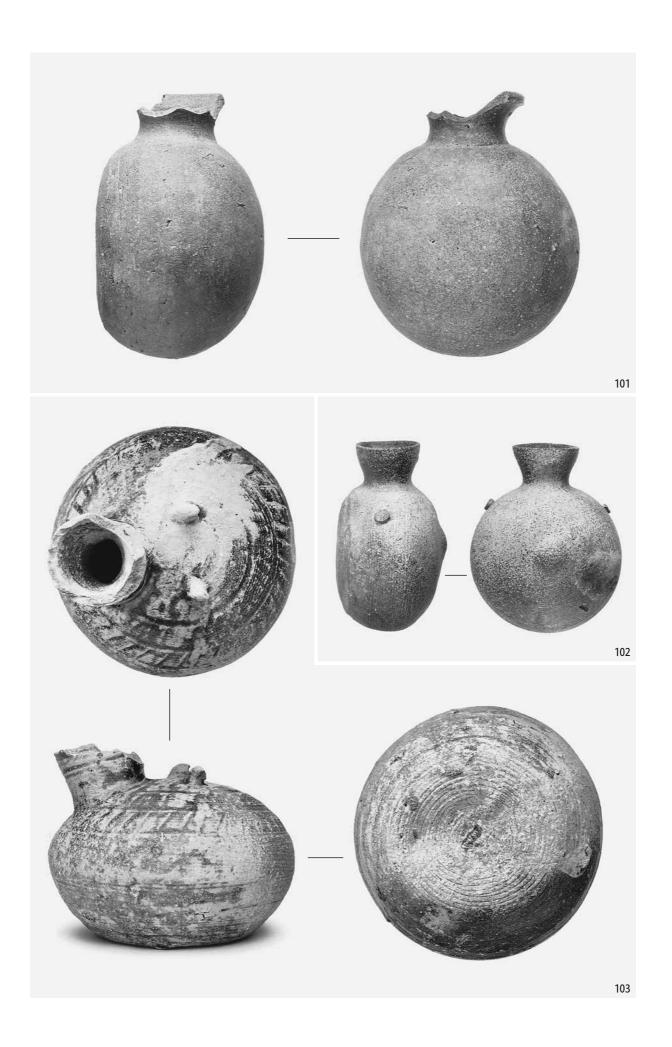
7号墳 土器 (6) 写真図版 65



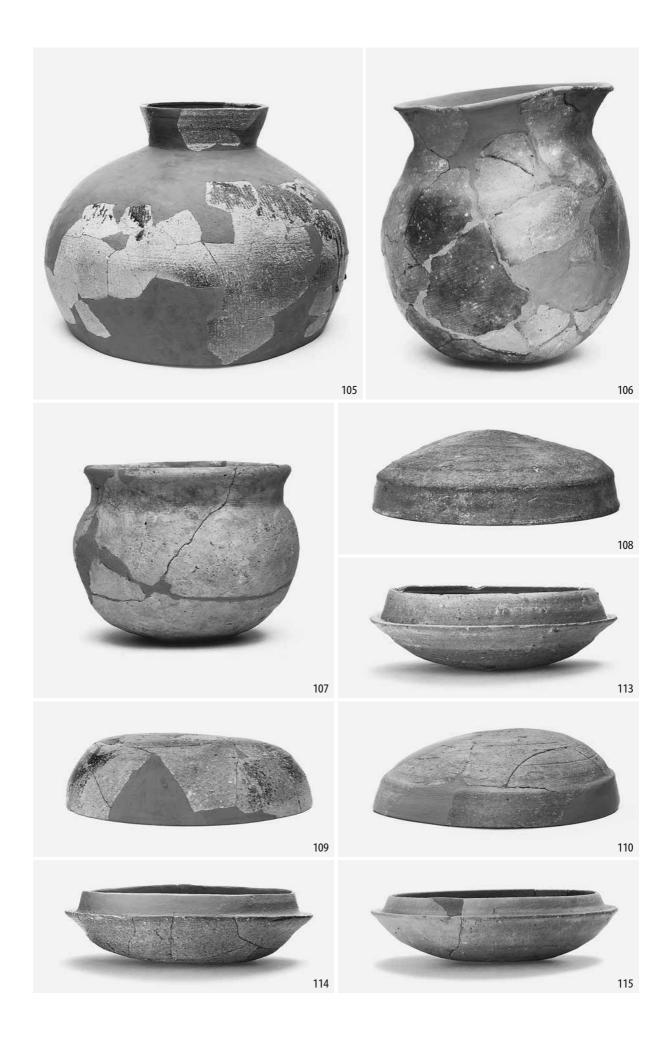
写真図版 66 7号墳 土器 (7)



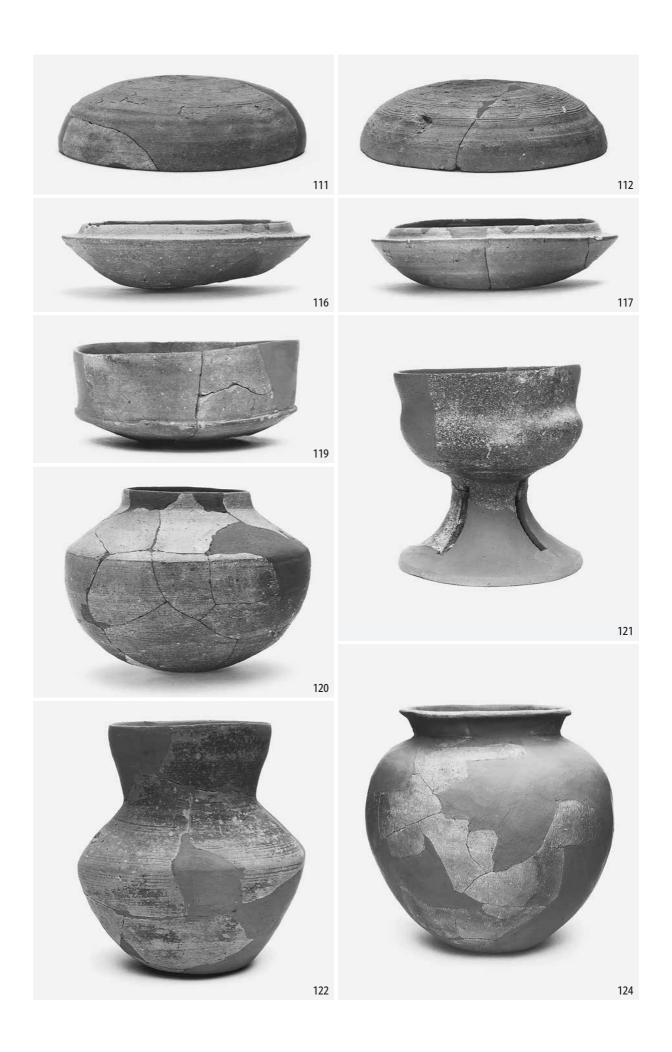
7号墳 土器 (8) 写真図版 67



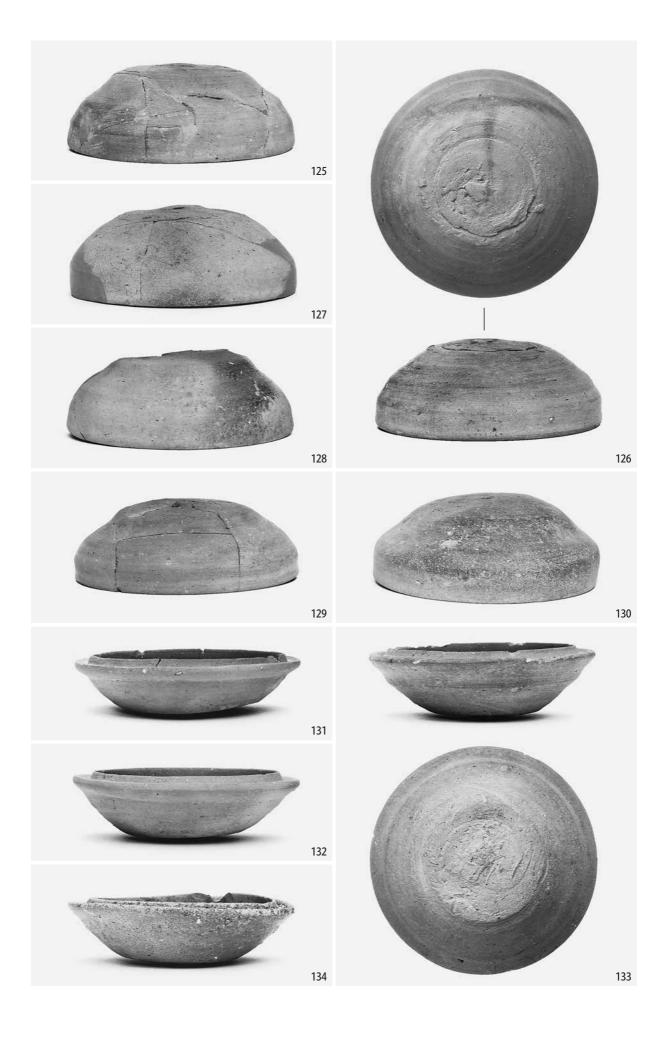
写真図版 68 7号墳 土器 (9)

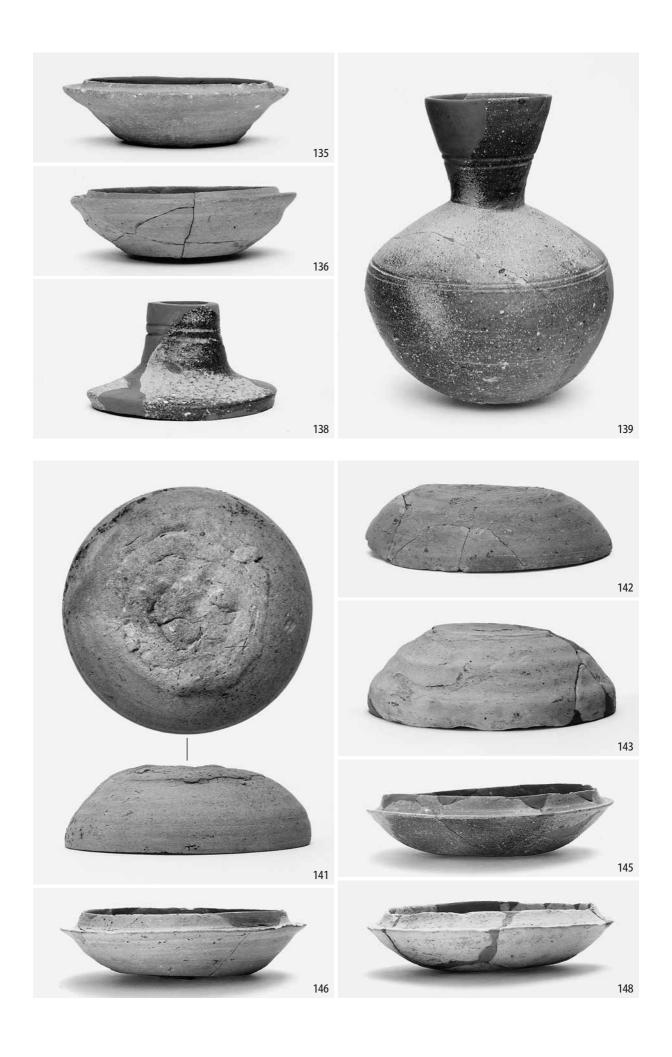


7号墳 土器 (10) 写真図版 69



写真図版70 8号墳 土器(1)

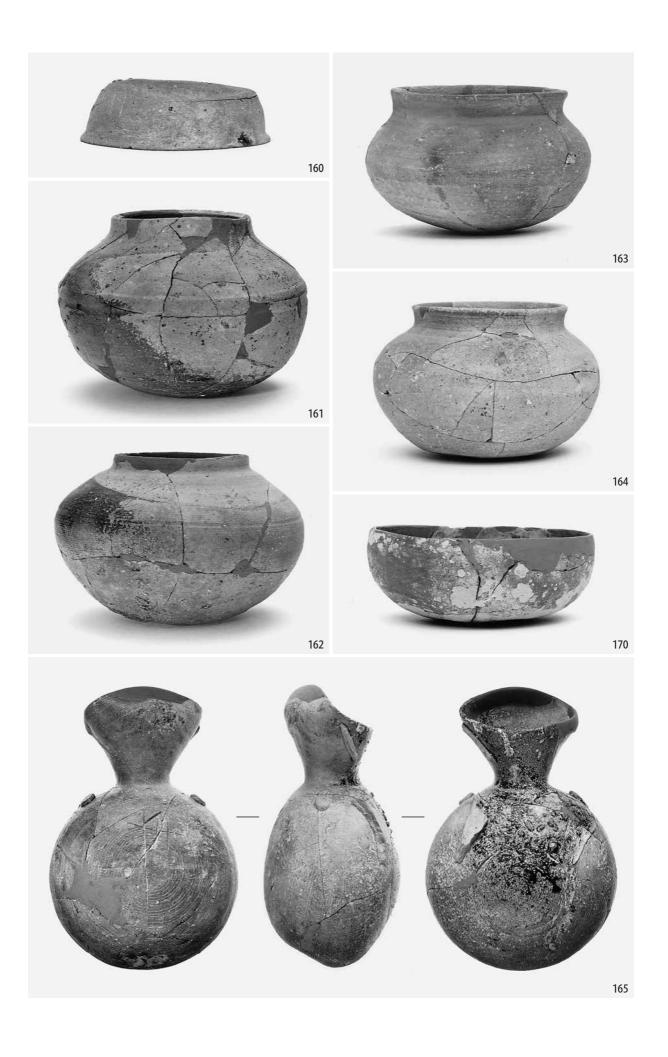




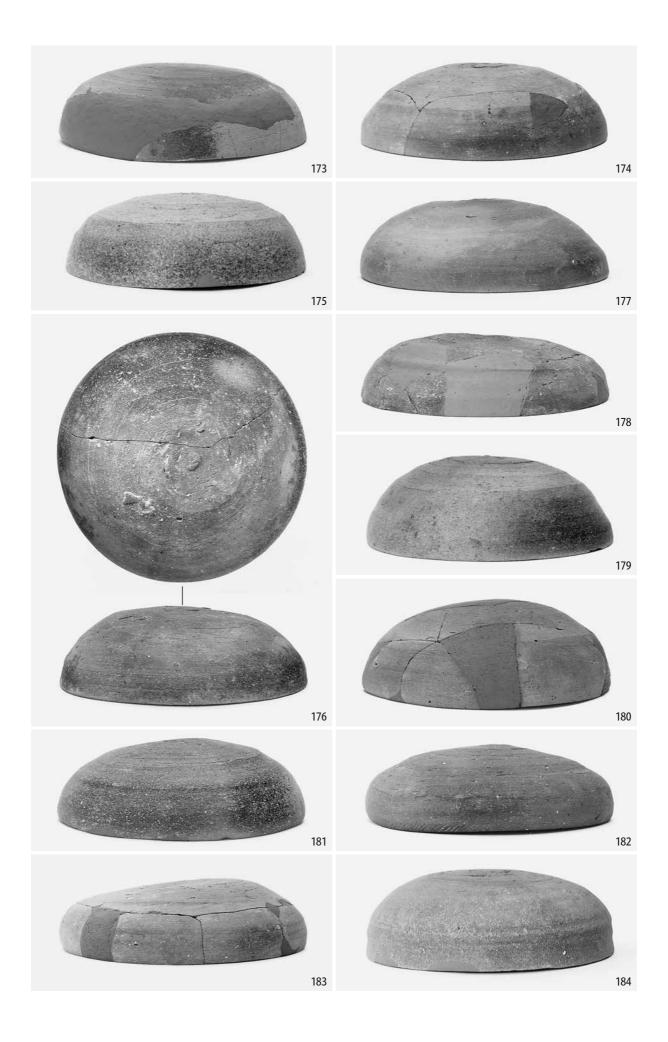
写真図版72 9号墳 土器 (2)

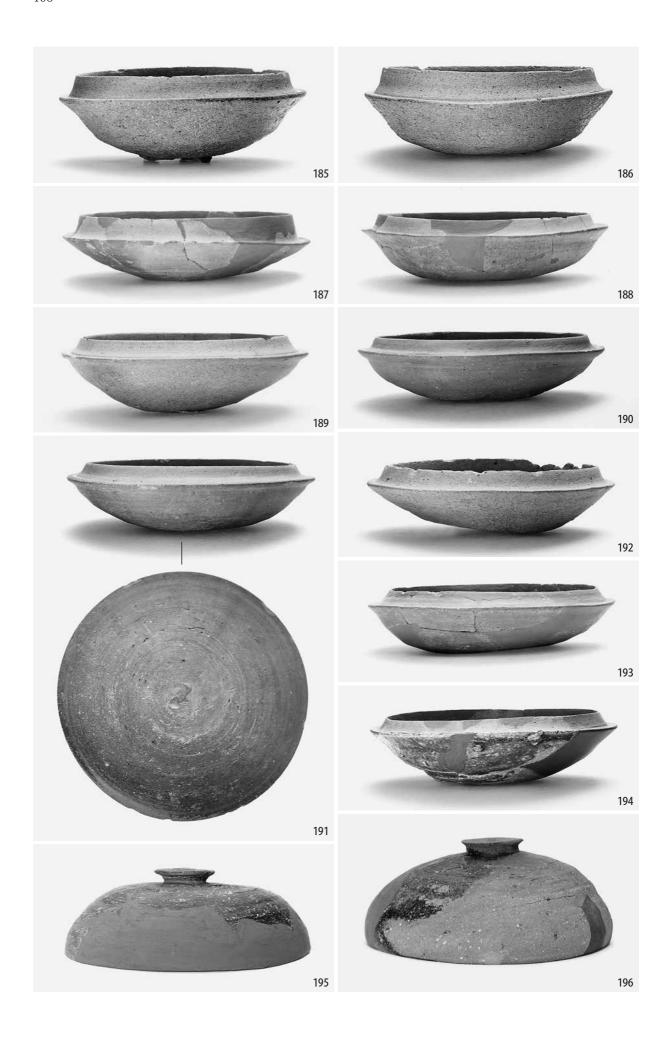


9号墳 土器 (3) 写真図版 73



写真図版 74 10号墳 土器 (1)

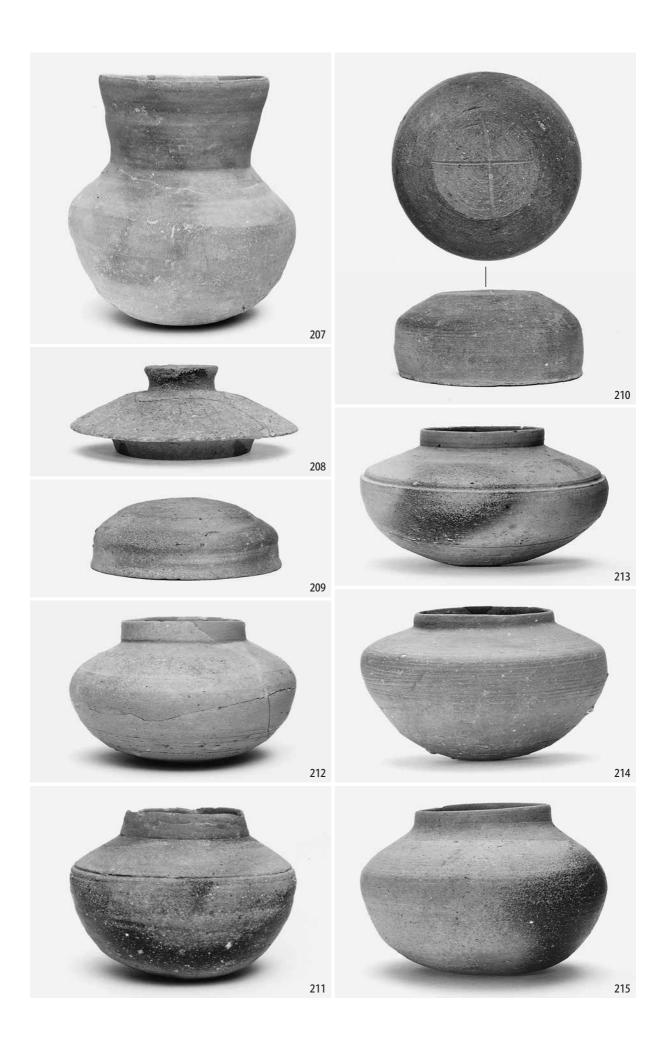




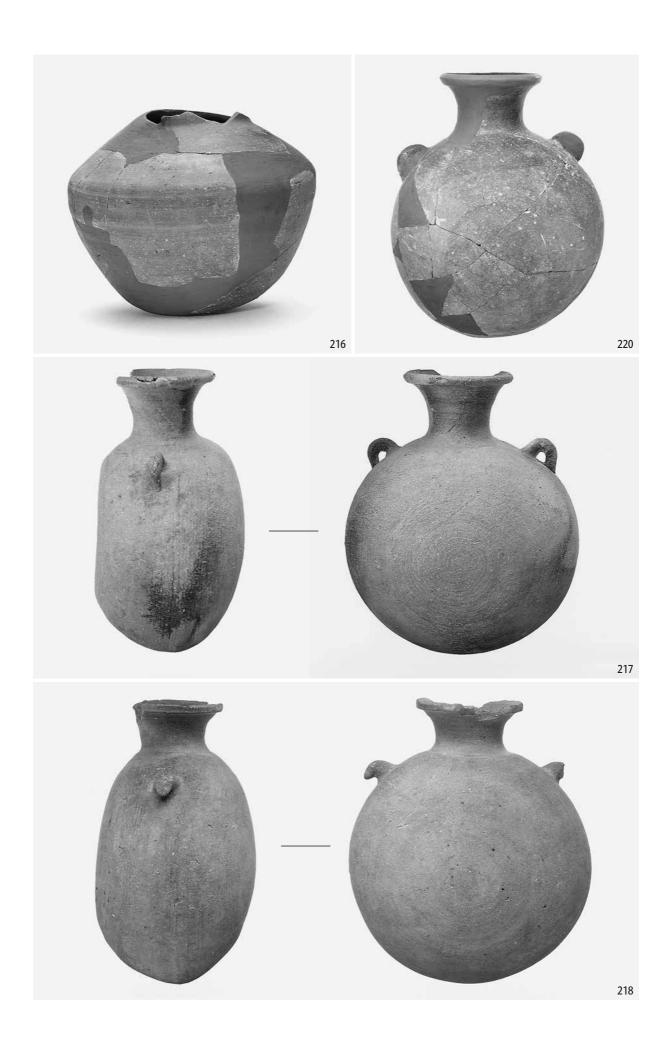
写真図版 76 10号墳 土器 (3)



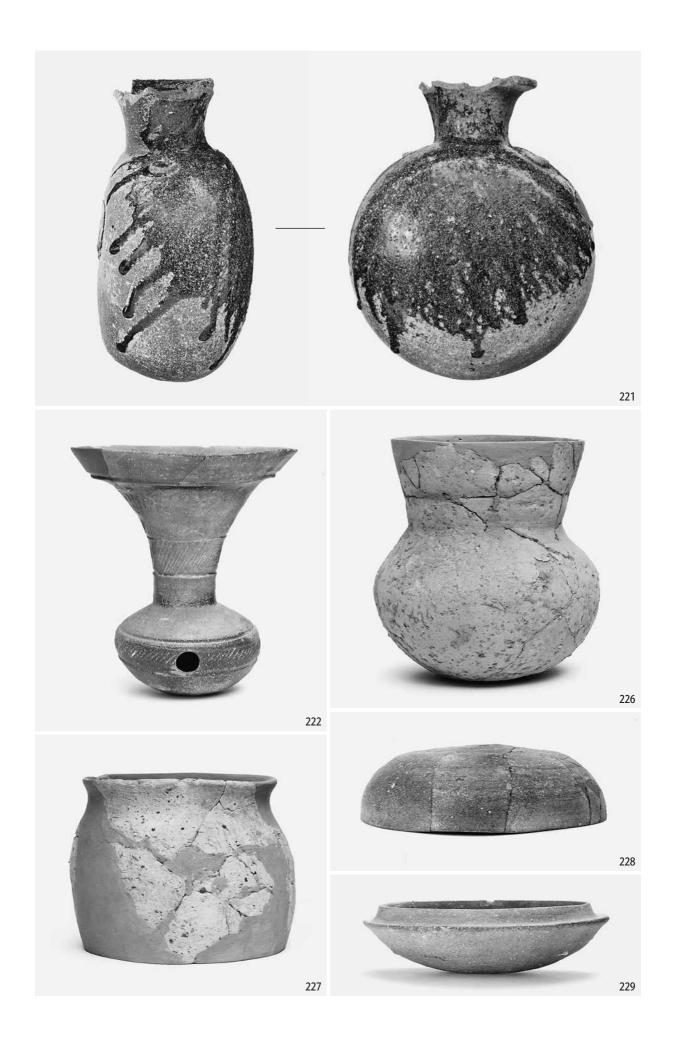
10号墳 土器 (4) 写真図版 77

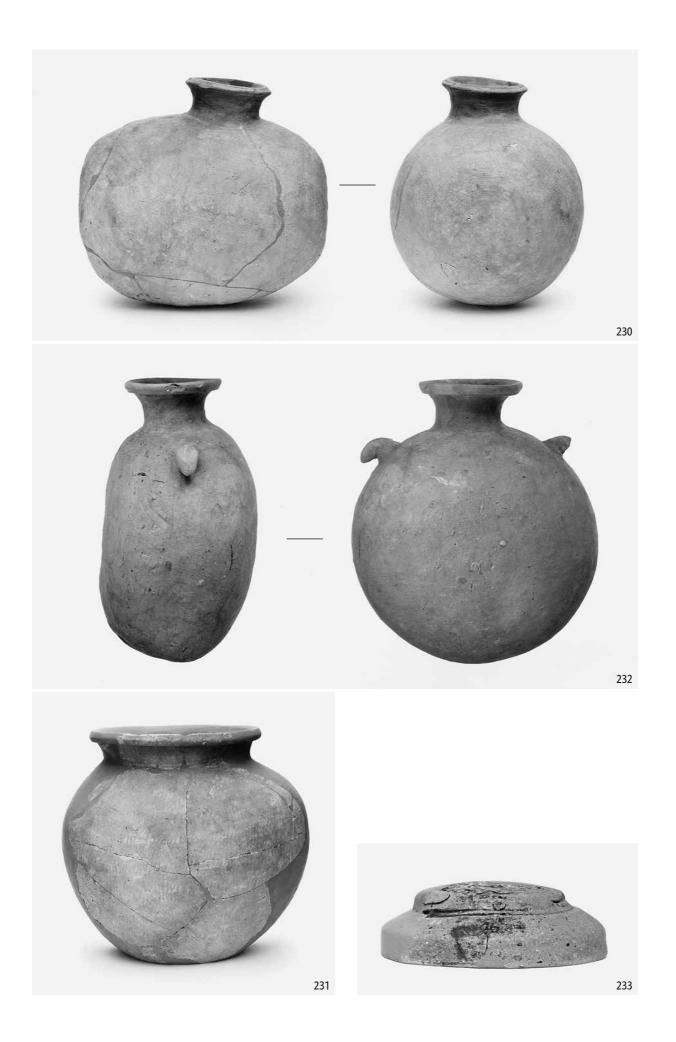


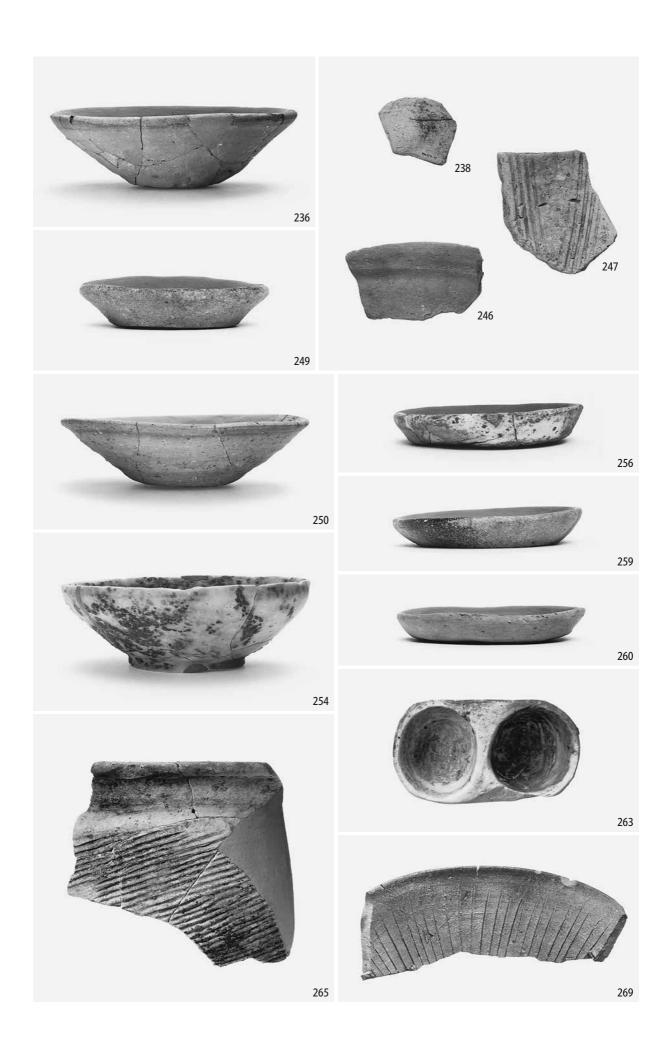
写真図版 78 10号墳 土器 (5)



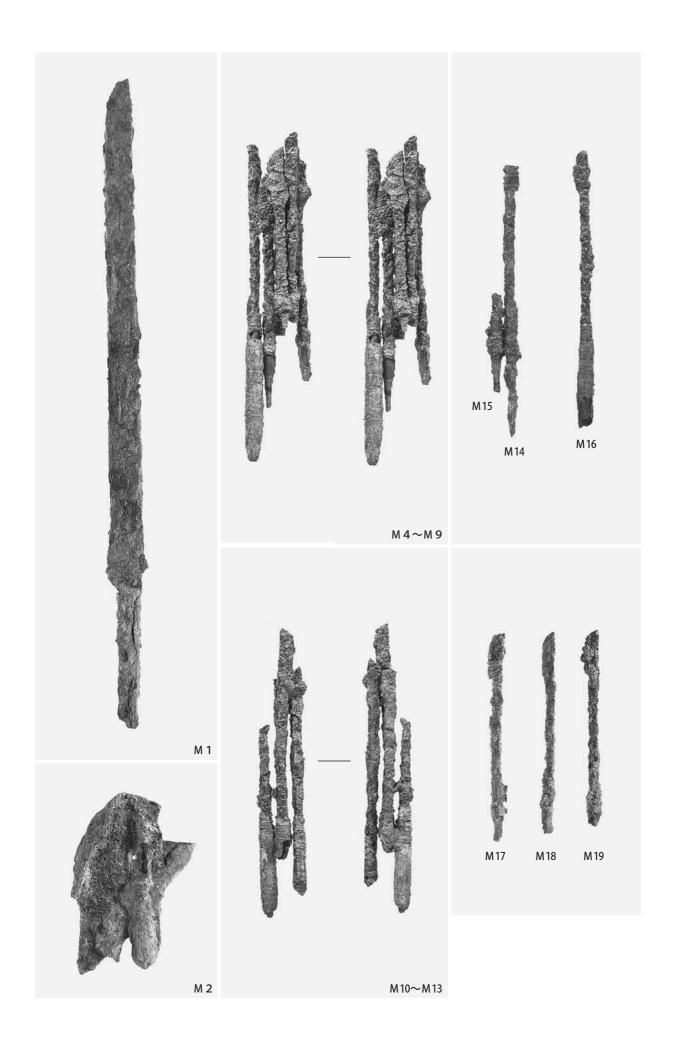
10号墳 土器 (6) 写真図版 79



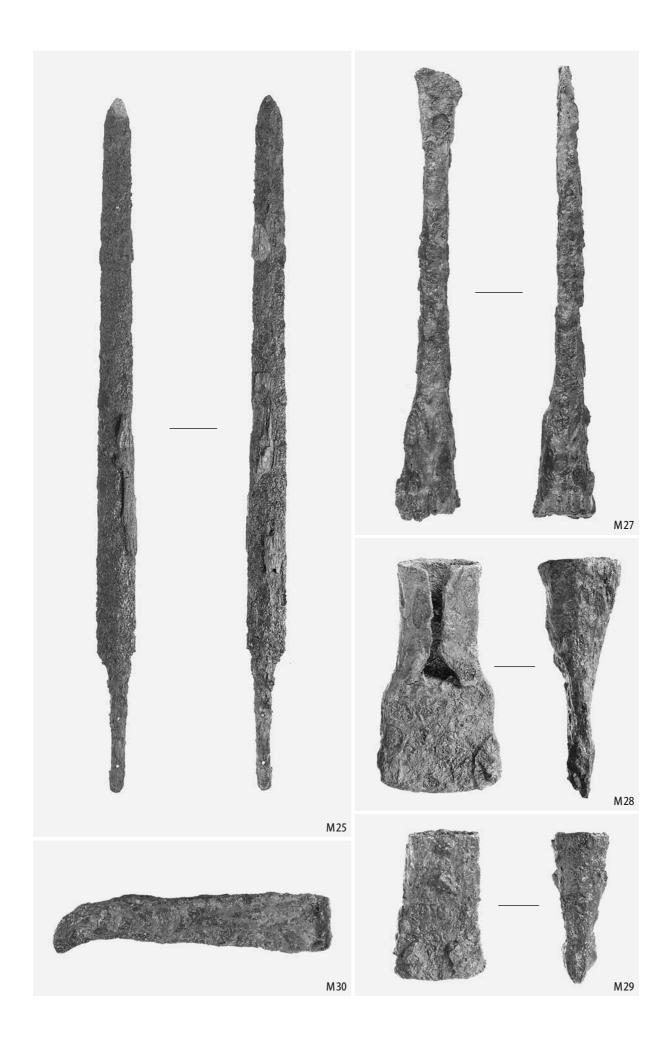




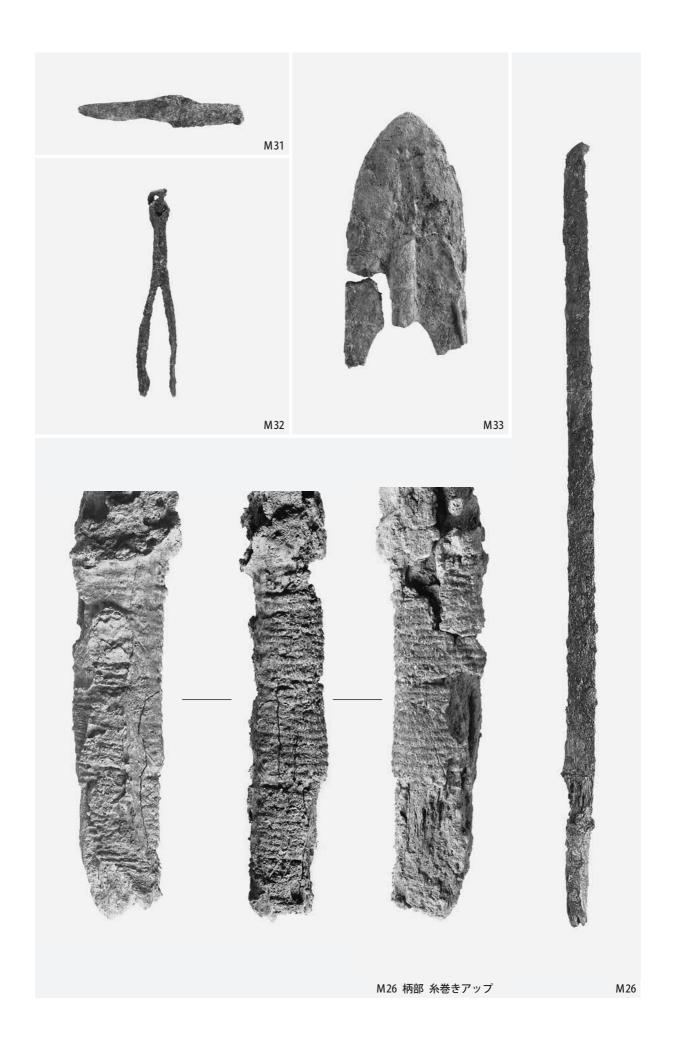
写真図版82 2・3号墳 鉄器



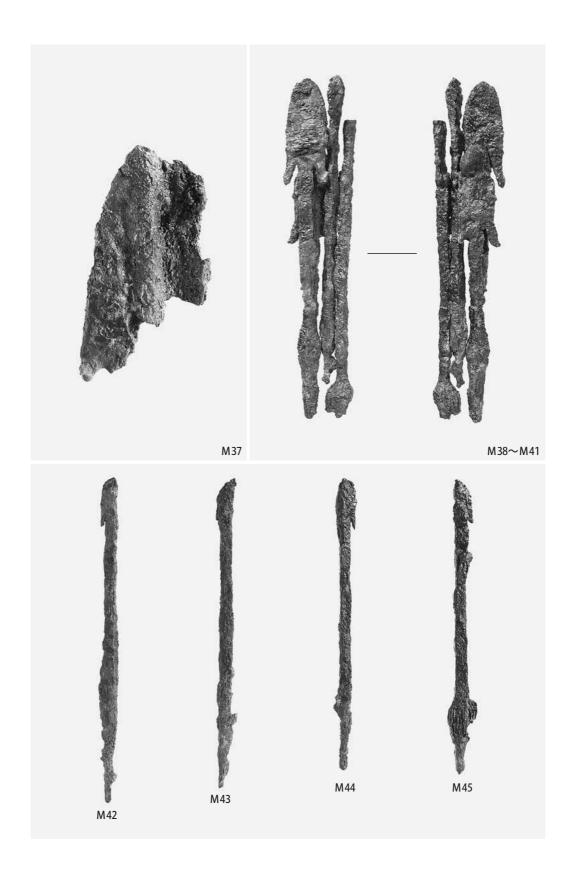
4号墳 鉄器 (1) 写真図版 83



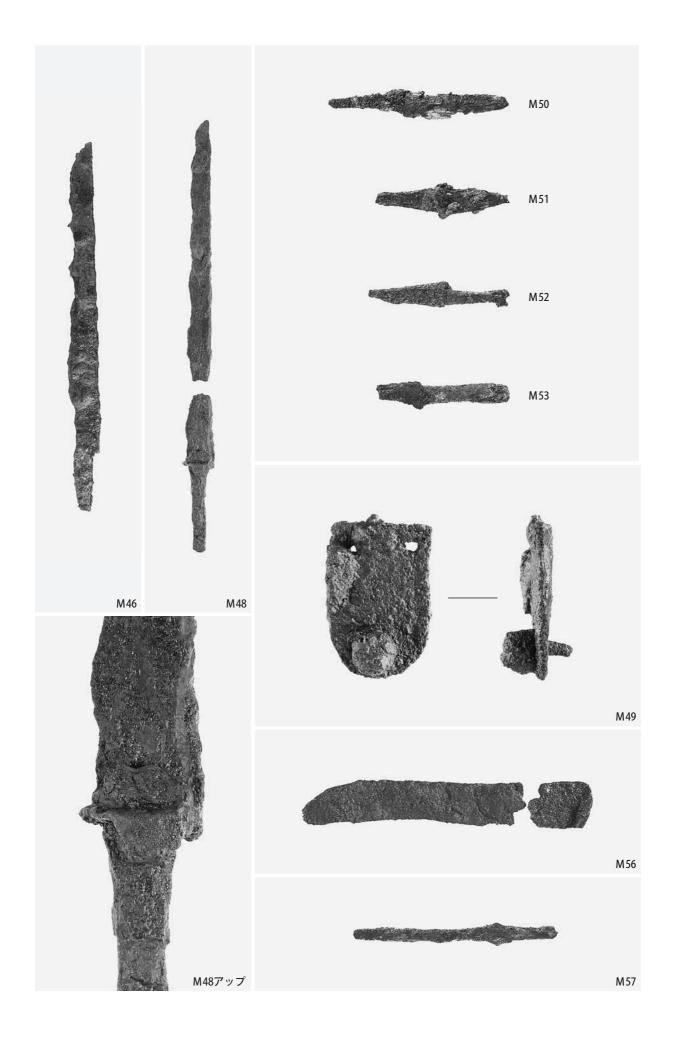
写真図版84 4号墳 鉄器(2)



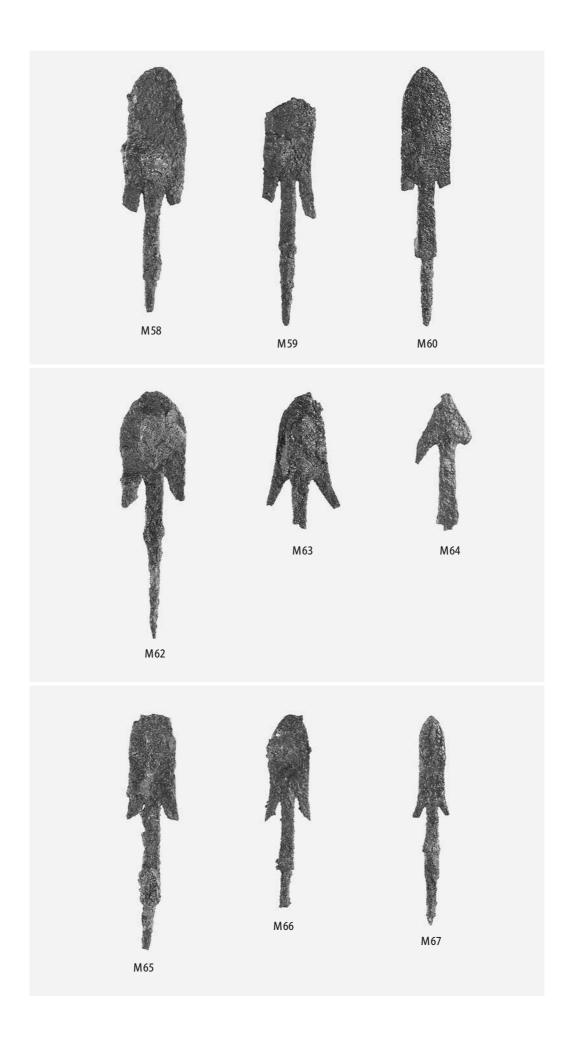
写真図版85



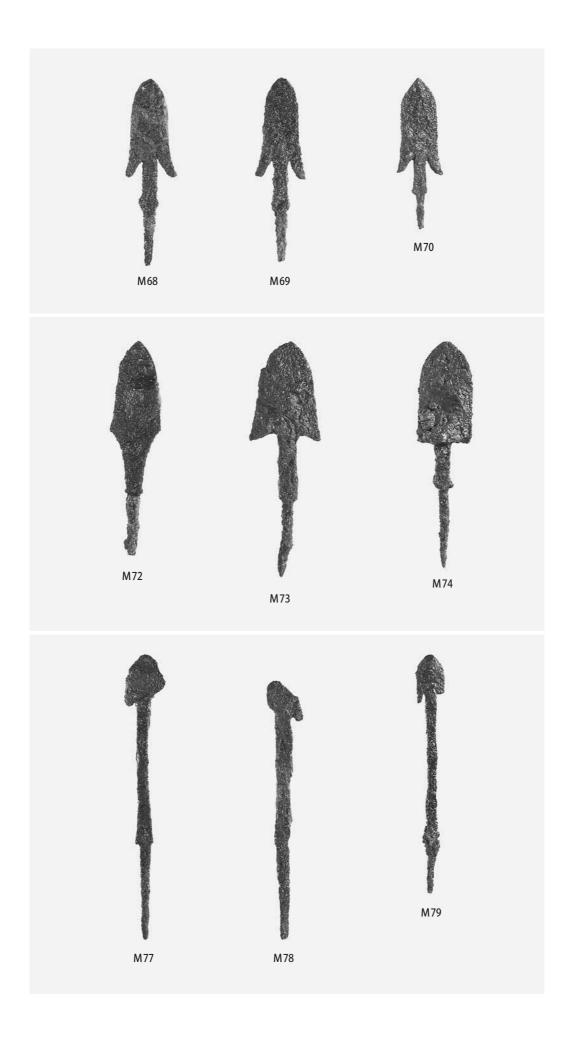
写真図版 86 7号墳 鉄器 **(1)**

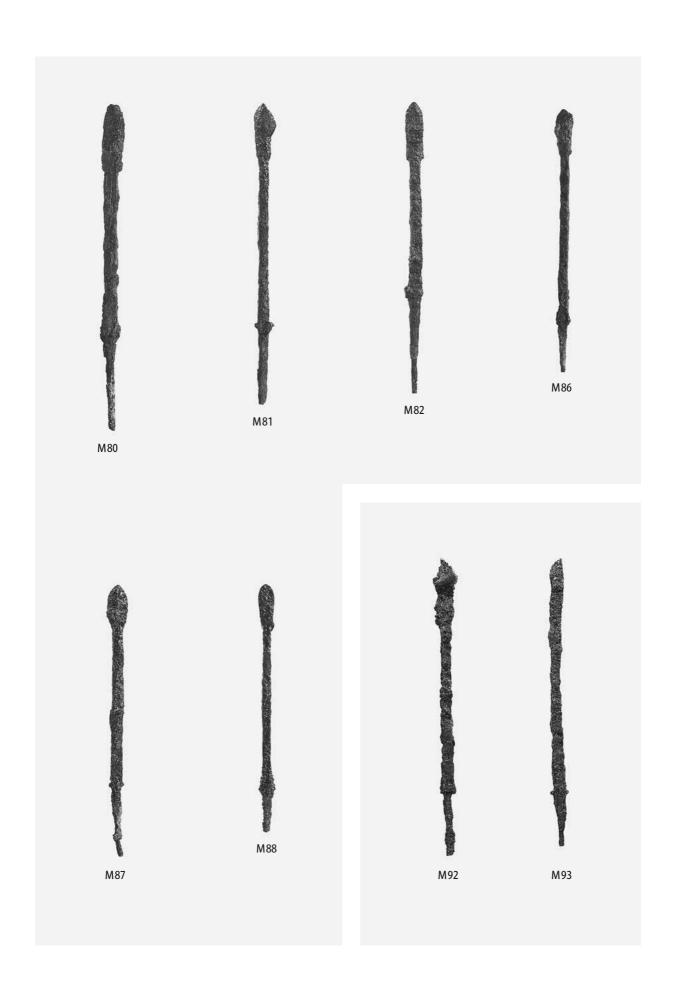


7号墳 鉄器 (2) 写真図版 87

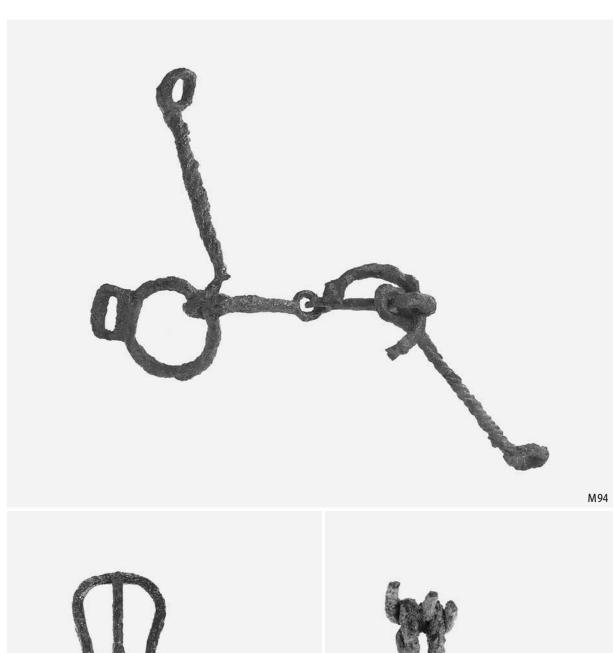


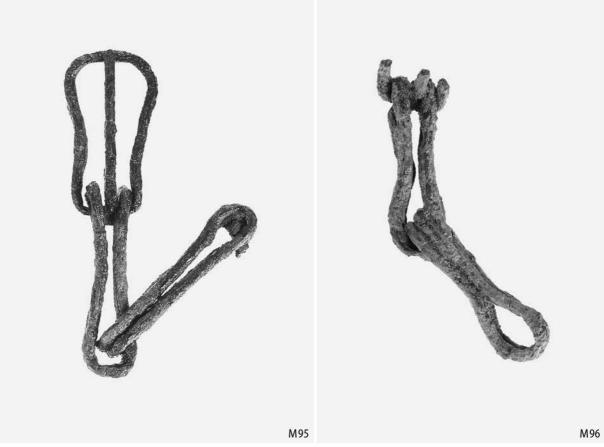
写真図版 88 7号墳 鉄器 (3)



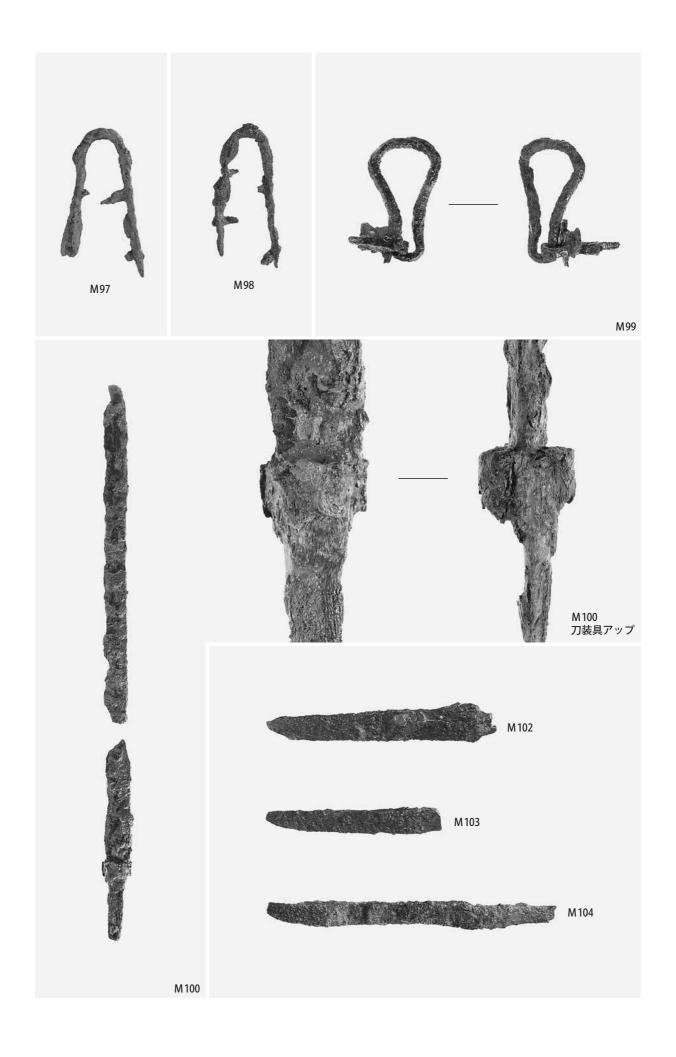


写真図版90 9号墳 鉄器(1)

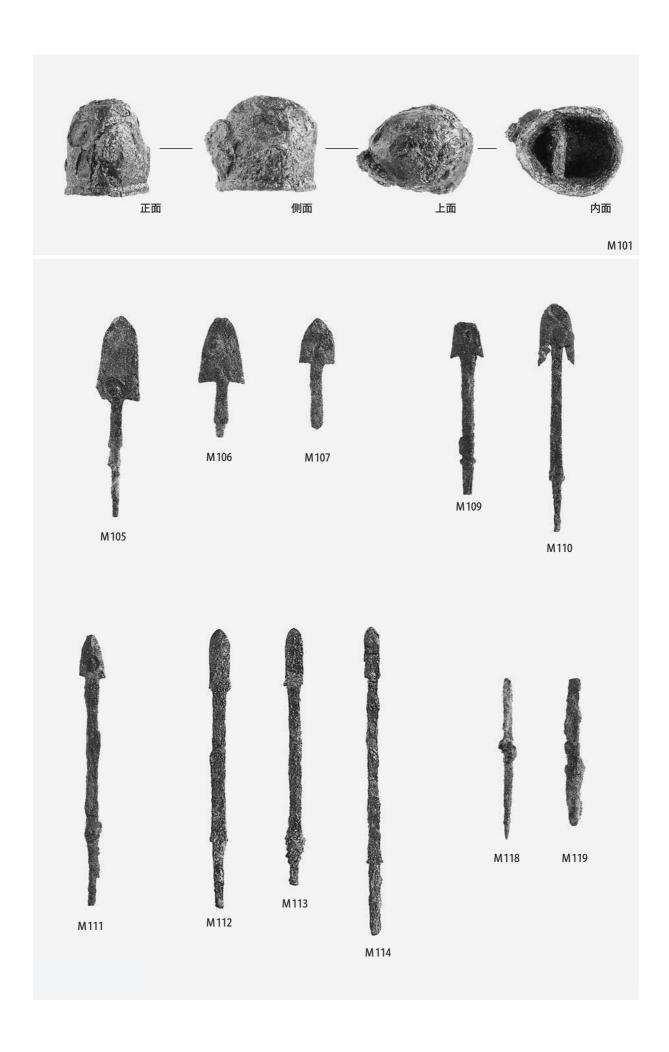




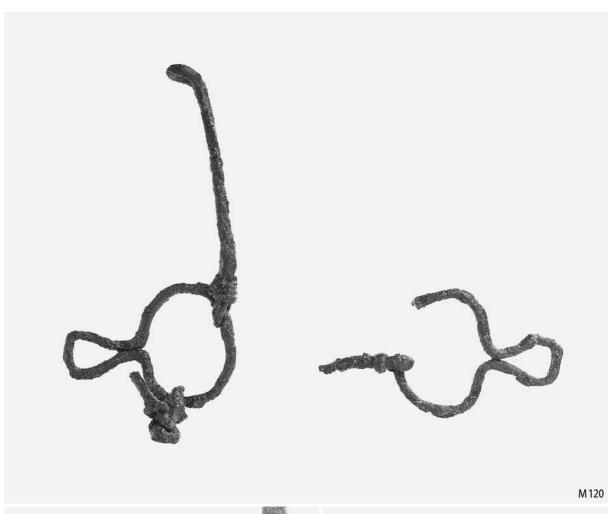
9号墳 鉄器 (2) 写真図版 91

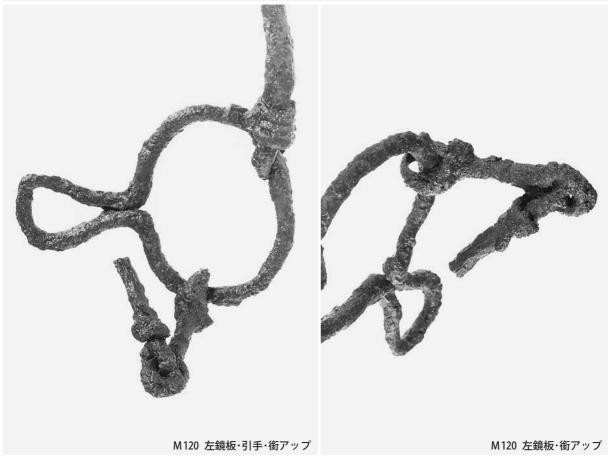


写真図版92 9号墳 鉄器(3)

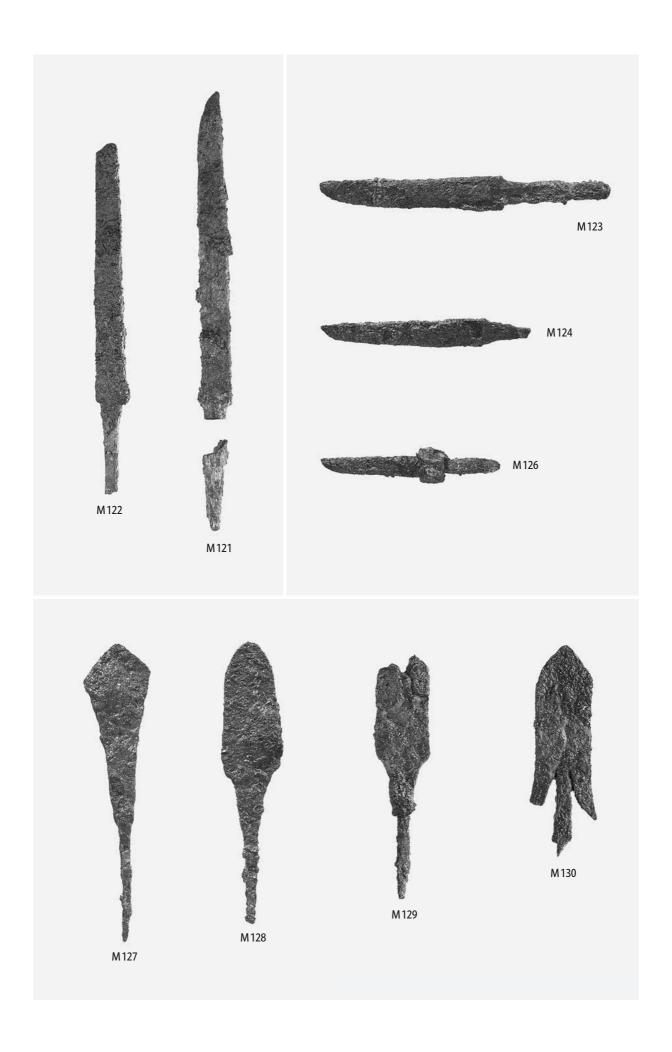


10号墳 鉄器 (1) 写真図版 93

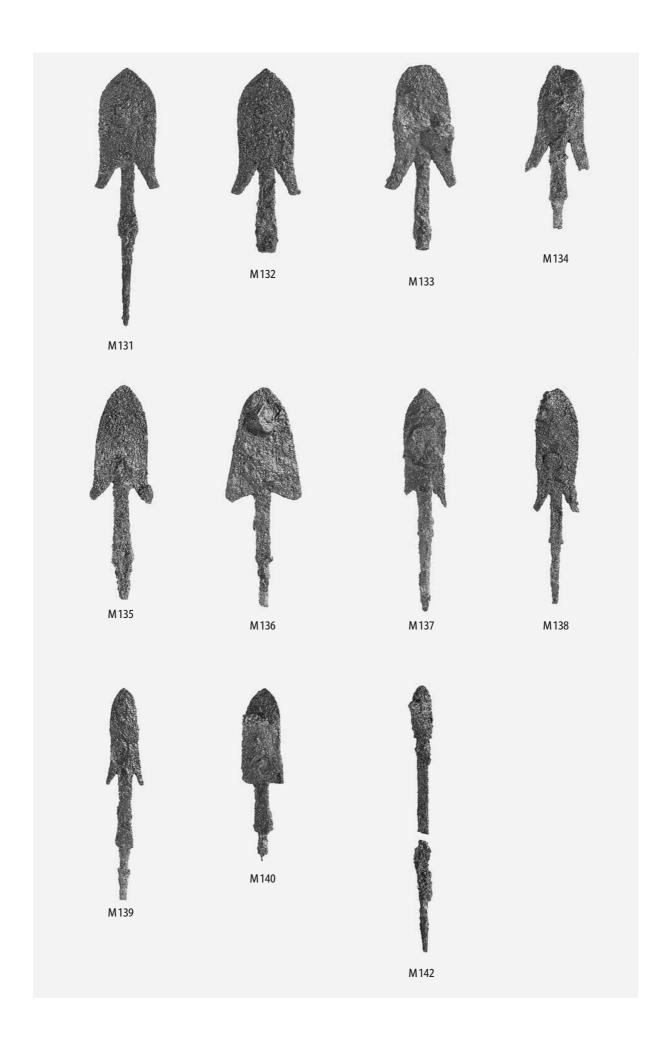


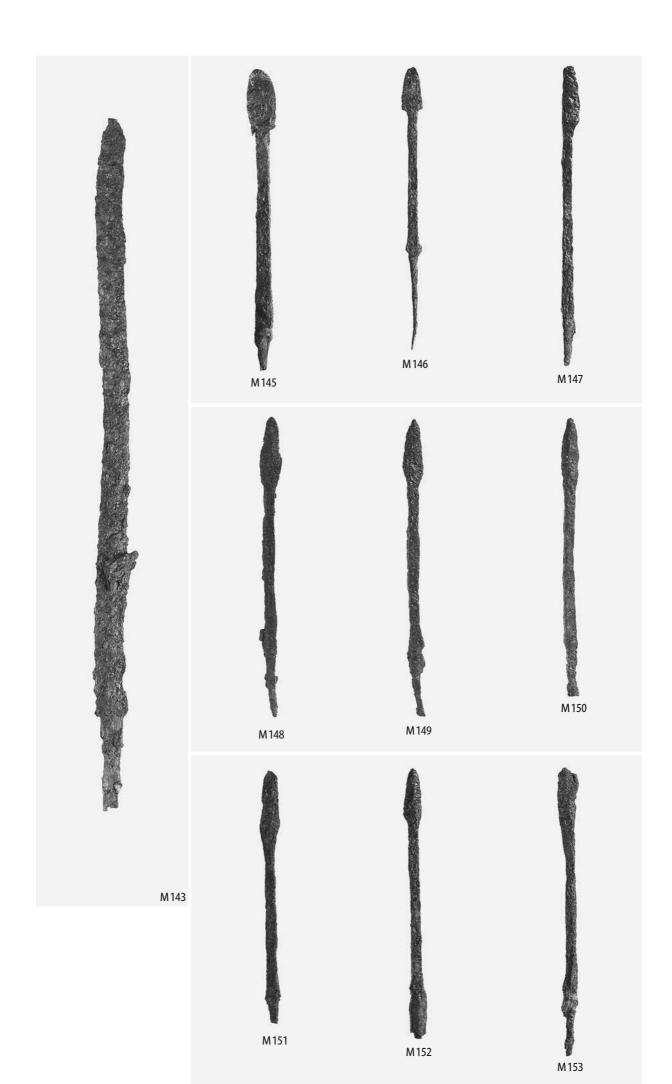


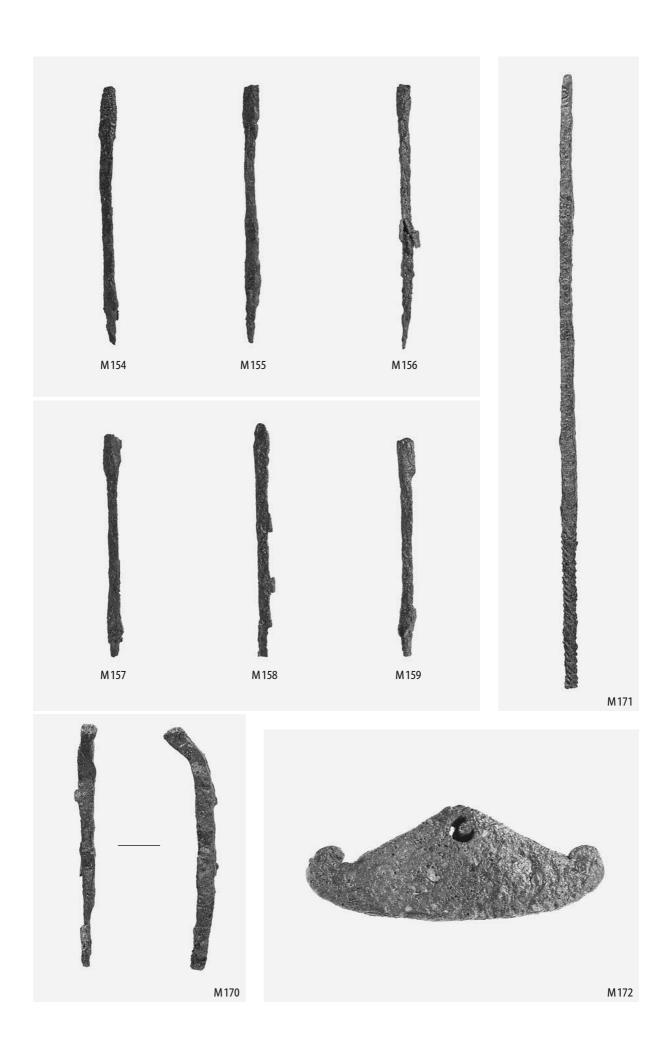
写真図版 94 10号墳 鉄器 (2)



10号墳 鉄器 (3) 写真図版 95







写真図版 98 火山遺跡 石器





報告書抄録

ふりが	な	ひやまこふんぐん ひやまじょうあと ひやまいせき									
書	名	火山古墳群 火山城跡 火山遺跡									
副書	名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路 I)建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 I									
巻	次										
シリーズ	名	兵庫県文化財調査報告									
シリーズ番	:号	第283冊									
編著者	名	池田正男・菱田淳子・中川 渉・長濱誠司・岡本一秀・大前篤子・多賀茂治・岡 昌秀・藁科哲男									
編集機	関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所									
所 在	地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5 111078-531-7011									
発行年月	日	西曆2005(平成17)年3月31日									
所収遺跡	名	所在	ł.ila	コ -	- F	- 北緯	東経	調査期間	調査面積		調査原因
		7月1生	~년	市町村	遺跡調 査番号			: 网旦粉间			
火山古墳群 (1~6号墳) 火山古墳群				28223	950367	35° 09′ 31″	135° 06′ 01″	19960109~ 19960329 19970512~	2,321 m ²		一般国道 483号北近
(7・9・10号墳)		丹波市春 日町平松 字火山			970161			19971007	1,6	609m²	畿豊岡自動 車道(春日
火山城跡 火山遺跡					970337			19971020~ 19980210	1,425m ²		和田山道路 I)建設事
火山古墳群 (8・11~13号墳)					970338			19971020~ 19980210	6	854m [*]	業
所 収 遺跡名	種	種別		主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
火山古墳群	古墳		古墳時代		横穴式	木棺直葬墳8基 横穴式石室墳5基 竪穴住居		須恵器・土師器・埴 輪 鉄刀・鉄剣・鉄鏃 馬具・工具・耳環 玉類		形象埴輪・須恵質 埴輪 蛇行剣 轡・鐙・鑷子 碧玉管玉・水晶玉 琥珀棗玉・ガラス 小玉	
火山城跡	山城	山城跡		中世		曲輪·帯曲輪· 平坦地		土師器·瓦質土器 鉄器		火箸	
火山遺跡	集落跡		平安時代~ 中世		土坑	土坑・柱穴		須恵器・土師器 黒色土器・瓦器 陶磁器 鉄器・銅銭・石器			

兵庫県文化財調査報告 第283冊

火山古墳群火山城跡火山遺跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路 I) 建 設 事 業 に 伴 う 埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書 I

2005 (平成17) 年3月31日

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会 〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 交友印刷株式会社 〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4-5